

# オニキシベ5遺跡

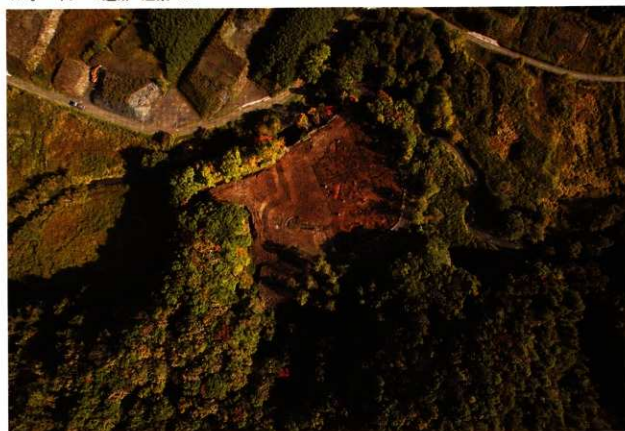
-厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6-

2013.3

厚真町教育委員会



1. オニキシベ5遺跡 遠景 NW→



2. オニキシベ5遺跡 俯瞰

カラー2



1. VH-01完掘 NW→



2. VH-01掘り上げ土断面 W→



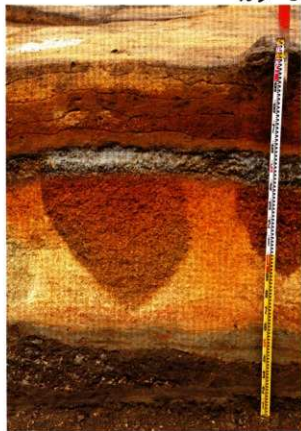
3. VP-10出土一括土器 NE→



4. VBB-05出土土器及び獣骨 N→



1. 調査区北東側斜面 基本層序 SW→



2. 旧石器トレンチ2(H23)断面 W→



3. VP-08出土石棒

カラー4



1. オニキシベ5遺跡 縄文時代中期土器



2. オニキシベ5遺跡 縄文時代後期前葉土器(タブコブ式土器)

## 序 文

厚真町は、胆振・日高地区屈指の豊かな水田地帯を有する大いなる田園都市であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源として流れ、農作物への恩恵を授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川と豊かな“ふるさと厚真”を更なる発展へと進めるために、農業用水確保と治水対策を主な柱とした多目的ダム「厚幌ダム」が、平成7年度に本格着工されました。

さて本書はこの厚幌ダム建設に先駆けて沈み行く地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査されたオニキシベ5遺跡の調査報告書であります。本書は平成22・23年度の発掘成果を記載するもので、約4,500から3,900年前の土器や石器のほか竪穴式住居跡やシカの落とし穴も多数見つかっています。厚真川の支流である鬼岸边川沿いにも、こうした遺跡が発見されることがわかり、山間部での生活がだんだんと明らかになってまいりました。

厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、今後数年にわたり継続される予定でございますが、このような貴重な埋蔵文化財を地域の教育的資源、文化的財産として普及活用を推し進めてまいりたいと思う所存でございます。また本書が広く埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係諸氏ならびに関係機関に、真に厚く、感謝申し上げる次第であります。

厚真町教育委員会  
教育長 兵頭 利彦

## 例言

1. 本書は、平成22・23年度に行った厚幌ダム建設事業に伴い発掘調査されたオニキシベ5遺跡(登録番号: J-13-90)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部(旧北海道室蘭土木現業所)の委託を厚真町教育委員会が受託した。
3. 調査・整理は以下の体制で行った。

調査担当者: [平成22年度] 奈良 智法 天方 博章 乾 哲也 [平成23年度] 奈良 智法 荻野 幸男 乾 哲也  
測量技能作業員・写真工: [平成22年度] 宮崎 美奈子 畑嶋 朝江 整備技能作業員: 大坪 正典 松本 稔  
[平成23年度] 畑嶋 朝江 渡辺 博道 整備技能作業員: 佐伯 憲吾 山川 健二  
[平成22年度] 発掘作業員24名 整理作業員22名  
[平成23年度] 発掘作業員17名 整理作業員13名  
奈良: [平成22・23年度] 縄文復元・拓影土器撮影、遺構写真図版作成、遺構図作成、礫石器実測、剥片石器実測  
校正、編集

天方: [平成22年度] 縄文復元・拓影土器撮影、遺構写真図版作成、遺構図作成、遺物写真図版作成  
乾 : 統括・渉外

4. 本書の編集は奈良が行い、各節の執筆は、文末に記す。
5. 関連諸科学の同定分析については、以下の機関および個人に依頼した。
  - ・AMS法<sup>14</sup>C年代測定: 株式会社 加速器分析研究所 ・動物遺存体同定: 千歳市埋蔵文化財センター 高橋 理
  - ・石器石材同定: アースサイエンス株式会社 加藤 孝幸 ・炭化種子同定: 札幌国際大学 榎坂 恭代
6. 礫石器・復元土器の写真撮影: 有限会社スタジオクリーク 佐藤雅彦
7. 剥片石器実測・写真、復元土器実測の一部を株式会社 トラスト技研に委託。
8. 地形測量委託・礫石器実測委託写真撮影: 株式会社 シン技術コンサルに委託。
9. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会が保管している。
10. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂き、記して感謝申し上げます。

北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課、苫小牧駒澤大学、札幌学院大学人文学部、公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター、釧路市埋蔵文化財調査センター、千歳市埋蔵文化財センター、苫小牧市博物館、平取町沙流川歴史館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、浦河町立郡土博物館、恵庭市教育委員会、遠軽町教育委員会、白老町教育委員会、上ノ国町教育委員会、新ひだか町教育委員会、日高町教育委員会、富良野市教育委員会、伊達市噴火湾文化研究所、余市町教育委員会、標茶町郷土館、厚真町観内自治会、(株) 佐藤組

青野友哉、赤石慎三、秋山洋司、阿部明義、天野哲也、石井 淳、石川 朗、伊藤昭和、白杵 熊、右代啓視、太田勝一、小野寺 聡、長田佳宏、柏木大延、川内谷 修、菅野修宏、工藤研治、熊谷仁志、小山卓臣、斉藤大朋、佐藤一夫、澤田 健、澤田恭平、杉浦重信、鈴木琢也、鈴木 信、仙庭伸久、高橋和樹、高橋勇人、田口 尚、田才雅彦、田中哲朗、種子幸生、千葉英一、塚田直哉、坪岡 始、鶴丸俊明、土井重男、土肥研晶、豊田宏良、中田裕香、長沼 孝、長町章弘、西脇对名夫、畑 宏明、広田良成、福井淳一、藤井誠二、藤原秀樹、松田淳子、松田宏介、丸山浩治、三浦正人、宗像公司、森岡健治、福田裕二、藪中剛司、山田 央、吉田正明。

## 凡例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。

〔遺構〕 住居：H 土坑：P Tピット：TP 焼土：F

〔遺物〕 土器：P 縄文土器：JP 剥片石器：FT 礫石器：ST 礫：S フレイク・チップ（黒曜石・頁岩製）：FC  
フレイク・チップ（緑色泥岩・片岩）：SPC 石製品：SP 炭化種子：SD

〔遺物等集中〕 土器片集中：PB 礫集中：SB 炭化物集中：CB 獣骨集中：BB フレイク・チップ集中：FCB

2. 地層等について下記の略号を用いた。

〔堆積土〕 樽前 a 砂質降下火山灰：Ta-a 駒ヶ岳 c2 砂質降下火山灰：Ko-c2 樽前 b 降下軽石：Ta-b  
有珠 b 降下火山灰：Us-b 白頭山-苫小牧火山灰：B-Tm 樽前 c 砂質降下軽石：Ta-c  
樽前 d1 細礫質降下スコリア：Ta-d1 樽前 d2 中礫質降下軽石：Ta-d2.p 恵庭岳 a 降下軽石：En-a  
黄褐色粘土質シルト（いわゆるローム）：L 攪乱：KR

〔色調〕 小山・竹原編著（1994）『新版 標準土色帳』に従った。

〔注記〕 土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については（ ）内に粒径（単位：mm）、状態を記載した。

混入土の比率

A + B：A と B が同量比混じる A-B：A を主体に B が多量に混じる

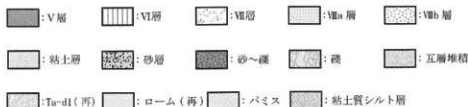
A = B：A を主体に B が少量 A≡B：A を主体に B が微量

φ：粒径（単位：mm） ↓：以下（状態）：斑状に混じる・均一に混じる

〔層位〕 標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や風倒木攪乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また、一覧表中には下記の略号を用いている。

U：上位 M：中位 L：下位

〔Tピット〕 第Ⅱ章第2節のTピット堆積図には以下のトーンを用いた。



〔焼土・獣骨集中〕 被熱による土壌赤色化の度合い等の表現に以下のトーンを用いた。



3. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。


基本土層：1/50 遺構周辺図：1/100, 1/40 住居跡：1/50 住居跡に付属する柱穴その他の付属遺構：1/20  
Tピット：1/40 焼土・灰集中：1/20 獣骨物集中：1/20, 1/40 集中遺物出土状態：1/10, 1/20, 1/30, 1/80  
土器実測図：1/3 土器拓影図：1/3 剥片石器・石製品実測図：1/2 礫石器実測図：1/3, 1/4, 1/5



4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

〔線種〕 - - - - - : オーバーハング    ———— : トレンチ    ———— : 攪乱・トレンチによる遺構推定

〔柱穴〕 住居跡柱穴の断面図において、しまりの強い壁面に斜線を用いている。

〔断面〕  : 柱穴の壁面周辺が強くしまる部分

5. 土器・石器の挿図および写真図版の番号に後続する枝番号は同一個体表記である。

6. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

〔断面〕  : たたき痕    |———| : 剥片石器 微細剥離 / 礫石器 擦り痕・滑沢面

〔平面〕  : 滑沢面範囲     : 被熱による赤色化/付着物範囲

7. 一覧表中の石材については、奈良が肉眼観察で分類した。下記の凡例は第III章で報告された石材同定結果の凡例と過年度の報告石材を合わせたものである。

〔火成岩 他〕 Obs: 黒曜石 Da: デイサイト (石英安山岩) And: 安山岩 Po: ひん岩

Gab: はんれい岩 Gni: 片麻岩 Bs: 玄武岩 Gbs: 玄武岩 (緑色岩化)

Gdo: ドレライト (粗粒玄武岩, 緑色岩化) Ser: 蛇紋岩 Gra: 花崗岩

〔火砕岩 他〕 Pm: 軽石 LpTf: 火山礫凝灰岩 Tf: 凝灰岩 Wtf: 溶結凝灰岩

〔堆積岩〕 Sa: 砂岩 Mud: 泥岩 Gr-Mud: 緑色泥岩 Con: 礫岩 Sh: 頁岩 Di-Mud: 珪藻泥質岩

Che: チャート Dsp: 圓結蛇紋岩質砕屑物 Tu: 凝灰岩 Aga-Sh: メノウ質頁岩

Aga: メノウ (化学的沈殿岩。晶洞に沈殿したので、周囲の母岩はあるが、置換した原石はない)

〔熱水変質岩〕 Si I: 珪化岩 I (メノウ質頁岩に相当。透明感強い。原岩を置換するが詳細不明)

Si II: 珪化岩 II (透明感にやや乏しい。原岩を置換するが、詳細不明。または沈殿物であるが、透明感に乏しい) Ssh: 珪質頁岩 (原岩が泥質岩)

〔変成岩〕 Amp: 角閃岩 Dio: 閃緑岩 Qu-Sch: 石英片岩 Bl-Sch: 青色片岩 Gsh: 緑色片岩 (片理発達)

Gsh-no: アオトラ型緑色岩 (変成度は緑色片岩相だが片理発達せず。原岩は玄武岩質の粒子からなる凝灰質砂泥質岩)

〔その他〕 Ftr: 木化石 Tul: 滑石

# 本文目次

## カラー

1-1 オニキシベ5遺跡 遠景

1-2 オニキシベ5遺跡 俯瞰

2-1 V H-01 完掘

2-2 V H-01 掘り上げ土断面

2-3 V P-10 出土一括土器

2-4 V B B-05 出土土器及び獣骨

3-1 調査区北東側斜面 基本層序

3-2 旧石器トレンチ2(H23)断面

3-3 V P-08 出土土棒

4-1 オニキシベ5遺跡 縄文時代中期土器

4-2 オニキシベ5遺跡 縄文時代後期前葉土器

(タブコブ式土器)

## 序文

## 例言

## 凡例

## 第1章 調査の概要

第1節 調査要項と体制	1
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
第2節 調査に至る経緯	1
1. 厚幌ダム建設事業	1
2. 発掘調査までの経緯	2
第3節 調査の方法	7
1. 調査区の設定	7
2. 包含層及び遺構の調査方法	7
3. 整理作業	8
第4節 遺物の分類	9
1. 土器	9
2. 剥片石器	9
3. 礫石器	10
第5節 調査結果の概要	11
1. 縄文時代	11
第6節 遺跡の位置と周辺の環境	12

1. 厚真町の概要	12
2. 遺跡の位置と周辺の環境	20
3. 調査区内の地形と地質	23

## 第II章 縄文時代の調査

第1節 住居跡	31
第2節 Tピット	43
第3節 土坑	63
第4節 焼土	75
第5節 遺物集中	85
1. 土器集中	85
2. 礫集中	107
3. フレイク・チップ集中	113
第6節 獣骨集中	116
第7節 包含層出土遺物	124
1. 土器	124
2. 剥片石器	130
3. 礫石器・石製品	134

## 第III章 自然科学及び動物遺存体分析

第1節 オニキシベ5遺跡における 放射性炭素年代	152
第2節 オニキシベ5遺跡における 石器石材同定	156
第3節 動物遺存体同定	158
第4節 オニキシベ5遺跡から検出された 植物種子	159

## 第IV章 まとめ

第1節 出土土器について	161
引用・参考文献	162
報告書抄録	213
奥付	

## 写真図版

図版	163~212
----	---------

# 挿 図 目 次

## 第 I 章

図 I-1	厚幌ダム建設事業関連 埋蔵文化財包蔵地位置図	4
図 I-2	周辺の地形図及びグリッド設定図	5
図 I-3	調査範囲・座標杭・メインセクション・ 旧石器トレンチ位置図	6
図 I-4	グリッド模式図	8
図 I-5	厚真町内遺跡分布図	13
図 I-6	厚真川上流域と鶴川中流域の古地形図	22
図 I-7	旧河川流路図	25
図 I-8	基本土層柱状図	26
図 I-9	南北断面図(1)	27
図 I-10	南北断面図(2)	28
図 I-11	東西断面図	29
図 I-12	南西断面及び旧石器トレンチ柱状図	30

## 第 II 章

図 II-1	縄文時代遺構配置図	32
図 II-2	VH-01 平面図及び周辺遺構	36
図 II-3	VH-01 断面図及び住居周辺地形図	37
図 II-4	VH-01 付属遺構平面図及び断面図	38
図 II-5	VH-01 柱穴断面図(1)	39
図 II-6	VH-01 柱穴断面図(2)	40
図 II-7	VH-01 及び関連出土遺物	42
図 II-8	TP-01・03・05・07 平面図	50
図 II-9	TP-01・03・05・07 断面図	51
図 II-10	TP-02・16・VPB-02・11 平面図及び断面図	52
図 II-11	TP-06・08・09・VP-01 平面図及び断面図	53
図 II-12	TP-10~12 平面図及び断面図	54
図 II-13	TP-13~15・17 平面図及び断面図	55
図 II-14	TP-18~20 平面図及び断面図	56
図 II-15	TP-21~23 平面図及び断面図	57
図 II-16	TP-24~26 平面図及び断面図	58
図 II-17	TP-27・28 平面図及び断面図	59
図 II-18	TPビット及び関連遺構出土遺物	60

図 II-19	VP-01~03・05・06 平面図及び断面図	68
図 II-20	VP-07~10 平面図及び断面図	69
図 II-21	VP-11~13・15~17 平面図及び断面図	70
図 II-22	VP-18・19・VPX-01 平面図及び断面図	71
図 II-23	VP-01・03・08 出土遺物	73
図 II-24	VP-10・11・16・18 出土遺物	74
図 II-25	VF-01~06 平面図及び断面図	79
図 II-26	VF-07~10・VBB-07~09 平面図及び断面図	80
図 II-27	VF-11・12・14・21 平面図及び断面図	81
図 II-28	VF-13・15~20・22・23 平面図及び断面図	82
図 II-29	VF-02 出土土器	83
図 II-30	VPB-01A・B・03~10・VFCB-01 平面及び 垂直分布図	90
図 II-31	VPB-12・14~16・19 平面及び 垂直分布図	91
図 II-32	VPB-17・18 平面及び垂直分布図	92
図 II-33	VPB-20・25 平面及び垂直分布図	93
図 II-34	VPB-21・22・24・26 平面及び 垂直分布図	94
図 II-35	VPB-23 平面及び垂直分布図	95
図 II-36	VPB 出土土器(1)	97
図 II-37	VPB 出土土器(2)	98
図 II-38	VPB 出土土器(3)	99
図 II-39	VPB 出土土器(4)	100
図 II-40	VPB 出土土器(5)	101
図 II-41	VPB 出土土器(6)	102
図 II-42	VPB 出土遺物(7)	103
図 II-43	VSB-01~03 平面図及び遺物分布図	110
図 II-44	VSB-04~07 平面図及び垂直分布図	111
図 II-45	VSB-08~12 平面図	112
図 II-46	VSB-01-02 出土礫石器	113
図 II-47	VSB-03 出土石器(1)	114
図 II-48	VSB-03 出土石器(2)	115
図 II-49	VSB-03 出土石器(3)	116

図Ⅱ-50	VSB-04-07~11 出土遺物	117
図Ⅱ-51	VSB-11 出土遺物	118
図Ⅱ-52	VSB-11・VBB-05・VFCB-03 出土遺物	119
図Ⅱ-53	VBB-01-02-04-05 平面及び遺物分布図	123
図Ⅱ-54	包含層出土土器(1)	126
図Ⅱ-55	包含層出土土器(2)	127
図Ⅱ-56	包含層出土土器(3)	128
図Ⅱ-57	時代別土器接合線図	129
図Ⅱ-58	包含層出土剥片石器(1)	135
図Ⅱ-59	包含層出土剥片石器(2)	136

図Ⅱ-60	包含層出土礫石器(1)	139
図Ⅱ-61	包含層出土礫石器(2)	140
図Ⅱ-62	包含層出土礫石器(3)	141
図Ⅱ-63	包含層出土礫石器(4)	142
図Ⅱ-64	包含層出土礫石器(5)	143
図Ⅱ-65	包含層出土礫石器(6)	144
図Ⅱ-66	包含層出土礫石器(7)	145
図Ⅱ-67	包含層出土礫石器(8)	146
図Ⅱ-68	包含層出土礫石器(9)	147
図Ⅱ-69	包含層出土礫石器(10)	148
図Ⅱ-70	包含層出土礫石器(11)	149

## 挿 表 目 次

### 第Ⅰ章

表Ⅰ-1	グリット設定関係坑座標値一覧表	5
表Ⅰ-2	オニキシベ5 遺跡概要一覧表	12
表Ⅰ-3	オニキシベ5 遺跡出土遺物一覧表	12
表Ⅰ-4	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)	14
表Ⅰ-5	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)	15
表Ⅰ-6	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(3)	16

### 第Ⅱ章

表Ⅱ-1	縄文時代遺構群一覧表(1)	33
表Ⅱ-2	縄文時代遺構群一覧表(2)	34
表Ⅱ-3	縄文時代遺構群一覧表(3)	35
表Ⅱ-4	VH-01 属性表	36
表Ⅱ-5	VH-01 付属遺構属性表	40
表Ⅱ-6	VH-01 柱穴属性表	41
表Ⅱ-7	VH-01 周辺出土土器属性表	41
表Ⅱ-8	VH-01 出土土器属性表	41
表Ⅱ-9	Tピット属性表	61
表Ⅱ-10	Tピット逆茂木跡属性表	62
表Ⅱ-11	V P 属性表	72

表Ⅱ-12	V F 属性表	83
表Ⅱ-13	Tピット関連及びV P・V F 出土 土器属性表	84
表Ⅱ-14	V P・Tピット出土土器属性表	85
表Ⅱ-15	VPB 出土土器属性表(1)	104
表Ⅱ-16	VPB 出土土器属性表(2)	105
表Ⅱ-17	VPB 出土土器属性表(3)	106
表Ⅱ-18	VPB 出土土器属性表	106
表Ⅱ-19	VSB-04・VFCB-03 出土土器属性表	119
表Ⅱ-20	VPB・SB・BB 出土土器属性表	120
表Ⅱ-21	縄文時代礫重量一覧表	121
表Ⅱ-22	VSB 出土礫石器・礫比率円グラフ	122
表Ⅱ-23	包含層出土土器属性表(1)	131
表Ⅱ-24	包含層出土土器属性表(2)	132
表Ⅱ-25	包含層出土土器属性表(3)	133
表Ⅱ-26	包含層出土剥片石器属性表(1)	137
表Ⅱ-27	包含層出土剥片石器属性表(2)	138
表Ⅱ-28	包含層出土礫石器属性表(1)	150
表Ⅱ-29	包含層出土礫石器属性表(2)	151

## 写真目次

図版 1-1	調査区近景(平成 22 年度調査区 1) …… 165	図版 7-2	T P-08 断面 …… 171
図版 1-2	調査区近景(平成 22 年度調査区 2) …… 165	図版 7-3	T P-09 完掘 …… 171
図版 1-3	調査区近景(平成 23 年度調査区) …… 165	図版 7-4	T P-09 断面 …… 171
図版 2-1	調査区北壁基本層序(H23) …… 166	図版 7-5	T P-10 完掘 …… 171
図版 2-2	A-Bライン断面 1 …… 166	図版 7-6	T P-10 断面 …… 171
図版 2-3	A-Bライン断面 2 …… 166	図版 8-1	T P-11 完掘 …… 172
図版 2-4	旧石器トレンチ 7 断面 …… 166	図版 8-2	T P-11 断面 …… 172
図版 2-5	旧石器トレンチ 3 断面 …… 166	図版 8-3	T P-12 完掘 …… 172
図版 2-6	旧石器トレンチ 5 断面 …… 166	図版 8-4	T P-12 断面 …… 172
図版 3-1	VH-01 完掘 …… 167	図版 8-5	T P-13 完掘 …… 172
図版 3-2	VH-01.HF01 検出 …… 167	図版 8-6	T P-13 断面 …… 172
図版 3-3	VH-01.HF01 断面 …… 167	図版 9-1	T P-14 完掘 …… 173
図版 3-4	VH-01.HF01 完掘 …… 167	図版 9-2	T P-14 断面 …… 173
図版 3-5	VH-01 東西断面 …… 167	図版 9-3	T P-15 完掘 …… 173
図版 3-6	VH-01.PT01 完掘 …… 167	図版 9-4	T P-15 断面 …… 173
図版 3-7	VH-01.PT01 断面 …… 167	図版 9-5	T P-16 完掘 …… 173
図版 4-1	HP01 断面 …… 168	図版 9-6	T P-16 断面 …… 173
図版 4-2	HP15 断面 …… 168	図版 10-1	T P-17 完掘 …… 174
図版 4-3	HP07 断面 …… 168	図版 10-2	T P-17 断面 …… 174
図版 4-4	T P-01 完掘 …… 168	図版 10-3	T P-18 完掘 …… 174
図版 4-5	T P-01 断面 …… 168	図版 10-4	T P-18 断面 …… 174
図版 4-6	T P-02 掘り上げ土及び VPB-02 出土状態 …… 168	図版 10-5	T P-19 完掘 …… 174
図版 4-7	VPB-02・T P-02 掘り上げ土断面 …… 168	図版 10-6	T P-19 断面 …… 174
図版 5-1	T P-02 完掘 …… 169	図版 11-1	T P-20 完掘 …… 175
図版 5-2	T P-02 断面 …… 169	図版 11-2	T P-20 断面 …… 175
図版 5-3	T P-03・05・07 検出状態 …… 169	図版 11-3	T P-21 完掘 …… 175
図版 5-4	T P-03 完掘 …… 169	図版 11-4	T P-21 断面 …… 175
図版 5-5	T P-03 断面 …… 169	図版 11-5	T P-22 完掘 …… 175
図版 6-1	T P-05 完掘 …… 170	図版 11-6	T P-22 断面 …… 175
図版 6-2	T P-05 断面 …… 170	図版 12-1	T P-23 完掘 …… 176
図版 6-3	T P-06 完掘 …… 170	図版 12-2	T P-23 断面 …… 176
図版 6-4	T P-06 断面 …… 170	図版 12-3	T P-24 完掘 …… 176
図版 6-5	T P-07 完掘 …… 170	図版 12-4	T P-24 断面 …… 176
図版 6-6	T P-07 断面 …… 170	図版 12-5	T P-25 完掘 …… 176
図版 7-1	T P-08 完掘 …… 171	図版 12-6	T P-25 断面 …… 176
		図版 13-1	T P-26 完掘 …… 177

図版 13-2 T P-26 断面	177	図版 18-2 V P-19 断面	182
図版 13-3 T P-27 完掘	177	図版 18-3 V F-01 検出	182
図版 13-4 T P-27 断面	177	図版 18-4 V F-01 断面	182
図版 13-5 T P-28 完掘	177	図版 18-5 V F-02 検出(近景)	182
図版 13-6 T P-28 断面	177	図版 19-1 V F-02 検出	183
図版 14-1 V P-01 完掘	178	図版 19-2 V F-02 断面	183
図版 14-2 V P-01 断面	178	図版 19-3 V F-02 炉石取り上げ後状態	183
図版 14-3 V P-02 完掘	178	図版 19-4 V F-03 検出及び断面	183
図版 14-4 V P-02 断面	178	図版 19-5 V F-04 検出	183
図版 14-5 V P-03(手前)・06(奥)完掘	178	図版 19-6 V F-04 断面	183
図版 14-6 V P-03 土器出土状態	178	図版 19-7 V F-05 検出	183
図版 14-7 V P-03 断面	178	図版 19-8 V F-05 断面	183
図版 14-8 V P-06 断面	178	図版 20-1 V F-06 検出	184
図版 15-1 V P-05 完掘	179	図版 20-2 V F-06 断面	184
図版 15-2 V P-05 断面	179	図版 20-3 V F-07 検出	184
図版 15-3 V P-07 完掘	179	図版 20-4 V F-07 断面	184
図版 15-4 V P-07 断面	179	図版 20-5 V F-08 検出	184
図版 15-5 V P-08 完掘	179	図版 20-6 V F-08 断面	184
図版 15-6 V P-08 断面	179	図版 20-7 V F-09 検出	184
図版 15-7 V P-09 完掘	179	図版 20-8 V F-09 断面	184
図版 15-8 V P-09 断面	179	図版 21-1 V F-10 検出	185
図版 16-1 V P-10 完掘	180	図版 21-2 V F-10 断面	185
図版 16-2 V P-10 断面	180	図版 21-3 V F-11 検出	185
図版 16-3 V P-11 完掘	180	図版 21-4 V F-11 断面	185
図版 16-4 V P-11 断面	180	図版 21-5 V F-12 検出	185
図版 16-5 V P-12 完掘	180	図版 21-6 V F-12 断面	185
図版 16-6 V P-12 断面	180	図版 21-7 V F-13 検出	185
図版 16-7 V P-13 完掘	180	図版 21-8 V F-13 断面	185
図版 16-8 V P-13 断面	180	図版 22-1 V F-14 検出	186
図版 17-1 V P-15 完掘	181	図版 22-2 V F-14 断面	186
図版 17-2 V P-15 断面	181	図版 22-3 V F-15 検出	186
図版 17-3 V P-16 完掘	181	図版 22-4 V F-15 断面	186
図版 17-4 V P-16 断面	181	図版 22-5 V F-16 検出	186
図版 17-5 V P-17 完掘	181	図版 22-6 V F-16 断面	186
図版 17-6 V P-17 断面	181	図版 22-7 V F-17 検出	186
図版 17-7 V P-18 完掘	181	図版 22-8 V F-17 断面	186
図版 17-8 V P-18 断面	181	図版 23-1 V F-18 検出	187
図版 18-1 V P-19 完掘	182	図版 23-2 V F-18 断面	187

図版 23-3 VF-19 検出	187	図版 28-1 VSB-07 検出	192
図版 23-4 VF-19 断面	187	図版 28-2 VSB-08 検出	192
図版 23-5 VF-20 検出	187	図版 28-3 VSB-09 検出	192
図版 23-6 VF-20 断面	187	図版 28-4 VSB-10 検出	192
図版 23-7 VF-21 検出	187	図版 28-5 VSB-11 検出(洪水シルト層)	192
図版 23-8 VF-21 断面	187	図版 28-6 VSB-11 検出	192
図版 24-1 VF-22 検出	188	図版 28-7 VBB-05 検出	192
図版 24-2 VF-22 断面	188	図版 28-8 VBB-08 検出	192
図版 24-3 VF-23 検出	188	図版 29-1 調査終了状態(H22 調査区1)	193
図版 24-4 VF-23 断面	188	図版 29-2 調査終了状態(H23 調査区)	193
図版 24-5 VPB-01A 検出	188	図版 29-3 作業状況1(H22)	193
図版 24-6 VPB-01B 検出	188	図版 29-4 作業状況2(H23)	193
図版 24-7 VPB-03 検出	188	図版 30-1 VH-01 及び周辺出土遺物	194
図版 24-8 VPB-05 検出	188	図版 31-1 Tビット・VP 出土復元土器	195
図版 25-1 VPB-09 検出	189	図版 31-2 Tビット・VP 出土遺物	195
図版 25-2 VPB-09 検出拡大	189	図版 32-1 VP-08・16・18・VPX-01・VF-02 出土遺物	196
図版 25-3 VPB-10 検出	189	図版 33-1 VPB 出土復元土器(1)	197
図版 25-4 VPB-12 検出	189	図版 34-1 VPB 出土復元土器(2)	198
図版 25-5 VPB-13 断面 (VP-10)	189	図版 35-1 VPB 出土土器	199
図版 25-6 VPB-14 検出	189	図版 36-1 VPB 出土遺物	200
図版 25-7 VPB-15 検出	189	図版 37-1 VSB-01・02 出土礫石器	201
図版 25-8 VPB-16 検出	189	図版 37-2 VSB-03 出土石器(1)	201
図版 26-1 VPB-17 検出	190	図版 38-1 VSB-03 出土石器(2)	202
図版 26-2 VPB-18 検出	190	図版 38-2 VSB-04・07~09 出土遺物	202
図版 26-3 VPB-19 検出	190	図版 39-1 VSB-10・11・VBB-05・VFCB-03 出土遺物	203
図版 26-4 VPB-20 検出	190	図版 40-1 包含層出土土器(1)	204
図版 26-5 VPB-21 検出	190	図版 41-1 包含層出土土器(2)	205
図版 26-6 VPB-23 検出	190	図版 42-1 包含層出土剥片石器(1)	206
図版 26-7 VPB-24 検出	190	図版 43-1 包含層出土剥片石器(2)	207
図版 26-8 VPB-25 検出	190	図版 44-1 包含層出土礫石器(1)	208
図版 27-1 VPB-26 検出	191	図版 45-1 包含層出土礫石器(2)	209
図版 27-2 VSB-01~03 検出	191	図版 46-1 包含層出土礫石器(3)	210
図版 27-3 VSB-01・02 検出	191	図版 47-1 包含層出土礫石器(4)	211
図版 27-4 VSB-01 検出	191	図版 48-1 包含層出土礫石器(5)・石製品	212
図版 27-5 VSB-03 検出(拡張部)	191		
図版 27-6 VSB-04・05 検出	191		
図版 27-7 VSB-04 検出	191		
図版 27-8 VSB-06 検出	191		

## 第1章 調査の概要

## 第1節 調査要項と体制

## 1. 調査要項

事業名：厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部（旧北海道室蘭土木現業所）

受託者：厚真町教育委員会

遺跡名：オニキシベ5遺跡（J-13-90）

調査面積：平成22年度 2,283㎡

平成23年度 3,144㎡ 合計5,427㎡

所在地：北海道勇払郡厚真町字幌内421.421-2.471-2

受託期間：平成22年4月14日～平成23年3月31日・平成23年4月6日～平成24年3月30日

発掘期間：平成22年9月1日～9月30日・平成23年5月11日～8月31日

## 2. 調査体制

厚真町教育委員会 教育長 兵頭 利彦

生涯学習課社会教育グループ

〔平成22年度〕

参事 佐藤 照美 主幹 上田 教子 学芸員 乾 哲也（調査担当者 主任）

〔平成23年度〕

参事 佐藤 照美 主幹 上田 教子 学芸員 乾 哲也（調査担当者 主査）

〔平成22年度〕

囑託職員 奈良 智法・天方 博章（調査担当者）・佐々木 都（事務員）

臨時職員 宮崎 美奈子・畑嶋 朝江（測量技能作業員および写図工）

〃 大坪 正典・松本 稔（整備技能作業員）

〃 発掘作業員 24名 整理作業員 22名

〔平成23年度〕

囑託職員 奈良 智法・荻野 幸男（調査担当者）鈴木 直樹（事務員）

臨時職員 畑嶋 朝江（測量技能作業員および写図工）・渡辺 博道（測量技能作業員）

〃 佐伯 憲吾・山川 健二（整備技能作業員）

〃 発掘作業員 17名 整理作業員 13名（奈良）

## 第2節 調査に至る経緯

## 1. 厚幌ダム建設事業

町内を縦貫する厚真川中下流域には約3,000haもの水田地帯が広がっている。このため、春の灌漑用水の確保は勿論のこと、融雪や豪雨による洪水への治水対策が開拓期以来の課題とされていた。

昭和45（1970）年に現河口より38km地点に、農業用ダムである「厚真ダム」が完成した。しかし、このダムは洪水調整機能が不十分で、昭和45年には洪水と濁水、昭和48・50・56年にも洪水が発生し、近年においても、平成12年春の融雪期と平成13年秋に、家屋や農地に被害をおよぼす洪



水、平成18・23年にも一部がオーバーフローする事態が発生している。また、昭和59・60・63年には深刻な水不足にも見舞われており、平成19年は、幼穂形成期の水不足により深水灌漑が行えなかったため低温障害を受け、作況指数が極端に低い年でもあった。特に田植え時期における農業用水の確保は農業者にとっては勿論、厚真町民にとっても関心事であり、厚真町の基幹産業である農業、豊かな穀倉地帯を築くうえで、治水や農業灌漑などを目的とする新たなダム建設が陳情されていた。また、市街地への人口集中の進行による住宅街や苫小牧東港への水道用水の需要が急増し、取水可能量は限界に達していることから、新たな上水道水源確保が急務となっている。

これらの状況の抜本的な治水等の改善策として、昭和52年に北海道土木現業所により厚幌ダム建設事業の予備調査が着手されている。その後、昭和61年に実施設計である「厚真川総合開発事業計画調査」の着手が決まり、平成7(1995)年に北海道と厚真町との間で「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」が結ばれ、洪水調整、灌漑用水、水道水の確保、流水の正常な機能維持の多目的ダムとして、現厚真ダム下流に「厚幌ダム」の建設着工が決定された。また、同年には地元厚真町内に厚幌ダム建設事務所が開設され、その後、沿岸漁業団体への説明会や環境アセスメントも実施されている。近年ではダム事業に関連して、道道切替工事や町内各地区の農業経営体育成基盤整備事業、農業用水路再編対策事業(厚幌導水路建設)が展開され、営農の効率化が促進されている。厚幌ダムの本格着工として、平成14年度からの水没地域内用地買収とともに、一般道道上幌内早来停車場線の切替工事に着手し、北進平取線としてむかわ町穂別まで延長開通の計画である。厚幌ダム本体(堤体)は、平成20年に建設費節減のため最新工法での設計変更がなされ、堤体長516m、高さ47.2m、台形CSGダムで、ヲチャラセナイ遺跡より約450m下流に堤体を建設する計画である。貯水は常時湛水面標高85.4m、最深湛水面標高88.1mであり、総貯水量は47,400千 $m^3$ 、現在の厚真ダムのおおよそ4.7倍の貯水量となり、多方面にわたって絶大な効果波及が想定され、早期完成が望まれていた。

しかし、北海道内の複数のダム事業との関係からダム堤体着手の予算確保が困難な状況が続き、当初計画の平成24年完成から平成27年秋に試験湛水、28年に春に供用を開始する計画となり工期が延長された。その後、平成20年11月に公共事業再評価を受け、多目的ダムの必要においてA評価を受け事業継続となっていた。ところが、平成21年7月の政権交代によって、全国の公共事業、とりわけダム事業の否定的見直しが進められ、厚幌ダムもその対象となっている(苫小牧民報社2009.10.7)。その後平成23年8月に国土交通省は事業継続を決定し、平成24年度からは完成に向けて、埋蔵文化財発掘調査費用も予算が配当され、道理文センターも調査に参入している。なお、厚幌ダムは国費54%、道費44.6%等のいわゆる「補助ダム」と称されるダムである。(乾)

## 2. 発掘調査までの経緯

### A 厚幌ダム建設事業の埋蔵文化財事前調査

厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえて、平成12年7月6日に北海道室蘭土木現業所厚幌ダム建設事務所(以下、ダム事務所)より、ダム事業全体に係わる埋蔵文化財事前協議書(室土厚幌第158号)が厚真町教育委員会(以下、町教委)を経て北海道教育委員会(以下、道教委)へ提出された。協議区域は最深湛水面標高88.1m以下の区域と道道上幌内早来停車場線(以下、道道)切替路線幅の合計約235,500 $m^2$ に及ぶ。まず、平成13年6月に道教委により試掘調査が行われ、約8,250 $m^2$ の「要発掘調査」面積となり、厚幌1遺跡(J-13-25)として新規登録された(平成13年7月18日付 教文第

4265号)。これを受け、厚幌ダム関連の埋蔵文化財発掘調査について道教委と町教委で協議した結果、ダム関連の試掘調査までは道教委が行い、発掘調査は厚幌ダム建設に係わる受益者が厚真町1町であることから、町教委と北海道室蘭土木現業所で委託契約を結び、町教委が行うこととなった。翌平成14・15年度の2ヶ年で厚幌1遺跡の発掘調査を行った(厚真町教育委員会2004)。

湛水地域内は平成13年10月に所在確認調査(A調査)が行われ、周知の遺跡(オニキシベ1遺跡、上幌内1遺跡)を含め16ヶ所、面積235,500㎡の要試掘調査の回答がされた(平成13年11月16日付け教文第4532号)。以後、追加箇所や範囲拡張も含め平成19年度までに8回、18地点の試掘調査が実施され、14遺跡、約143,000㎡の要発掘・要遺構確認調査地点が確認されていた。

しかし、これまでの発掘調査成果から河岸段丘の低位面にも埋蔵文化財包蔵地が広がること等、この地区における遺跡の立地パターンが判明してきており、建設中工事の発見を避けるため新たな視点での再試掘調査の必要性が生じていた。これを受け道教委は平成21年5月に湛水地域内の所在確認踏査を行い、要試掘調査地点10ヶ所を回答した(平成21年6月11日付け教文第928号)。これらの試掘調査は平成22年11月を最後に一連の所在・範囲確認調査は終了した。既に発掘調査が終了した面積と遺構確認調査面積を含め、平成24年1月現在の要発掘調査地点は21ヶ所に及び要発掘面積150,151㎡、要遺構確認調査面積は49,044㎡で合計199,195㎡となった。平成24年1月現在で発掘調査終了面積が76,538㎡(合計面積の38.4%)となっている(図I-1)。

#### B オニキシベ5遺跡の発見経緯

オニキシベ5遺跡は、平成15年8月、道教委による試掘調査によって新規記載された包蔵地である。林地現況のままの試掘であり、小型バックホー0.28㎡と精査の作業員5名で17ヶ所のトレンチが掘開された。この結果、3ヶ所から遺物が出土し、遺構確認を含む2,000㎡が「要発掘調査」の回答となった(平成15年9月1日付け教文第4495号)。合わせて同年11月に厚真町教育委員会によって「オニキシベ5遺跡」(J-13-90)として包蔵地登録カードを作成した。

#### C 調査に至る経緯と範囲の拡張

平成22年度の発掘調査地点選定は、ダム事務所との協議で町道切替工事の計画があるため本遺跡の調査が優先された結果による。平成22年度は鬼岸辺川に沿った段丘縁辺部約800㎡を「調査区1」、これより南側内陸に約25m入り込んだ地点を「調査区2」とし、これら調査区の間約1,000㎡を遺構確認範囲とした(図I-3)。また、平成22年度の発掘調査結果により16ラインより東側に遺物が続くことが判明し、ダム事務所、道教委と協議を行った。同年9月に道教委による範囲確認調査で「要発掘」の回答となり(平成22年10月4日付け教文第1860号)、これらの結果、段丘東側を含む約3,000㎡の要発掘回答がなされた。平成22年度に新規着手で発掘調査が開始された本遺跡は、調査区1とした鬼岸辺川に面する縁辺部で調査中に被熱礫等が多量に出土した。これらの遺物は明らかに調査区外の北西側に広がりを見せることが判明したため、想定拡張範囲を確認した後にダム事務所、道教委と協議し調査範囲の拡張を行っている。調査区1の北側は段丘縁であり、伐採を行っていない樹木も林立していることから、崩落の危険を回避するため縁から2~3mのクリアランスを確保して範囲拡張を行った。また遺構確認調査としていた範囲については、火山灰除去によって埋没河川であることが判明したが、埋没河川北側縁辺には土器や石器などが出土していたため、一部重機と人力併用で遺構確認範囲を調査している。平成23年度の調査でも、鬼岸辺川に面する縁辺部に遺物が多く出土したため、安全面を考慮し範囲の拡張を行っている。(乾)

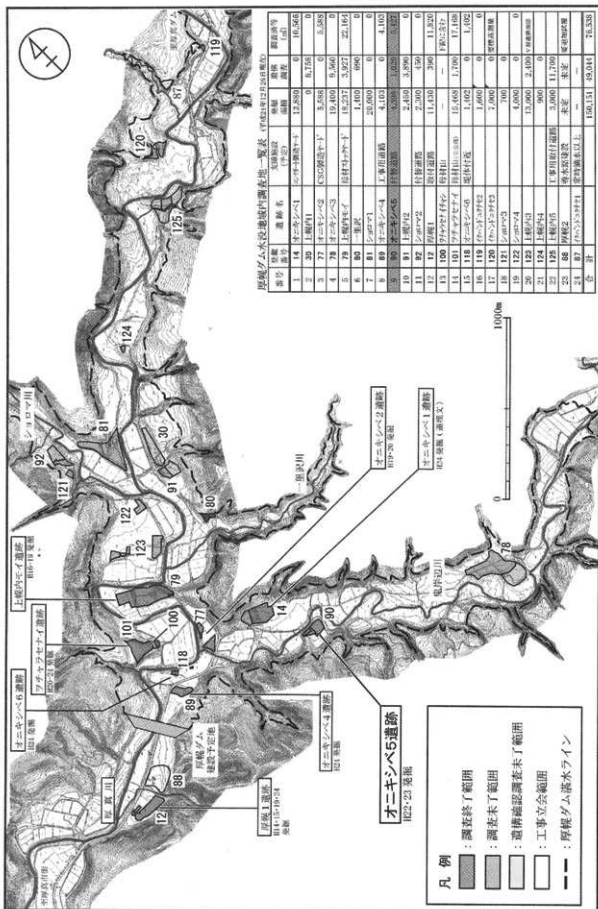


図 1-1 厚鏡ダム建設事業関連埋蔵文化財包蔵地位置図

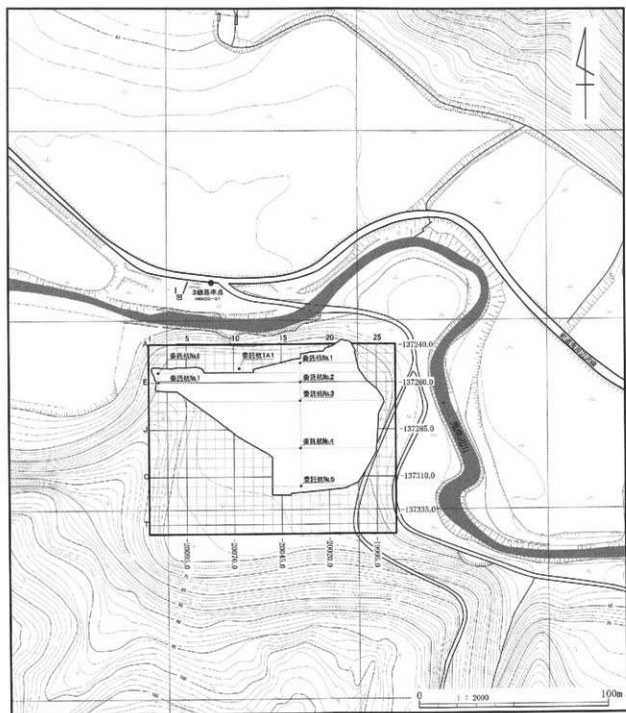


図 I-2 周辺の地形図及びグリッド設定図

表 I-1 グリッド設定関係杭座標値一覧表

杭名	X座標	Y座標	Z座標
TA1	-137252.760	-20083.935	60.686
No.1	-137250.000	-20035.000	67.661
No.2	-137260.000	-20035.000	67.218
No.3	-137270.000	-20035.000	67.100
No.4	-137295.000	-20035.000	67.252
No.5	-137315.000	-20035.000	67.320
No.6	-137255.000	-20110.000	67.877
No.7	-137260.000	-20110.000	67.477

※ 世界測地系公共座標(平成18年度十測沖地費補正版)

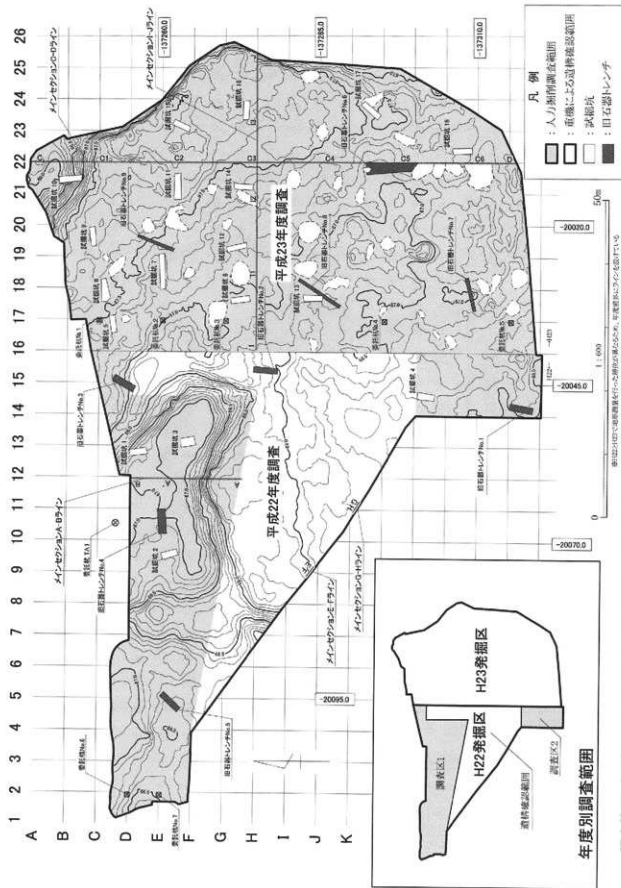


図 I-3 調査範囲・産横杭・メインセクション・旧石器トレンチ位置図

### 第3節 調査の方法

#### 1. 調査区の設定

調査区内のグリッドは公共座標（世界測地系 平成15年十勝沖地震対応）に従い、遺物包含層の堆積が想定される段丘面のほぼ全面を含む160m×100mで設定し、5m四方のメッシュで区分した。グリッド網の起点（A-1区：X=-137240.000 Y=-20115.000）は北西コーナーとし、南北のX軸をA・B・C・・・のアルファベット列で、東西のY軸ラインを1・2・3・・・のアラビア数字列とした。各グリッドの呼称も北西コーナーの杭とし、A-1区、A-2区・・・とした。5m四方のメッシュを大グリッドとし、これを1m四方の小グリッドに25分割し、微細図等の作成基準点などに用いている（図I-4）。

現地での設定方法は、平成22年度にグリッド設定基準杭7点の設置を有限会社福田測量に委託し、測量技能作業員が光波式トータルステーションを用いて調査区全面のグリッド杭を設置した（I-3）。

絶対高は、本段丘縁辺に設定したTA1杭より各グリッド杭へ移設した。絶対高算出の基準杭は、道道上幌内早来停車場線と町道鬼岸辺沢線との交差点より西方向へ約1,150m、厚幌ダム堤体建設予定地に所在する「3級基準杭 厚幌ダムHB BMNo.3-45 北海道室蘭土木現業所」である。（乾）

#### 2. 包含層および遺構の調査方法

調査の準備段階として、調査員立会のもとバックホーにより表土や耕作土、盛土と同時に樽前b火山灰及びⅢ層黒色腐植土の除去を行った。Ⅲ層は試掘段階で遺物が出土していないため樽前b火山灰除去と同時に行ったが、調査員立会のもと遺物・遺構の有無を確認している。そのため火山灰除去は一度に樽前c火山灰まで行い、V層上面はジョレンを用いて人力による精査を行った。精査と並行して調査補助員、技能作業員で基準杭（委託杭No.1～7）から光波トータルステーションを使用してグリッド杭の打設を行った。

平成22年度の火山灰除去は当初から人力による調査予定地点であった調査区1から始め、調査区2の除去を終えた後に調査前状態の近景写真撮影を行った。遺構確認範囲については、人力で調査区1の調査と並行して黒色土の除去を行っている。

平成23年度も調査員立会のもとバックホーにより北側段丘縁辺部から火山灰除去を始め、Ⅲ層の遺物、遺構を確認しながら樽前c火山灰まで除去を行っている。V層は25%を移植ゴテで調査を行い、VI層までの遺物出土頻度を確認したうえで、遺物の濃い範囲から調査を行っている。また、平成23年度の調査区については北東側に住居跡と思われる皿状の窪地を確認したため、掘り上げ土の範囲も含む周辺にトレンチを設定して先行調査を行った。地形測量は平成22年度がⅦ層、平成23年度がⅥ層で50cmメッシュ座標単点を取り込み、測量データを株式会社シン技術コンサルに委託して地形測量図を作成している。地形測量図に関しては年度ごとに単点を記録した層位が異なってしまったため、最大で1mの誤差が生じている。これについては遺構配置図や位置図など調査区の等高線が入った図面全てに年度別のライン（16ライン）を設けて等高線が繋がらないことを示している。同一調査区内で等高線が異なり、非常に見づらい図になってしまったことをお詫び申し上げる。なお、旧石器時代の遺物包含層確認のためV層調査終了後に旧石器確認トレンチを掘削したが、樽前d火山灰直下が河川堆積層であったため、人力による精査は行っていない。

遺構は住居跡など包含層上面から窺みとして確認できたものは、先行トレンチや土層観察用のベルトを設定し、できるだけ遺構構築面の把握や構築面での調査を考慮した。焼土や炭化物集中区等については、燃焼面のほぼ全量をフローテーションサンプルとして採取し、2ヶ年の土壌サンプル

量は合計 129.60 に及ぶ。処理は同事業のヲチャラセナイ遺跡に運搬し、ビニールハウス内で乾燥、計量を行った後、フローテーションマシンを用いて発掘調査期間中に処理を行った。記録図化については光波式トータルステーションを用いて平面形およびエレベーションを記録し、堆積状態については調査担当者が分層と土層注記を行い、測量技能作業員が堆積図作成の実測を行った。各調査経過は 35mm 一眼レフカメラでデジタル画像とモノクロで写真記録撮影を行った。

遺物の取り上げについては調査員による層位確認と段丘堆積物中の自然礫とを認定区分したうえで、光波式トータルステーションによる XYZ 座標（公共座標世界測地系）をデジタル記録している。この時、手簿（日付・グリッド・層位・遺物名等）の記載も行い、データ入力ミスの補充を行っている。

なお、調査終了後の現地については、旧石器確認トレンチやTピットなどの深い遺構のみ埋め戻し作業を行ったが、他はそのままの裸地状態で発掘調査を終了している。（乾）

### 3. 整理作業

平成 22 年度は二次整理として出土遺物の整理、分類、データ入力、遺構図は第二原図を作成し、トレースと配置まで行った。遺物は実測、トレース、写真撮影、平成 23 年度は前年度と同じく二次整理作業を行い、2ヶ年分の遺物及び遺構図、写真図版の編集作業を行った。平成 24 年度は現場における調査担当者の奈良が編集と校正の報告書作成業務を行った。

一次整理は発掘調査段階から水洗、注記作業を行い、整理業務に入ってから各担当の調査員が調査区遺構名や層位、種別、細分類、分類等の台帳確認作業を行った。また並行して、フローテーション処理後の試料選別作業も行っている。

二次整理は、各種遺物の接合・復元・実測・拓本等の作業を行い、復元土器の一部や剥片石器の実測は株式会社トラスト技研へ委託した。また、礫石器実測用写真撮影をシン技術コンサルへ委託した。

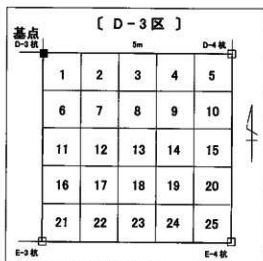


図 I-4 グリッド模式図

実測遺構図等の第 2 原図の作成やトレース作業・編集は、パソコン Windows (Os Adobe IllustratorCS) で行った。遺物の写真撮影は有限会社スタジオクリークの佐藤雅彦氏へ委託し、撮影データをパソコン (Os Windows Adobe Photoshop CS) で撮影背景の切り抜き作業やレイアウトを行っている。報告書掲載図や写真図版などの版組み、一覧表の編集も上記のソフトで行い、本文の Word 文書と合わせて、ひまわり印刷株式会社へデジタル入稿した。遺物の保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のは、分類及び調査区毎にコンテナに収納し町内の廃校舎に收藏している。（乾）

## 第4節 遺物の分類

## 1. 土器

縄文時代早期から弥文文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで型式、時期等の細分をした。

## 第I群土器 縄文時代早期に属する土器。

本遺跡では出土していない。

## 第II群土器 縄文時代前期に属する土器。

本遺跡では出土していない。

## 第III群土器 縄文時代中期に属する土器。

A類 中期前半の円筒上層式系土器群。

A1類 円筒上層 a 式または b 式に相当するもの。

A2類 円筒上層 c 式または d 式、厚真 1 式に相当するもの。

B類 中期後半から末葉の土器群。

B1類 萩ヶ岡 1・2 式、天神山式に相当するもの。

B2類 柏木川式に相当するもの。

B3類 a 北筒式に相当するもの。

B3類 b 煉瓦台式に相当するもの。

## 第IV群土器 縄文時代後期に属する土器。

A類 後期初頭の土器群。

A1類 a 古手の余市式土器。円形刺突文の有無に関わらず、貼付帯や地文縄文が多段の羽状構成の土器。

A1類 b IV群 A1類 a 土器に併存する沈線文系の土器。非在地系。

A1類 c 天祐寺式に相当するもの。IV群 A1類 a 土器に併存する。非在地系。

A1類 d 北筒Ⅲ式に相当するもの。肥厚帯が顕著で円形刺突文を有する土器。

A2類 新しい段階の余市式。古手のタブコブ式。階段状の器表面や斜め下方からの刺突文や縄端圧痕文が施される土器。

B類 後期前葉の土器群。

B1類 新手のタブコブ式。縦位の棒状貼付帯縄線文または地文縄文のみが施されているもの。

B2類 手稲砂山式に相当するもの。

B3類 入江式、大津 7 群、白坂 3 式土器。

C類 後期中葉の土器群。

C1類 ウサクマイ C 式に相当するもの。

C2類 手稲式に相当するもの。

C3類 ホッケマ式に相当するもの。

D類 後期後葉の土器群。

D1類 堂林式、御殿山式に相当するもの。

## 第V群 縄文時代晩期に属する土器群。

本遺跡では出土していない。

## 第VI群土器 統縄文時代に属する土器群。

本遺跡では出土していない。

(奈良)

## 2. 剥片石器

## ポイント類

長軸 4 cm を境に石鏃と石槍・石銛とを区分した。

## A 「石鏃」

1 細身で薄手のもの。

2 無茎のもの。

3 明瞭な茎部をもつもの。

4 不明瞭な茎部を持つもの。

5 片岩製で両縁のみに調整加工を施すもの。

統縄文時代に特徴的なもの。

## B 「石槍」・「石銛」

1 明瞭な茎部をもつもの。

a 茎部端が平ら。b 茎部端が尖る。c 抉りがある。

2 不明瞭な茎部をもつもの。

a 茎部端が平ら。b 茎部端が尖る。c 抉りがある。

## C 欠損品・未製品

## 石鏃

A 剥片の一部に機能部を作出したもの。

B 柄と機能部の区別が明瞭なもの。



- C 柄と機能部の区別が不明瞭で幅広なもの。
- D 柄と機能部の区別が不明瞭で棒状のもの。
- E 他石器からの転用品と思われるもの。

#### ナイフ・スクレイパー類

縁辺に刃部が作出されたもののうち、素材の1辺に対し半分以上の範囲で刃部が形成されているもの。

##### A 「つまみ付きナイフ」

- 1 素材の周縁にのみ加工を施したものの。
- 2 素材の片面全体に加工を施したものの。
- 3 素材の両面全体に加工を施したものの。

##### B 素材端部に刃部が形成されているもの。

- 1 「ラウンド・スクレイパー」
- 2 「エンド・スクレイパー」

##### C 素材端部に刃部が形成されていないもの。

- 1 「サイド・スクレイパー」
  - a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。
- 2 「コンクェイブ・スクレイパー」
  - a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。
- 3 「挿入石器」

##### D 続縄文時代に伴う「ナイフ状石器」

##### E 欠損品

- a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

#### RF・UF

縁辺部に刃部が作出されたもののうち、素材の1辺に対し半分未満の連続的剥離のあるものをRF、使用によるとと思われる微細剥離のあるものをUFとして扱っている。

#### ピエス・エスキュー

#### 石核

### 3. 礫石器

#### 石斧

##### A 磨製石斧

B 未製品1：剥離敲打により完成品に近い大きさまで整形されているもの。

C 未製品2：礫皮を残すが、擦り切り・剥離・敲打調整により素材礫形状が不明

瞭なもの。

D 未製品3：剥離・敲打調整が部分的に施され、素材礫の形状を大きく残すもの。

#### たたき石

敲打痕が面状に形成されるもので、素材礫の形状で細分類を行った。

##### I 平面形が縦長のもの。

##### A 扁平のもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁後あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2を並存するもの。

##### B 棒状または角柱状のもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁後あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2を並存するもの。

##### II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

##### A 扁平のもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁後あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2を並存するもの。

##### B 厚さがあるもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁後あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2を並存するもの。

##### III 平面形が円～楕円形のもの。

##### A 扁平のもの。

##### B 球形または棒状のもの。

##### IV 破片のため上記に分類不可のもの。

##### V 礫片を素材としているもの。

#### すり石

A 断面三角形の礫の後に擦り面のあるもの。

B 断面楕円形の礫の側縁に擦り面のあるもの。

C 扁平礫の側縁に擦り面のあるもの。

D 北海道式石冠

## E その他

## 砥石

## 滑沢面のある礫

素材礫の形状を変えず、平滑な面を有するもの。

線条痕はほとんど観察できない。

## 線条痕のある礫

肉眼観察において、明瞭な線条痕があるもの。

## 石皿・台石

便宜的に素材礫の重量が 900 g 以上で、素材礫の平坦面に擦痕・敲打痕があるもの。

## 滑沢面と敲打痕のある大型礫

- I 表裏面にそれぞれが単独で認められるもの。
- II 一面に両方の痕跡が認められるもの。
- III 素材礫の形状が変形する研磨面を有するもの。

## 加工痕のある礫

加工目的の剝離があるもので、剝離加圧（打点）部分に潰打面が形成されず側面観が稜線状となるもの。

## 自然礫

加工痕や明瞭な使用痕が認められないもの。

- I 平面形が縦長のもの。
  - A : 扁平のもの。
  - B : 棒状または角柱状のもの。
- II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。
  - A : 扁平のもの。
  - B : 棒状または角柱状のもの。
- III 平面形が円～楕円形のもの。
  - A : 扁平のもの。
  - B : 球形または棒状のもの。

(奈良)

## 第5節 調査結果の概要

## 1. 縄文時代

縄文時代はV層とした黒色腐植土の包含層から中期中葉、後期前葉の土器が出土している。遺物包含層であるV層黒色腐植土はTa-cテフラで完全に保護された状態で、一部北西側に延びる配水管以外に後世の攪乱を受けていない。調査区は鬼岸辺川に沿った左岸の河岸段丘上に位置し、河川により形成された自然堤防で標高約 65m～67mの高低差が認められる。調査は平成 22 年度と平成 23 年度の2ヶ年にわたって行われ、平成 23 年度は遺構確認を行わず全て手掘りによる調査を行っている。遺構及び遺物は主に段丘縁辺部に沿って広がりを見せ、鬼岸辺川下流の西側は多量の礫集中（図 II-43）が出土している。調査面積は合計 5,427 m<sup>2</sup>で、遺構は竪穴式住居跡 1 軒、Tピット 27 基、土坑 17 基、焼土 22 ヶ所、獣骨集中（焼骨片）9 ヶ所、土器集中 27 ヶ所、礫集中 12 ヶ所、フリット・チップ集中 4 ヶ所を検出している。遺物は微細な剥片等も含めて 31,712 点出土している。うち土器は 10,429 点出土し、時代は縄文時代中期中葉から後期前葉で、後期前葉の土器が主体的に出土している。また、中期中葉円筒土器下層 c 式相当が VP-10 からほぼ完形個体で出土し、町内での復元個体としては初めてとなる。石器類については礫石器が 1,053 点、剥片石器が 349 点出土しているが、遺構に伴う出土状態は V H-01 の床面炉石周辺から出土した、たたき石と台石（図 II-7-6・8）のみである。VP-08 で出土した石棒は遺構に伴わないが、厚真町では初めての出土となり、形状は円柱に近く、両端は敲打によって窪みが顕著に認められる。石材は輝石安山岩で、器面には被熱が認められる。石棒については近隣市町村では小樽市忍路土場遺跡、余市町フゴッペ貝塚遺跡で出土しているが、函館市大船遺跡、白尻 B 遺跡や森町石倉 2 遺跡など道南で多く出土しているため南との交流が示される資料であると考えられる。その他の特徴的な出土状態としては、調査区 1 の北西側（鬼岸辺川下流側）に広がる礫集中である。特に VSB-03 とした礫集中は段丘縁辺まで広範囲に分布し、

表I-2 オニキシベ5遺跡 概要一覧表

項目	調査年度	V層		調査年度	V層		合計
		縄文時代			縄文時代		
発掘調査面積(m <sup>2</sup> )		2,283			3,144		5,427
住居跡		-			1		1
土坑		7			10		17
焼土		6			16		22
Tピット		15			12		27
礫集中	平成22	7		平成23	5		12
土器集中		11			16		27
獣骨集中		3			6		9
フレイク・チップ集中		1			3		4
炭化物集中		1			0		1
遺物総点数		15,788			15,924		31,712

表I-3 オニキシベ5遺跡 出土遺物一覧表

調査年度	層位	細分類						計
		土器	礫石器	剥片石器	石製品	礫	剥片類	
H22	V層	5,278	371	107	1	9,416	615	15,788
H23	V層	5,151	682	242	2	7,993	1,854	15,924
合計		10,429	1,053	349	3	17,409	2,469	31,712

礫の組成は殆どが砂岩で被熱している。こうした礫集中は遺跡内に12ヶ所所検出され、殆どが被熱礫で構成されている(表II-22)。所属時期についてはそれぞれの集中に明確に伴う土器は認められないが、VSB-11の範囲内からⅢ群B1類の土器片が出土していることから、これらの被熱礫集中は縄文時代中期中葉と考えられ、同時期は多量の礫を焼いて使用していることが明らかとなった。(奈良)

## 第6節 遺跡の位置と周辺の環境

### 1. 厚真町の概要

#### A 地理的環境

厚真町は石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる人口4,777人(平成25年2月末日現在)の農業の町である。町域の総面積は404.56千㎡で、流路52.3kmの二級河川厚真川流域に広がり南北32.5km、東西17.3kmと細長く、南部は約6.5kmにわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。北海道の空の玄関口である新千歳空港から車で35分、海上物流の拠点である苫小牧港からは40分と現代社会において利便性に恵まれた位置でもある。町域を縦貫する厚真川は源流部から河口までの1河川流域で厚真町域のみを流下し、全国において1河川流域を有する自治体は数少ない。行政区域の北部は夕張市や由仁町と接し、夕張山地南部の標高200~600mの山地が続き、総面積の約70%を山林が占める。東は夕張山地からの低い山地を挟んで、むかわ町と接し北西は標高100m前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯(以下、苫東地区)内で苫小牧市と接している。厚真の語源は3説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」(at-to-mam「向こうの湿地帯」)で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したという(厚真村1956)。

町内は、大きく4つの地区に分かれ、厚真川沿いに下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区、むかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区がある。ここでは厚真川流域を中心に概略を述べる。南部は砂浜が続き、明治期以前より地引網での鱈漁が盛んであったが、現在では苫小牧沿岸にかけてホッキ貝(ウバガイ)の全国一の漁場となっている。かつては標高10m前後の砂丘列が発達し、背後には勇払原野の湿地帯が広がっていたが、現在は苫東地区の一部で苫小牧東港や道内最大の火力発電所、石油備蓄タンク群等の工業用地となっている。また国道や高規格道路、鉄道があり、札幌圏から日高方面への主要幹線路ともなっている。地形的には、苫東地区の静川・源武台地と同じ様相を示し、樹枝状に開折された標高10~20m前後の支筋

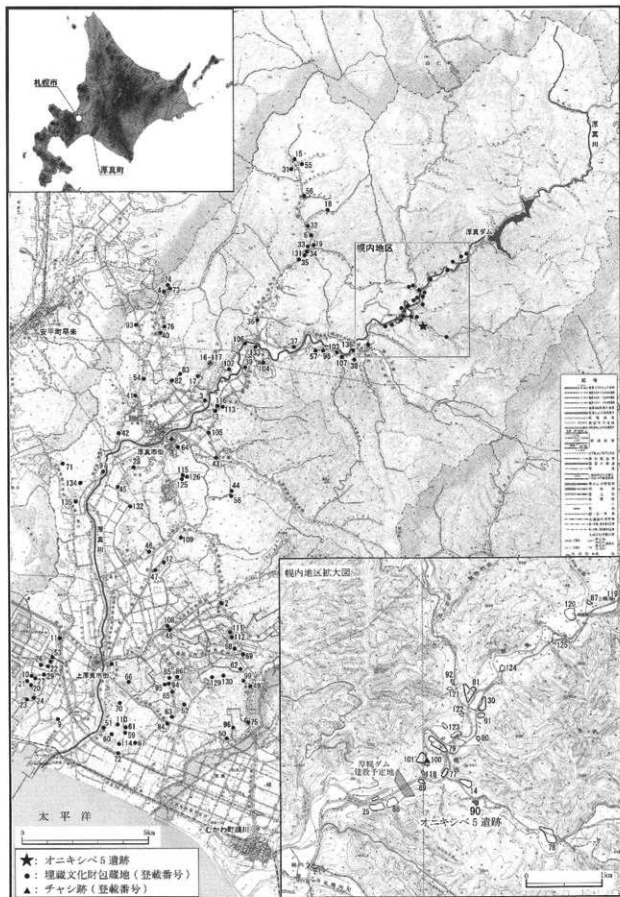


図 I-5 厚真町内遺跡分布図 (平成25年1月1日現在)

表I-4 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
1	遺物包含地	上厚真遺跡	縄文中～後期・統縄文・擦文期	1
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期・統縄文期	1
3	遺物包含地	朝日遺跡(文献1:振老)	縄文後～晩期・統縄文・擦文期	1,2,31
4	遺物包含地	幌里1遺跡(文献1:仁達橋)	縄文中・晩期・統縄文期	1
5	遺物包含地	新町遺跡(文献1:上振内)	縄文中期・統縄文・擦文・アイヌ期	1,4,6
6	遺物包含地	高丘1遺跡(文献1:顔奥宇)	縄文中期・統縄文期	1
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中・統縄文期	1
8	集落跡	共和遺跡(文献1:西岡文)	縄文晩期・擦文期	1,8
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	縄文?	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	3,8
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文晩期	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡(文献1:当麻内)	統縄文期	1
13	遺物包含地	東和遺跡(文献1:東老軽舞)	縄文・統縄文期	1
14	集落跡	オニキシベ1遺跡(文献1:オニキシベ)	縄文中・後期	1
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	中世アイヌ期	4,6
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文晩期	
18	遺物包含地	高丘2遺跡	縄文?	
19	集落跡	高丘10遺跡	縄文?	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	8,13
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文中期?	8
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文期	10
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文前～晩期・統縄文・擦文期	
25	集落跡	厚真1遺跡	縄文早～晩期・統縄文・擦文・アイヌ期	18,30
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文・擦文期	9
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文中～晩期	8
28	遺物包含地	美里2遺跡	縄文早・中期	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文中・晩期・擦文	10
30	遺物包含地	上幌内1遺跡(旧幌内3遺跡)	縄文中期	
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文?	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文?	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文?	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文?	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	統縄文期	
37	遺物包含地	富里1遺跡(文献1:楢山)	縄文中～晩期	1
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	テコマナイ遺跡	縄文?	
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	縄文・中世アイヌ期	16
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	統縄文期	
45	遺物包含地	美里1遺跡(文献1:振内)	縄文中期	1
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	擦文期	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	統縄文期	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡(文献1:上岡文?)	縄文	1
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡(文献5:鹿沼B)	縄文中期	5
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡(文献5:鹿沼A)	縄文	5
51	遺物包含地	厚和1遺跡(文献5:岡文)	縄文中期・アイヌ期	1,4,6
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早～中・晩期・統縄文・擦文期	10
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文?	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前・後期・アイヌ期	32
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・中～後期	
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	

表 I-5 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文中期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文中期	14
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文中期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前・後～晩期	15
72	遺物包含地	浜厚真3遺跡	縄文早・後期	17
73	遺物包含地	ニタツポロ沢遺跡	縄文後・晩期	
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文早・後期	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期?	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文	
77	遺物包含地	オニキシベ2遺跡	縄文中～後期・統縄文・檜文・中世アイヌ期	
78	遺物包含地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	
79	集落跡・墳墓	上幌内モイ遺跡	旧石器・縄文早・中～後期・統縄文・檜文・中世アイヌ	19,21,22,2 4,26,27,28
80	遺物包含地	一里沢遺跡	縄文前～中期・アイヌ期	4,5,21
81	集落跡	ショロマ1遺跡	縄文前・後期	
82	遺物包含地	東ニタツポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタツポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	溝穴遺構	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	20,23,25
86	溝穴遺構	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包含地	イクバンドニクチセ遺跡	縄文後期	
88	遺物包含地	厚幌2遺跡	縄文前期	
89	遺物包含地	オニキシベ4遺跡	縄文	
90	遺物包含地	オニキシベ5遺跡	縄文中期～後期	
91	溝穴遺構	上幌内2遺跡	縄文・アイヌ期	
92	遺物包含地	ショロマ2遺跡	縄文中期	
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文中～後期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	統縄文・檜文	
98	遺物包含地	幌内6遺跡	縄文後期	
99	溝穴遺構	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	ワチャラセナイチャシ跡	中世アイヌ期	
101	遺物包含地	ワチャラセナイ遺跡	縄文早～後期・統縄文・檜文・中世アイヌ期	
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	遺物包含地	幌内7遺跡	縄文晩期・檜文	
104	集落跡	ニタツナイ遺跡	縄文前～後期・統縄文・檜文・近世アイヌ期	29,32
105	遺物包含地	宇隆3遺跡	縄文中期	
106	遺物包蔵地	富里2遺跡	縄文後・晩期・統縄文・檜文・中近世アイヌ期	32
107	遺物包蔵地	オコッコ1遺跡	縄文前・中・後期・檜文	
108	遺物包含地	軽舞2遺跡	縄文前期・統縄文	
109	遺物包蔵地	豊沢5遺跡	縄文後期	
110	溝穴遺構	厚和10遺跡	縄文早・中・後期	
111	遺物包含地	豊丘2遺跡	縄文早期	
112	遺物包蔵地	豊丘3遺跡	縄文中期	
113	遺物包蔵地	東和2遺跡	縄文晩期	
114	遺物包含地	浜厚真5遺跡	縄文後期	
115	遺物包蔵地	豊沢6遺跡	縄文早・中・後期	
116	遺物包蔵地	東和3遺跡	縄文早期	
117	遺物包含地	桜丘2遺跡	縄文中・後期	
118	遺物包含地	オニキシベ6遺跡	縄文後期	
119	溝穴遺構	イクバンドニクチセ2遺跡	縄文後期	

表 I-6 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(3)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
120	遺物包蔵地	イクバンドユクチセ3遺跡	縄文中・後期・統縄文期	
121	遺物包蔵地	シヨロマ3遺跡	統縄文期	
122	遺物包蔵地	シヨロマ4遺跡	縄文	
123	遺物包蔵地	上幌内3遺跡	縄文中・後期	
124	遺物包蔵地	上幌内4遺跡	縄文中期	
125	溝穴遺構	上幌内5遺跡	縄文	
126	遺物包蔵地	豊沢7遺跡	縄文中・後期	
127	遺物包蔵地	豊沢8遺跡	縄文後期	
128	遺物包蔵地	ライカルマイ遺跡	統縄文・縄文・中世アイヌ期・明治期	
129	遺物包蔵地	長沼1遺跡	縄文早期	
130	溝穴遺構	長沼2遺跡	縄文	
131	遺物包蔵地	高丘13遺跡	縄文前期・縄文期	
132	遺物包蔵地	上野1遺跡	縄文中期	
133	遺物包蔵地	富里3遺跡	縄文中・晩期	
134	遺物包蔵地	豊川3遺跡	縄文晩期	
135	遺物包蔵地	三ヶ月沼遺跡	縄文晩期	
136	遺物包蔵地	幌内8遺跡	縄文前・中期	

## 関連文献

1: 厚真村郷土研究会 1956『厚真村古代史』 2: 亀井喜久太郎 1957『厚真出土の土偶』『先史時代3』 3: 苫小牧市教育委員会 1974『苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財分布調査報告書』 4: 亀井喜久太郎・池田実 1976『厚真の旧地名を尋ねて』 5: 鶴川町教育委員会 1977『鶴川町遺跡分布報告』 6: 亀井喜久太郎・池田実 1978『統縄文の旧地名を尋ねて』 7: 松浦武四郎(高倉新一郎校訂) 1985『戊午東西蝦夷伝記』 8: 苫小牧市教育委員会 1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』 9: 苫小牧市教育委員会 1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』 10: 苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』 11: 苫小牧市教育委員会 1992『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』 12: 苫小牧市教育委員会 1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』 13: 幸石慎三 1999『苫小牧地方の円筒土層式について』『苫小牧市埋蔵文化財調査センター』 2003『厚真町浜厚真3遺跡』 14: 厚真町教育委員会 2001『鯉沼2遺跡』 15: 厚真町教育委員会 2001『豊川1遺跡』 16: 鈴木信 2001『IV-4 北海道の中世埋蔵文化財』『千歳市ユネスコ・ボン・C15遺跡(4)』(財)北海道埋蔵文化財センター159 17: (財)北海道埋蔵文化財センター 2003『厚真町浜厚真3遺跡』 18: 厚真町教育委員会 2004『厚幌1遺跡』 19: 厚真町教育委員会 2005『上幌内モイ遺跡発掘調査概要報告書』 20: 厚真町教育委員会 2005『鯉沼3遺跡』 21: 豊島栄紀 2005『松浦武四郎の探検からみた胆振東部・日高西部の古交通路』『前近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振・日高)』 22: 厚真町教育委員会 2006『上幌内モイ遺跡(1)』 23: 厚真町教育委員会 2006『鯉沼3遺跡(2)』 24: 厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡(2)』 25: 厚真町教育委員会 2008『鯉沼3遺跡(3)』 26: 出穂雅史他 2008『論集忍路子Ⅱ』 27: 関根達人 2008『平泉文化と北方交易2-縄文期の網罟をめぐる-』『平泉文化研究年報8』 28: 厚真町教育委員会 2009『上幌内モイ遺跡』発掘調査報告書(3) 29: 厚真町教育委員会 2009『ニタツナイ遺跡(1)』 30: 厚真町教育委員会 2010a『厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)』 31: 北海道大学附属図書館HP北方資料データベース 32: 厚真町教育委員会 2010b『幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタツナイ遺跡(2)』 33: 厚真町教育委員会2011『オニキシベ2遺跡』 34: 苫小牧民報社2011. 3.3 新聞記事

火山・樽前山の火山灰で構成される低平な台地と縄文海進期の海跡湖群、湿地が見られる。特に厚真川左岸から入鹿別川右岸にかけての厚和地区は静川台地と全く同じ地形・地質様相を呈している(仮称厚和台地・鯉沼台地)。中部には厚真町の中心市街があり、鶴川、平取・徳別、早来、浜厚真方面への道道交差部に官公署や住宅地が形成されている。かつては町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展していた。地形的には厚真川本流と比較的大きな支流である知決辺川、ウクル川などの合流点に形成された平野部に位置し、夕張山地系と馬追丘陵南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。中部以北では、厚真川は頗美宇川との合流点付近において流路方向を変え、左岸には河岸段丘が発達する。北部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部で、本流とシュルク川、幌内川の3河川の合流点でもある。この地区は上流域の山間部より産出される豊富な林産資源の集積地として発展し、昭和5年から24年まで早来駅とを結ぶガンソク機関車軌道が敷設されていた。これより上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く(松野・石田 1960)。標高400m以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を呈している。厚真川は夕張市、由仁町との1市2町の境界線付近、標高500m付近の夕張山地南域に源流部がある。

## B 歴史的探境

### (1) 埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には平成25年1月現在で136ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期に至るまでである(図I-5、表I-4~6)。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての仮称厚和台地や仮称鯉沼台地、厚真川中流域の支流河川沿い、北部の高丘地区及び幌内地区にやや集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、顔美宇(はびう)川流域の高丘地区や厚幌ダム水没地域内に多く分布する。これらは安平町安平地区やタ張市滝之上地区、むかわ町穂別・豊田地区へ抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられる。

時期的には、町内最古の遺跡として上幌内モイ遺跡で札幌型細石刃核を伴う石器集中が1ヶ所検出されており、AMS法炭素年代測定の結果、補正年代3点の平均で14,591.69±60yr B.P.が得られている(厚真町教育委員会2006a)。縄文時代の最も古いものでは豊沢4遺跡の試掘調査で早期前半の物見台系貝殻土器片1点が出土し、時期が下って浜厚真3遺跡で東銅路Ⅱ式土器がややまとまって出土している(北海道埋蔵文化財センター2003)。遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の縄文尖底土器群の時期と考えられ、多量の被熟礫や哺乳網の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認されている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期の遺跡数でピークを迎える。縄文時代後期中葉から後葉にかけて遺跡数が激減し、晩期前葉以降、続縄文文化期に再び増加し、擦文文化期前期は遺跡数が再び減少する。この様な各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市の傾向と概ね一致している。苫小牧市との差異として擦文文化期中期から中世アイヌ文化期にかけては遺跡数が増加する傾向がある。

### (2) 町内における埋蔵文化財調査の概要

町内における埋蔵文化財の調査・研究は、最初の記録として、大正5(1916)年に現在の朝日遺跡から出土した縄文土器を教材として、学校に保管する許可書が発行されたことである(厚真村郷土研究会1956)。遺物の多くは縄文晩期初頭の土器片と思われ、数点の土偶片も出土している(厚真村郷土研究会1956、亀井1956、古井1961、北海道大学附属図書館HP 北方資料データベース)。以後、厚真町での埋蔵文化財に係る流れは大きく3期に分けることが可能である。

#### a. 厚真村郷土研究会・埋蔵文化財の地域自主的研究(昭和20年代後半から40年代中頃)

元厚真村長で名誉町民の亀井喜久太郎氏の熱心な働きかけで昭和27年に八幡一郎氏、30年に大場利夫氏等が来村し、町内の遺跡・遺物を実見している。また、亀井氏は昭和28年に厚真村郷土研究会を発足させ、遺物の収集や会報『郷土研究』で遺物の紹介を行い、昭和31年には『厚真村古代史』を刊行している(厚真村郷土研究会1956)。現在、埋蔵文化財保護の基礎資料である埋蔵文化財包蔵地カードの「調査・文献」には「昭和31年7月 厚真村郷土研究会『厚真村古代史』」や「昭和47年12月 厚真町郷土研究会 踏査」の記載で始まるものが32遺跡もあり、厚真町の文化財保護・研究に大きな功績を残し、礎となっている。町内で初めての組織的な発掘調査は、昭和37年に厚真村郷土研究会によって朝日遺跡と共和遺跡で行われた。調査に関する詳細は不明だが、縄文時代晩期初頭の土器片を中心とした出土遺物がコンテナにして5箱分、厚真町教育委員会に保管されている。また、昭和34年に宇蔭地区公民館建設工事現場からの遺物出土の連絡を受け、道内



で初めての出土となる愛知県常滑産と推定される12世紀中葉の広口壺を回収している。当初は、須恵器と判断されていたが、平成23年に常滑市民俗資料館 中野晴久氏によって確認された。

#### b. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター・大規模な行政発掘「苫東調査」(昭和48年から昭和54年)

昭和48年から苫小牧市埋蔵文化財調査センターによる苫東地区の試掘・発掘調査が開始され、昭和59年までの12年間で厚真町域にかかるもので新規発掘14遺跡、調査着手11遺跡があり、縄文時代早期～擦文文化期までの資料が得られている。調査成果として、昭和51年調査の厚真1遺跡(苫小牧市教育委員会1986)では、この地域で初めてのTピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真1式土器」(赤石1999)の標識遺跡でもある。厚真7遺跡では縄文時代中期末葉と後期前葉の住居跡8軒の検出と、石狩川中流域で数多く出土する「丸のみ形石斧」も出土している(苫小牧市教育委員会1987)。また、共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文文化期前期の竪穴式住居跡2軒が調査されている(苫小牧市教育委員会1987)。これらの成果は苫小牧市教育委員会により『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』として報告書が刊行されている(苫小牧市教育委員会1986・1987・1990・1992)。整理・報告後の出土遺物等は平成13年度に町教委へ返却・保管されている。

なお、厚真町域における町教委による「埋蔵文化財包蔵地資料整備の一般分布調査」は、昭和54年9月行われ、52遺跡の包蔵地カードが作成されている。

#### c. 開発に伴う調査の増加と厚幌ダム・厚幌導水路事業の開始(平成10年以降)

近年は火山灰採取などの開発に伴う試掘調査や工事立会調査が増加し、町教委による豊川1遺跡(厚真町教育委員会2001b)、鯉沼2遺跡(厚真町教育委員会2001a)、鯉沼3遺跡(厚真町教育委員会2005・2006b・2008)などの調査が行われた。高規格道路日高自動車道の建設に伴う(財)北海道埋蔵文化財センターによる浜厚真3遺跡の調査では、187基のTピットが検出されている(北海道埋蔵文化財センター2003)。これらの調査結果では、縄文時代中期後葉以前にTピットが数多く構築されていることが分かり、周囲には比較的規模の大きい集落跡の存在が想定できる。

平成12年には北海道室蘭土木現業所より厚幌ダム建設事業に係る埋蔵文化財保護の事前協議書が提出され所在踏査や試掘調査が開始された。発掘調査は平成14年から町教委により継続的に行われ、厚幌1遺跡(厚真町教育委員会2004)、上幌内モイ遺跡(厚真町教育委員会2006a・2007・2009a)、オニキシベ5遺跡(本書)、ヲチャラセナイ遺跡・ヲチャラセナイチャシ跡等の調査を行い、平成24年度までの11年間の調査終了面積は約76,538㎡である。

平成15年には総延長24.5kmに及ぶ厚幌導水路建設事業の事前協議書が提出され、所在確認踏査や試掘調査が行われている。試掘調査等は未了の箇所があるものの、現在11遺跡での要発掘・工事立会調査地点が確認され、平成19年度には厚真川中流域富里地区のニタップナイ遺跡、20年度は厚幌1遺跡と幌内7遺跡(厚真町教育委員会2010a)、21年度は幌内5遺跡と富里2遺跡の発掘調査を行った(厚真町教育委員会2010b)。これらの大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成27年度まで継続される予定であったが、平成22年度に厚幌ダム事業の再検証が行われたため、厚幌導水路に係る発掘事業は一時中止となり当初計画からのずれ込みが危惧されている。

これらの厚幌ダム、導水路事業以外にも平成22・23年度には厚真川中流域において道道上幌内早来停車場線改良事業に伴うライカルマイ遺跡や町宅地造成事業での豊沢6遺跡、民間業者の火山灰採取に伴う東和3遺跡の発掘調査が実施された。近年の傾向として全町的に埋蔵文化財の発掘調査が進みつつあり、先史時代における厚真川流域の様相が解明されつつある。

### (3) 歴史時代

厚真周辺の記録として、1643年に編纂された北海道最古の文書とされる『新羅之記録』(松前1643)によると、「松前以東は畷川西は與依地迄人間往古する事、右大將頼朝卿進発して奥州の泰衡を追討し御ひし節、糠部津軽より人多く此国に逃げ渡つて居住す。」とあり12世紀末葉には東北部の和人が厚真周辺域まで進出していた可能性がある。厚真町とほぼ特定できる最初の記述は1692年に書かれた『蝦夷記』(野澤1692)で、シャクシャインの戦い(1669年)に関連し「於多久具印住處阿津摩ニテ討取ル」とある。厚真町中部に位置する桜丘チャシ跡との関連性が想定されていたが、平成21年度のトレンチ調査で樽前bテフラと生活硬化面との間に1~2cm程度黒色土が堆積し、より古い中世アイヌ文化期のチャシ跡であることが判明している。この時期の遺跡は厚真川上中流域のダムや導水路建設関連の発掘調査で多数の遺跡が確認されており、今後も増加するものと思われる。

これ以降の記録として、1700年の『松前家臣支配所持名前帳』には鳥屋支配所として「志古津ノ阿津満」と記され、2ヶ所の鷹打場が設けられている。シャクシャインの戦いに係わる『津軽一統志』(相坂兵右衛門1731)の中で、「あつまへつ〜川有、戸田義兵衛 商場」と記されているが、産物や周辺のコタンについての記述は見られない。1739年頃に成立した『蝦夷商賈聞書』には義経伝説を交えた記述の中に「右之山奥ニアツマ申所ニ城跡ト申而松柏之古木沢山ニ繁リテアリ〜」や1785年の「三国通覽図説蝦夷国全圖」に「アツマ」と記載があり、注記に「鬼ノノ出処」と記されている(林子平1785)。しかし、寛政から文化年間(18世紀末~19世紀初)の『東蝦夷地道中記』(1791)や『蝦夷記行』(谷元旦1799)、『拾遺北日本地図全圖蝦夷地産交通路図』などの紀行文や古地図では僅かな記述にすぎず、1800年に八王子千人同心等、数名の和人が浜厚真に移り住むが定住することはない。近世アツマ場所の産物として干鮭や椎茸、シナ縄、鹿皮が挙げられているが詳述はなく、以降の紀行文や測量日誌にも交通路であった勇払と鶴川間の厚真川河口周辺の簡単な記述に留まっている。なお本町の和人定住者としては明治3(1870)年に新潟県人の青木与八が厚真川河口に渡船場を開業したことが始めとされている(厚真村1956)。

内陸部までの詳述は、松浦武四郎による『戊午安都麻日誌』(松浦・吉田1962、松浦・秋葉他1985)で、1857(安政5)年6月に苫小牧市勇払から厚真川河口を経てトンニカ(現富里)にて2泊している。蝦夷地探検の6回目で、町内には6ヶ所のコタンが記録されている。この中で比較的規模の大きいコタンでは、粟、稗、隠元、蕪などの畑作が盛んに行われているが、直前に襲った厚真川の洪水によって畑地のほとんどが冠水したことも記され、かつてより氾濫の多い河川であったことが伺える。宿泊したトンニカコタンのイカシユ(乙名板蔵)の家中について「西同所の土人等とは大に違ひ、凡行器の三十も有、耳壺の七ツハツ、篋の武ツ計、蝦夷太刀の二十五六振も懸、また此余短刀の七八本も有るよし語りけるなり。」(松浦・秋葉他1985)とあり漆器や刀剣類の宝物が多く、その裕福さに驚いている。上流域に関しては聞き取りによる記述で、3穴の吊耳鉄鍋の残儀伝承があるカニシユウ(現幌内・一里沢遺跡)も記述されている。苫小牧駒澤大学 養島栄紀氏は、これらの松浦武四郎の記録から古交通路について論じており、トンニカコタンの記述や上幌内モイ遺跡の搬入系遺物の出土量から鶴川水系やタ張水系へのルートが存在について述べている(養島2005)。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、厚幌ダム建設に係わる発掘調査で確認された厚幌1遺跡(厚真町教育委員会2004)、上幌内モイ遺跡(厚真町教育委員会2007a・2009a)の他、試掘調査でも上幌内2遺跡、一里沢遺跡があり、厚幌導水路建設事業関連でのニタツナイ遺跡(厚真町

教育委員会 2009b) や幌内7遺跡(厚真町教育委員会 2010a)、富里2遺跡(厚真町教育委員会 2010b)がある。その他、試掘調査で層位的確認がされた新町遺跡のほか、厚和1遺跡、幌内5遺跡では近世アイヌ墓が単独で発見されている。近年、発掘調査によってアイヌ文化期の遺跡が新たに発見されており、今後も資料の増加が期待される。

明治維新後、廃藩置県までは高知藩所管の時代があり、1873(明治6)年に以降に開拓使苫小牧出張所や勇払郡役所の所管となる。現在の厚真町が行政単位としての始まりは1897(明治30)年に苫小牧外6ヶ村から分離独立し、厚真村戸長役場が桜丘地区(現専厚寺境内)に設置されたことによる。内陸部の和人開拓は明治10年代からで、手掘りによる石油掘削も始められ、明治21年には開拓使から農事指導員が派遣され西老怪舞(現吉野)へ集住させられたアイヌ民族への勸農政策も実施されている。1892(明治25)年には鉄道室蘭線が開通し、近隣である厚真の内陸部も開拓移住者が増加した。これは明治19年の国有未開地の開放で北海道開拓の促進を図る「北海道土地払下規則」が制定されたことによる。以後、開拓移住者の増加が続き現在の農業の町厚真の礎が確立されていく。

(乾)

## 2. 遺跡の位置と周辺環境

### A 自然地理的環境

遺跡の周辺地域を厚幌ダム堤体建設予定地から厚真ダムまでの厚真川本流域とその支流域とした。この地域は標高約150~400mの山地に囲まれ、その多くは200~300mの浸食が進んだ山稜を呈している。厚真川及び支流域は浸食開折した谷状地形を呈し、“線状”の地域となっている。遺跡群はこれらの流域に形成された河岸段丘上に立地している。急峻な山稜や河岸段丘の発達は、この地域の基盤層が新第三紀に形成された砂岩泥岩層(松野・石田1960)の比較的軟弱な岩相であることに起因すると思われる。

本遺跡は厚真川河口から約30km地点で、厚真川本流に注ぎ込む鬼岸辺川下流域に所在する。鬼岸辺川は流路延長約9kmの小河川で、鶴川流域むかわ町穂別豊田地区との標高約250~300mの山稜付近に源流部を有し、通年、流水があるものの水量は極めて少ない。上流域から中流域にかけては概ね西南西へ流下し、下流域は北西方向へ流下する。兩岸は河川浸食による急傾斜地で、谷状地形となっており、下流域における谷底幅は約250~280mを測る。また小規模な河岸段丘面が3面程度まで確認できるほか、背後の急傾斜地を開折する沢状地開口部には沖積錐地形も発達している。

厚真川との合流点よりやや下流左岸にはオニキシベ4遺跡、合流点右岸にオニキシベ2遺跡が存在し、その東には標高150mの大きな山体が突出している。この地区のランドマーク的な存在であり、昭和40年代頃まで、竜神を祀る神社が山頂にあり、身近な信仰対象として古くまで遡る可能性もある。合流点より280m上流の右岸にはオニキシベ1遺跡が所在している。山体裾に形成されている河岸段丘面及び沖積錐地形上に立地し、平成24年度より公益財団法人北海道埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている。本遺跡はオニキシベ1遺跡よりさらに約700m上流の左岸に位置し、本遺跡より約1,000m上流の右岸には流域最奥部のオニキシベ3遺跡が立地している。

本遺跡は本流との合流点より東南東へ直線距離約680mの鬼岸辺川左岸に位置する。北東方向へ台形状に突出した標高65~67m、鬼岸辺川との比高差約10mの河岸段丘先端部に立地し、直下には鬼岸辺川が流下している。段丘面全域は約10,000㎡で、背後には比高差約20mに及ぶ急傾斜の段丘崖が存在し、上位には標高90m前後に存在する狭小な高位段丘面がある。調査区の南東側におい

て半島状に突出し、この基部には湧水地点があり本段丘面の低位部分において湿地を形成していた。湧水の存在は本遺跡の立地選択条件の要因であったことが想定される。また流地の谷状地形中央部まで張り出した段丘先端部であるため、狭い沢あいでありながらも日照条件は良好である。さらに流域の谷状地形は概ね東西方向であることから、流域兩岸の南向き斜面（右岸）と北向き斜面（左岸）とで春の雪解け時期が異なり可食性植物の採取期間がやや長期間に及ぶ利点があるほか、冬期において積雪の少ない右岸の南西向き斜面は、エゾシカが給餌する地点ともなっている。

## B 歴史的環境

この地区には、後期旧石器時代から中近世アイヌ文化期までの時期にわたる 22 遺跡が所在する。最上流のイクバンドヌクチセ 2 遺跡 (J-13-119) は厚真川河口より約 33km の地点にあるが、地域住民の聞き取り調査から現在の厚真ダム堤体付近にも埋蔵文化財包蔵地が所在していたようである。遺跡群の時期的な特徴としては、縄文時代後期初頭の余市式土器群が各遺跡から出土しており、時期の偏りも見受けられる。多時期わたって利用されている比較的規模の大きい遺跡は上幌内モイ・ヲチャラセナイ・ショロマ 1・オニキシベ 1 遺跡で、これまでの発掘調査や試掘調査で住居跡などが検出されている。いずれも厚真川本流と規模の大きい支流との合流点付近で、河岸段丘面も 13,000 m<sup>2</sup>以上の面積を有し、比較的広い段丘面である。

本遺跡の主体時期である縄文時代中期中葉、後期前葉とほぼ同時期と考えられる遺跡は、縄文時代中期天神山式期の厚幌 1 遺跡があり、縄文後期前葉のタブコブ式 (旧) がまとまって出土したのは本遺跡が初例となる。

近現代については、林業や製炭業、稲作や畑作で本支流域における開拓の歴史を伺うことができる。戦後以降、無人となっている流域であるがオニキシベ 3 遺跡の試掘調査において、鉄鍋や蹄鉄、ガラス瓶などが出土しており、山間部への開拓の歴史も残されている。

## C 松浦武四郎の記録と周辺のアイヌ語地名

この地区でのアイヌ文化に係る記録としては、江戸時代末期の安政 5 (1857) 年に厚真を訪れた松浦武四郎の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』(松浦・吉田 1962、松浦・高倉・秋葉 1985) が最も古い記録である。ヲチャラセナイやカニシユウ (現一里沢遺跡)、ヲニケレベ (現オニキシベ)、ショウロマ (現ショロマ) などが記載されている。厚真川下流からの左右岸の表記などからほぼ全ての位置が判明している (亀井・池田 1978)。厚真川上流域の厚幌地区には集落 (コタン)、集落跡 (フシココタン) の記述は無く、ヒグマやシカ、ワシタカ類の狩猟や植物採取に関わる記述に留まる。

本遺跡が所在する「ヲニケレベ」は、「右の方同じく小沢也。此川すじ極度多く有るよし。よつて号とかや。此辺え来りしや兩岸峨々として本川すじは皆赤崩平のみ也。」と記されており、現在の地形とも符合している。オニキシベの語源として「入口で・木を・削り・つけている・もの」とあり、「シナの木 (オヒョウニレ) より樹皮を剥き採る場所」を意味するという (厚真村 1956)。

本遺跡の所在する鬼岸辺川を遡り分水嶺を越えると鶴川水系のキナウス川筋 (むかわ町豊田地区) に入る。この支流の 1 つに良樹ノ沢川がある。これは明治 29 年の地形図では「ルマキナウシ」(道・入る・キナウシ・蒲・群生する・ところ) に相当する (扇谷 2003)。この沢口となる豊田地区の鶴川対岸和泉地区にはルベシベ川 (道・沿つて下る・もの) があり、分水嶺を越えると沙流川流域の平取町荷負・長知内地区に至る。この地区は沙流川流域で最大の支流である額平川との合流点で、さらには新冠美宇地区や新ひだか農産地区などの日高中部への内陸ルートへと続くものと思われる。

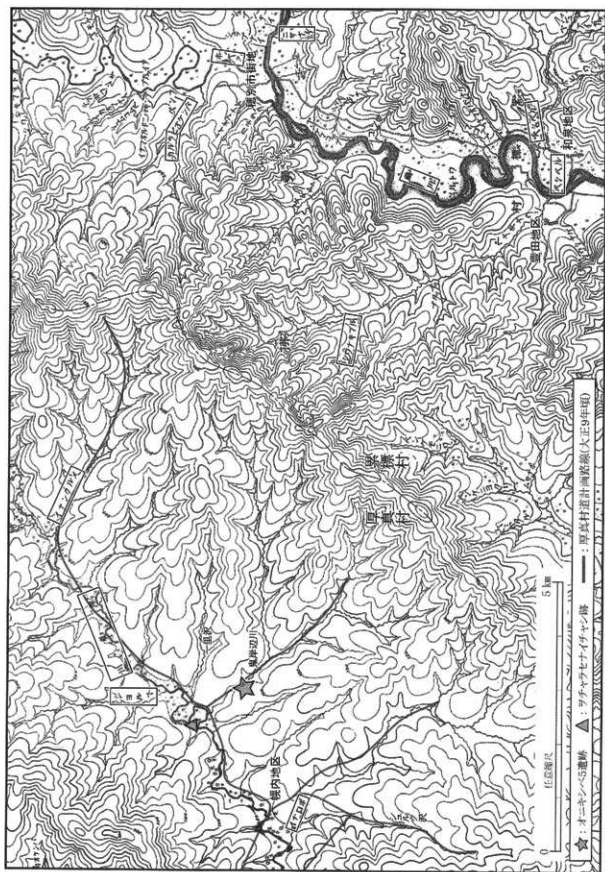


図 1-6 厚真川上流域と鶴川中流域の古地形図 (明治29年発行 5万分の1「ファイカルマイ」と「ルベシペ」の縮合を50%縮小)

この他、大正年間に作成された「厚真村道計画路線図」には、鬼岸辺川流域にも村道計画路線があり、従来からの山越えルートが存在していたものと思われる。

ほかにもこの地区には夕張川水系流之上地区於兎牛沢川へ抜けるショロマ川や徳別本町地区パンケオビラルカ沢川へ抜けるメルクンナイ川、厚真川最上流域では徳別稲里地区パンケオビラルカ沢川へ通り抜ける複数の山越えルートがある。これらのルートの全てが鬼岸辺川と厚真川本流との合流点で全て集約する。オニキシベの語源にある「入口」とは、低平な地形である石狩低地帯から、山間部におけるこれらの山越えルートのへ「入口」とも想像することもでき、ヒトやモノの流れにおいてこの地区が重要な位置にあったことも容易に想定される。合流点对岸に突出した河岸段丘上に立地するヲチャラセナイチャシ跡の立地は必然的なものとも思える。(乾)

### 3. 調査区内の地形と地質

#### A. 地形

調査区の所在する河岸段丘は鬼岸辺川左岸の標高約 65~67m で高低差は最大で約 2m ある。現河床との比高差は約 10m で段丘崖には基盤層である新第三紀の砂岩泥岩層の「振老層」が層理状によく観察できる。厚真川本流域の河岸段丘については「上幌内モイ遺跡(1)」に報告されている(出穂 2006)。本遺跡では旧石器トレンチNo1~9において樽前 d1・d2 テフラ(VIIa・b層 約8,000年前降下)より下層にあたるシルト~砂利層まで確認しているが、基盤層まで確認していないため厳密な河岸段丘形成時期の検証は不可能であるが、現河床との比高差と樽前 d テフラ再堆積の状況から上幌内モイ遺跡の T2 面に対比できると思われる。

微地形については、工程上VI層及びVII層で地形図を作成しており、平成22年度と23年度では16ラインを境界として約50cm高さが異なってしまう地形測量図の不整合が生じたため、各遺構位置図には境界線を設けている。ここでは年度によって等高線が異なることを考慮しておかなければならないが、概ね4面の微地形に区分できる。また、この他に旧河川に堆積する河川堆積物が樽前 c テフラ(IV層 約2500年前降下)の上下層で確認されているので含めて記述する。

#### (1) 微高地 (T2a 面)

段丘北側縁辺部の1~15ラインにかけて東西軸にほぼ直線状となる微高地と、段丘北東側縁辺部の18~23ラインの南北約30mにかけて弓状に形成される微高地が認められる。これらの微高地は鬼岸辺川の河川堆積物である砂、粘土質シルト、シルトが互層堆積を成しており、樽前 d テフラ降下以前に自然堤防上の高まりが形成されたと考えられる。旧石器トレンチ4では粘土、粘土質シルトが特に厚く堆積しており(図I-12)、その後樽前 d テフラが降下している。微高地の形成は樽前 d テフラが降下し一度完全に離水した時点と思われるが、樽前 d テフラの再堆積層がプライマリな樽前 d テフラを部分的に開削していることから安定的になったのはVII層(漸移層)位と推測できる。

#### (2) 平坦部 (T2b 面含む)

段丘南側の標高約66m前後の範囲で、基本的には前述した河川堆積物上層に樽前 d テフラの再堆積層を主体としている。旧石器トレンチ3で恵庭 a テフラの風化ロームが認められるが、上下層を砂利、砂層に挟まれた二次堆積層である。この平坦面においては樽前 c テフラ降下以前に水成堆積物である粘土質シルトが旧河川流域に堆積している(図I-7)。旧河川は微高地の間を抜け北方向に走っており、北側段丘縁辺部の微高地も部分的に開析している。また南西側の一部であるがメインセクション E-F ラインで樽前 b テフラ(II層 1667年降下)直下に粘土質シルトが認められ、一

部の旧河川はこの時期まで離水していなかったことがわかる。この E-F ラインについては、樽前 d テフラ再堆積上層にシルト→V層→粘土質シルト→IV層→鉄分沈着したIV層→砂→粘土質シルト→樽前 b テフラと水成堆積物が主体となるが、IV層とその上位に堆積する鉄分沈着したIV層が示すように樽前 c テフラを押し流さない程度の極めて流れの緩い澁みの環境であったことが推察できる。

### (3) 傾斜部

北東先端部の A-22・23 区で、鬼岸辺川の河川作用によって形成されたと考えられる。標高は約 65.5m で調査区内においては最も低い段丘面である。確認できた最下層では粘土質シルト、シルト、樽前 d テフラを起因とするパミスがシルトと互層堆積している。その上層には粘土が厚く堆積していることから離水過程において緩やかな流れが断続的に続く、もしくは湿地のような環境であったと考えられる。この段丘面にはV層起源の黒色土はVa層が僅かに認められるのみで、殆どが河川堆積に起因するシルト、砂層の堆積物である。

### B. 地質

段丘堆積物より上層のテフラや遺物包含層の堆積状態について記述する。

調査区は笹根等の表土層 (I層) があり、その下位に礫質降下軽石の樽前 b テフラ (II d 層、Ta-b、1667 年降下) が調査区内ほぼ全体に堆積している。町内のダム事業に係わる発掘事業では本来の基本土層として樽前 a テフラ (II a 層、Ta-a、1739 年降下) や駒ヶ岳 c2 テフラ (II c 層、Ko-c2、1694 年降下) の堆積を部分的に確認しているが、今回の調査では南西側の E-F ラインと段丘北東先端部斜面に僅かな堆積が認められたのみであった。樽前 b テフラ直下の砂質降下火山灰の有珠 b テフラ (II b 層、Us-b、1663 年降下) については本遺跡では確認されていない。なお、樽前 a-b テフラの間層に黒色砂質土層 (0B 層相当) が北側壁面で僅かに確認できる。縄文時代晩期後葉から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層である III 層は樽前 b テフラと樽前 c テフラに狭在する黒色腐食植土層で、平均層厚は約 38 cm と厚く堆積しているが、色調や土質によって a~c 層に細分可能である。III b 層はやや粘性を有し、III c 層は均質に IV 層を多量に含むことから色調が暗褐色を呈し、砂質土層である。本遺跡においてはこの層境に白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm、10 世紀前半降下) は認められない。また、先述したように樽前 b テフラ降下直前まで水成堆積物である粘土質シルトが約 40 cm と厚く堆積する地点もある。IV 層の樽前 c テフラは均質で 1 つのフォールユニットから成る。

縄文時代早期から晩期中葉にかけての遺物包含層である V 層黒色腐植土は平均層厚約 40 cm で a~c 層に細分できる。Va 層は IV 層と斑状に堆積し、主体となる Vb 層は粘性が強い黒色土層である。Vc 層は VII または VIII 層起源の樽前 d テフラが均質に混じり、泥岩などの混入物も Vb 層に比べ多く混入する。本遺跡においては樽前 c テフラ降下以前に T2b 面とした河川堆積が認められる地点 (平坦部) からは Vb 層を基準として上位を F1 層、中位を F2 層、下位を F3 層として細分した。層厚は平均で約 15 cm、粘土質シルトを基質とした水成堆積である。VI 層は V 層と VII 層が植物痕跡等により斑状に堆積する漸移層である。遺物出土層位は Va 層縄文時代晩期、Vb 層縄文時代中期・後期、Vc 層縄文時代前期、VI 層は縄文時代早期の遺物包含層となり、これまでの町内発掘調査の結果と概ね一致する。

(奈良)

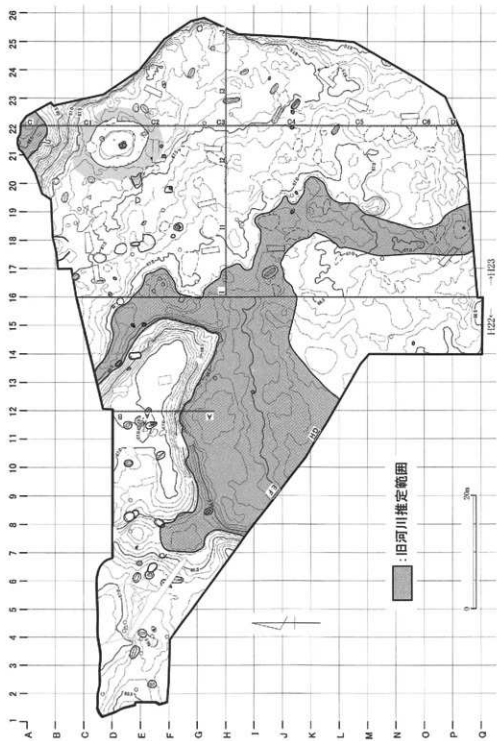


図 I-7 旧河川流路図(推定)



〔基本土層柱状図〕

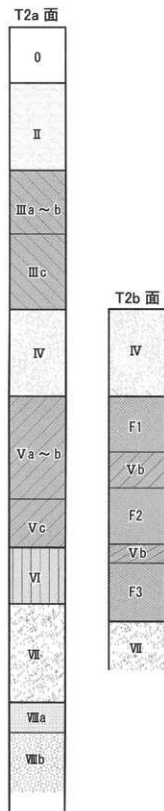


図 I-8 基本土層柱状図

- 0層：攪乱・耕作土
- I層：近現代表土 7.5YR3/1 黒褐色砂質土
- II層：近世火山噴出物及び黒色砂質腐植土
- a：樽前aテフラ (Ta-a) 10YR6/4 にぶい黄褐色 砂質降下火山灰 1739年降下。耕作により部分的に堆積。層厚 8cm 前後。
- b：黒色砂質腐植土層 10YR2/1 黒色 新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）の調査における0黒層相当。
- c：駒ヶ岳c2テフラ (Ko-c2) 10YR8/3 浅黄褐色 砂質降下火山灰 1694年降下。II層中において部分的に堆積している。
- d：樽前bテフラ (Ta-b) 2.5YR7/3 淡赤褐色 細礫質降下軽石 1667年降下。層厚 20～30cm 前後。
- e：有珠bテフラ (Us-b) 2.5YR6/1 赤灰色 シルト質降下火山灰 1663年降下。層厚数mm, IIIa層上に堆積。
- III層：黒色腐植土
- a：砂質シルト 7.5YR2/1 黒色 II・c層を斑状に含む。層厚 1cm 前後。やや赤味あり。近世初頭遺物包含層。
- b：シルト 10YR1.7/1 黒色 やや粘性あり。層厚 17cm 前後。上位から中位が中近世アイヌ文化期遺物包含層。下位が縄文文化期包含層。IIIb層とIIIc層との層境に白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm シルト質降下火山灰 10c 前半降下) が部分的に堆積する。
- c：砂質シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 20cm 前後。縄文晩期後半の包含層。
- IV層：樽前eテフラ (Ta-e) 10YR6/6 明黄褐色 砂質降下軽石 B.P.2, 500年前降下。層厚 20cm 前後。I層のフォート・エント。
- V層：黒色腐植土
- a：シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚 2cm 前後。縄文晩期前半の遺物包含層。
- b：シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚 25cm 前後。縄文中・後期の遺物包含層。
- c：シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 13cm 前後。縄文前・中期の遺物包含層。
- F1・F2・F3；水成堆積シルト F1はVb層の上、F2はVb層中、F3はVb層の下に堆積している。更に上下でa・bの細分を行っている
- VI層：漸移層 2.5YR4/6 赤褐色 暗褐色シルト。層厚 15cm 前後。縄文早期の遺物包含層。
- VII層：沖積世河岸段丘堆積物。Ta-d主体の再堆積層。
- a；Ta-d ローム主体 10YR5/6 黄褐色
- b；Ta-d1 主体 2.5Y5/2 暗灰黄色
- c；Ta-d2 主体 5YR4/8 赤褐色
- d；段丘堆積砂主体 10Y6/1 灰色
- e；亜角礫主体 2.5Y6/4 にぶい黄色
- VIII層：樽前dテフラ B.P.8, 000年前降下。
- a：樽前d1テフラ (Ta-d1) 5G4/1 暗緑灰色 細礫質降下スコリア (φ5↓) 層厚 10cm 前後。
- b：樽前d2テフラ (Ta-d2) 5YR4/8 赤褐色 中礫質降下スコリア層厚 150cm 前後。部分的に水成風化による粘土化も有る。
- ※T2b面に関しては図I-6で旧河川流路図に対応するものである

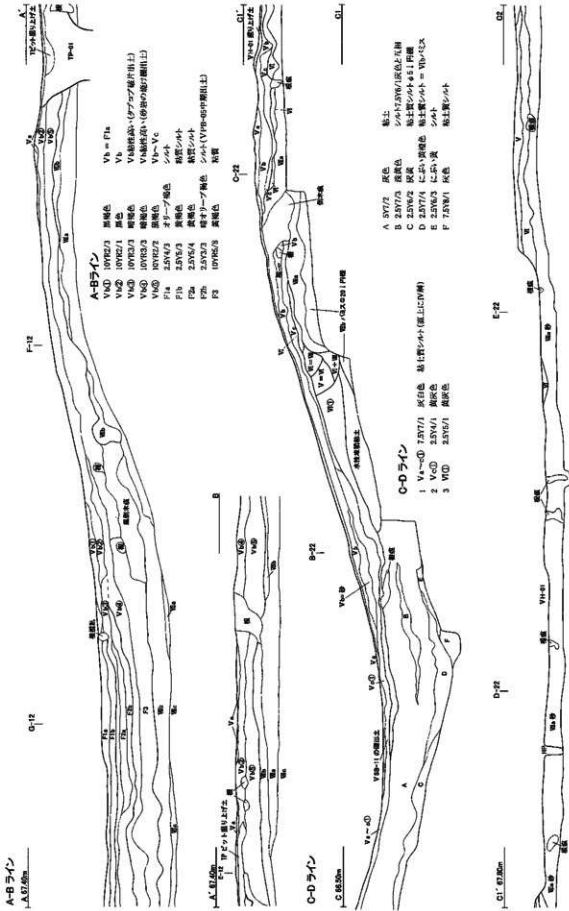
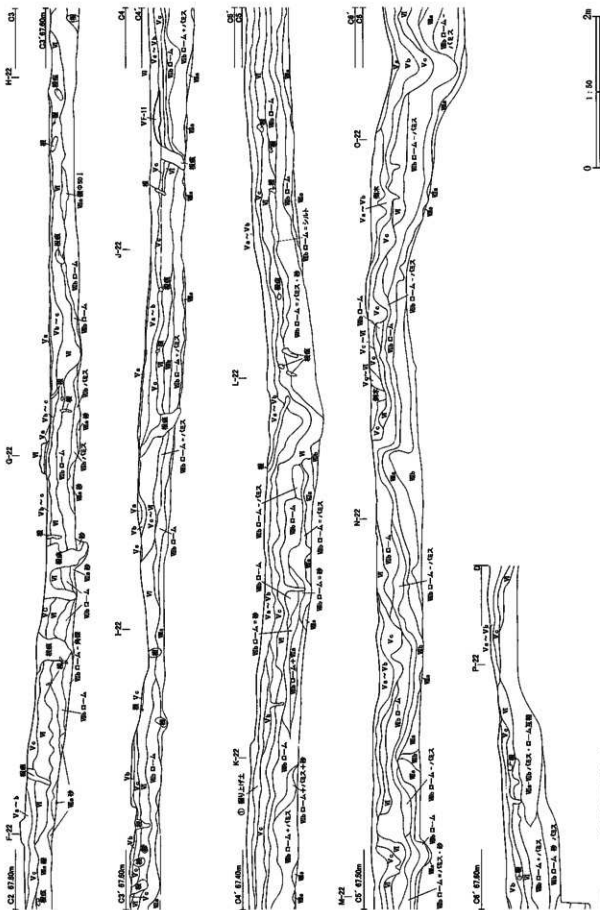
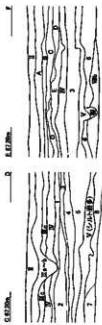


図 I-9 南北断面図 (1)





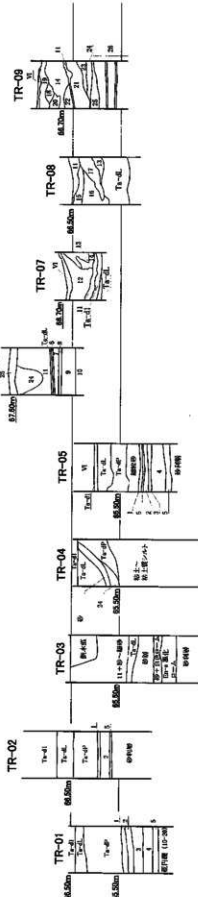
南西断面ライン (C ~ D E ~ F)



C ~ F ライン

- A 10784/2 灰褐色 粘土質シルト
- B 10785/4 細かい黄褐色 砂質シルト = 腐植・ $Ts-d^P$
- C 10786/2 灰褐色 シルト+砂 = 腐化物
- D 10786/2 灰褐色 腐砂
- E 7.5705/6 明褐色 細分粒層
- F 10784/2 灰褐色 シルト
- 1 10784/2 灰褐色  $Ts-dL + Ts-d^P = V$  (砂一)
- 2 10785/3 細かい黄褐色 粘土質シルト = 腐化物
- 3 10785/3 明褐色  $V = Ts-d^P$  (砂一)
- 4 7.5705/8 明褐色  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 5 10785/9 細かい黄褐色 シルト
- 6 10785/9 黄褐色 シルト
- 7 10785/9 黄褐色 シルト

旧石器トレンチ柱状図



旧石器トレンチ

- 1 10787/3 細かい黄褐色 粘土
- 2 2.5707/2 灰褐色 粘土
- 3 2.5707/3 細かい黄褐色 粘土質シルト
- 4 2.5707/3 細かい黄褐色 シルト
- 5 2.5707/3 明褐色 腐砂
- 6 2.5707/3 明褐色 腐砂
- 7 10786/1 明褐色 粘土
- 8 10786/2 灰褐色 腐砂
- 9 10785/2 明褐色 腐砂+粘土質シルト互層
- 10 10785/2 明褐色 腐砂+粘土質シルト互層
- 11  $Ts-d^P$ -A (腐植層) = 黄褐色①
- 12  $Ts-d^P$ -A =  $\Delta$ CS (腐植層)
- 13  $Ts-d^P$  =  $\Delta$ CS (腐植層)
- 14  $Ts-d^P$ -A =  $\Delta$ CS (腐植層)
- 15  $Ts-d^P$ -A =  $\Delta$ CS (腐植層)
- 16  $Ts-d^P + \Delta$ CS (腐植層)
- 17  $Ts-d^P$ -A = 砂 (腐植層)
- 18  $Ts-d^P$  =  $\Delta$ CS (腐植層)
- 19  $Ts-d^P$ -A (腐植層) = 黄褐色①
- 20  $Ts-d^P$ -A (腐植層) = 黄褐色①
- 21  $Ts-d^P$  (腐植層) = 黄褐色① +  $\Delta$ CS (腐植層)
- 22  $Ts-d^P$  (腐植層) = 黄褐色①
- 23  $Ts-d^P$  (腐植層) +  $\Delta$ CS (腐植層)
- 24  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 25  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 26  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 27  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 28  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 29  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 30  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 31  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 32  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 33  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 34  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 35  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 36  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 37  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 38  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 39  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 40  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 41  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 42  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 43  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 44  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 45  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 46  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 47  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 48  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 49  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 50  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 51  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 52  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 53  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 54  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 55  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 56  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 57  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 58  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 59  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 60  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 61  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 62  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 63  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 64  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 65  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 66  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 67  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 68  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 69  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 70  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 71  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 72  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 73  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 74  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 75  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 76  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 77  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 78  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 79  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 80  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 81  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 82  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 83  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 84  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 85  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 86  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 87  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 88  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 89  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 90  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 91  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 92  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 93  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 94  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 95  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 96  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 97  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 98  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 99  $Ts-d^P$  (腐植層)
- 100  $Ts-d^P$  (腐植層)

図 I-12 南西断面及び旧石器トレンチ柱状図

## 第Ⅱ章 縄文時代の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物は Ta-c テフラ下層の黒色腐植土及び漸移層から出土したものである。遺跡は鬼岸辺川左岸の段丘上に立地しており、現河川に近い北側で自然堤防状の起伏が認められ、南西側は山裾で緩やかな傾斜を示している。発掘区は 16 ラインより西側を平成 22 年度、東側を平成 23 年度にわけ 2 ヶ年で調査を行っている。調査区の設定は試掘調査の結果により人力と重機による遺構確認調査に分けて行っている(図 I-3)。調査は重機で表土から Ta-c テフラまで除去し、V 層上面で一度精査を行いグリッド単位に掘り下げを行った。平成 22 年度のすき取りでは、遺構確認範囲は旧河川跡であることが判明し、シルト及び粘土質シルトが厚く堆積している。また、段丘北側の縁辺部に出土した被熱礫の量から、多量の遺物が出土することが予想できたため、火山灰除去後直ぐに遺物範囲確認を行った。平成 23 年度は試掘結果から北側に濃い分布域を示すことが推定でき、すき取り段階で調査区北東側に浅い窪みを検出したため、北東側から調査を行った。特筆する点は被熱礫の多さで、Vb 層下位から Vc 層にかけて出土し、層位的に縄文時代中期中葉頃の所産と考えられる。本遺跡からは縄文時代前期の土器は出土していないため、被熱礫の使用は中期頃まで続いていると考えられる。また、厚真で初めてとなる安山岩製の石棒が 1 点出土し、VP-10 からほぼ完形の円筒下層 c 式相当の土器が一括で出土している。本遺跡の主体となる時期は土器の出土量から縄文時代後期前葉のタブコブ式であり、次いで余市式土器も出土している。タブコブ式土器は段状積み上げのタイプがまとまって出土し、搬入品として北筒Ⅲ式土器が 1 点出土している。

遺構は竪穴式住居 1 軒、Tピット 27 基、土坑 17 基、焼土 22 ヶ所、土器集中 27 ヶ所、礫集中 12 ヶ所、フイ・フガ 集中 4 ヶ所、焼骨集中 9 ヶ所を検出している。

遺物は土器 10,429 点、礫石器 1,053 点、剥片石器 349 点、礫 17,409 点、剥片類 2,469 点、石製品 3 点の合計 31,712 点出土している。(奈良)

### 第 1 節 住居跡

住居跡は調査区北東側の自然堤防上の高まりに 1 軒検出している。形状は北北西-南南東軸で楕円形を呈しており、南側を深く、北側を浅く掘り込んで構築している。住居跡周辺には掘り上げ土が薄く 16×14m の範囲で分布し、中央には石組炉を 1 ヶ所検出している。以下に詳細を述べる。

VH-01 (図Ⅱ-2~7 図版カラー2-1・3・4-1~3・30)

位置：C~E-20~22 規模：1096×864×25cm 検出層位：VbU

長軸方向：N-19° W 平面形：楕円形 付属遺構：HF01・PT01

**確認・調査：**重機による火山灰除去を行っている際、調査区北東側に楕円形の浅い窪みを確認した。当初は旧河川による自然堤防上の微地形であると考えていたが、V 層上面で地形測量を行った結果、自然地形とはやや異なる等高線を示し、窪み周辺に掘り上げ土と考えられる Vc~VI 層が分布していたため住居跡と想定した。調査は中心と予想される地点から掘り上げ土がかかる範囲まで十字ベルトを設定しトレンチで床面及び壁面の立ち上がり、掘り上げ土の範囲を確認した。床面からは石組炉と住居南側端部に楕円形の黒色プランを検出した。十字ベルトセクションの記録後に各付属遺構及び柱穴の確認調査を行った。床面精査の際、僅かではあるが内側に約 150 cm 幅のベンチ状の段差を確認したため範囲を記録し、完掘写真撮影して調査終了とした。

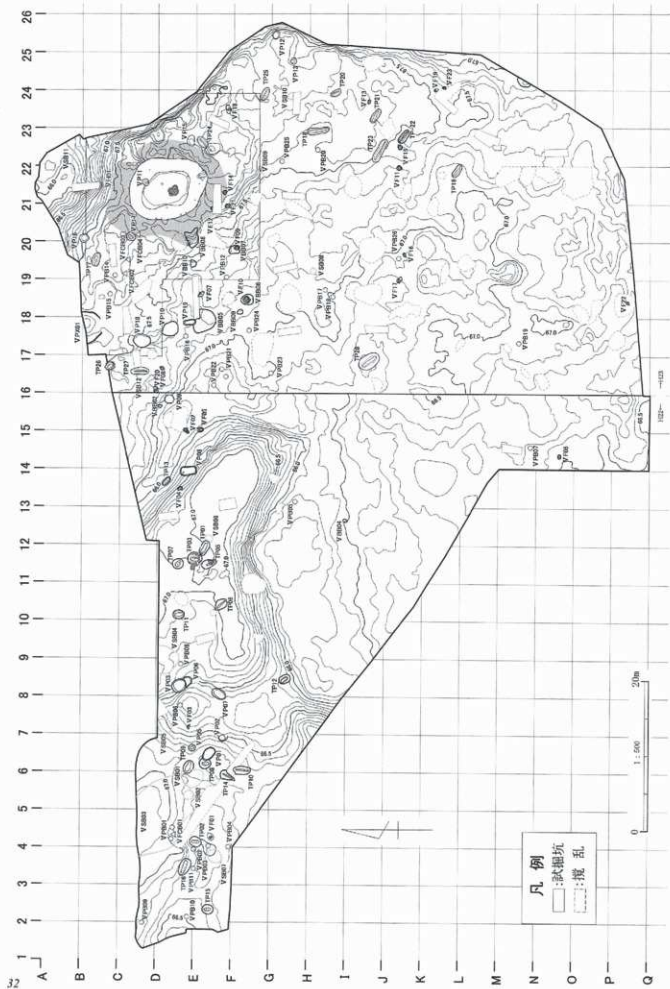


図1-1 縄文時代遺構配置図

表II-1 縄文時代遺構群一覧表(1)

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
VH-01	縄文時代後期	1096	864	C~E-20~22	VbU	HF01・PT01	
VP-01	縄文時代中期~後期	200	140	E-6	Vc		
VP-02	縄文時代中期~後期	-	-	E-6	Vc		
VP-03	縄文時代中期~後期	192	172	D-8	Vc		
VP-05	縄文時代中期~後期	88	96	D-E-6	Vc		
VP-06	縄文時代中期~後期	(148)	120	D-8	Vc		
VP-07	縄文時代中期~後期	196	124	E-7・8	VI		
VP-08	縄文時代中期~後期	128	212	D-13・14	VI		石棒出土
VP-09	縄文時代中期~後期	126	118	D-15	VI		
VP-10	縄文時代中期	240	184	D-17	VbL		
VP-11	縄文時代中期~後期	96	84	C-21	2		住居覆土で検出
VP-12	縄文時代中期~後期	112	92	G-25・F-25	VbL		
VP-13	縄文時代中期~後期	94	78	G-24	Vc		
VP-15	縄文時代中期~後期	142	102	D-22	Vc		
VP-16	縄文時代中期~後期	116	122	A・B-19・20	Vc		
VP-17	縄文時代中期~後期	124	108	C-20	Vc		
VP-18	縄文時代中期~後期	232	176	C-17	Vc		
VP-19	縄文時代中期~後期	160	72	D-17	Vc		
VFX-01	縄文時代中期~後期	424	(210)	B-17・18	Vc		
VF-01	縄文時代中期~後期	110	78	E-4	VbL		
VF-02	縄文時代中期~後期	50	40	D-15	VbU		
VF-03	縄文時代中期~後期	58	(34)	D-7	Vc		
VF-04	縄文時代中期~後期	70	42	D-13	Vbu		
VF-05	縄文時代中期~後期	(80)	60	E-14・15	Vc		
VF-06	縄文時代中期~後期	42	58	N-14	VbU		
VF-07	縄文時代中期~後期	96	52	D・E-18	VbL		
VF-08	縄文時代中期~後期	64	44	D-16	VbL		
VF-09	縄文時代中期~後期	64	58	E・F-19	VbL		
VF-10	縄文時代中期~後期	92	80	F-18	VbL		
VF-11	縄文時代中期~後期	62	72	J-21・22	VbL・Vc		
VF-12	縄文時代中期~後期	50	(26)	E-20	VbL		
VF-13	縄文時代中期~後期	94	78	I-23	Vc		
VF-14	縄文時代中期~後期	56	48	E-21	Vc		
VF-15	縄文時代中期~後期	72	54	J-22	Vc		
VF-16	縄文時代中期~後期	54	34	J-19	Vc		
VF-17	縄文時代中期~後期	86	54	J-18・19	Vc		
VF-18	縄文時代中期~後期	114	54	E-23	Vc		
VF-19	縄文時代中期~後期	110	64	K-23・24	Vc		
VF-20	縄文時代中期~後期	84	62	C・D-16	Vc		
VF-21	縄文時代中期~後期	66	(56)	E-20・21	Vc		
VF-22	縄文時代中期~後期	36	38	P-18	Vc		
VF-23	縄文時代中期~後期	46	26	K-24	Vc		
TP-01	縄文時代中期~後期	200	88	E-11・12	Vc		
TP-02	縄文時代中期~後期	160	140	D・E-4	Vc		
TP-03	縄文時代中期~後期	188	160	D・E-11	Vc		
TP-05	縄文時代中期~後期	204	112	E-11	Vc		
TP-06	縄文時代中期~後期	192	140	E-10	Vc		
TP-07	縄文時代中期~後期	144	140	D-11	Vc		
TP-08	縄文時代中期~後期	152	144	E-6	Vc		



表Ⅱ-2 縄文時代遺構群一覧表(2)

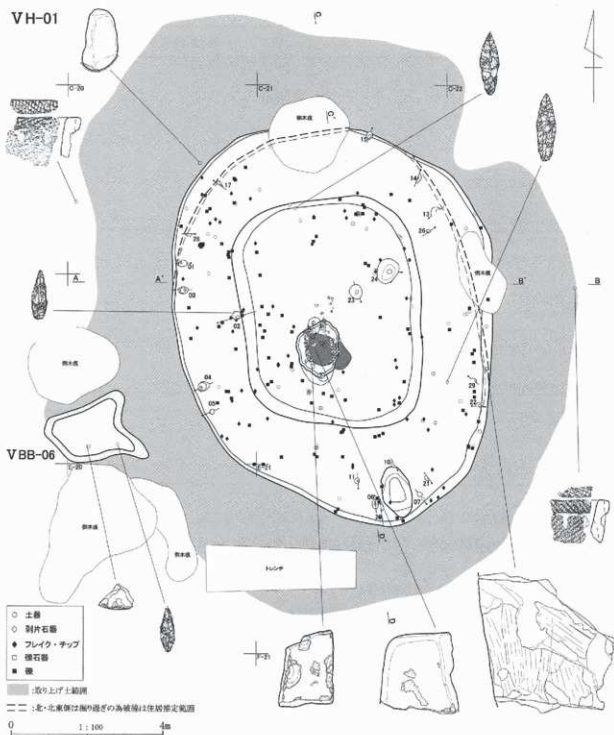
遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
TP-09	縄文時代中期～後期	180	140	D-5・6	VI		
TP-10	縄文時代中期～後期	228	116	F-5・6	VI		
TP-11	縄文時代中期～後期	152	120	D-10	VI		
TP-12	縄文時代中期～後期	160	120	G-8	VI		
TP-13	縄文時代中期～後期	140	72	D-13	VII		
TP-14	縄文時代中期～後期	212	120	E-5・6・F-5	VII		
TP-15	縄文時代中期～後期	152	128	E-2	VI		
TP-16	縄文時代中期～後期	236	140	D-3	VI		
TP-17	縄文時代中期～後期	180	98	B-19	Vc		
TP-18	縄文時代中期～後期	296	92	H-22・23・G-22	Vc		
TP-19	縄文時代中期～後期	196	84	K-21・22	Vc		
TP-20	縄文時代中期～後期	152	76	H-23・24	Vc		
TP-21	縄文時代中期～後期	210	84	I-23	Vc		
TP-22	縄文時代中期～後期	204	94	J-22	Vc		
TP-23	縄文時代中期～後期	334	104	I-22・23	Vc		
TP-24	縄文時代中期～後期	176	102	E-22	Vc		
TP-25	縄文時代中期～後期	188	94	F-23・24	Vc		
TP-26	縄文時代中期～後期	(130)	112	B-16	Vc		
TP-27	縄文時代中期～後期	240	102	C-16	Vc		
TP-28	縄文時代中期～後期	294	194	I-16・17	VI		
VPB-01A	縄文時代後期	58	50	D-4	VbU		
VPB-01B	縄文時代後期	50	40	D-4	VbU		
VPB-02	縄文時代後期	46	42	D-3・4・E-4	VbU		
VPB-03	縄文時代中期	55	39	E-4	VbU		
VPB-04	縄文時代後期	72	30	E-3・4	VbU		
VPB-05	縄文時代中期	29	25	G-13	VbU		
VPB-06	縄文時代中期	65	25	D-7	VbL		
VPB-07	縄文時代後期	100	58	M-14	VbU		
VPB-08	縄文時代中期	44	23	D-8	VbL		
VPB-09	縄文時代中期	94	87	C-2	VbU		
VPB-10	縄文時代中期	115	68	D-2	VbU		
VPB-11	縄文時代後期	55	38	D-E-3	VbU		
VPB-12	縄文時代後期	148	115	E-19	VbU・VbL		VPB-02と同一
VPB-13	縄文時代中期	32	16	D-17	1・2	VP-10	
VPB-14	縄文時代後期	67	59	B-19	VbU		
VPB-15	縄文時代中期	79	66	B-18	VbU・VbL		
VPB-16	縄文時代中期	60	29	D-17	VbL		
VPB-17	縄文時代中期	71	27	I-18	VbU・VbL・Vc		
VPB-18	縄文時代後期	18	12	I-18	VbU・VbL		
VPB-19	縄文時代後期	90	59	M-17	VbU		
VPB-20	縄文時代後期	329	119	H-22	VbU		
VPB-21	縄文時代後期	114	46	E-16	VbU		A～C
VPB-22	縄文時代後期	32	32	E-16	VbU		
VPB-23	縄文時代後期	214	36	F・G-16	VbU・VbL		
VPB-24	縄文時代後期	47	30	F-17	VbL		
VPB-25	縄文時代後期	248	124	G-22	VbL		
VPB-26	縄文時代後期	113	61	J-19	VbU・VbL		
VSB-01	縄文時代中期～後期	256	224	D・E-5・6	VbU・L	VSB-02・03	
VSB-02	縄文時代中期～後期	120	112	D-5	VbU	VSB-01・03	

表Ⅱ-3 縄文時代遺構群一覧表(3)

遺構名	時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
VSB-03	縄文時代中期～後期	1016	744	C・D-4・5	VbU・VbL	VSB-01・02	
VSB-04	縄文時代中期～後期	364	300	D-8・9	VbL		
VSB-05	縄文時代中期～後期	196	136	D-7	VbL		
VSB-06	縄文時代中期～後期	80	80	E-12	VbL		
VSB-07	縄文時代中期～後期	172	160	E-3	VbL		
VSB-08	縄文時代中期～後期	129	55	G・H-19	VbL		
VSB-09	縄文時代中期～後期	327	225	F-21	Vc		
VSB-10	縄文時代中期～後期	64	22	G-23	Vc		
VSB-11	縄文時代中期～後期	634	385	A-21・22	VbL・Vc		
VSB-12	縄文時代中期～後期	79	36	C-16	Vc		
VBB-01	縄文時代中期～後期	83	65	E-4	VbU		
VBB-02	縄文時代中期～後期	50	41.6	C・D-15	VbU		
VBB-04	縄文時代中期～後期	59	42	H-12	VbU		
VBB-05	縄文時代中期～後期	75	60	D-17・18	Va		
VBB-06	縄文時代中期～後期	285	181	D-19・20	VbU		
VBB-07	縄文時代中期～後期	138	109	E・F-19	VbU		
VBB-08	縄文時代中期～後期	75	65	F-18	VbU		
VBB-09	縄文時代中期～後期	158	136	F-18	VbU		
VBB-10	縄文時代中期～後期	89	-	D-19	VbU		
VCB-01	縄文時代中期～後期	350	183	D-7	VbL		
VFCB-01	縄文時代中期～後期	126	79	D-4	VbU		
VFCB-02	縄文時代中期～後期	210	120	B・C-19	VbU		
VFCB-03	縄文時代中期～後期	115	81	C-19	VbU		
VFCB-04	縄文時代中期～後期	24	19	C-20	Vc		

堆積状態：2～5層はVb層にVc層が少量から多量混入する住居掘り上げ土で、西側では10～20cm認められるが、倒木痕の影響により不明瞭な堆積が多い。6・10・11層は三角堆積でプライマリーな層とやや色調が異なる。1層は覆土上位の堆積層で中期・後期の土器が混在して出土している。7・8層はVb層が主体で住居廃棄後最初に堆積したものと考えられる。9層は倒木痕の影響によりややVc層が多い。住居跡はVc層まで掘り込んで構築されており、Vc層混じりの掘り上げ土が周辺から流れ込み埋没している。また、堆積層が比較的水平で、中心に掘り上げ土があまり認められないことから本住居跡は掘り上げ土を屋根土として使用していなかったと考えられる。

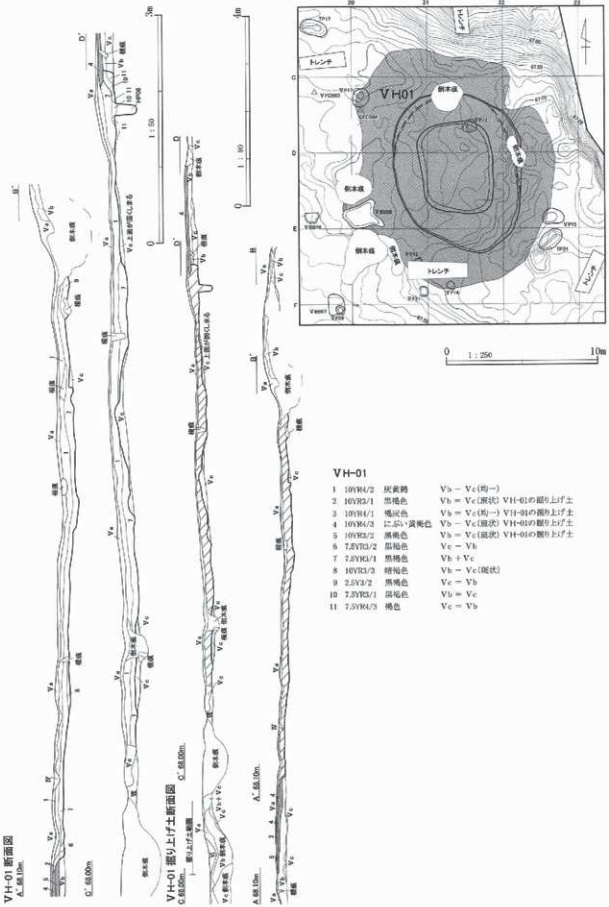
石組炉：住居中央よりやや南西側に平均厚24.4mmの板状礫で構成された石組炉を1ヶ所検出した。ほぼ南北に軸をもつ石組炉は長軸側が比較的残存状態が良好であったが、北側部分は散在していた。形状は明瞭ではないものの南側が開放されている「コ」の字状を呈し、板状礫は最大長が横方向になるよう配置されている。炉内には焼土が形成され、周辺には微細な焼骨片が散在している。また、石組炉の外側（東側）にも焼土が形成され、重複していることがわかる。石組炉は炉石よりひと回りほど大きく土坑状のプランが確認されたため、古い焼土を切るように浅い窪みを掘り、板状礫を配したものと考えられる。図Ⅱ-4のe-fラインはおそらく板状礫が抜けた痕に焼土が流れ込んだものと考えられる。石組炉内から採取した炭化材でAMS年代測定分析を行ったところ3,740±30yrBPという数値を得ている。



図Ⅱ-2 VH-01 平面図及び周辺遺構

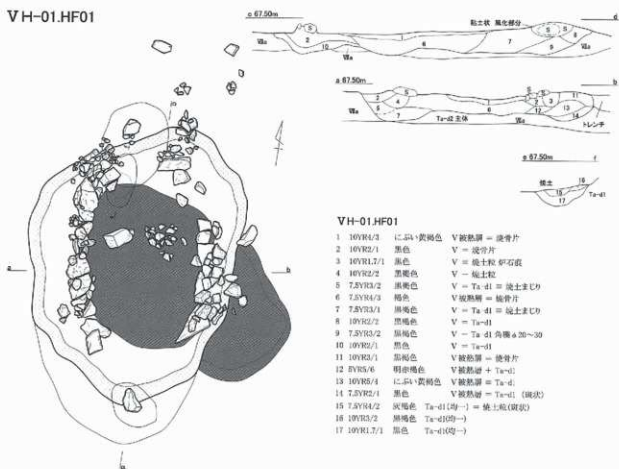
表Ⅱ-4 VH-01属性表

押図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)				深さ	ベンチ		付属遺構	備考
					上端		下端			幅	高さ		
					長軸	短軸	長軸	短軸					
Ⅱ-2	カラ 2-1・ 3-1	C・D・E- 20~22	VbU	N-19° W	1096	864	624	472	25	-	-	HF01・PT01	

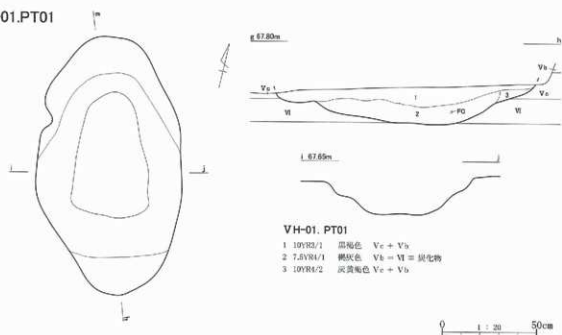


図II-3 VH-01断面図及び住居周辺地形図

VH-01.HF01

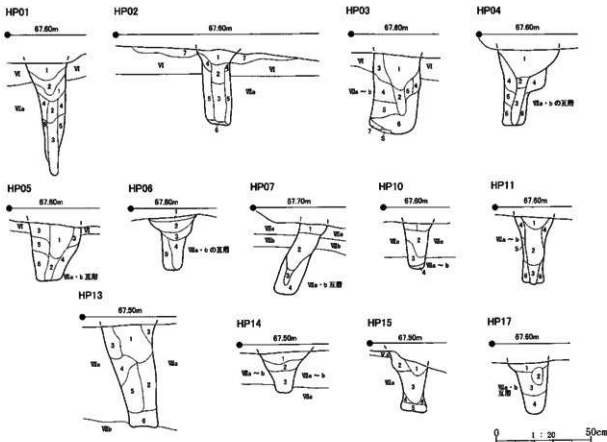


VH-01.PT01



図Ⅱ-4 VH-01 付属遺構平面及び断面図

VH-01.HP



- HP01**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色 Vb = VI
  - 2 7.5YR3/2 黒褐色 Vb + VI
  - 3 7.5YR2/1 黒色 Vc + Vb
  - 4 10YR4/2 灰黄褐色 Vd = Vc
  - 5 10YR4/1 褐色 Vc + VI Ta-da
  - 6 10YR3/1 黒褐色 Vc + VI Ta-d1

- HP02**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色 Vb = VI
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 Vc + VI
  - 3 7.5YR2/1 黒色 Vc = Vb
  - 4 7.5YR4/4 褐色 VI = Vb
  - 5 2.5YR4/3 にぶい暗褐色 Vc + Vb
  - 6 2.5YR4/2 灰赤色 Wa = Vb
  - 7 7.5YR4/1 褐色 VI + Vb

- HP03**
- 1 10YR3/2 黒褐色 V = VI (底状) 柱底
  - 2 10YR3/1 黒褐色 V = VI (均一) 柱底
  - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI = V (底状)
  - 4 7.5YR3/1 黒褐色 V + VI (均一)
  - 5 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-d1主 = V (均一)
  - 6 7.5YR4/3 褐色 Ta-d1
  - 7 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1

- HP04**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色 V + Ta-d1 (底状) = 硬骨片φ51 柱底
  - 2 10YR3/3 暗褐色 V + Ta-d1 (底状) 柱底
  - 3 7.5YR2/1 黒色 V = Ta-d1 (均一) 柱底
  - 4 7.5YR4/4 褐色 Ta-d1 - Ta-d1 (均一)
  - 5 10YR3/1 黒褐色 V - Ta-d1 (均一)
  - 6 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d1 + d2 (均一)

- HP05**
- 1 10YR3/2 黒褐色 V = Ta-d1 (均一) 柱底
  - 2 10YR2/1 黒褐色 V = Ta-d1 (底状) 柱底
  - 3 7.5YR3/1 黒褐色 V = Ta-d1 (均一)
  - 4 7.5YR3/2 黒褐色 V - VI (底状) = 角礫φ23.1
  - 5 7.5YR4/2 灰褐色 V + VI (底状)
  - 6 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d1 + d2 (底状)

- HP06**
- 1 7.5YR2/1 黒褐色 V - Ta-d1 (角礫φ5~10.1)
  - 2 7.5YR4/1 褐色 V + Ta-d1 (均一)
  - 3 10YR2/1 黒褐色 V = Ta-d1 (均一)
  - 4 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1 (底状)
  - 5 10YR4/4 褐色 Ta-d1 + Ta-d1 (底状)

- HP07**
- 1 10YR4/2 灰黄褐色 V - VI (底状)
  - 2 10YR3/2 黒褐色 V = VI (底状)
  - 3 10YR4/1 褐色 V = Ta-d1 (均一)
  - 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色 Ta-d1 = V

- HP11**
- 1 10YR2/1 黒色 V - Ta-d1 (底状)
  - 2 10YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1 (均一)
  - 3 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1 (均一)
  - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色 V + Ta-d1 (底状)
  - 5 10YR3/3 暗褐色 V + Ta-d1 (均一)
  - 6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 Ta-d1

- HP13**
- 1 10YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1 (均一)
  - 2 10YR2/1 黒色 V - Ta-d1 (均一)
  - 3 10YR4/2 灰黄褐色 V + Ta-d1 (均一)
  - 4 10YR2/2 黒褐色 V - Ta-d1 (均一)
  - 5 7.5YR3/2 黒褐色 Ta-d1 = V (底状)
  - 6 7.5YR2/1 黒色 V = Ta-d1 (底状)

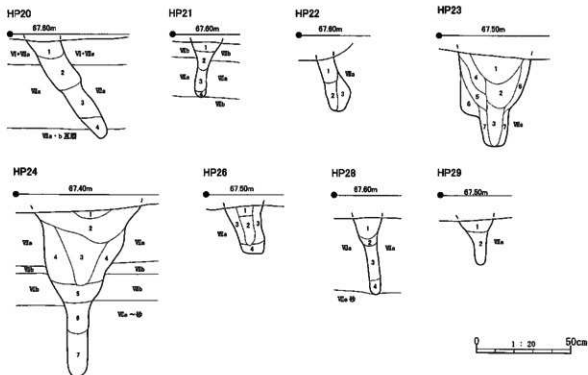
- HP14**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色 V - Ta-d1 (均一)
  - 2 7.5YR4/2 灰褐色 Ta-d1 = V (均一)
  - 3 7.5YR2/2 黒褐色 V - Ta-d1 (均一)

- HP15**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色 V = Ta-d1 (均一)
  - 2 10YR4/2 灰黄褐色 V + Ta-d1 (均一)
  - 3 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1 (底状)
  - 4 7.5YR3/2 黒褐色 V + Ta-d1 (底状)
  - 5 10YR2/1 黒色 V = Ta-d1 (均一)

- HP17**
- 1 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1 (底状)
  - 2 10YR2/1 黒色 V = Ta-d1 (均一) 木根の可能性
  - 3 7.5YR3/2 黒褐色 V + Ta-d1 (均一)
  - 4 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1 = V (均一)

図Ⅱ-5 VH-01 柱穴断面図(1)

VH-01.HP



- HP20**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色 V - Ta-d1(腐状)
  - 2 7.5YR2/1 黒色 V - Ta-d1(腐状)
  - 3 10YR2/1 黒色 V = Ta-d1(腐状)
  - 4 10YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1(腐状)

- HP21**
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1(腐状)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 V - Ta-d1(腐状)
  - 3 10YR3/3 暗褐色 V + Ta-d1(腐状)
  - 4 10YR4/1 褐色 V + Ta-d1(腐状)

- HP22**
- 1 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1(腐状)
  - 2 7.5YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1(腐一)
  - 3 10YR3/3 暗褐色 V - Ta-d1(腐一)

- HP23**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色 V - シルト(均一 Vc相当)
  - 2 10YR2/1 黒色 V = シルト(均一)
  - 3 10YR1.7/1 黒色 V = シルト(均一 粘性あり)
  - 4 10YR3/1 黒褐色 V = Ta-d1(腐状)
  - 5 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-d1 = V(均一)
  - 6 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-d1主体 = V(腐状)
  - 7 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1+d2 = V(腐状)

- HP24**
- 1 10YR4/3 灰黄褐色 V + Ta-d1(均一)
  - 2 7.5YR2/1 黒色 V = Ta-d1(均一)
  - 3 10YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1(腐状)
  - 4 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-d1 - V(腐状)
  - 5 2.5Y4/2 暗灰黄色 Ta-d1 - V(腐状)
  - 6 10YR3/3 暗褐色 V + Ta-d1(腐状) - 角径φ5-20 ↓ 柱底
  - 7 2.5Y3/1 黒褐色 V + Ta-d1(均一) 柱底

- HP26**
- 1 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1(均一)
  - 2 10YR2/1 黒色 V = Ta-d1(均一)
  - 3 10YR4/2 灰黄褐色 V + Ta-d1(腐状)
  - 4 10YR3/1 黒褐色 Ta-d1 = V(腐状)

- HP28**
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1 = 角径φ10-20 ↓
  - 2 7.5YR3/1 黒褐色 V - Ta-d1(腐状)
  - 3 5YR3/2 暗赤褐色 V - Ta-d1(腐状)
  - 4 7.5YR2/1 黒色 V - Ta-d1(均一)

- HP29**
- 1 10YR3/3 暗褐色 V = Ta-d1(均一)
  - 2 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1(均一)

図Ⅱ-6 VH-01 柱穴断面図(2)

表Ⅱ-5 VH-01付属遺構属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)					灰・骨片の有無	備考
							上面		底面		深さ		
							長軸	短軸	長軸	短軸			
Ⅱ-4	3-6	PT01	E-21	2	-	楕円形	138	76	66	40	20	-	
Ⅱ-4	3-2	HP01	D-21	2	石組炉	楕円形	136	104	112	84	16	焼骨片	

表II-6 VH-01柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
II-5	4-1	HP01	22	4	60	5°	打込み	
II-5	-	HP02	20	10	40	0°	掘り方	
II-5	-	HP03	24	20	42	10°	掘り方	
II-5	-	HP04	32	12	40	10°	掘り方	
II-5	-	HP05	28	12	30	20°	掘り方	
II-5	-	HP06	26	6	28	0°	掘り方	
II-5	4-3	HP07	14	10	40	25°	掘り方	
II-5	-	HP10	16	6	24	0°	掘り方	
II-5	-	HP11	20	12	32	0°	掘り方	
II-5	-	HP13	28	16	58	6°	掘り方	
II-5	-	HP14	26	6	22	0°	掘り方	
II-5	4-2	HP15	20	12	26	0°	掘り方	
II-5	-	HP17	22	6	26	5°	掘り方	
II-6	-	HP20	18	6	60	31°	打込み	
II-6	-	HP21	16	2	28	8°	打込み	
II-6	-	HP22	10	6	28	12°	打込み	
II-6	-	HP23	38	12	48	5°	掘り方	
II-6	-	HP24	56	12	88	0°	掘り方	
II-6	-	HP26	18	12	26	10°	掘り方	
II-6	-	HP28	14	6	40	5°	打込み	
II-6	-	HP29	14	4	40	8°	打込み	

表II-7 VH-01周辺出土土器属性表

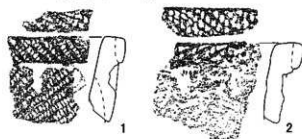
挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
II-7-1	30-1-1	JP090	IVA2	D-22	VbU	1	口縁~ 胴部	平縁・やや外傾- 隅丸角状	RL斜行縄文-貼付帯 1B・RL斜行縄文-弱 いミガキ/段状積み 上げ・LR斜行縄文 ・刺突文(縄)	砂礫多量 混入	
II-7-2	30-1-2	JP094	IVA2	C-20	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾- 角状	RL斜行縄文-貼付帯 1B・LR斜行縄文 ・刺突文(縄) -弱いミガキ	砂礫中量・ 角礫少量 混入	

表II-8 VH-01出土石器属性表

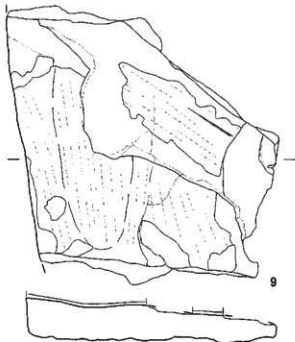
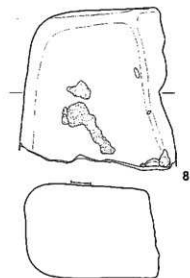
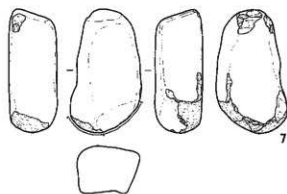
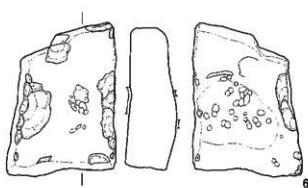
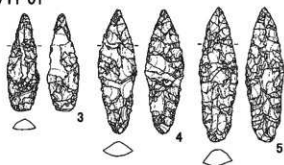
挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物名	遺物 番号	遺構名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
II-7-3	30-1-3	-	石槍	14899	VH-01	B2③	1	51.5	17.0	6.5	5.3	Obs.	
II-7-4	30-1-4	-	石槍	17364	VH-01	B2③	2	65.5	20.5	10.7	10.3	Obs.	
II-7-5	30-1-5	-	石槍	19304	VH-01	B2③	2	71.0	20.5	9.1	13.1	Aga-sh.	
II-7-7	30-1-6	-	たたき石	13454	VH-01	II B2	VbU	99.0	54.0	37.0	385.0	Gab.	
II-7-6	30-1-7	-	たたき石	19497	VH-01	II B1	2	123.0	87.0	38.0	540.0	Sa.	
II-7-9	30-1-8	-	石皿	16133	VH-01	-	1	(211.0)	(205.0)	29.0	(1650.0)	Sa.	
II-7-8	30-1-9	-	台石	16705	VH-01, HP01	-	1	(129.0)	125.0	74.0	(1850.0)	Sa.	
II-7-10	30-1-10	-	石槍	13273	VBB-06	B2③	VbU	47.0	15.5	9.7	5.4	Obs.	
II-7-11	30-1-11	-	すり石	13260	VBB-06	-	VbU	40.0	(53.0)	24.0	50.0	Sa.	



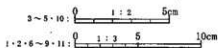
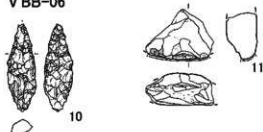
VH-01 周辺出土土器



VH-01



VBB-06



図Ⅱ-7 VH-01 及び関連出土遺物

**付属土坑・柱穴:**土坑は住居南側端部に1ヶ所検出している。形状は楕円形を呈し、周辺にはHP06・07・10・20を検出しているが土坑との関連は不明である。柱穴は全部で21本確認し、概ね住居立ち上がりの壁面に配列しているが、主柱穴は明瞭な配列が認められない。柱穴は打ち込みと掘り方のタイプが混在しているが、ある程度掘り込んだ後柱を打ち込んだものと考えられる。HP24に関しては深さ80cm以上あり、対になる柱穴が認められないことから住居に関連しない可能性もある。

**遺物出土状態:**遺物は住居跡周辺のVa層から散在する状態で出土しているが、量的には少なく、一括遺物の集中はない。住居壁面には倒木痕が多く、中期・後期の土器が同一レベルから出土する状態であった。また、掘り上げ土も平面で明瞭に区分することが出来なかったため、掘り上げ土上下層で遺物を確認することは困難であった。遺物の分布を見ると石組炉周辺にやや遺物が多く出土する傾向にあるが、土器や礫石器は破片資料が殆どで、明確に伴う土器片は出土していない。掲載遺物は掘り上げ土周辺及び住居覆土より出土したもので、うち8・9は石組炉周辺の床面から出土した石器類である。また、住居南西側にVBB-06・10を検出しており、石組炉内の焼骨片が少量であるため、掻き出しを行っている可能性が考えられる。このため掘り上げ土と同一レベルで検出されたVBBを関連遺構として掲載している。

**出土遺物(1~11):**1・2は掘り上げ土縁辺部から出土したIV群A2類土器である。いずれも口唇部は隅丸角状で、内面は横方向に弱い磨きが施される。口縁部には貼付帯と縄による刺突列が施され、1は形態断面や同一個体の資料から段状積み上げのタブコブ式土器である。胎土は両方砂礫を多く含み、2は器表面が層状に剥がれる。この他住居内の覆土1・2層からIV群土器41点出土しているが、口縁部ではないために、掲載していない。3~5はB2類とした石槍3点で棒状3は基部が平坦、4・5は丸状である。3は稜に古い剝離面を残し背面を調整している。4・5はともに両面調整しており、4は基部側の右側面に連続した微細剝離で、浅い抉りが認められる。5は器表面が風化し稜の剝離が磨滅している。6・7はたたき石で6は方形の板状礫を素材として両面に敲打痕、側面に剝離が認められる。7は素材端部に連続して敲打が認められる。8は台石で浅い敲打面が中央付近に認められることから、方形に割ったもしくは割れた石材を利用したものと考えられる。9は多方向に擦痕認められる板状礫を素材とした石皿である。斜め方向の擦痕は部分的に線条痕を残し、縦方向の浅い窪みは石冠などのすり石によってレンズ状を呈したものと考えられる。10はB2類とした石槍で、断面はカマボコ状に近い形態を呈している。裏面は右側縁からの微細剝離調整が連続する。11はすり石とした資料で、下端部に長軸方向のすり面が認められる。形状は石錐と類似するが、幅が広く側面までの擦痕が顕著でなかったためすり石とした。また、石組炉内の土壌サンプルから不明炭化種子が1点、焼骨片で部位不明の哺乳綱が36.16g出土している。

## 第2節 Tピット

Tピットの検出は、Vc層からVII層上面において黒色土の落ち込みで平面形を確認した。調査は、検出平面形長軸の中間付近で、長軸方向に対し直交する位置にセクションラインを設定し、半載後、堆積状態の撮影・実測を行った。実測終了後残り半分を調査し、完掘平面形の撮影・実測及びエレーションの実測を行った。また、坑底で杭穴を検出したものは同様の手順で調査を行っている。

### 形態分類

Tピットの形態分類は、坑底面平面形の長短比および杭穴の有無を基準とする『苫小牧東部工業

地帯の遺跡群Ⅱ』(苦小牧埋蔵文化財センター 1987)での分類案を基に、長短比数値に若干の変更を加えた厚幌1遺跡(厚真町教育委員会 2004)での分類に従い、細分を含め7タイプに分けた。

A型：長短比が8以上で、長さに対して幅が狭い溝状のタイプ。

A1型 長軸が2m以上のもの A2型 長軸が2m未満のもの

B型：長短比が4以上、8未満のもので、長楕円形のタイプ。

B1型 杭穴がないもの B2型 杭穴があるもの

C型：長短比が4未満のもので、楕円形から円形に近いもの。

C1型 杭穴がないもの C2型 杭穴があるもの

D型：長さ1m、幅0.2m前後の小規模なタイプで、深さ0.5m以下のもの

#### 形態

分類毎の検出数はA1型4基、A2型3基、B1型7基、C1型4基、C2型9基である。

C型で杭のあるC2型の比率が高く全体の3割を占めている。この要因は坑底面がTa-d ロームもしくは灰褐色ロームであるため杭が打ち込みやすい環境にあったことや時期的な要因が挙げられる。

#### 配列

今回検出したTピットはTP-12・28を除いて全て埋没河川より上位に構築されている。分布は段丘縁辺に沿って自然堤防上の高台に広がり、TP-19~22は北東-南西軸に配列が認められる。

以下に遺構ごとの詳細を示す。

(奈良)

#### TP-01 (C1型)・03 (C2型)・05 (B1型)・07 (C2型)

(図Ⅱ-8・9・18-1 図版4-4・5-3~5-6-1・2・5・6・31-3)

位置：D-E-11・12 規模・平面形：[TP-01]：200×88cm長楕円形 [TP-03]：188×160cm楕円形  
[TP-05]：204×112cm長楕円形 [TP-07]：144×140cm楕円形

確認・調査：D-E-11・12区でVb層調査中にTa-d2バミス(a・b・e)及びTa-d2バミスとVb層の混入した土(c・d・f・g)のブロックを検出した。これらのブロックは遺構の掘り上げ土と想定された。また、この面でTa-cテフラが堆積している範囲があり、Ta-cテフラ降下時は窪みとなっていたことが判る。この面で撮影を行いTa-d2バミス主体土のブロックの範囲とTa-cテフラが堆積している範囲の記録を行った。その後遺構が確認できるVI層上面まで調査を進めた。VI層上面で5ヶ所の落ち込みを確認し、それぞれの調査を進めたところ内1ヶ所を風倒木痕と判断し、他4ヶ所はTピットで長楕円形のもの2基(TP-01・05)、楕円形のもの2基(TP-03・07)であった。

堆積状態：TP-01の土層2、TP-03の土層2・3、TP-05の土層1・2は覆土上位でTa-d2バミス等が主体となるもので、掘り上げ土が堆積したものと考えられる。この掘り上げ土の下にはそれぞれVb層が堆積している。

TP-01に堆積する掘り上げ土(土層1)は血状に堆積しており、下のVb層との境界が非常に明瞭であることから、壁面の崩落及び土砂の流入が安定した後で堆積したものと思われる。また、土層1は掘り上げ土のbと一体となるものだが、後述するようにこのbはTP-03の掘り上げ土である可能性が高いものである。TP-03の上部に堆積する掘り上げ土a~cは、TP-03を中心として東西両側に開口部の外側まで分布するものである。また、掘り上げ土の土層2・3とその下のVb層との境界は漸移的である。これらの状況からa~cは別のTピットの掘り上げ土という可能性よりも、TP-03自体

の掘り上げ土が東西両側に堆積されており、これが壁面の崩落などに伴って流入した可能性が高いと思われる。これと同じ状態の掘り上げ土とTピットのセットはヲチャラセナイ遺跡のTP-43(ヲチャラセナイ遺跡 印刷中)でも調査しており、これは周囲に他の遺構がないことから、別遺構の掘り上げ土の可能性がないものである。TP-05は掘り上げ土の土層1・2とその下のVb層との境界は明瞭である。また、土層1・2と掘り上げ土d・eは一体となるものである。このような状況から別のTピットの掘り上げ土が堆積したものと考えられ、TP-01・03の可能性はある。

**新旧関係：**各Tピットの切り合い関係はないが、掘り上げ土と遺構との重複関係などから新旧関係の想定が可能なものがある。前述したようにTP-01(長楕円形)の覆土上部にTP-03(楕円形)の掘り上げ土が堆積していることからTP-01が古く、TP-03が新しい。(天方)

**出土遺物(1)：**1は扁平稜素材のたたき石でIIA1に相当する。片面2ヶ所に窪みが顕著な敲打痕が認められ、使用頻度は高かったと推定される。石材は砂岩である。(奈良)

**TP-02・16 (C2型)** (図II-10・18-2~4 図版4-6・5-1・9-5・31-1・4・5)

位置：[TP-02] D・E-4 [TP-16] D-3

規模・平面形：[TP-02] 160×140cm 楕円形 [TP-16] 236×140cm 長楕円形

**確認・調査：**TP-02・16はVcからVI層まで掘り下げた後黒色土の落ち込みでプランを確認した。TP-16については北西側拡張部分から検出されたため、図上でTP-02との位置関係を示している。また、これらTピットをVI層で確認する前には、Vb層上位でTa-dバミス为主体とする掘り上げ土が確認されていたために、周辺にTピットがあることが予想され、プランが明瞭になるVI層まで掘り下げた後に短軸方向で半載を行った。掘り上げ土周辺にはVPB-02・11が出土しており、Tピットと掘り上げ土の関係は土器に被覆もしくは同一レベルで検出している。なお、両遺構の坑底面に杭跡が認められたため、杭跡の半載及び断面の記録をとって調査終了とした。

**堆積状態：**いずれも埋没過程は自然堆積によるものであるが、覆土中位から上位にかけてのV・VI層中にTa-dを含む土壌が堆積している。これらは人為的な埋め戻しではなく、堆積状態から掘り上げ土の再流入と考えられる。(奈良)

**出土遺物(2~4)：**2~4はIV群A1類a種の深鉢形土器の同一個体である。口縁部は粘土の輪積み痕を部分的に残し段になっている部分があるが、明瞭な貼付帯とはなっていない。但しこれを境に縄文の原体を変えていることから、意図的なものと考えられる。胴部には4本の貼付帯が横環している。(天方)

**TP-06 (B1型)** (図II-11 図版6-3)

位置：E-10 規模：192×140cm 平面形：長楕円形

**確認・調査：**E-10区でVc層調査中にVb黒色土のやや歪んだ楕円形の落ち込みを確認した。落ち込み中央の短軸で半載したところ、坑底面は開口部から極端にすぼまることが判りTピットと判断して付番した。撮影及び土層断面図の作成後に残り半分を調査し、完掘平面形の撮影・実測及びエレベーションの実測を行った。調査中に壁面中位の根穴攪乱の黒色土を掘ってしまい、一部掘り過ぎとなってしまった。

**堆積状態：**覆土は壁面の崩落と周囲からの土の流入等による自然堆積と考えられる。(天方)

**TP-08 (C2型)** (図II-11 図版7-1)

位置：E-6 規模：152×144cm 平面形：楕円形

**確認・調査:** VP-01 のプランを確認中、西側に黒色土の落ち込みを確認した。検出プランからV P-01 が新しいと判断できたため、土坑調査終了後に短軸で半截し、深さ、堆積状態からTピットであることが明らかとなったために、断面の記録後に完掘を行った。坑底面には杭跡が2ヶ所認められたため、それぞれ半截し断面の記録をとって調査終了とした。

**堆積状態:** 坑底面からは黒色土を主体とする暗褐色土が約50cm、その上位にTa-d崩落土が堆積している。これら上位にはV・VI層主体にTa-dを含む層が流れ込んでいる。堆積状態から自然堆積であると考えられ、覆土に含まれているTa-dは掘り上げ土の再流入と考えられる。(奈良)

**TP-09 (C1型) (図II-11 図版7-3)**

位置: D-6 規模: 180×140cm 平面形: 楕円形

**確認・調査:** 本遺構はVSB-01の遺物取り上げ後、包含層を掘り下げ遺構確認をしていたところ、VI層上面で黒色土の落ち込みを確認した。短軸と予想されるところで半截し、深さや堆積状態からTピットであることが判明したため各種記録を行った。形状がC1型であったが、杭跡は確認できなかった。

**堆積状態:** 坑底面からはV層にTa-dを多く含む土壌と、その上位に10層としたTa-d崩落土が南方向から堆積している。覆土中位から上位にかけては基本的にV・VI層を主体とした黒色から黒褐色の土壌が自然堆積している。これら中位から上位にかけての覆土に認められるTa-dは隣接するTP-08もしくは本遺構掘り上げ土の再流入と考えられる。また、覆土上位にVSB-01の礫が多数出土していることから本遺構の方が古く、完全に埋没する前にVSB-01が形成されたと考えられる。

(奈良)

**TP-10 (B1型) (図II-12 図版7-5)**

位置: F-6 規模: 228×116cm 平面形: 長楕円形

**確認・調査:** 本遺構は北側がTa-d層まで攪乱が及んでいたために、一部黒色プランの落ち込みを確認できていた。調査はVI層まで全体を掘り下げ、プランを確認した後に短軸で半截を行った。半截した結果深さや堆積状態からTピットであることが判明したため、各種記録をとって調査終了とした。

**堆積状態:** 本遺構は溝状タイプのTピットであり、坑底面に薄く黒色土が堆積した後に覆土中位までTa-dの崩落土で短期間に埋没したと思われる。その後、自然堆積によって埋没していくが、2層とした砂質シルトを含むTa-dと1・3層のTa-dは4層と色調が明瞭に異なるため人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

(奈良)

**TP-11 (C2型) (図II-12 図版8-1)**

位置: D-10 規模: 152×120cm 平面形: 楕円形

**確認・調査:** 調査区1のほぼ中央をVI層まで掘り下げたところ黒色土の落ち込みを確認した。東側には掘り上げ土が確認できるTピット4基がまとまって検出されているが、本遺構の構築面と考えられるVb層中では掘り上げ土等の確認は出来ていない。完掘後に坑底面ほぼ中央に1ヶ所の杭跡を検出したため、半截して断面記録をとって調査終了とした。

**堆積状態:** 黒色土主体の土壌が堆積した後、覆土中位まで崩落が進み、上位まで黒色土を主体とする自然堆積で埋没している。黒色土に含まれるTa-dは東側の倒木痕から供給された可能性がある。

(奈良)

## TP-12 (C2型) (図II-12 図版8-3)

位置：G-8 規模：160×120cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**本遺構は重機による遺構確認調査範囲の標高約66mの低い地点から検出されたTピットで、VI層で遺構確認をしていたところ褐灰色から灰黄褐色の落ち込みを確認した。断面観察からTピットであることがわかったため、各種記録と完掘を行った。坑底面に杭跡が2ヶ所確認されたため半載して断面記録をとって調査終了とした。

**堆積状態：**本遺構の堆積物は、5～11層にかけてV層及びTa-dを含む土壌で埋没し、1～4層には水成堆積のシルト及び粘土質シルト層を多く含む。いずれも自然堆積で埋没したものであるが、水成堆積が流入しているためTピットは河道になる以前に構築されたことがわかる。(奈良)

## TP-13 (C2型) (図II-13 図版8-5)

位置：D-13 規模：140×72cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**D-13区T2a面からT2b面にかけての斜面裾のVc層調査中に楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。落ち込み中央の短軸に沿って半載し、土層断面の撮影・実測を行った後で残り半分を調査し、完掘平面形の撮影・実測及びエレベーションの実測を行った。坑底面の長軸に沿って並ぶ3ヶ所の杭跡を確認し、半載したところ1ヶ所は2本が開口部付近で重複しているものであり、計4本の杭跡を確認した。他のTピットと同様の手順で調査記録を行った。

**堆積状態：**坑底は短軸方向で傾斜しており、上り斜面側で高く、下り斜面側で低くなっている。覆土は壁面の崩落と周囲からの土の流入等による自然堆積と考えられる。(天方)

## TP-14 (C2型) (図II-13 図版9-1)

位置：E-5・6・F-5 規模：212×120cm 平面形：長楕円形

**確認・調査：**E-5・6、F-5区を通る、現代の水道管理設工事による攪乱層を除去したところ、底のVI層上面及び壁面に黒色土の落ち込みを確認し、遺構の可能性があるものと判断した。周囲の包含層の調査がVI層まで進み黒色土の落ち込み全体が把握できた。攪乱の壁面で半載し、土層断面の撮影・実測を行った後で残りを調査し、完掘平面形の撮影・実測及びエレベーションの実測を行った。

**堆積状態：**覆土は壁面の崩落と周囲からの土の流入等による自然堆積と考えられる。(天方)

## TP-15 (C2型) (図II-13 図版9-3)

位置：E-2 規模：152×128cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**本遺構は北西側に遺物が多く出土したため段丘縁辺近くまで拡張した際に検出したTピットである。周辺には遺構はなく、掘り上げ土も認められなかったためVI層まで掘り下げた段階で黒色土の落ち込みで確認し半載して断面観察を行った。完掘後坑底面に杭跡の確認を行ったところ1ヶ所に杭跡が認められたため半載し断面記録を行って調査終了とした。

**堆積状態：**坑底面にV層を主体とする黒色土が堆積し、その上位に8～12層までのTa-dを主体とする崩落土で埋没している。1から7層にかけてのV層を主体とする堆積物の中にはTa-dが含まれており、周辺に掘り上げ土を要する遺構が検出されていないため、本遺構の掘り上げ土が再流入したものと考えられる。他のTピット同様、覆土上位にV層主体のTa-dを多く含む堆積物が認められるが、層境が明瞭でないものについては基本的に自然堆積の埋没と考えられる。(奈良)

## TP-17 (C1型) (図II-13・18-5 図版10-1・31-2-6)

位置：B-19 規模：180×98cm 平面形：長楕円形

**確認・調査：**調査区北側の段丘縁辺部をVI層まで掘り下げたところ、楕円形の黒色プランを検出し、Tピットであると考えられたため、短軸で半載し断面確認を行った。断面の記録後に完掘し、坑底面で杭痕の確認を行ったが、認められなかった。平面及びエレベーションを記録して調査終了とした。

**堆積状態：**覆土は1~4層までが黒色土を主体とし、以下はVc層からTa-d再堆積のシルト岩及びパミスを多く含む崩落土である。

**出土遺物(6)：**覆土上位よりつまみ付きナイフが1点出土している。5は縦長剥片を素材として片面に刃部調整を行い、右側縁は腹面の微細彫削調整を打点として刃部を作り出している。(奈良) TP-18 (A1型) (図II-14・18-6・7 図版10-3・31-2・7・8)

位置：G-22・H-22・23 規模：296×92cm 平面形：長楕円形

**確認・調査：**Hラインに50cm幅のメインセクションレンチを設定し、VII層上面まで掘削したところ黒色のプランを確認した。周辺はVb層下位で遺構確認面まで掘り下がっていなかったため、トレンチ内の黒色プランを掘削して遺構の確認を行なった。掘削途中でTピットであることが判明したために、北側を半載して断面の確認を行った。断面の記録後、メインセクションの調査が終了した後に、Tピットの完掘を行い平面及びエレベーションの記録をして調査終了とした。

**堆積状態：**覆土は壁面の崩落とV層の自然堆積である。特に再堆積層の砂が崩落し7層以下に主体的な堆積を示している。

**出土遺物(6・7)：**覆土上位より土器が出土している。6・7はIV群Ia類の土器片で、6は中空工具による円形刺突文が器面に対して垂直方向に施される。7は胴部片から胴部下半まで貼付帯をもつタイプであることがわかる。胎土は砂礫と亜円礫を含み、内面、破断面の色調は赤褐色を呈する。その他同一個体の土器片が出土しているが掲載していない。(奈良)

TP-19 (B1型) (図II-14 図版10-5)

位置：K-21・22 規模：196×84cm 平面形：長楕円形

**確認・調査：**22ラインに50cm幅のメインセクションレンチを設定し、Ta-d再堆積上面まで掘削したところ黒色のプランを確認した。TP-18同様トレンチ内の黒色土を掘り下げて遺構確認を行なったところTピットと判明したため、西側部分を半載し、断面の記録を行った。メインセクションの調査終了した後に、Tピットの完掘を行い、平面及びエレベーションの記録をして調査終了とした。

**堆積状態：**覆土は壁面の崩落が5層まで進み、その後黒色土主体の流入土が堆積するが、覆土上位は根痕の影響と思われるTa-dパミスやシルト岩が含まれている。(奈良)

TP-20 (A2型) (図II-14 図版11-1)

位置：H-23・24 規模：152×76cm 平面形：長楕円形

**確認・調査：**調査区東側縁辺部をVI層まで掘り下げたところI-23区において楕円形の黒色プランを確認した。調査はプランのほぼ中央を短軸で半載し断面確認を行った。Tピットと判明したため断面の図化及び撮影を行い完掘した。完掘後は平面及びエレベーションの記録をして調査終了とした。

**堆積状態：**1~8層までがV層主体の流入土で、9層から下位は崩落による堆積で、再堆積のTa-dロームやパミスが主体となる。(奈良)

## TP-21 (B1型)・TP-22 (A1型) (図II-15 図版11-3~6)

位置：[TP-21] I-23 [TP-22] J-22

規模・平面形：[TP-21] 210×84cm 長楕円形 [TP-22] 204×94cm 長楕円形

確認・調査：段丘東側にTP-20とその南西側直線上にTP-19を検出しているため、間にTピットの配列が考えられた。周辺をVI層まで掘り下げると楕円形の黒色プランを各グリッドより検出した。それぞれ短軸で半載を行い、断面記録後に完掘を行った。完掘後平面及びエレベーションの記録を行いTP-22については坑底面から杭痕を確認したため、平面記録後に半載して断面記録、深さを計測して調査終了とした。

堆積状態：TP-21は4層以下がTa-d再堆積主体の崩落層で、断面観察から南側がやや崩落が顕著である。1~3層は黒色土を主体とする自然堆積層である。TP-22は6層より下位がTa-d再堆積層を主体とする崩落層であるが、壁面がTa-dバミスでTP-21と同じ条件であるが崩落が顕著ではない。1~4層は黒色土主体の自然堆積層である。(奈良)

## TP-23 (A1型) (図II-15 図版12-1)

位置：I-22 規模：334×104cm 平面形：長楕円形

確認・調査：TP-19~22の配列が認められる周辺を精査中、VII層上面で北西-南東軸の細長い黒色プランを検出した。短軸で半載し断面を確認したところ溝状タイプのTピットであったため断面の記録後に完掘した。平面及びエレベーションの記録をして調査終了とした。

堆積状態：15・16層はV層を主体とする自然堆積で、5~14層はTa-d再堆積層を主体とする崩落土で、10層は壁面両側から一度に大きく崩落したことを示す堆積と考えられる。1~4層は自然堆積層で黒色土主体である。(奈良)

## TP-24 (A2型) (図II-16 図版12-3)

位置：D・E-22 規模：176×102cm 平面形：長楕円形

確認・調査：住居跡の南東側掘り上げ土縁辺部に楕円形の黒色プランをVI層で検出した。地形図ではTピット南西側に微高地が認められ、Tピット掘り上げ土の可能性も考えられたが、現場では確認することが出来なかった。調査は短軸で半載し断面確認でTピットであることが判明したために、断面の記録後完掘を行った。平面及びエレベーションの記録を行って調査終了とした。

堆積状態：覆土8・9層にV層主体の自然堆積層が認められるため、本遺構は廃絶後短期間で崩落したのではなく、崩落とV層自然堆積を繰り返しながら埋没していったものと考えられる。(奈良)

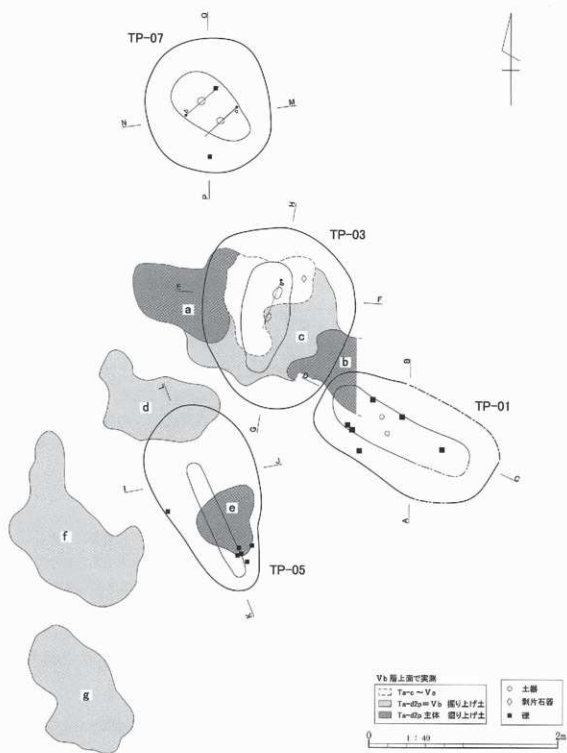
## TP-25 (A2型) (図II-16 図版12-5)

位置：M-23・24 規模：188×94cm 平面形：長楕円形

確認・調査：VI層で遺構確認を行った際、段丘東側の張り出し部分に楕円形の黒色プランを確認した。半載し、断面観察を行うとTピットであることが判明したため、記録後に完掘を行った。平面及びエレベーションの記録をとって調査終了とした。

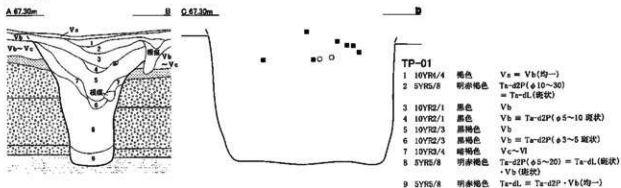
堆積状態：坑底面には黒色土主体の堆積は認められず、6層以下が崩落土、1~5層はV層主体の自然堆積層である。自然堆積層に混入するTa-dバミスは周辺に遺構が無いことから、Tピット掘り上げ土起源と考えられるが、掘り上げ土は確認できていない。(奈良)



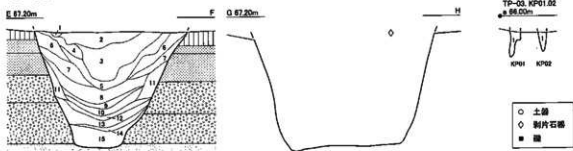


図Ⅱ-8 TP-01-03-05-07 平面図

TP-01



TP-03



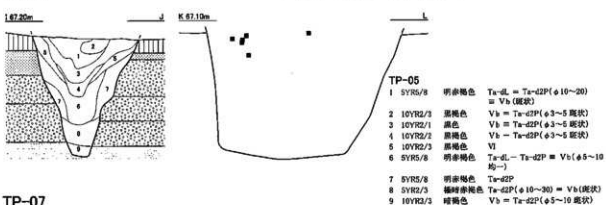
TP-03

- |   |   |
|---|---|
| 1 10YR2/1 黒色 V <sub>b</sub>                               | 9 10YR2/2 黒褐色 V <sub>b</sub> = Ta-d2P(φ1~3瓶状)   |
| 2 10YR3/4 暗褐色 VI = V <sub>b</sub> ・Ta-dI = Ta-d2P(φ1~3瓶状) | 10 5YR4/6 赤褐色 Ta-d2P = V <sub>b</sub> (瓶状)      |
| 3 10YR2/3 黒褐色 V <sub>b</sub> + Ta-d2P(φ10~30瓶状)           | 11 5YR4/8 赤褐色 Ta-d2P                            |
| 4 10YR2/2 黒褐色 V <sub>b</sub> = Ta-d2P(φ1~3瓶状)             | 12 10YR2/2 黒褐色 V <sub>b</sub> = Ta-d2P(φ5~10瓶状) |
| 5 10YR2/2 黒褐色 V <sub>b</sub> = Ta-d2P(φ5~10瓶状)            | 13 5YR4/6 赤褐色 Ta-d2P = V <sub>b</sub> (瓶状)      |
| 6 10YR2/3 黒褐色 V <sub>c</sub>                              | 14 10YR2/2 黒褐色 V <sub>b</sub> = Ta-d2P(φ5~10瓶状) |
| 7 10YR2/3 暗褐色 VI  | 15 5YR3/6 暗赤褐色 Ta-d2P - V <sub>b</sub> (瓶状)     |
| 8 5YR3/6 暗赤褐色 Ta-d2P - V <sub>b</sub> (瓶状)                |   |

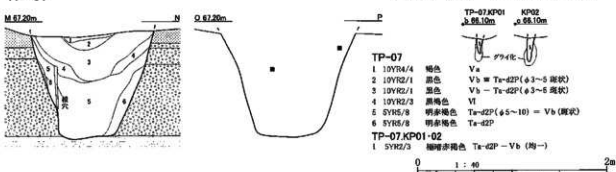
TP-03, KP01-02

- 1 5YR2/3 暗赤褐色 Ta-d2P - V<sub>b</sub>(均一)

TP-05

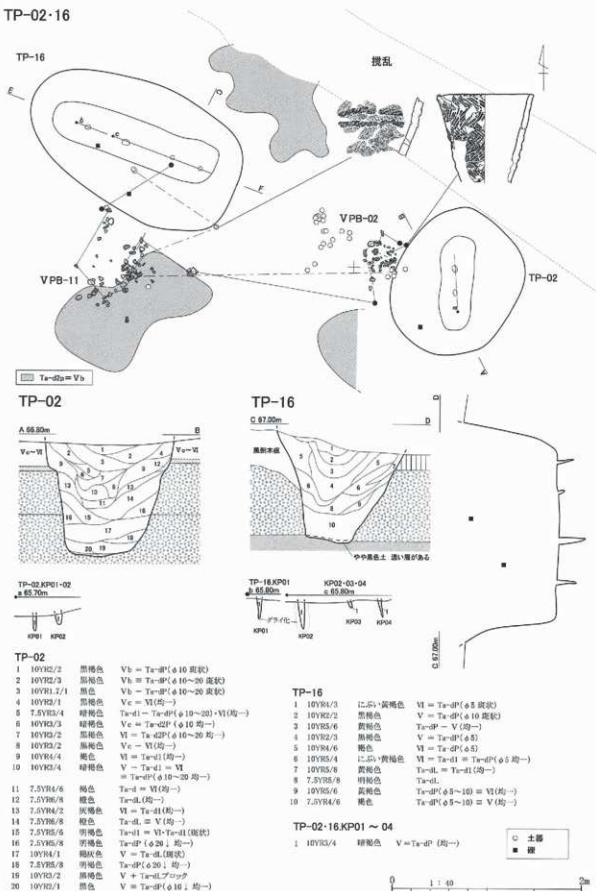


TP-07

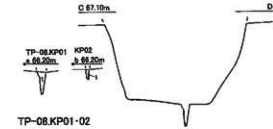
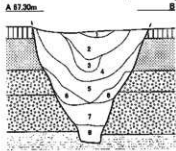
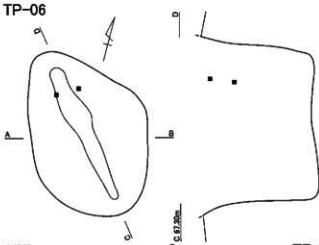


図II-9 TP-01-03-05-07 断面図

TP-02・16



図Ⅱ-10 TP-02・16・VPB-02・11 平面及び断面図



TP-08.KP01-02  
1 10YR2/4 暗褐色 V-Ta-dP (均一)

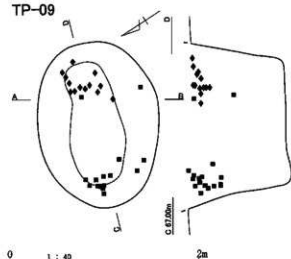
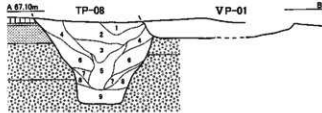
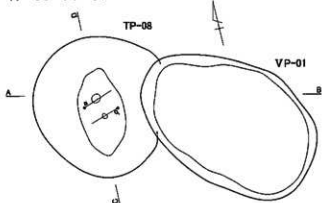


図 II-11 TP-06・08・09・VP-01 平面及び断面図

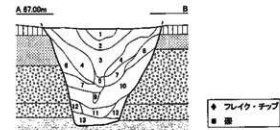
- TP-06
- |           |      |                             |
|-----------|------|-----------------------------|
| 1 10YR2/1 | 黒色   | Vb = Ta-dP (φ3~5 環状)        |
| 2 10YR2/1 | 黒色   | Vb                          |
| 3 10YR2/3 | 黒褐色  | Vb = VI = Ta-dP (φ3~5 環状)   |
| 4 10YR2/3 | 黒褐色  | Vb = Ta-dP (φ3~5) = VI (環状) |
| 5 5YR5/8  | 明赤褐色 | Ta-dP (φ3~5) = Vb (環状)      |
| 6 10YR2/2 | 黒褐色  | Vb = Ta-dP (φ3~5 環状)        |
| 7 5YR5/8  | 明赤褐色 | Ta-dP (φ5~10) = Vb          |
| 8 5YR5/8  | 明赤褐色 | Ta-dP (φ20~40)              |

- TP-08
- |            |         |                                    |
|------------|---------|------------------------------------|
| 1 10YR5/6  | 黄褐色     | Ta-c = VI (均一) = Ta-dP (φ10~20 均一) |
| 2 10YR2/3  | 暗褐色     | V = VI = Ta-dP (φ10 均一)            |
| 3 10YR2/1  | 黒色      | V = Ta-dP (φ10~20 均一)              |
| 4 10YR4/3  | にじみ・黄褐色 | VI = Ta-dP (φ10~20 均一)             |
| 5 10YR2/3  | 暗褐色     | V + Ta-dP (φ20 均一)                 |
| 6 7.5YR5/8 | 明褐色     | Ta-dL = Ta-dI (均一)                 |
| 7 7.5YR4/6 | 褐色      | Ta-dL = V (均一)                     |
| 8 5YR4/8   | 赤褐色     | Ta-dP (φ20~30 均一)                  |
| 9 10YR2/4  | 暗褐色     | V = Ta-dL (均一)                     |

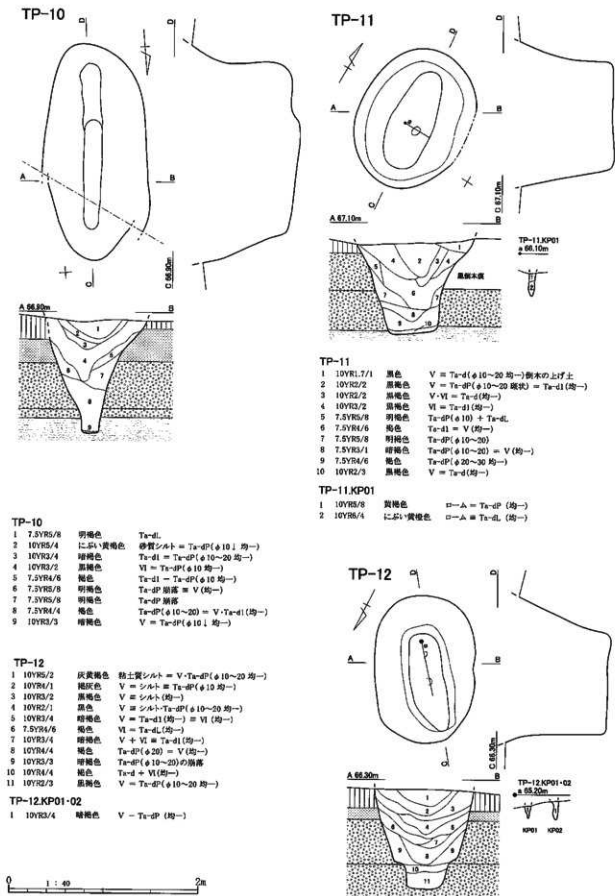
TP-08・VP-01



- TP-09
- |             |     |                                   |
|-------------|-----|-----------------------------------|
| 1 10YR4/4   | 褐色  | VI = Ta-dP (φ10 環状) = V (均一)      |
| 2 10YR2/2   | 黒褐色 | V = VI = Ta-dP (φ10~20 環状)        |
| 3 10YR1.7/1 | 黒色  | V = Ta-dP (φ10 均一)                |
| 4 10YR4/4   | 褐色  | VI = Ta-dI-Ta-dP (φ10~20 均一)      |
| 5 10YR2/2   | 暗褐色 | V = Ta-dL (均一)                    |
| 6 10YR5/8   | 黄褐色 | Ta-dL = VI (均一)                   |
| 7 10YR2/2   | 暗褐色 | VI = Ta-dI = Ta-dL-Ta-dP (φ10 均一) |
| 8 7.5YR5/8  | 明褐色 | VI = Ta-dL (均一)                   |
| 9 10YR5/8   | 黄褐色 | Ta-dL = VI (均一)                   |
| 10 7.5YR5/8 | 明褐色 | Ta-dP (φ10~20)                    |
| 11 10YR2/3  | 暗褐色 | V + Ta-dP (φ10~20 均一)             |
| 12 7.5YR4/6 | 褐色  | Ta-dP (φ10~20 均一)                 |
| 13 10YR4/4  | 褐色  | V + Ta-dP (φ10 均一)                |



◆ フレイク・チップ  
■ 土



図Ⅱ-12 TP-10～12平面及び断面図

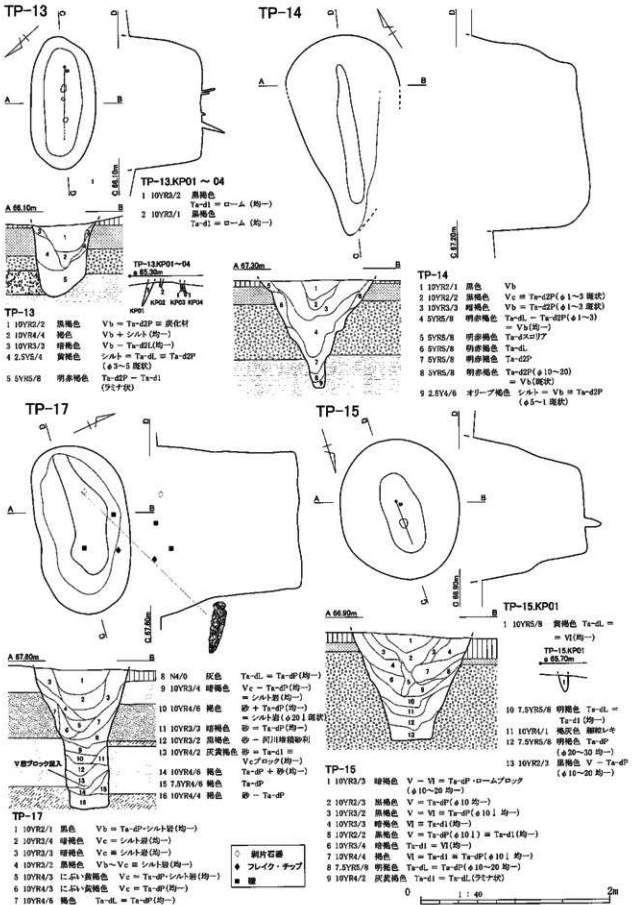
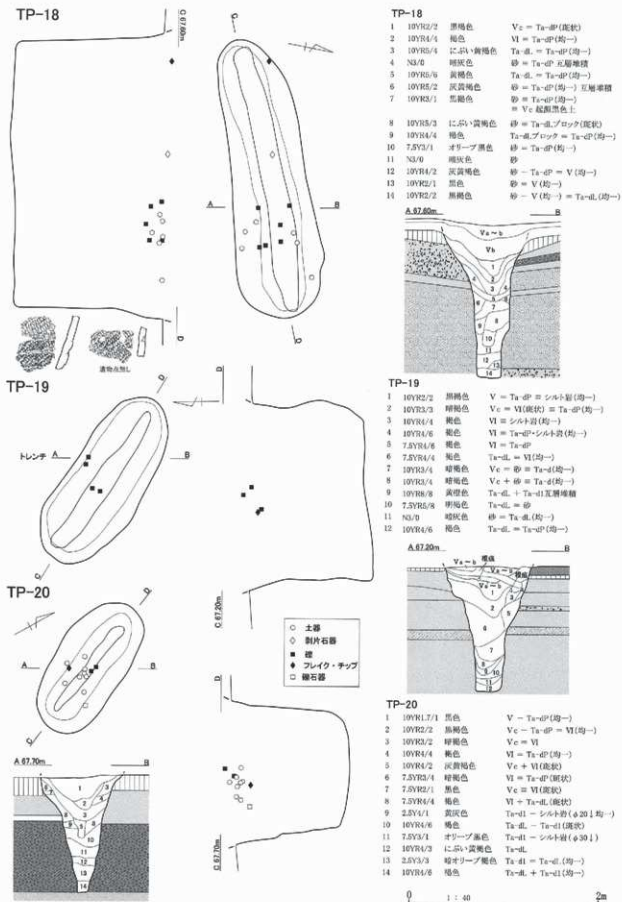
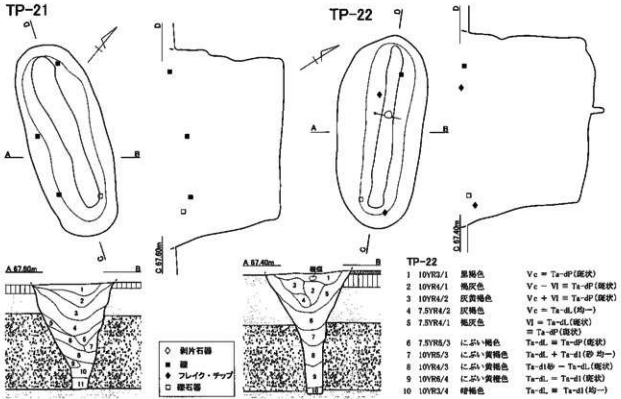


図 II-13 TP-13 ~ 15・17 平面及び断面図



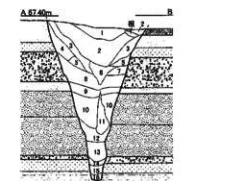
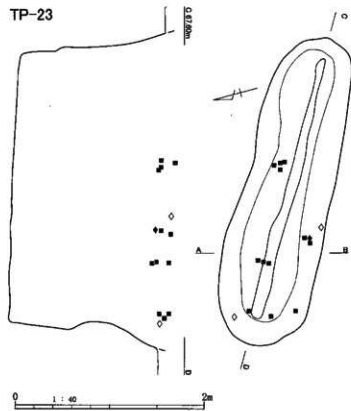
図II-14 TP-18～20平面及び断面図



- TP-21**
- |                  |                     |                 |                   |
|------------------|---------------------|-----------------|-------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色    | Vc = Ta-dP(均一)      | 6 5Y4/1 灰色      | Ta-dI = Ta-dP(均一) |
| 2 10YR2/1 黒色     | Vc = Ta-dP(均一)      | 7 5YR4/8 赤褐色    | Ta-dP = Ta-dI(層状) |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 | Vc + VI = Ta-dP(均一) | 8 5Y4/1 灰色      | Ta-dI             |
| 4 10YR4/4 褐色     | VI - Ta-dL(層状)      | 9 5YR4/8 赤褐色    | Ta-dP = Ta-dI(層状) |
| 5 10YR4/4 褐色     | Ta-dI = Ta-dL(均一)   | 10 5Y2/1 オリーブ黒色 | Ta-dI = Ta-dL(均一) |
|                  |                     | 11 10YR3/3 暗褐色  | Ta-dL + Ta-dI(層状) |

- TP-22**
- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 1 10YR3/1 黒褐色    | Vc = Ta-dP(層状)      |
| 2 10YR4/1 暗灰色    | Vc - VI = Ta-dP(層状) |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色   | Vc + VI = Ta-dP(層状) |
| 4 7.5YR4/2 灰褐色   | Vc = Ta-dL(均一)      |
| 5 7.5YR4/1 暗灰色   | VI = Ta-dL(層状)      |
|                  | = Ta-dP(層状)         |
| 6 7.5YR3/3 にぶい褐色 | Ta-dL = Ta-dP(層状)   |
| 7 10YR5/3 にぶい黄褐色 | Ta-dL + Ta-dI(砂均一)  |
| 8 10YR4/3 にぶい黄褐色 | Ta-dI砂 - Ta-dL(層状)  |
| 9 10YR6/4 にぶい黄褐色 | Ta-dL = Ta-dI(層状)   |
| 10 10YR3/4 暗褐色   | Ta-dL = Ta-dI(均一)   |

- TP-22-KP01**
- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 11 10YR6/8 明黄褐色 | シルト = Ta-dP(均一) |
| 12 10YR7/8 黄褐色  | シルト             |



- TP-23**
- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1 10YR2/1 黒色       | < ぼみに堆積したVc層          |
| 2 10YR3/2 黒褐色      | Vc - VI = Ta-dP(層状)   |
| 3 10YR3/3 にぶい黄褐色   | VI = Vc(均一)           |
| 4 10YR6/4 にぶい黄褐色   | Ta-dL = VI(均一)        |
| 5 7.5YR4/4 褐色      | Ta-dL + Ta-dP(ツミナ状)   |
| 6 10YR4/2 灰黄褐色     | Ta-dL = Ta-dP(層状)     |
| 7 5YR4/8 赤褐色       | Ta-d2 = Ta-dI(ツミナ状)   |
| 8 5YR3/2 明赤褐色      | Ta-dI = Ta-dP(ツミナ状)   |
| 9 7.5YR4/6 褐色      | Ta-dL = Ta-dI(ツミナ状)   |
| 10 2.5Y4/2 暗灰黄色    | Ta-dL = Ta-dP(ツミナ状)   |
| 11 7.5YR3/3 暗褐色    | VI - Ta-dI(層状)        |
| 12 7.5YR6/6 棕色     | Ta-dP = Ta-dI(層状)     |
| 13 2.5Y3/2 黒褐色     | Ta-dI = V = Ta-dL(均一) |
| 14 5Y3/2 オリーブ黒色    | Ta-dI = V(層状)         |
| 15 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 | V - Ta-dI(層状)         |
| 16 10YR3/4 暗褐色     | V - Ta-dL(均一)         |

図II-15 TP-21 ~ 23 平面及び断面図



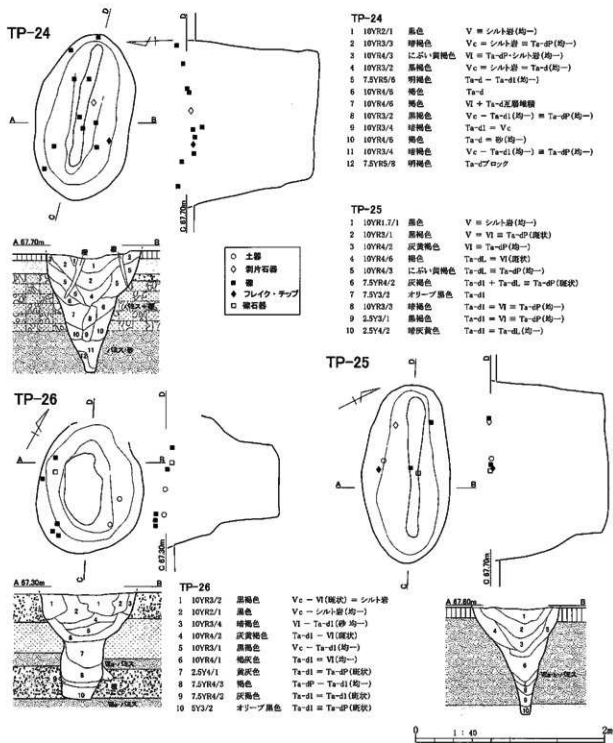
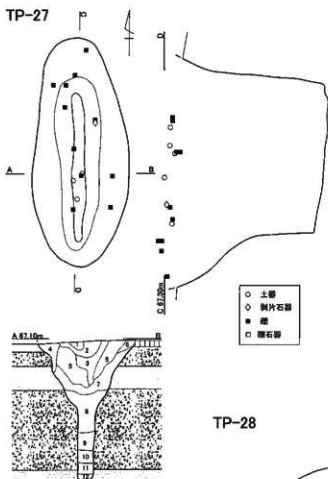


図 II-16 TP-24 ~ 26 平面及び断面図



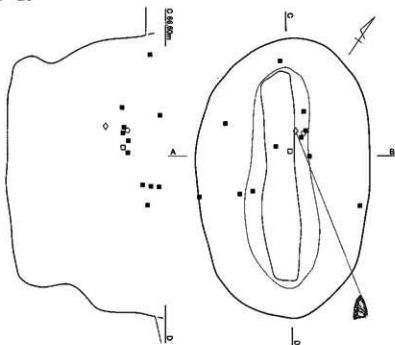
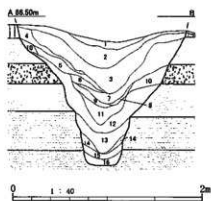
TP-27

- |    |          |      |                           |
|----|----------|------|---------------------------|
| 1  | 7.5YR3/2 | 黒褐色  | V - VI = Ta-dP(底状)        |
| 2  | 10YR2/1  | 灰色   | Vc = シルト層(均一)             |
| 3  | 10YR3/2  | 黒褐色  | Vc + VI = Ta-d1(均一)       |
| 4  | 7.5YR3/1 | 黒褐色  | Vc = Ta-d1(均一)            |
| 5  | 10YR4/2  | 灰黄褐色 | Vc - VI = Ta-d1(底状)       |
| 6  | 10YR3/1  | 黒褐色  | Vc = VI(底状)               |
| 7  | 7.5YR4/4 | 褐色   | Ta-d1 + Ta-dP(底状) = Vc    |
| 8  | 10YR4/2  | 灰黄褐色 | Ta-d1 = Vc(底状)            |
| 9  | 10YR5/2  | 灰黄褐色 | Ta-d1 = Ta-dL(底状)         |
| 10 | 10YR3/1  | 黒褐色  | V = Ta-d1(底状) = Ta-dP(底状) |
| 11 | 10YR3/3  | 暗褐色  | V = Ta-d1(底状)             |
| 12 | 10YR7/6  | 明黄褐色 | 粘土質シルト = Ta-d1(底状)        |

TP-28

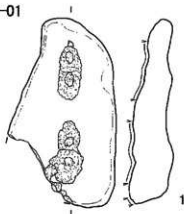
- |    |           |        |                       |
|----|-----------|--------|-----------------------|
| 1  | 10YR1.7/1 | 灰色     | Vb水成堆積層               |
| 2  | 10YR5/1   | 黄灰色    | 粘土質シルト                |
| 3  | 10YR2/2   | 黒褐色    | V = Ta-dP(均一) 水成堆積    |
| 4  | 10YR3/3   | 暗褐色    | VI = 礫(均一)            |
| 5  | 10YR3/2   | 黒褐色    | V - 無粒砂 = Ta-dP(均一)   |
| 6  | 7.5YR4/5  | 褐色     | Ta-dL = V(均一) = 砂(均一) |
| 7  | 10YR4/4   | 褐色     | VI = Ta-dP(均一)        |
| 8  | 7.5YR5/8  | 暗褐色    | Ta-dL = V(均一)         |
| 9  | 10YR3/1   | 黒褐色    | V - 砂質(多均一)           |
| 10 | 10YR5/2   | にぶい黄褐色 | V - 砂質(多均一)           |
| 11 | 10YR3/3   | 暗褐色    | V - VI = Ta-dL(均一)    |
| 12 | 10YR3/4   | 暗褐色    | Ta-dL = V(均一)         |
| 13 | 7.5YR4/5  | 褐色     | Ta-dL = 砂             |
| 14 | 10YR6/2   | 灰黄褐色   | 粘土質シルト                |
| 15 | 10YR5/4   | にぶい黄褐色 | 粘土質シルト = Ta-dL(均一)    |
| 16 | 10YR4/4   | 褐色     | 粘土質シルト = Ta-dL(均一)    |

TP-28

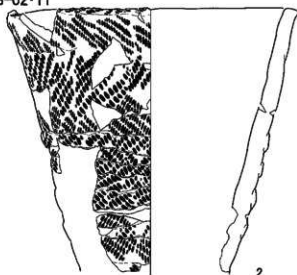


図II-17 TP-27-28 平面及び断面図

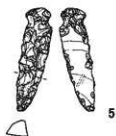
TP-01



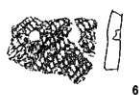
TP-02 関連遺物  
VPB-02・11



TP-17



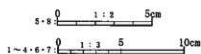
TP-18



TP-28



図Ⅱ-18 Tピット及び関連遺構出土遺物



表Ⅱ-9 Tピット属性表

探洞 番号	図版 番号	遺構名	平面形		グリッド	調査面 層位	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	抗跡	調査面 長短比	坑底面 長短比	備考
			調査面/坑底面				長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅱ-8- 9	4-4	TP-01	長楕円形/長楕円形		E-11-12	Vc	200	88	160	48	144	N-63° W	-	2.3	3.3	
Ⅱ-10	5-1	TP-02	楕円形/楕円形		D-E-4	Vc	160	140	100	36	124	N-69° W	2	1.1	2.8	
Ⅱ-8- 9	5-4	TP-03	楕円形/楕円形		D-E-11	Vc	188	160	116	52	124	N-12° E	2	1.2	2.2	
Ⅱ-8- 9	6-1	TP-05	長楕円形/長楕円形		E-11	Vc	204	112	132	24	128	N-22° W	-	1.8	5.5	
Ⅱ-11	6-3	TP-06	楕円形/長楕円形		E-10	Vc	192	140	156	28	124	N-42° W	-	1.4	5.6	
Ⅱ-8- 9	6-5	TP-07	円形/楕円形		D-11	Vc	144	140	92	53	116	N-48° W	2	1.0	1.7	
Ⅱ-11	7-1	TP-08	円形/楕円形		E-6	Vc	152	144	96	44	92	N-0°	2	1.1	2.2	
Ⅱ-11	7-3	TP-09	楕円形/楕円形		D-6	VI	180	140	132	44	108	N-75° W	-	1.3	3.0	
Ⅱ-12	7-5	TP-10	長楕円形/長楕円形		F-6	VI	228	116	176	24	124	N-4° E	-	2.0	7.3	
Ⅱ-12	8-1	TP-11	楕円形/楕円形		D-10	VI	152	120	88	48	100	N-1° E	1	1.3	1.8	
Ⅱ-12	8-3	TP-12	楕円形/楕円形		G-8	VI	160	120	108	40	108	N-41° W	2	1.3	2.7	
Ⅱ-13	8-5	TP-13	楕円形/楕円形		D-13	VII	140	72	116	40	80	N-46° W	3	1.9	2.9	
Ⅱ-13	9-1	TP-14	-/長楕円形		E-3-4-F-6	VII	212	120	152	20	120	N-26° E	-	1.8	7.6	
Ⅱ-13	9-3	TP-15	楕円形/楕円形		E-2	VI	152	128	88	40	116	N-0° E	1	1.2	2.2	
Ⅱ-10	9-5	TP-16	楕円形/長楕円形		D-3	VI	236	140	180	52	120	N-4° E	4	1.7	3.5	
Ⅱ-13	10-1	TP-17	楕円形/長楕円形		B-19	Vc	180	98	130	38	148	N-81° E	-	1.8	3.4	
Ⅱ-14	10-3	TP-18	長楕円形/長楕円形		H-22-23- C-22	Vc	296	92	284	26	154	N-67° E	-	3.2	10.9	
Ⅱ-14	10-5	TP-19	長楕円形/長楕円形		K-21-22	Vc	196	84	172	22	132	N-55° W	-	2.3	7.8	
Ⅱ-14	11-1	TP-20	長楕円形/長楕円形		H-23-24	Vc	152	76	114	12	122	N-22° W	-	2.0	9.5	
Ⅱ-15	11-3	TP-21	長楕円形/長楕円形		I-23	Vc	210	84	166	24	110	N-57° W	-	2.5	6.9	
Ⅱ-15	11-5	TP-22	長楕円形/長楕円形		J-22	Vc	204	94	172	16	126	N-70° E	1	2.2	10.8	
Ⅱ-15	12-1	TP-23	長楕円形/長楕円形		I-22	Vc	334	104	284	14	160	N-50° E	-	3.2	20.3	
Ⅱ-16	12-3	TP-24	長楕円形/長楕円形		D-E-22	Vc	176	102	132	12	120	N-75° W	-	1.7	11.0	
Ⅱ-16	12-5	TP-25	長楕円形/長楕円形		M-23-24	Vc	188	94	148	18	112	N-50° W	-	2.0	8.2	
Ⅱ-16	13-1	TP-26	楕円形/楕円形		B-16	Vc	(138)	112	76	38	110	N-31° W	-	1.2	2.0	
Ⅱ-17	13-3	TP-27	長楕円形/長楕円形		C-16	Vc	240	102	156	14	146	N-2° E	-	2.4	11.1	
Ⅱ-17	13-5	TP-28	楕円形/楕円形		I-16	VI	294	194	220	40	132	N-38° W	-	1.5	5.5	

## TP-26 (C1型) (図Ⅱ-16 図版 13-1)

位置：B-16 規模：(138)×112cm 平面形：楕円形

確認・調査：調査区北側段丘崖の区外延びる楕円形状の黒色プランを確認した。南北軸であったため短軸で南側を半截し断面確認を行った。Tピットと判明したため断面の記録後に完掘を行ったが、北側の上場は直ぐ下が崖であり崩落の危険があったため一部推定線で記載している。平面及びエレベーションの記録をとって調査終了とした。16ラインから東側では初めてとなるC型のTピットであるが、平成22年度との配列は認められない。

堆積状態：覆土は7層より下位はTa-d再堆積層の崩落土で埋没し、1~6層にかけてはV層を主体とする自然堆積層である。(奈良)

## TP-27 (A1型) (図Ⅱ-17 図版 13-3)

位置：C-16 規模：240×102cm 平面形：長楕円形

確認・調査：本遺構の検出は試掘坑5に一部かかる黒色プランが認められていたが、周辺V層上面から遺物が多く出土していたために、これらの遺物取り上げを行い、VI層まで掘り下げてから調

表Ⅱ-10 Tピット逆茂木跡属性表

押図番号	図版番号	遺構名	遺構名	平面形 調査面/坑底面	グリッド	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
						上端	下端	深さ			
Ⅱ-10	-	TP-02	KP01	円形/ -	E-4	4	1	16	-	打込み	
				円形/ -		8	1	10	10	打込み	
Ⅱ-9	-	TP-03	KP01	円形/ -	D-11	12	1	28	5	打込み	
				円形/ -		8	1	20	-	打込み	
Ⅱ-9	-	TP-07	KP01	円形/ -	D-11	6	1	16	-	打込み	
				円形/ -		8	1	26	3	打込み	
Ⅱ-11	-	TP-08	KP01	円形/ -	E-6	8	1	24	-	打込み	
				円形/ -		4	1	10	10	打込み	
Ⅱ-12	-	TP-11	KP01	円形/ -	D-10	6	1	24	-	打込み	
Ⅱ-12	-	TP-12	KP01	不明	G-8	6	1	12	-	打込み	
				不明		6	1	20	-	打込み	
Ⅱ-13	-	TP-13	KP01	円形/ -	D-13	6	1	26	15	打込み	
				円形/ -		2	1	6	-	打込み	
				円形/ -		2	1	6	-	打込み	
				円形/ -		2	1	14	10	打込み	
Ⅱ-13	-	TP-15	KP01	円形/ -	E-2	10	1	18	-	打込み	
Ⅱ-10	-	TP-16	KP01	円形/ -	D-3	5	1	20	-	打込み	
				円形/ -		8	1	28	5	打込み	
				円形/ -		4	1	8	10	打込み	
				円形/ -		4	1	16	12	打込み	
Ⅱ-15	-	TP-22	KP01	円形/ -	G-22	7	1	14	2	打込み	

査を行った。黒色プランは南北に細長く、短軸で断面の確認を行った。断面観察でTピットであることが判明したために、断面の記録後完掘を行った。平面及びエレベーションの記録をとって調査終了とした。

**堆積状態:** 覆土下位の10・11層に黒色土が主体的に堆積し、その後Ta-d再堆積層の崩落とV層黒色土の自然堆積を繰り返して埋没している。断面で確認すると坑底面から80cm程は殆ど崩落せず埋没していることがわかる。(奈良)

#### TP-28 (B1型) (図Ⅱ-17・18-8 図版13-5・31-2-9)

位置: I-16 規模: 294×194cm 平面形: 楕円形

**確認・調査:** 標高約66.5mのT2b面に楕円形の灰褐色プランを検出した。本遺跡は旧河川跡が見つかっており、基本層のV層黒色土もT2b面では一部水成堆積をしている。調査は短軸と思われる地点で半載し断面を確認したところ、Tピットと判明したが、坑底面付近まで掘り下げると水が湧く状態であった。断面の記録後に平面及びエレベーションをとって調査終了とした。なお、楕円形タイプのため坑痕の可能性も考え精査を行ったが、湧水が著しく確認することは出来なかった。

**堆積状態:** 覆土下位には粘土質シルト層が流入し、その後12層のTa-d再堆積層が崩落し、より上位の崩落が進んだものと考えられる。覆土中位の7~10層はV層黒色土を多く含んでいるが、シルト化した土壌が認められない。また、2層はシルト化したV層黒色土の自然堆積であり、Tピット構築後に河川の流路になり埋没したものと考えられる。また、堆積している土壌の粒子が細かいため比較的流れの緩い河川が存在が推測できる。

**出土遺物 (8):** 覆土中位よりA2に相当する石礫1点が出土している。8は無茎で基部に挟りが認められるタイプである。調整は薄手の剥片素材周縁のみ調整して刃部を作出している。(奈良)

### 第3節 土坑

土坑はいずれも段丘縁辺部に沿って17基確認している。形状は楕円から隅丸方形状で、掘り込みは浅く特徴的な堆積は認められない。土坑の重複関係はVP-03・06に認められ、VP-03は坑底面出土の土器から後期初頭に位置付けられる。殆どの土坑が中期から後期にかけて帰属すること以外時期の特定はできない。VP-08は上位からは全長30cm以上ある安山岩製の石棒が町内で初めて出土し、VP-10は覆土にⅢ群A2類土器が一括で出土していることから、この2基については中期に帰属すると考えられるが、これら以外は時期特定できる資料が出土していない。以下に各遺構の詳細を記す。(奈良)

#### VP-01 (図II-19-23-1 図版14-1・31-2-10)

位置：E-6 規模：200×140cm 平面形：楕円形

確認・調査：Vc層で遺構確認をしたところ、楕円形の黒褐色から明褐色プランと、西側に黒色プランを重複して検出した。プランから本遺構が新しいと判断したが、A-Bラインでトレンチを設定し、新旧を確認した後E-Fラインで半載を行った。図、写真の記録をした後に完掘を行い調査終了とした。

形態：遺構確認面及び坑底面は不整な楕円形状をしている。開口部は南西側が比較的直立して立ち上がるが、北東側は緩やかに立ち上がり、坑底面はやや勾配がある。

堆積状態：自然堆積で3から5層はV層黒色土主体にTa-dが均一に混入している。また、1・2層はTa-d主体であることからTP-08もしくは周辺の遺構掘り上げ土が堆積したものと考えられる。

出土遺物(1)：1はIA類相当とした角柱状の砂岩礫を利用したたき石である。敲打痕が深く窪んでいることから、使用頻度が高かったことが推定される。(奈良)

#### VP-02 (図II-19 図版14-3)

位置：E-6・7 規模：不明 平面形：楕円形

確認・調査：VP-01の東側で包含層を掘り下げている途中、グリッドライン壁面に黒色土の落ち込みが認められる。断面形状から土坑の可能性を考え、断面の記録後に完掘を行った。坑底面はやや凹凸が認められるが、立ち上がり及び堆積状態から土坑と判断し、平面記録後に調査終了した。

形態：遺構確認面は包含層掘削により不明であるが、坑底面形状は円形に近く、開口部は北側に直立気味に立ち上がる。坑底面は根の影響もあるがやや凹凸が見られる。

堆積状態：いずれも黒色土を主体とし、Ta-dを少量含んでいる自然堆積層である。(奈良)

#### VP-03・06 (図II-19-23-2 図版14-5～8・31-2-11)

位置：D-8 規模：[VP-03] 192×172cm [VP-06] (148)×120cm

平面形：[VP-03] 円形 [VP-06] 不明

確認・調査：調査区ほぼ中央の段丘縁辺部D-8区で円形の黒色プランを確認した。半載を行ったところ、坑底面から土器がまとまって出土した。調査は土器を残した状態で断面図の記録、除去を行い完掘写真は土器及び坑底面出土の礫を残した状態で行った。坑底面の遺物は別途微細図による記録を行い、写真撮影後取り上げをして調査終了とした。なお、坑底面にまとまって出土した土器は残存状態が悪く、破片で取り上げると接合しない可能性があったため、周囲の土壌ごと回収して接合を試みたが、剥落が激しく掲載できたのは図示した1点のみで形状などは不明である。VP-06

はVP-03の完掘をしている際、南東側に黒色土が広がるプランで確認した。プランからVP-03とは別遺構と予想されたため、VP-03調査終了後に断面の記録を行って完掘し調査終了とした。新旧関係は遺構確認面のプランからVP-03が新しく、06が古いと考えられる。

**形態：**VP-06は重複のため殆ど不明であるが、残存部分から楕円形の土坑と推定できる。VP-03は確認面、坑底面も円形に近く、立ち上がりはどちらも直立気味で、坑底面は比較的平坦である。

**堆積状態：**両遺構ともにV層主体の黒色土が流れ込み、1・2層にはTa-dを含んだ土壌が堆積している。いずれも自然堆積であると考えられるが、Ta-dの供給源は周辺遺構掘り上げ土か、小規模な上げ土と思われる。

(奈良)

**出土遺物(2)：**2はIV群A2類の口縁部片で、口唇の断面形は角状である。同一個体片で縄端の刺突文が施されているものがあるが、細片であるため掲載していない。

(天方)

#### VP-05 (図Ⅱ-19 図版15-1)

**位置：**D-E-6 **規模：**88×96cm **平面形：**楕円形

**確認・調査：**Vc層で遺構確認をしているところ、円形の黒色プランを確認した。断面確認のため半載したところ坑底面が平坦で、立ち上がりが明瞭なことから土坑と判断し、記録後に完掘を行った。

**形態：**遺構確認面は円形に近く、坑底面は楕円形を呈している。坑底面は平坦で、立ち上がりは開口部に向けて緩やかに立ち上がる形状をしている。

**堆積状態：**V層を主体とする黒色土の自然堆積層で、2・3層はTa-dを僅かに含んでいる。覆土に河川堆積物を含んでいないため、河川埋没後に構築されたと考えられる。

(奈良)

#### VP-07 (図Ⅱ-20 図版15-3)

**位置：**E-7・8 **規模：**196×124cm **平面形：**楕円形

**確認・調査：**VI層遺構確認の際、VP-02から埋没河川を挟んで東側に楕円形のV層黒色土範囲を確認した。短軸で半載して断面を確認したところ、坑底面もほぼ平坦で立ち上がりも明瞭であることから土坑として調査を行った。平面及びエレベーション完掘写真の記録を図に取って調査終了とした。

**形態：**遺構確認面、坑底面ともに楕円形状で、坑底面は埋没河川側に向かって緩やかな傾きを示している。開口部までの立ち上がりは直立気味で明瞭である。

**堆積状態：**土坑下位からV層主体の黒色土にTa-d2パミス及びスコリアが堆積しているが、上位堆積物の1・3・4層にはシルト層が認められるため、本遺構は埋没河川より古い時期に形成された可能性が考えられる。

(奈良)

#### VP-08 (図Ⅱ-20・23-3 図版15-5・32-1)

**位置：**D-13・14 **規模：**128×212cm **平面形：**楕円形

**確認・調査：**T2a面からT2b面にかけての緩斜面のVb～VI層調査中、斜面上側で明瞭な黒色土のプランを確認した。プランの規模から堅穴住居跡の可能性が考えられたため、十字にトレンチを設定し、トレンチ調査を先行し規模の把握に努めた。南北トレンチの調査を行ったところ、遺構の立ち上がりを確認し規模から土坑と判断した。トレンチ調査で規模、坑底面を把握することができたため土坑として調査を進めながら撮影及び各種の図を作成し調査を終了した。

**形態：**平面形は隅丸方形で、壁面はやや緩やかに立ち上がる。

**堆積状態:** 覆土はレンズ状に堆積していること等から自然堆積と思われる。土層1で大型の石棒が出土しているが、土層の堆積状況から土坑との関連はないと思われる。時期はVbU1・2を切っており、この下にはF2シルト層があることから後期前葉と考えられる。(天方)

**出土遺物(3):** 3は長軸31.9cm、短軸14cm、厚さ12.4cmの円柱状に整形された石棒である。両端は敲打によって深く窪み、全体の形状は敲打によって丸みを帯びるように整形され、裏面は素材面を残しているが弱く研磨され、側縁の一部は研磨により稜が作出され断面がかまぼこ状を呈している。石材は同定結果から輝石安山岩で(第三章第2節)、正面の上位約半分被熱しており、特に上端部は黒色に変化するほど色調が変化している。(奈良)

#### V P-09 (図II-20 図版15-7)

位置: D-15 規模: 126×118cm 平面形: 円形

**確認・調査:** 平成22年度のVII層遺構確認でD-15区に円形の黒色プランを検出していた。しかし、範囲が次年度発掘区との境界に近かったため平成23年度に調査を行った。円形プランであったため、短軸と考えられる地点で半截し断面確認を行った。坑底面が水平であることと、立ち上がりが認められたことから土坑と判断し、断面の記録後完掘を行った。平面及びエレベーションの記録をとって調査終了とした。

**形態:** 平面形は円形で、坑底面はやや南東側に傾斜しているが水平で、壁面は比較的垂直に立ち上がる。

**堆積状態:** 上面の大部分を遺構確認面まで掘り下げているため非常に浅い。1・2層ともに自然堆積で流れ込みによるものと考えられる。(奈良)

#### V P-10 (図II-20・24-1~4 図版16-1・31-2・12~14)

位置: D-17 規模: 240×184cm 平面形: 楕円形

**確認・調査:** D-17区を掘り下げているところ、土器口縁部片を検出した。土器の長軸上にトレンチを設定し、土器の状況を確認したところほぼ1個体が潰れた状態で斜めに埋没していたためV PB-13を付番して調査した。土器の出土状態から、埋設土器の存在が考えられたためトレンチを延長し、壁面立ち上がり及び坑底面の確認を行った。断面観察で壁面の立ち上がりを確認できたため、ベルトを残して周囲をプランが確認できるVI層まで掘り下げた。その後、断面の記録をもって土器のみ残して完掘した。土器は坑底面出土遺物と合わせて微細図及び撮影の記録後、取り上げを行った。土器は個体が押し潰された状態であったため下側半分は写真記録のみで図化は行わず、取り上げ完掘で調査終了とした。

**形態:** 平面形はやや不整な楕円形で、坑底面はTa-d ローム(再堆積)を基底として、やや凹凸が認められ緩やかに立ち上がる。

**堆積状態:** V層主体の自然堆積層と考えられる。土器は埋め戻した堆積は認められなく、北東側の微高地の遺物と接合関係にあることから、3・4層が堆積した窪地に埋没した可能性も考えられる。

**出土遺物(1~4):** 1はIII群A2類の一括土器で、4ヶ所の大きな波状突起を有しており、口縁部が大きく外反する。胴部は上半で僅かに膨らみが認められ、底部に向かってややすぼまる。文様は口唇部に沿って貼付文を巡らし、突起部分に弧状の貼付文とこれに垂下する貼付文が2条付され、これらを繋ぐように更に弧状の貼付文が付されている。ボタン状貼付文は突起頂部から垂下した地点に2ヶ所認められるが、1ヶ所は欠損、1ヶ所は剥落したと思われる本来は4ヶ所施されていた可能



性が高い。貼付文には捺糸圧痕文が、貼付文間には突引文が連続して施される。内面は胴部が縦方向、口縁部が横方向に平滑調整されている。胎土は砂粒を中量含んでいる。2 は底面を欠損する底部で変換点に若干の張り出しが認められる。底側縁はナデ調整され、胎土に砂粒を少量含む。内面のミガキは1ほど丁寧ではなく、やや凹凸が認められる。復元状態や胎土の観察から1とは別個体である。3 は円板状素材の両面に溝が認められる有溝石製品としたものである。溝は中心付近の1条以外にごく浅い溝が数条認められる。溝の形状は両面とも緩いカーブを描き、断面はV字状に尖る。用途は不明であるが、断面で確認すると両面の位置がほぼ重なる。4 は完形の磨製石斧で両側縁に敲打が認められ、両面ともに剥離が顕著で、刃部は僅かであるが摩滅が認められる。(奈良) VP-11 (図Ⅱ-21・24-5 図版16-3・31-2-15)

位置：C-21 規模：96×84cm 平面形：不整形

確認・調査：VH-01の床面調査中、北東側に円形の黒色プランを検出した。確認面ではIV群土器も認められ、住居の付属遺構の可能性も考えられた。住居の調査終了後に短軸で半載して断面観察を行ったところ、覆土にTa-d1を多く含み、住居の堆積と異なっていたため住居とは別の遺構として掲載した。遺物は覆土上位から中位にかけて出土するものが多く、土器片も細片が殆どであったため完掘しながら取り上げを行った。完掘後、平面の記録をして調査終了とした。

形態：不整形で、立ち上がりは西側に一段差が認められ、すり鉢状の坑底面で緩やかな立ち上がりをしている。

堆積状態：V層主体の自然堆積層で、覆土にTa-d1を同量から微量に含む。周辺に焼土は認められないが1層からは微量の焼骨片を検出しているため、灰を窪地に投棄した可能性も考えられる。

出土遺物(5)：5はIV群2類の口縁部片で、貼付帯直下に縄による刺突文が認められる。破断面の観察から口唇部にむかって薄く輪積みした後、貼付帯を口縁部内側まで折り返して口唇部の平坦部を作出している。胎土はほかのIV群と同じく砂粒を含み器表面が脆く割れやすい。(奈良)

VP-12・13 (図Ⅱ-21 図版16-5・7)

[VP-12] 位置：G-25・F-25 規模：112×92cm 平面形：円形

[VP-13] 位置：G-24 規模：94×78cm 平面形：円形

確認・調査：VcからVI層にかけての遺構確認で、調査区東側の比較的平坦な地形に円形の黒色プランを検出した。それぞれ半載を行い断面観察したところ、2基とも立ち上がりを確認できたため土坑として調査を行った。VP-12は床面付近に大型の礫がまとまって出土したため、微細図の記録をして遺物を残して完掘した。それぞれ平面の記録後、遺物を取り上げて調査終了とした。

形態：[VP-12]楕円形で、坑底面は平坦、垂直に立ち上がる。

[VP-13]円形で坑底面はすり鉢状を呈し、比較的垂直に立ち上がる。

堆積状態：VP-12は1層黒色土が主体的に堆積し、大型礫を含んでいるが遺物の出土状態から流れ込みのものと考えられる。VP-13もV・VI層にTa-dPを含む自然堆積層である。

出土遺物：VP-12は周辺に礫が散在しており、坑底面上4cmから確認面にかけて土器IV群A2類1点、礫15点、うち被熱10点が出土している。出土状態から流れ込みと考えられることから掲載していない。(奈良)

VP-15 (図Ⅱ-21 図版17-1)

位置：D-22 規模：142×102cm 平面形：楕円形

**確認・調査:** VI層遺構確認中、TP-24の北側に楕円形のプランを確認した。短軸で半載を行い断面観察したところ坑底面が水平で立ち上がりが認められたため土坑と判断した。完掘後に平面の記録をとって調査終了とした。

**形態:** 楕円形で、坑底面はほぼ水平になり比較的垂直に立ち上がる。

**堆積状態:** V層主体の自然堆積層で、Ta-d1及びTa-d ローム、シルト岩の混入が認められることからTピットの掘り上げ土が流れ込んだと考えられる。(奈良)

**VP-16** (図II-21-24-6・7 図版17-3・32-2・3)

**位置:** A・B-19・20 **規模:** 116×122cm **平面形:** 円形

**確認・調査:** 調査区北側縁地の東側に傾斜する地点に円形の黒色プランを確認した。半載して断面を確認すると坑底面は東側に傾斜するが立ち上がりが認められたため土坑と判断して調査した。完掘後に平面の記録をとって調査終了とした。

**形態:** 円形で坑底面は水平だがやや東側に傾斜する。立ち上がりは東側が垂直に立ち上がる。

**堆積状態:** 6層はVII層を主体のロームで、壁面が一部崩落して堆積したものと考えられる。その他はV・VI層を主体とする自然堆積層である。

**出土遺物(6・7):** 6はB1類に相当する石槍で、基部を平坦に作出している。基部は両側縁ともに稜が潰れている。7は縦長の剥片素材を用いて右側縁と端部に刃部を作出しているスクレイパーである。端部は一部欠損しているが、鋭角な刃部を作出している。素材は6が黒曜石、7が頁岩製である。(奈良)

**VP-17** (図II-21 図版17-5)

**位置:** C-20 **規模:** 124×108cm **平面形:** 楕円形

**確認・調査:** VH-01調査終了後、周辺をVI層まで掘り下げ遺構確認を行なった際C-20区に楕円形の黒色プランを確認した。半載した断面で立ち上がりが確認できたため土坑として調査を行った。完掘後に平面の記録をとって調査終了とした。

**形態:** 楕円形で坑底面はすり鉢状になり、緩やかな立ち上がりを呈している。

**堆積状態:** Vc層主体の自然堆積であることから、VH-01より古い遺構と考えられる。また、8層にTa-dロームを多く含むが周辺に遺構が無いため土坑掘り上げ土の再流入が考えられる。(奈良)

**VP-18** (図II-22-24-8~10 図版17-7・32-4~6)

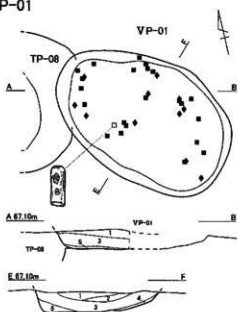
**位置:** C-17 **規模:** 232×176cm **平面形:** 楕円形

**確認・調査:** C-17区をVI層まで掘り下げて遺構確認を行っている際、不整形形状の黒色プランを確認した。本遺構の周辺には被熱礫をはじめ遺物が多く散在し、このプラン内にも遺物が認められた。調査は長軸規模が2mを超えるプランであったため、中心地点で十字ベルトを設定しトレンチで立ち上がりを確認し、ベルトを残して完掘を行った。断面の記録後にベルトを外して完掘し平面の記録をとって調査終了とした。遺物は破片資料が多く、個別の記録は取らずに点で取り上げを行っている。

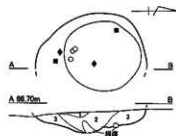
**形態:** 不整形楕円形で坑底面はほぼ水平を呈し、西側は掘り下げ過ぎのため不明瞭であるが、東側は比較的垂直に立ち上がる。

**堆積状態:** いずれもVc層を多く含む自然堆積層である。

VP-01



VP-02



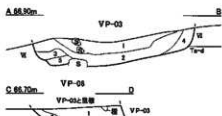
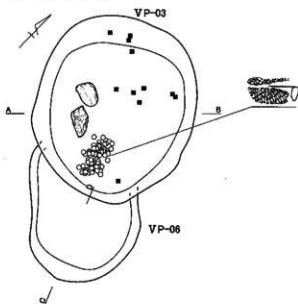
VP-01

- |   |           |     |                     |
|---|-----------|-----|---------------------|
| 1 | 1.5YR5/6  | 明褐色 | Te-d                |
| 2 | 2.5YR3/2  | 黒褐色 | Te-d - V(均-)        |
| 3 | 10YR1.7/1 | 黒色  | V = Te-dP(φ5~10 均-) |
| 4 | 10YR3/2   | 黒褐色 | V1 = Te-d(均-)       |
| 5 | 2.5YR4/6  | 褐色  | V + Te-d(均-)        |

VP-02

- |   |         |     |                     |
|---|---------|-----|---------------------|
| 1 | 10YR4/4 | 褐色  | Va                  |
| 2 | 10YR2/1 | 黒色  | Vb = Te-dP(φ3~5 腐状) |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐色 | Vb = Te-dP(φ3~5 腐状) |

VP-03・VP-06



VP-03

- |   |         |     |                               |
|---|---------|-----|-------------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色 | V = Te-dP(φ5~10)<br>-Te-d(均-) |
| 2 | 10YR2/1 | 黒色  | V = Te-dP(φ5   均-)            |
| 3 | 10YR4/4 | 褐色  | V1 = Te-d(均-)                 |
| 4 | 10YR3/4 | 褐色  | V = V1(均-)                    |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐色 | V = V1(均-)                    |

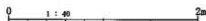
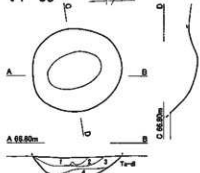
VP-05

- |   |           |    |                    |
|---|-----------|----|--------------------|
| 1 | 10YR2/1   | 黒色 | V = V1(均-)         |
| 2 | 10YR4/6   | 褐色 | Te-d1 = V(均-)      |
| 3 | 10YR1.7/1 | 黒色 | V = Te-dP(φ5   均-) |
| 4 | 10YR3/4   | 褐色 | Te-d1 = V(均-)      |

VP-06

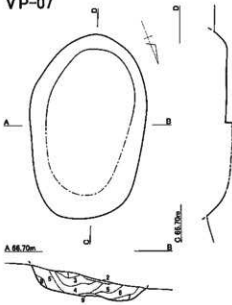
- |   |         |    |                          |
|---|---------|----|--------------------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒色 | V = Te-d+Te-dP(φ5~10 均-) |
| 2 | 10YR3/4 | 褐色 | V1 = Te-d(均-)            |

VP-05



図II-19 VP-01 ~ 03・05・06 平面及び断面図

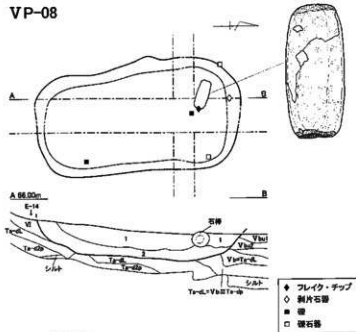
VP-07



VP-07

- 1 2.SY4/6 オリーブ褐色 シルト層
- 2 10YR3/2 黒褐色 Vb = Te-d2P(φ3~5 直状)
- 3 2.SY4/4 オリーブ褐色 シルト = Vb+Te-d2P(φ3~5 直状)
- 4 10YR3/4 暗褐色 Vb + シルト = Te-d2P(φ3~5 直状)
- 5 10YR3/2 暗褐色 Vb = Te-d2P(φ3~5 直状)
- 6 10YR3/3 黒褐色 Vb = Te-d2P(φ5~10 直状)
- 7 10YR3/2 黒褐色 Vb = Te-d2スコリア(均一)
- 8 7.SYR4/6 褐色 Te-dスコリア = Vb(均一)
- 9 10YR2/3 黒褐色 Vb + Te-d(均一)

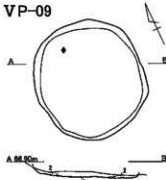
VP-08



VP-08

- 1 7.SYR4/6 褐色 Vb + Te-dL = Te-d2P(φ3~5 直状)
- 2 10YR2/3 黒褐色 Vb = Te-dL, Te-d2P(φ3~5 直状)

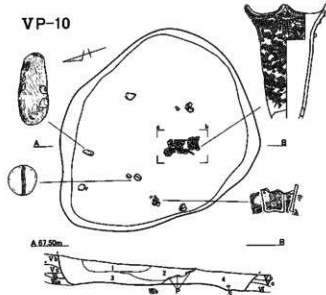
VP-09



VP-09

- 1 10YR2/1 黒色 Vb主体 = Te-dP(均一)
- 2 10YR3/3 暗褐色 Vc主体 = Te-dP(均一)

VP-10

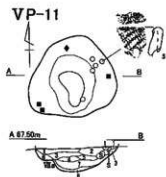


VP-10

- 1 10YR2/1 黒色 Vb = シルト岩 = Te-dP(均一)
- 2 10YR3/4 暗褐色 Vc = Vbブロック シルト岩 Te-dP(均一)
- 3 10YR2/2 黒褐色 V = シルト岩 = Te-d1(均一)
- 4 10YR3/3 暗褐色 V = シルト岩 = Te-dP(均一)

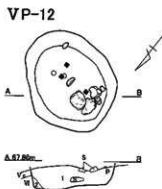


図II-20 VP-07~10 平面及び断面図



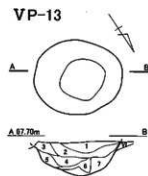
VP-11

- 1 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1 = 掘り片
- 2 10YR3/2 黒褐色 V - Ta-d1 (土器片タブコブ出土)
- 3 7.5YR2/1 黒色 V = Ta-d1
- 4 10YR3/1 黒褐色 V - Ta-d1
- 5 10YR3/3 暗褐色 V + Ta-d1
- 6 7.5YR4/1 灰灰色 V - Ta-d1
- 7 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-d1 = 炭化物 φ101 = 角径 φ10~30 ↓
- 8 7.5YR2/2 黒褐色 V + Ta-d1 (炭状)



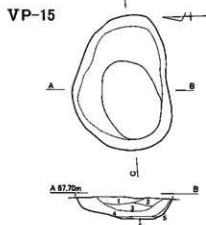
VP-12

- 1 10YR2/1 黒色 V = VI (均一) = シルト岩(薄板)
- 2 10YR3/2 黒褐色 Vc = Ta-dP・シルト岩(均一)



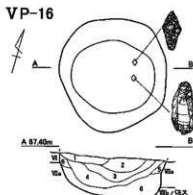
VP-13

- 1 10YR1.7/1 黒色 Vb = シルト岩(均一)
- 2 10YR2/2 黒褐色 Vc = VI (均一)
- 3 10YR2/1 黒色 Vc = Ta-dP (均一)
- 4 10YR4/3 に少し黄褐色 VI = Ta-dP (均一)
- 5 10YR4/4 褐色 VI = Ta-dP (均一)・Ta-dL (均一)
- 6 10YR3/3 暗褐色 V = Ta-dP (均一)
- 7 10YR4/3 に少し黄褐色 VI = Ta-dP (均一) = 砂(均一)



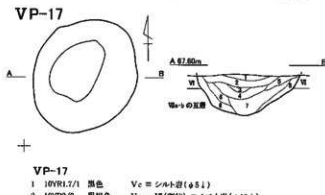
VP-15

- 1 10YR2/3 暗褐色 V = Ta-dL (均一) = シルト岩(均一)
- 2 10YR2/2 黒褐色 V = Ta-dL (均一)
- 3 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL - Ta-dL (均一)
- 4 10YR2/1 黒色 V = Ta-dL (均一)・シルト岩薄板
- 5 7.5YR5/6 明褐色 Ta-dL = Ta-dL (均一)
- 6 10YR4/3 に少し黄褐色 V + Ta-d1 = シルト岩(均一)



VP-16

- 1 10YR2/1 黒褐色 Vc = シルト岩(φ51)
- 2 2.5Y3/1 黒褐色 Vc = シルト岩(φ101)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 VI - Vc (炭状) - シルト岩(φ101)
- 4 10YR2/1 黒色 Vc = VI (炭状) = シルト岩(φ101)
- 5 10YR4/4 褐色 VI = Vc (均一)
- 6 7.5YR4/3 褐色 Ta-d1 + Ta-dP (炭状)



VP-17

- 1 10YR1.7/1 黒色 Vc = シルト岩(φ51)
- 2 10YR2/2 黒褐色 Vc - VI (炭状) = シルト岩(φ101)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 Vc - Ta-d1 (均一)
- 4 10YR2/1 黒色 Vc = Ta-dP
- 5 10YR4/1 褐色 Vc = VI (均一)
- 6 10YR3/3 暗褐色 Vc - VI (均一)
- 7 10YR3/2 黒褐色 Vc = VI (炭状) = Ta-dP
- 8 7.5YR4/2 灰褐色 Ta-dL - 角径 φ20 ↓ VI (炭状)



0 1 : 40 2m

図ニ-21 VP-11 ~ 13・15 ~ 17 平面及び断面図

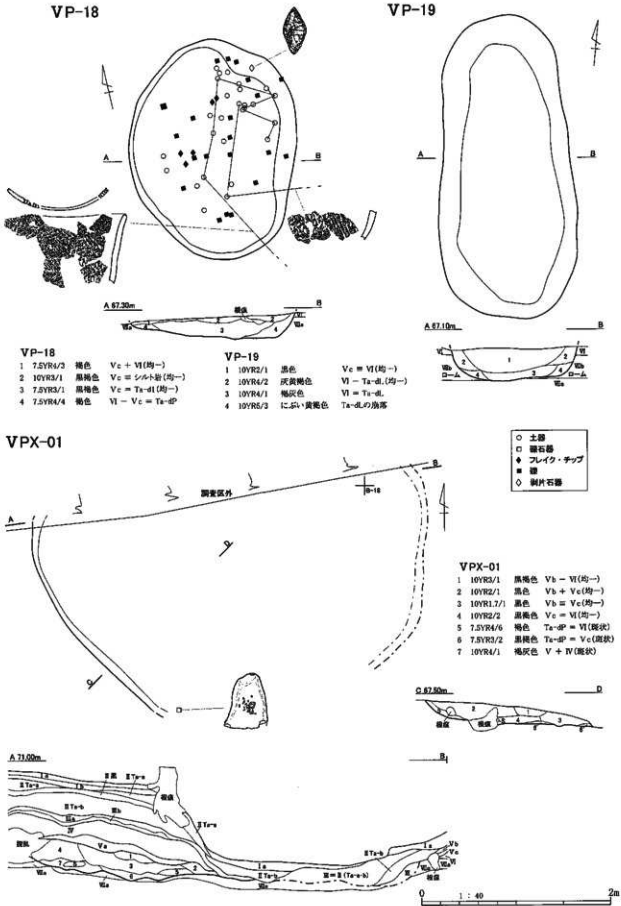


図 II-22 VP-18-19-VPX-01 平面及び断面図

出土遺物(8~10):8-9はⅢ群A2類に相当する口縁部と胴部片で、口縁部は僅かな小突起を有し、口唇部には捲糸圧痕文が施文される。地文は第1種結束羽状縄文だが施文が浅く不明瞭である。10はB2類に相当する石槍としたものである。形状はほぼ左右対称の菱形を呈しているが、背面左側縁の剝離により基部が急角度に作出され、使用のためかやや光沢を失っている。(奈良)

VP-19 (図Ⅱ-22 図版18-1)

位置:D-17 規模:160×72cm 平面形:長楕円形

確認・調査:D-17区においてVBB-05の調査が終了し、VI層で遺構確認を行なっていると、細長い楕円形の黒色プランを確認した。プランからTピットの可能性が高く短軸でトレンチを設定し、掘り下げたところ、坑底面と考えられるTa-d再堆積層が40cm弱で確認できたため土坑と判断した。完掘後平面の記録をして調査終了とした。

形態:楕円形で、坑底面は水平を呈し、立ち上がりは比較的垂直である。

堆積状態:4層はVIIb層の三角堆積を示し、その後VI層を主体とした2・3層とV層を主体とした1層が自然堆積している。(奈良)

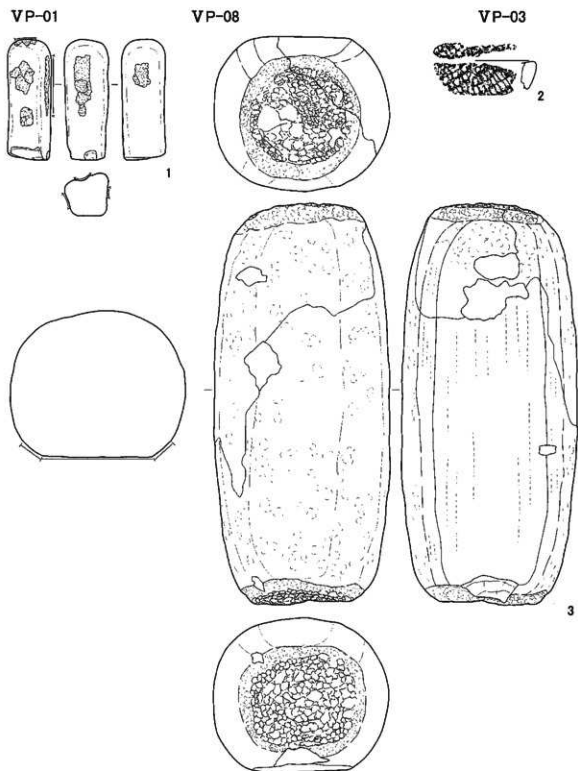
VPX-01 (図Ⅱ-22-24-11 図版32-7)

位置:B-17-18 規模:424×(210)cm 平面形:不整形

確認・調査:調査区北側に浅い窪みを検出した。この地点は鬼岸辺川の浸食により、北側は崩落し段丘崖となっている。東西方向にトレンチを設定し、窪みの断面を確認したところ、西側はV層がなく、東側に自然堆積ではないV層を主体とした堆積を確認した。東西セクションでは明瞭な立ち上がりを確認できなかったため、C-D地点にトレンチを設定し断面の観察を行った。C-D地点に立ち上がりを確認でき、おおよそのプランも円~楕円形を呈していたことから土坑様遺構(VPX-01)を付番して、平面図等の記録をとって調査終了とした。

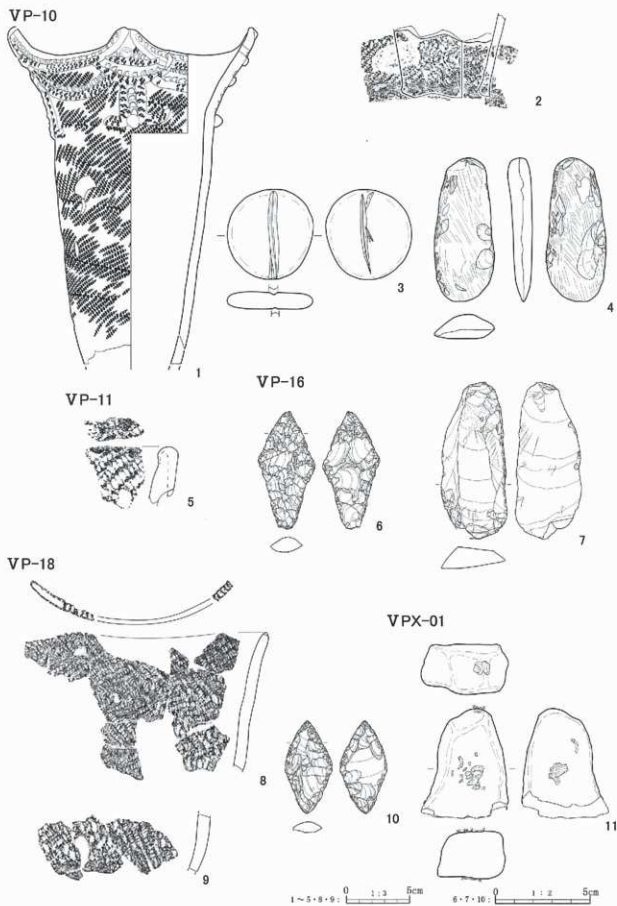
表Ⅱ-11 VP属性表

棟号 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	調査面 層位	平面形 調査面/坑底面	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	調査面 長短比	坑底面 長短比	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸					
Ⅱ-19	14-1	VP-01	E-6	Vc	楕円形/楕円形	200	140	184	120	28	N-40° W	1.4	1.5	
Ⅱ-19	14-3	VP-02	E-6-7	Vc	- / 楕円形	-	-	112	72	28	N-48° W	-	1.6	
Ⅱ-19	14-5	VP-03	D-8	Vc	円形/円形	192	172	160	120	32	N-19° W	1.1	1.3	
Ⅱ-19	15-1	VP-05	D-E-6	Vc	円形/楕円形	88	96	60	36	24	N-12° W	0.9	1.7	
Ⅱ-19	14-8	VP-06	D-8	Vc	- / -	(148)	120	(120)	100	24	N-39° W	(1.2)	(1.2)	
Ⅱ-20	15-3	VP-07	E-7-8	VI	楕円形/楕円形	196	124	156	88	20	N-30° E	1.6	1.8	
Ⅱ-20	15-5	VP-08	D-13-14	VI	楕円形/楕円形	128	212	104	192	28	N-0°	0.6	0.5	
Ⅱ-20	15-7	VP-09	D-15	VI	円形/円形	126	118	114	106	6	N-15° E	1.1	1.1	
Ⅱ-20	16-1	VP-10	D-17	Vbl	楕円形/楕円形	240	184	224	170	28	N-57° W	1.3	1.3	
Ⅱ-21	16-3	VP-11	C-21	2	不整形/不整形	96	84	20	38	28	N-65° E	0.5	0.5	
Ⅱ-21	16-5	VP-12	G-F-25	Vbl	楕円形/楕円形	112	92	94	68	24	N-68° W	1.4	1.4	
Ⅱ-21	16-7	VP-13	G-24	Vc	円形/円形	94	78	50	42	34	N-72° W	1.2	1.2	
Ⅱ-21	17-1	VP-15	D-22	Vc	楕円形/楕円形	142	102	84	62	22	N-89° W	1.4	1.4	
Ⅱ-21	17-3	VP-16	A-B-19-20	Vc	円形/円形	116	122	88	76	44	N-83° E	1.2	1.2	
Ⅱ-21	17-5	VP-17	C-20	Vc	楕円形/楕円形	124	108	66	48	44	N-30° E	1.4	1.4	
Ⅱ-22	17-7	VP-18	C-17	Vc	楕円形/楕円形	232	176	210	156	24	N-1° E	1.3	1.3	
Ⅱ-22	18-1	VP-19	D-17	Vc	長楕円形/長楕円形	160	72	136	56	16	N-18° W	2.4	2.4	
Ⅱ-22	-	VPX-01	B-17-18	Vc	不整形/不整形	424	(210)	400	(190)	30	-	-	-	



図II-23 VP-01-03-08 出土遺物





図Ⅱ-24 VP-10・11・16・18 出土遺物

形態：北側は崩落のため不明だが、楕円形と思われる。

堆積状態：1~4・7はV層を主体とする自然堆積層で、4・7層は一部倒木の影響を受ける。5・6はTa-dパミスが主体で、床面直上に堆積する。西側はおそらく、段丘崖であったために崩落によって覆土が失われ、その後窪地にII~III層が再堆積したものと考えられる。

出土遺物 (11)：11は両面と端部に敲打痕が認められるたつき石で被熱している。(奈良)

#### 第4節 焼土

焼土は北側段丘縁部に7ヶ所、北東側住居周辺に7ヶ所、調査区南側に9ヶ所の合計23ヶ所検出している。上記のように焼土の分布は大きく3ブロックに分かれるが、段丘北側および東側縁部まで連続して遺構が分布しているため、特徴的な広がり認められない。このうちVF-02は自然地形の浅い窪地に石組炉が配置されているもので、周辺からはタブコブ式土器が出土している。平成23年度には石組炉の住居跡(タブコブ式期と推定)を検出していることから、掘り込みが殆どない住居跡が存在していた可能性も考えられる。今回検出した焼土については、中期中葉と後期前葉の土器のみ出土しているため、焼土もこれらの時期に相当するものと考えられる。また本遺跡においては被熱礫の集中が多量に検出され、遺跡内に残された焼土との関連性を述べなければならないが、被熱礫に伴う明確な焼土は認められなく検出層位で時期の推定を行っている。検出層位及び周辺の出土遺物及び位置等から中期中葉のもの14ヶ所、後期前葉のもの9ヶ所と考えられる。

(奈良)

##### VF-01 (図II-25 図版18-3)

位置：E-4 規模：110×78cm 平面形：楕円形

確認・調査：E-4区のVb層下位で110×78cmの範囲で検出し、被熱層はVc層まで達している。本遺構を検出した地点周辺からは、被熱礫を主体とした礫集積が分布しているが、焼土内から被熱礫等は出土していない。焼土は上位に薄く焼骨片を含む土壌が認められ、フローテーションサンプルを回収したところシカ臼歯冠片及び哺乳綱が得られている(第三章3節表1)。遺物等は出土していないが検出層位から中期中葉の所産と考えられる。

(奈良)

##### VF-02 (図II-25・29-1 図版18-5・19-2・32-8)

位置：D-15 規模：50×40cm 平面形：楕円形

確認・調査：T2b面のVa層調査中、焼けた板状礫を検出した。集石等の遺構であると考えられたため、これらの礫を残し周囲の調査を行ったところ、Vb層上面で焼土を確認した。この面で焼土南西側の焼けた板状礫を炉石と判断し、石囲い炉とした。この時点で、撮影と炉石の微細図の作成を行った。炉石の見られなかった北東側には炉石の抜け痕と考えられる落ち込みが3ヶ所確認できたが、これと炉石の間には明瞭な抜け痕は見られなかった。焼土と炉石、炉石の抜け痕と考えられる落ち込みを通る位置で半截し、土層断面の撮影及び実測を行った。土層1・2は焼土で上面に僅かであるが焼骨片が確認できたので土壌を回収し、フローテーションを行っている。3・4は炉石の抜け痕と考えられる。焼土南西側の炉石の一部はやや外側に傾いて直立した状態で出土しているが、大半は炉石が崩れて倒れたものである。フローテーション作業から哺乳綱の骨が得られている。

遺物は1が炉石とほぼ同レベルでより出土している。図II-56-40と同一個体片でIV群A2類であ

る。口唇は内削ぎの角状で、縄文が施文されている。階段状の器表面を呈するもので、口唇横の貼付帯の下に縦位の縄線文が施されている。この縦位縄線文の上端が最も深く押されており、縄による刺突文を意識したものと思われる。

時期はVb層上面で検出したことと、出土土器から後期前葉と思われる。

(天方)

**VF-03** (図Ⅱ-25 図版19-4)

位置：D-7 規模：58×34cm 平面形：-

**確認・調査**：D-7区のVc層で58×34cmの範囲で検出している。本遺構は8ラインの埋没河川西側に形成され、周辺には北側にVSB-05が出土している。焼土はVI層まで被熱層が認められ焼骨片を僅かに含んでおり、付帯黒色土はTa-dに達している。遺物等は出土していないが、検出層位から中期中葉の所産であると考えられる。

(奈良)

**VF-04** (図Ⅱ-25 図版19-5)

位置：D-13 規模：70×42cm 平面形：不整形

**確認・調査**：T2a面からT2b面にかけての緩斜面でVb層調査中に検出した。焼土上面で焼骨片が僅かに確認できたことから、土壌を回収してフローテーション作業を行ったところ、哺乳綱の骨が得られている。時期は中期の遺物は基本的にT2aの平坦面に限られることから、立地及び検出層位から後期前葉と思われる。

(天方)

**VF-05** (図Ⅱ-25 図版19-7)

位置：E-14・15 規模：(80)×60cm 平面形：楕円形

**確認・調査**：T2b面のVb層調査中に焼土を検出した。VF-02と100cm程と近接した地点で検出している。焼土上面で焼骨片をやや多く確認しており、土壌を回収してフローテーション作業を行ったところ、シカと哺乳綱の骨が得られている。時期はこの下に非常に薄いF2シルト層があることと、周囲の出土土器から後期前葉と考えられる。但し、近接する同時期のVF-02と燃焼面のレベルが10cm程異なり違和感あるが、これはVF-05の燃焼面とVF-02の間の土層が二次的に堆積したためと想定される。VF-05調査時の写真を見ると、VF-05燃焼面より上の土層はTa-dパミスを多く含み、燃焼面下位のVb層と異なることが判るが、調査時点ではこのことに気がつくのが遅れ土層断面等は作成していない。この二次堆積土について調査終了後の想定であるが所見を下記に述べる。T2a面のE-F-13・14区はTa-c除去後Vbが堆積しておらず、直ぐにTa-d2を検出した範囲があった。現場段階で範囲等の記録は行っていないが、火山灰除去後の調査範囲を撮影した写真から確認できる。二次堆積土はこの部分を人為的に削平し、下のT2b面に排出したものではないかと思われる。この削平されたと考えられる範囲からタブコブ式の細片が出土しているが、細片のため新旧の細分は行えなかった。また、削平を行った目的を明らかにすることはできなかった。(天方)

**VF-06** (図Ⅱ-25 図版20-1)

位置：N-14 規模：42×58cm 平面形：楕円形

**確認・調査**：Vb層調査中に焼土を検出した。380cm程離れてIV群A2類の土器集中であるVPB-07が出土している。また、この周囲から他の土器は出土していない。時期は周囲の出土遺物から後期前葉のIV群A2類の頃と考えられる。

(天方)

**VF-07** (図Ⅱ-26 図版20-3)

位置：D-E-18 規模：96×52cm 平面形：不整形

**確認・調査：**試掘坑7の壁面を精査していたところ焼土を確認した。断面ではV層上面から風化した板状礫と焼土粒を含むV層ブロックも確認したため関連あるものと判断し、ベルトを設定して南側を焼土検出面まで掘り下げた。南側にも板状礫が出土したため一連の遺構と判断したが、北側の大部分をトレンチによる掘削で消失しているため板状礫の配置は不明である。時期は周囲からIV群A2類の土器及びこれらに伴い獣骨が出土しているため(VBB-05)後期前葉の所産であると考えられる。礫は掲載していないが砂岩製の板状礫で未被熱である。(奈良)

**VF-08** (図Ⅱ-26 図版20-5)

位置：D-16 規模：64×44cm 平面形：不整形

**確認・調査：**Vb層下位で楕円形の焼土を検出した。周辺にはVb層下位から土器や礫が、またまった遺物は南側10m地点にIV群A2類土器が4個体(VPB-21-22)出土している。断面観察でも焼骨片は確認されず、時期は検出層位から中期中葉の所産と考えられる。(奈良)

**VF-09・VBB-07** (図Ⅱ-26 図版20-7)

位置：E・F-19 規模：64×58cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**Vb層下位で遺物取り上げを行っていたところ、不整形の焼骨片範囲を確認した。短軸断面で焼土を伴うか確認したところ、灰層と考えられる焼骨片層が1cm以下と薄く、焼土が下位に認められなかったため獣骨の範囲と土壌サンプルを採取して調査終了とした。しかし、Vc層まで掘り下げると、獣骨範囲とほぼ重なる位置から焼土を検出した。焼土は確認面で範囲と断面の記録をとり終了とした。時期は焼土の検出層位から中期中葉の所産と考えられる。焼土上面のVBB-07のサンプルからは不明の焼骨片が0.42g得られている。(奈良)

**VF-10・VBB-08** (図Ⅱ-26 図版21-1)

位置：F-18 規模：92×80cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**Vb層下位で楕円形の焼骨片範囲を確認しVBB-08と付番し、短軸でトレンチを設定し土壌サンプルを採取しながら断面確認を行った。断面に焼土を確認したため、焼骨範囲の平面を記録して焼土確認面まで掘り下げた。焼土の断面及び平面の記録をとって調査終了とした。なお、焼骨範囲は全て土壌サンプルを行い同定したところ部位不明の哺乳網が277.03g得られている。時期は周辺の遺物出土状態と焼骨範囲の検出層位から中期中葉の所産と考えられる。(奈良)

**VF-11** (図Ⅱ-27 図版21-3)

位置：J-21・22 規模：62×72cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**22ラインの南北トレンチを掘削中Vb層下位から焼骨片を含む焼土を検出した。調査はメインセクションにかかっていたため、西側範囲の平面を記録し、トレンチをVII層まで掘り下げた。焼土断面はメインセクションと同一で記録し、残り東側の焼土検出面まで掘り下げ平面の記録を取って調査終了とした。なお、焼骨片を含んでいたため全面土壌サンプルを行い、哺乳網が12.85g得られている。時期は検出層位から中期中葉の所産と考えられる。(奈良)

**VF-12・14・21** (図Ⅱ-27 図版21-5・22-1・23-7)

[VF-12] 位置：E-20 規模：50×(26)cm 平面形：不整形

[VF-14] 位置：E-21 規模：56×48cm 平面形：楕円形

[VF-21] 位置：E-20・21 規模：66×(56)cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**VH-01南側の試掘坑11を精査すると壁面に炭化物を含む焼土を検出した。燃焼面

まで約15cm黒色土が堆積していたために、断面図の記録後にVb層下位まで掘り下げて範囲確認を行った。試掘坑周辺を掘り下げるとVc層で焼土を2ヶ所検出したため合わせて断面及び平面の記録を行った。いずれも肉眼では焼骨片を確認することができなかったが、それぞれ土壌のサンプリングとフローテーションを行った結果VF-12から不明の焼骨片が1点(0.19g)得られている。時期は南側約1.5m地点にVSB-09が出土しており、層的に中期中葉の所産と考えられる。(奈良)

#### VF-13 (図II-28 図版21-7)

位置：I-23 規模：94×78cm 平面形：楕円形

**確認・調査**：Vb～c層で遺構確認中、楕円形の焼土を確認した。燃焼面には中量の焼骨が認められたため平面の記録後にベルトを残して土壌サンプルを採取し半載した。断面の記録をして調査終了とした。周辺には遺物が少なく、本遺跡で唯一の北筒Ⅲ式土器が約3.5m北西に出土しているが、焼土に伴う遺物は出土していない。時期はサンプルから回収したクルミのAMS年代測定から3,710±30yrBPという年代が与えられており、検出層位はVc層に近いが後期前葉の所産と考えられる。また、部位不明の哺乳綱が17.67g得られている。(奈良)

#### VF-15 (図II-28 図版22-3)

位置：J-22 規模：72×54cm 平面形：不整形

**確認・調査**：Vc層でTP-22の黒色プランを確認した際に精査を行うと、北西側に不整形の焼土を検出した。確認面では焼骨片等は認められず、平面の記録後に半載し断面で確認を行ったが、VI層にレンズ状の焼土が認められるのみであったため断面を記録して調査終了とした。時期は検出層位から中期中葉の所産と考えられる。(奈良)

#### VF-16・17 (図II-28 図版22-5・7)

〔VF-16〕位置：J-19 規模：54×34cm 平面形：楕円形

〔VF-17〕位置：J-19 規模：86×54cm 平面形：不整形

**確認・調査**：調査区のほぼ中央で旧河川の低地部分に2ヶ所焼土を検出した。いずれも楕円形を呈しており、平面の記録後に断面確認を行った。いずれもVc～VI層にかけて被熱層が認められ、炭化物を少量から微量に含んでいる。VF-17は2層にTa-dパミス、焼土粒を含むが根による影響と考えられる。それぞれの断面を記録して調査終了とした。VF-16の北側にはVFB-26が出土しており、レベル的にはほぼ同一面であることから後期前葉の所産と考えられる。(奈良)

#### VF-18 (図II-28 図版23-1)

位置：E-23 規模：114×54cm 平面形：不整形

**確認・調査**：調査区北東側縁辺部で遺構確認中、Vc層で不整形の焼土を確認した。平面の記録後南側を半載したところ、焼土下位が倒木痕による攪乱のため、基本層に乱れが生じていた。断面を記録して調査終了とした。燃焼面は1層を中心として東西に細長く弱い被熱層が広がっているが、他の焼土とは異なり燃焼面にまとまりが見られないことから、後世に根の影響を受けたか、自然による焼土の可能性も高い。時期は検出層位から中期中葉と考えられる。(奈良)

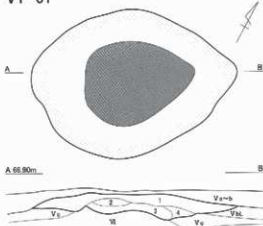
#### VF-19・23 (図II-28 図版23-3・24-3)

〔VF-19〕位置：K-24 規模：110×64cm 平面形：楕円形

〔VF-23〕位置：K-24 規模：46×26cm 平面形：楕円形

**確認・調査**：調査区南東側縁辺部で、楕円形の焼土を検出した。焼土を検出した地点は倒木痕に

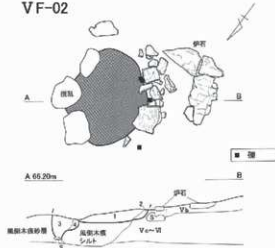
VF-01



VF-01

- 1 10YR2/2 黒褐色 Vb = 焼骨片
- 2 10YR2/4 暗褐色 Vb地山被熱層 = 焼骨片
- 3 10YR4/4 褐色 Vb地山被熱層 = 焼骨片
- 4 10YR2/3 黒褐色 Vc地山被熱層(弱)

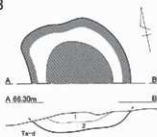
VF-02



VF-02

- 1 7.5YR4/6 褐色 シルト地山被熱層 = 焼骨片
- 2 7.5YR3/4 暗褐色 Vb地山被熱層 = 焼骨片
- 3 10YR2/3 暗褐色 Vb = シルト(弱)
- 4 10YR2/4 暗褐色 Vb = シルト

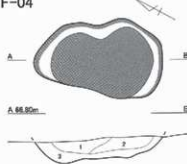
VF-03



VF-03

- 1 7.5YR7/8 黄褐色 Vc地山被熱層 = 焼骨片
- 2 10YR3/4 暗褐色 VI = Te-dL

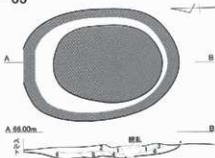
VF-04



VF-04

- 1 7.5YR4/4 褐色 Vc地山被熱層(弱) = 焼骨片
- 2 7.5YR4/6 褐色 Vc地山被熱層(強) = 焼骨片
- 3 10YR2/1 黒色 付帯赤色土

VF-05



VF-05

- 1 5YR3/8 赤褐色 Vb地山被熱層(弱)
- 2 5YR3/6 暗赤褐色 Vb地山被熱層(弱) = 焼骨片 = 炭化骨
- 3 7.5YR3/4 暗褐色 Vb地山被熱層(弱)
- 4 5YR3/4 暗赤褐色 Vb地山被熱層(弱)
- 5 10YR2/1 黒色 付帯黒色土
- 6 7.5YR2/4 暗褐色 付帯黒色土

VF-06

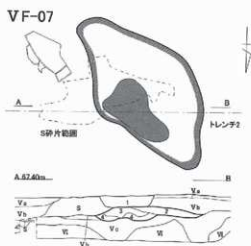


VF-06

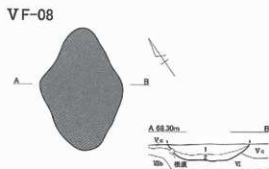
- 1 5YR5/8 明赤褐色 Vb地山被熱層



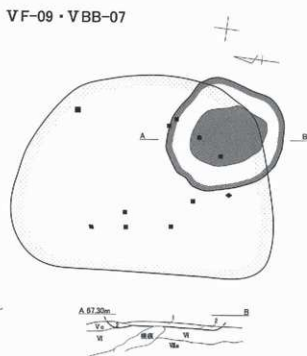
図II-25 VF-01～06 平面及び断面図



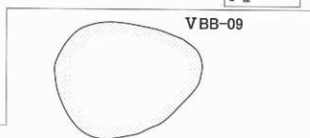
- VF-07**
- |            |        |                          |
|------------|--------|--------------------------|
| 1 10YR4/2  | にぶい黄褐色 | IV = Vブワック・焼土粒(炭状)       |
| 2 10YR2/2  | 黒褐色    | V = 焼土粒Ta・炭粒(炭状)         |
| 3 7.5YR5/6 | 明褐色    | 焼山灰熟層 Vとやや炭状に準じ 炭骨・炭化物なし |
| 4 10YR3/2  | 黒褐色    | 被熱層層内主体に広がる付着黒色土         |



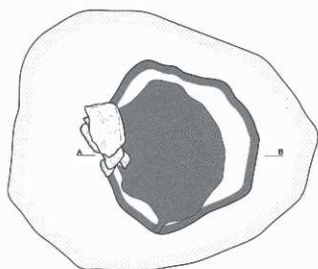
- VF-08**
- |            |     |                  |
|------------|-----|------------------|
| 1 5YR4/6   | 赤褐色 | 焼山被熱層            |
| 2 7.5YR4/6 | 褐色  | V1弱い被熱層 炭骨・炭化物なし |



- VF-09**
- |            |        |              |
|------------|--------|--------------|
| 1 2.5YR4/3 | にぶい赤褐色 | 焼土 Vc = Ta-d |
| 2 7.5YR3/2 | 黒褐色    | V = 炭化物      |



**VF-10・VBB-08**

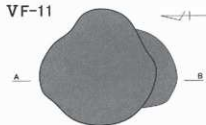


- VF-10**
- |           |     |                 |
|-----------|-----|-----------------|
| 1 10YR4/6 | 褐色  | 焼山被熱層 - 焼骨片(均一) |
| 2 10YR2/2 | 黒褐色 | Vc = 焼骨片(均一)    |
| 3 10YR2/2 | 黒褐色 | Vc - V1付着黒色土    |

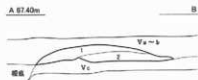
図Ⅱ-26 VF-07～10・VBB-07～09 平面及び断面図



VF-11



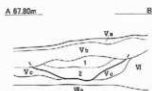
A 87.40m



VF-11

- 1 10YR2/2 黒褐色 V=炭骨片(均一)  
2 7.5YR3/4 暗褐色 Vb=焼熱層=炭骨片(均一)

A 87.80m



VF-12

- 1 2.5YR4/6 赤褐色 Vb=炭化物  
2 10YR3/4 暗褐色 Vc = Ya-d1 = 炭化物  
付着黒色土

A 87.70m



VF-14

- 1 5YR3/3 暗赤褐色 汚れた地山被熱層  
2 5YR3/4 暗褐色 Vc=地山被熱層

A 87.50m



VF-21

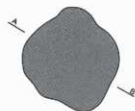
- 1 2.5YR3/1 暗赤灰 Vc被熱層  
2 2.5YR4/6 赤褐色 VI被熱層  
3 2.5YR2/1 赤黒色 弱VI被熱層

VF-12



トレンチ6

VF-14



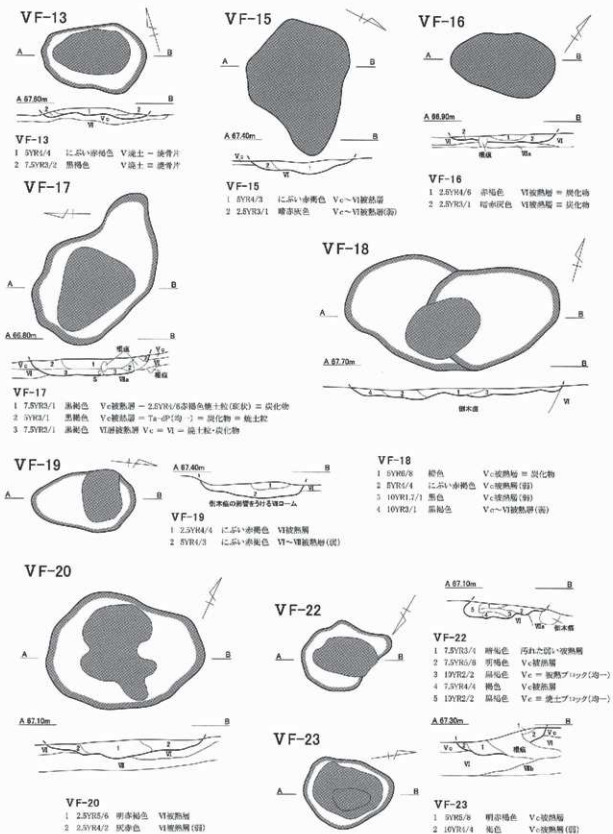
VF-21



0 1 : 40 2m

図II-27 VF-11・12・14・21平面及び断面図



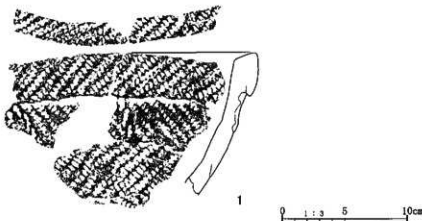


図ニ-28 VF-13・15 ~ 20・22・23 平面及び断面図



表Ⅱ-12 VF属性表

神図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-25	18-3	VF-01	E-4	VbL	槽円形	110	78	12	焼骨	
Ⅱ-25	18-5	VF-02	D-15	VbU	槽円形	50	40	6	焼骨	
Ⅱ-25	19-4	VF-03	D-7	Vc	-	58	(34)	10	焼骨	
Ⅱ-25	19-5	VF-04	D-13	VbU	不整形	70	42	14	焼骨	
Ⅱ-25	19-7	VF-05	E14-15	Vc	槽円形	(80)	60	10	焼骨	
Ⅱ-25	20-1	VF-06	N-14	VbU	槽円形	42	58	4	焼骨	
Ⅱ-26	20-3	VF-07	D・E-18	VbL	不整形	96	52	14	-	
Ⅱ-26	20-5	VF-08	D-16	VbL	不整形	64	44	8	-	
Ⅱ-26	20-7	VF-09	E・F-19	VbL	槽円形	64	58	4	焼骨	
Ⅱ-26	21-1	VF-10	F-18	VbL	槽円形	92	80	7	焼骨	
Ⅱ-27	21-3	VF-11	J-21・22	VbL・Vc	槽円形	62	72	10	焼骨	
Ⅱ-27	21-5	VF-12	E-20	VbL	不整形	50	(26)	12	-	
Ⅱ-28	21-7	VF-13	I-23	Vc	槽円形	94	78	34	-	
Ⅱ-27	22-1	VF-14	E-21	Vc	槽円形	56	48	8	-	
Ⅱ-28	22-3	VF-15	J-22	Vc	不整形	72	54	6	-	
Ⅱ-28	22-5	VF-16	J-19	Vc	槽円形	54	34	4	-	
Ⅱ-28	22-7	VF-17	J-19	Vc	不整形	86	54	8	-	
Ⅱ-28	23-1	VF-18	E-23	Vc	不整形	114	54	5	-	
Ⅱ-28	23-3	VF-19	K-24	Vc	槽円形	110	64	8	-	
Ⅱ-28	23-5	VF-20	C・D-16	Vc	不整形	84	62	8	-	
Ⅱ-27	23-7	VF-21	E-20・21	Vc	槽円形	66	(56)	10	-	
Ⅱ-28	24-1	VF-22	P-18	Vc	不整形	36	38	8	-	
Ⅱ-28	24-3	VF-23	K-24	Vc	槽円形	46	26	8	-	



図Ⅱ-29 VF-02 出土土器

よって基本層が乱れており、下層からTa-d再堆積層も部分的に上がってきていたため、燃焼面の判別が困難であった。VF-19とした焼土の記録後、周辺の精査を行っている、南側約0.8mにもう1ヶ所の焼土を検出し、VF-23と付番して調査を行った。これら2ヶ所の焼土の新旧関係は不明である。いずれも炭化物や焼骨片の混入は認められない。時期は検出層位から中期中葉の所産と考えられる。(奈良)

## VF-20 (図Ⅱ-28 図版23-5)

位置：C・D-16 規模：84×62cm 平面形：不整形

確認・調査：C・D-16区には被熱礫が比較的多量に出土し、遺物を取り上げた後に遺構確認を行

表II-13 Tピット関連及びVP・VF出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
II-18-2	31-1-1	JP042A	IVA1a	VPB-02	VbU	10	口縁 ~ 胴部	平縁・外傾 -外削角状/外傾	LR縄文-2段異原体 羽状縄文+貼付帯2 +LR斜行縄文	軽石(φ1~ 8)・砂粒 少量混入	Tピット 関連
				VPB-11	VbL	16					
				D-3	VbL	8					
				VPB-11	VbU	1					
II-18-3	31-2-4	JP042B	IVA1a	VPB-02	VbU	11	胴部 下半	外傾	貼付帯2+LR斜行 縄文-2段異原体 羽状縄文	軽石(φ1~ 3)少量・砂粒 微量混入	Tピット 関連
				VPB-11	VbL	2					
				D-3	VbL	4					
II-18-4	31-2-5	JP042C	IVA1a	E-4	Vc	1	底部	やや外傾-丸状 -平底	LR斜行縄文	軽石(φ1~ 3)少量・砂粒 微量混入	Tピット 関連
II-18-6	31-2-7	JP077B	IVA1a	TP-18	VbL	2	胴部	やや外傾	LR斜行縄文・ 円形刺突文	砂礫中量・ 珪円礫少量 混入	
II-18-7	31-2-8	JP077C	IVA1a	TP-18	VbL	2	胴部	やや外傾	異原体羽状縄文・ 貼付帯2 +LR斜行縄文	砂礫中量・ 珪円礫少量・ 石英極少量 混入	
II-23-2	31-2-11	JP031A	IVA2	VP-03		1	口縁部	平縁-内削角状 -外傾	LR斜行縄文 -LR斜行縄文	小礫(φ1~5) 多量混入	
II-24-1	31-1-2	JP050A	III A2	VP- 10・V PB-13		1・2	口縁部 ~ 胴下部	山型突起・外反- 尖状/外傾	貼付文+刺突文+ 捻糸押圧+円形刺 突文/LR第1種斜行 縄文-ミガキ	砂粒砂中量 混入	
				C-17・ 18	VbU VbL	2					
II-24-2	31-2-12	JP059	III A2	VP- 10・V PB-13		1・ Vc	胴下部 ~ 底部	やや外傾-直立- 平底	LR第1種結束 羽状縄文	砂粒砂中量・ 珪円礫極 少量混入	
II-24-5	31-2-15	JP091	IVA2	VP-11		1	口縁部	平縁・やや外傾- 隅丸角状	RL斜行縄文-貼付帯 1+LR斜行縄文・ 刺突文(縄)	砂粒少量 混入	
II-24-8	32-1-4	JP057D	III A2	VP- 18・C- 17		1・2・ VbU	口縁 ~ 胴部	平縁・小突起・や やや外傾-角状	捻糸圧直文(小突起 部)-RL第1種結束 羽状縄文-弱いミガ キ/RL第1種結束羽 状縄文-弱いミガキ	細粒砂少量・ 円礫極少量 混入	
II-24-9	32-1-5	JP057A	III A2	VP- 18・C- 17・19		1・ VbL Vc	胴部	やや外傾	RL斜行縄文	細粒砂少量・ 円礫極少量 混入	
II-29-1	32-1-8	JP034A	IVA2	VF-02		2	口縁部 ~ 胴部 上半	平縁・やや外傾 -内削角状/外傾	LR斜行縄文- 貼付帯1 +LR斜行縄文 ・刺突文(縄)/ 段状積み上げ・ 2段異原体羽状縄文	軽石(φ1~ 5)少量・ 砂粒・小礫 (φ1~5) 微量混入	
				D-15	VbU	2					

表Ⅱ-14 VP・Tピット出土石器属性表

押図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 名	遺物 番号	遺構名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-18-1	31-2-3	-	たたき石	5312	TP-01	IA1	1	150.0	85.0	37.0	(465.0)	Sa.	
Ⅱ-18-5	31-2-6	-	つばき石	19550	TP-17	A2	1	51.0	16.5	8.1	6.73	Obs.	
Ⅱ-18-8	31-2-9	-	石 鑿	26302	TP-28	A2	1	27.0	15.0	2.8	1.09	Obs.	
Ⅱ-23-1	31-2-10	-	たたき石	4313	VP-01	IB3	3	96.0	35.0	34.0	180.0	Sa.	
Ⅱ-23-3	32-1-1	-	石 棒	6601	VP-08	-	1	319.0	140.0	124.0	8960.0	And.	
Ⅱ-24-3	31-2-13	-	有稜石製品	15562	VP-10	-	1	70.0	67.5	14.0	90.0	Sa.	
Ⅱ-24-4	31-2-14	-	石 斧	15568	VP-10	A	1	114.0	48.0	19.0	140.0	Gr-Mod.	
Ⅱ-24-6	32-1-2	-	石 鑿	24923	VP-16	B1a	1	62.5	30.0	9.2	13.6	Obs.	
Ⅱ-24-7	32-1-3	-	スクリュー	24535	VP-16	B2	1	84.0	35.5	13.8	41.1	Sh.	
Ⅱ-24-10	32-1-6	-	石 鑿	24948	VP-18	B2(1)	1	49.5	25.0	6.4	7.04	Obs.	
Ⅱ-24-11	32-1-7	-	たたき石	26927	VPX-01	IB3	2	88.0	66.0	38.0	275.0	Sa.	

ったところVc層で焼土を検出した。平面と断面の記録をとって調査終了とした。焼土の北側にはVSB-12を検出しており、出土層位と周辺の遺物出土の状態から時期は中期中葉の所産であると考えられる。(奈良)

## VF-22 (図Ⅱ-28 図版24-1)

位置：P-18 規模：36×38cm 平面形：不整形

確認・調査：調査区南側の倒木痕上に楕円形を呈する焼土をVc層(推定)で検出した。焼土は燃焼面が大きく乱れていないことから倒木痕より後に形成されたものと考えられる。平面の記録後に長軸上で半截したところ、断面に焼土ブロックが認められた。土壌サンプルを行いフローテーション選別で動物、部位不明の焼骨片が0.06g出土していることから焼土として掲載している。時期は検出層位から中期中葉の所産と考えられる。(奈良)

## 第5節 遺物集中

## 1. 土器集中

土器集中は12ヶ所検出されている。Ⅲ群B1類は6ヶ所(VPB-03・05・06・08～10)、Ⅳ群A1類aは2ヶ所(VPB-02・11)、Ⅳ群A2類は1ヶ所(VPB-07)、Ⅳ群B1類(VPB-01A・01B)は2ヶ所である。VPB-02・11は同一個体片である。またTP-02と関連するものであることから、第2節で前述している。

## VPB-01A・B、VFCB-01 (図Ⅱ-30・36 図版24-5・33-1・2・35-12～14)

位置：D-4 層位：Vb層上位

規模：VPB-01A 58×50cm VPB-01B 50×40cm VFCB-01 126×79cm

出土点数：VPB-01A 1,308点 VPB-01B 795点 VFCB-01 173点

確認・調査：Va層上面を精査中に土器片のまとまりを2ヶ所確認した。この2ヶ所のまとまりは90cm程しか離れておらず、当初同一個体と思われたことからVPB-01と付番した。このまとまりを把握するため、土器片を残し周囲の調査を進めたところ、この間から緑色泥岩のフレイクがまとまって出土することからVFCB-01と付番し、範囲を記録した後一括して取り上げた。Vb層上面で土器片のまとまりを把握することができ、撮影のため土器の水洗いを行ったところ、2ヶ所のまとまりは別個体であると判り、それぞれにVPB-01A・01Bと付番し、微細図を作成してから遺物の取り上げを行った。VPB-01Aは横に倒れた状態で出土している。土器片は非常に細片化しており、接合が困難であったため口縁部から底部までの復元には至らなかった。また、口縁部の破片は非常に少な

かったことから、口縁部は別の場所で破損している可能性がある。VPB-01Bも同様に横に倒れた状態で出土している。これは底部片が全く見られないことから、別の場所で底部が破損した可能性がある。VPB-01Aと01Bは出土状態より供伴するものと思われる。VFCB-01は出土状態からVPB-01A・01Bと同時期のものと考えられる。フレイクの中には、自然面を残すものや、敲打整形痕を残すものが見られることから、石斧製作時の粗割りした破片と考えられる。

**遺物(1~3)**：1~3はVPB-01A、4・5はVPB-01Bで出土したもので、それぞれ同一個体片である。共にIV群B1類のタブコブ式土器である。1~3は縦位の棒状貼付帯が施されるもので、貼付帯上には縦位の縄線文が施されている。また口縁部に横位の縄線文が2条施されている。地文はLRの斜行縄文で、施文後にナデ調整が行われ条間が潰れている。接合することができなかった破片の中に、内面に縄文の施されているものが僅かにある。4・5は口縁が僅かに内湾する深鉢形の土器である。口唇は隅丸角状で、縄文が施される。口縁部に施される2条の縄線文は部分的に途切れながら横環する。地文はLRの原体の回転方向を変えて羽状縄文となるようである。口縁部内面には横走縄文が施文されている。胎土は共にφ5~10mmの大粒のバミスが多量に混入している。

**VPB-03** (図II-30-37-6 図版24-7-33-3)

位置：E-4 層位：Vb層上位 規模：55×39cm 出土点数：236点

**確認・調査**：Vb層上位で土器片がまとまって確認された。この時点で撮影を行い、位置を記録しながら遺物を取上げた。土器片は全て同一個体片で構成されている。

**遺物(6)**：6はⅢ群B1類の深鉢形土器である。4ヶ所に山形の突起をもつもので、口唇部は肥厚している。LRの斜行縄文施文後に貼膚及び貼付帯を貼り付け、半截竹管で刺突を施している。内面の口縁部付近は光沢があることからミガキ調整が行われたと思われる。

**VPB-04** (図30-37-7・8 図版35-15-16)

位置：E-3・4 層位：Vb層上位 規模：72×30cm 出土点数：183点

**確認・調査**：Vb層上位で土器片がまとまって確認された。この時点で撮影を行い、位置を記録しながら遺物を取上げた。土器片は細片であるが全て同一個体片であり、胴部下半の破片のみで構成されると思われる。

**遺物(7・8)**：7・8は同一個体片でIV群B1類である。単節の羽状縄文が施されるもので、施文後のナデ調整により条間は潰れている。

**VPB-05** (図II-30-37-9 図版24-8-33-4)

位置：G-13 層位：F2シルト層中 規模：29×25cm 出土点数：66点

**確認・調査**：T2b面のVb層上位で土器片の一部を検出した。その下のシルト層中に土器片が続くことが想定されたため、土器片を残した状態で調査しながら掘り下げた。土器片はシルト層中で全体を検出した。シルト層中での出土は発掘調査のこの時点では初出であったことから、出土層位をより正確に把握するため、集中の長軸で半截し出土断面の撮影を行った。土器片はⅢ群B1類の同一個体の底部片で構成されており、底部をほぼ水平にし正置した状態で出土している。掘り込み等は確認できない。このT2b面ではF2シルトより上では後期の土器が出土するが、下からは後期の土器が出土していない。この土器集中の出土状況より中期Ⅲ群B1類の頃にF2シルト層が堆積したと考えられる。また、この集中の土器片は全て全面が磨滅しているが、水成環境によるものと思われる。

**遺物(9)**：9はⅢ群B1類の深鉢形土器の底部片である。平底で底部側面は強く張り出している。

地文はLRの斜行縄文である。胎土は繊維が混入していたと考えられる。

**VPB-06** (図Ⅱ-30-37-10-11 図版 35-17-18)

位置：D-7 層位：Vb層下位 規模：65×25 cm 出土点数：63点

**確認・調査**：T2b面のVb層下位で土器片のまとまりを検出した。この位置は明瞭なF2シルト層の堆積がなく関係は不明であるが、出土した部分のVb層下位の色調は暗褐色でやや粘性の高い土層であることから、F2シルト層と対応する可能性がある。

**遺物(10:11)**：10:11は同一個体片である。平底で底部側面は強く張り出す。地文はRLRの斜行縄文であり、底面にもRLRの縄文が施されている。底面は光沢があり、条間が潰れていることから施文後にミガキ調整が行われたと考えられる。

**VPB-07** (図Ⅱ-30-37-12 図版 35-19)

位置：M-14 層位：Vb層上位 規模：100×58 cm 出土点数：599点

**確認・調査**：Vb層上位で土器片のまとまりを検出した。この時点で撮影を行い、位置を記録しながら遺物を取上げ、細片については一括して取り上げを行っている。

**遺物(12)**：12はIV群A2類の口縁部片である。口唇の断面形状は内削ぎの角状である。縄端で刺突文を施している。胎土にφ3mm程の円礫とパミスを混入し、板状で平行に細かく割られる。

**VPB-08** (図Ⅱ-30-37-13 図版 33-5)

位置：D-8 層位：Vb層下位 規模：44×23 cm 出土点数：37点

**確認・調査**：VSB-04に隣接して、Vb層下位で土器片のまとまりを検出した。ほぼ同レベルで出土しているが、同時期のものであるかは不明である。撮影を行い、位置を記録しながら遺物の取り上げを行っている。

**遺物(13)**：13はⅢ群B1類の底部部片である。平底で、底部側面は強く張り出す。地文LRの斜行縄文が施文され、図化していないが底面にも同原体の縄文が施されている。胎土には繊維が混入されている。

**VPB-09** (図Ⅱ-30-38-14-15 図版 25-1-33-6-35-20)

位置：C-2 層位：Vb層上位 規模：94×87 cm 出土点数：107点

**確認・調査**：VPB-10と約500cm離れた位置のVb層下位で土器片のまとまりを検出した。この時点で撮影と微細図の作成を行った。

**遺物(14:15)**：14:15はⅢ群B1類の同一個体片である。14は山形突起の口縁部片で、口唇は肥厚している。15は結束第1種LR斜行縄文施文後に貼付文を施している。底部側面は強く張り出しており、ミガキが施されている。内面は口縁部付近で部分的に光沢のある平坦面があり、ミガキ調整が施されたものと考えられる。

**VPB-10** (図Ⅱ-30-38-16 図版 25-3-34-7)

位置：D-2 層位：Vb層上位 規模：115×68 cm 出土点数：115点

**確認・調査**：Vb層上位で土器片のまとまりを検出し、土器片を残したまま調査を進めたところ、Vb層下位で土器片全体を検出した。この時点で撮影と微細図の作成を行った。

**遺物(16)**：16は台形状の突起をもつものである。口唇部は粘土紐を貼り付けて、肥厚している。地文は結束第1種LR斜行縄文を施文し、口唇にも縄文を施文している。内面の口縁部付近はミガキ調整が顕著で、横方向にミガキを行っている。胎土には繊維がやや多く混入している。(天方)

## VPB-12 (図Ⅱ-31・38-17 図版 25-4)

位置: E-19 層位: Vb層上位~下位 規模: 148×115cm 出土点数: 195点

**確認・調査:** Vb層上位で土器片のまとまりを検出した。周辺を精査したところ器表面が殆ど剥落した細片が板状礫とともに散在していた。遺物を残して掘り下げたが下層に続かなかつたために微細図の作成と遺物の取り上げをして調査終了とした。

**遺物(17):** 17はIV群A2類の土器で、口縁部直下に貼付帯と縄による刺突文が施される。剥落は輪積み部分で顕著になる。器体は比較的薄く作出され、内面はナデで凹凸が認められる。胎土は砂粒が多量に混入している。

## VPB-14 (図Ⅱ-31・39-18・19 図版 25-6・35-21・22)

位置: B-19 層位: Vb層上位 規模: 67×59cm 出土点数: 76点

**確認・調査:** 調査区北側縁辺部を掘り下げていると、Vb層上位で土器のまとまりを検出した。全体の範囲を確認するため周囲の精査をしたところ、北西側約1.5m地点に土器のまとまりを検出した。破片を確認したところ別個体の土器であったため、VPB-14の土器を残して下に掘り下げ全体量の確認を行った。微細図の作成後に遺物を取り上げて調査終了とした。

**遺物(18・19):** 18・19はIV群B1類の同一個体片である。18は口縁部から胴部で口唇部断面が角状、波状口縁部の頂部から縄線文が垂下する。口縁部直下には潰れた縄文が一部認められることから、器表面全面に縄文を施し、その後ナデにより口縁部直下に無文帯を形成したものと思われる。地文はLR斜行縄文で、施文後に弱いナデを施しているため条間が開いている。19も同様の文様構成で、内面は弱いミガキ、胎土は砂粒のほか軽石を多量に含んでいる。本資料は柏原18遺跡(苫小牧1995)でも出土しているタブコブ式と同時期と考えられ縄線文を有する新しいタイプで、遺跡からの最小個体数は6個体と出土割合は少ない。

## VPB-15 (図Ⅱ-31・39-20・21 図版 25-7・35-23・24)

位置: B-18 層位: Vb層上位~下位 規模: 79×66cm 出土点数: 398点

**確認・調査:** VPB-14の範囲確認中、北西側約1.5m地点の浅い窪地に土器のまとまりを確認した。土器を残して下位に掘り下げたところ周辺に広がり認められなかったために、微細図を作成し遺物を取り上げて調査終了とした。

**遺物(20・21):** 20・21はIV群A2類の胴部から底部にかけての資料である。内面は両資料とも剥落し、20は残存している部分の段状積み上げが上4.5cm、下6cm認められる。器表面は縄文施文後ナデによって縄文が潰れている。21は底面が僅かに認められ縄文が施されている。胎土は砂粒と軽石を含み、剥落した内部は灰色を呈している。

## VPB-16 (図Ⅱ-31・39-22・23 図版 25-8・35-25・26)

位置: D-17 層位: Vb層下位 規模: 60×29cm 出土点数: 258点

**確認・調査:** VP-10を精査中、南西側約0.6m地点で土器のまとまりを検出した。周囲の広がりを確認して微細図を作成し遺物を取り上げて調査終了とした。

**遺物(22・23):** 22・23はIII群A2類の口縁部及び胴部片である。22は突起部分で頂部は指頭圧痕によりM字状を呈し、粘土がボタン状にせり出している。口唇部と貼付文上には僅かに撚糸圧痕が認められ、器表面はミガキと地文縄文が僅かに認められる。23は胴部で僅かに張り出しが認められ、内面は弱いミガキ調整されている。胎土は繊維と細砂粒を含み色調はやや赤色を呈する。

## VPB-17-18 (図Ⅱ-32-39-24・40-25 図版 26-1・2・34-9・10)

〔VPB-17〕位置：I-18 層位：Vb層上位～Vc層 規模：71×27cm 出土点数：75点

〔VPB-18〕位置：I-18 層位：Vb層上位～下位 規模：18×12cm 出土点数：144点

確認・調査：I-18区を掘り下げていると縄文後期前葉の土器（VPB-18）と混じて中期の土器が散在して出土した。時期の異なる土器が入り混じて出土していたが、範囲確認のため周辺の精査を行ったところ主体分布が分かかれ、北側にVPB-17が、南側にVPB-18のまとまりを検出した。VPB-17は中期の土器であることからVb層下位にも続く可能性があり掘り下げたところVc層からも出土し、VPB-18と合わせて微細図を作成し、遺物を取り上げて調査終了とした。VPB-17はレベル的にVPB-18より上位に出土しているが、旧河川の低地部分に後期の土器が出土しているため層位的な矛盾はない。

遺物(24)：24はVPB-17のⅢ群A2類復元個体で、胴部下半から欠損している。口縁部は薄い肥厚帯と鋸歯状の貼付文が施され、口縁部から胴部にかけては貼付文が弧状に巡り、向きの異なる2条1対の捺糸圧痕文が貼付文上に施され、貼付文の間には突引文が充填されている。内面は丁寧にミガキが認められ、胎土は細砂粒主体に極少量の繊維が混入している。25はVPB-18のⅣ群A2類復元個体で、胴部下半から欠損している。口唇部は平縁の内削ぎであるが、口縁部に貼付帯を貼り付けた痕跡が顕著で雑な整形である。文様構成は幅約5～6cmに段状積み上げた後に異原体の羽状縄文を地文としている。さらに口縁部貼付帯上に縄線文が全体の約2/3付され、貼付帯直下には3～4本で縦方向の縄線文とこれを繋ぐ横方向の縄線文が5ヶ所認められる。内面はナデで整形のため凹凸があり、胎土に砂粒と円礫を多く含んでおり剥落が著しい。

## VPB-19 (図Ⅱ-31-40-26-27 図版 26-3・35-27・28)

位置：M-17 層位：Vb層上位 規模：90×59cm 出土点数：287点

確認・調査：調査区南側に遺構・遺物を殆ど検出していない地点から土器がまとまって出土した。範囲を確認したところ比較的狭い範囲でまとまり、遺構確認面まで掘り下げたが本集中のみであった。土器が細片の集中であったため写真記録のみで、図化は行わず遺物を取り上げて調査終了とした。

遺物(26・27)：26・27は胴部片で、いずれも内面剥落している。両方段状積み上げの段差部分で、他の破片資料からすると2段異原体羽状縄文であると思われる。胎土は砂粒を含み剥落が著しい。

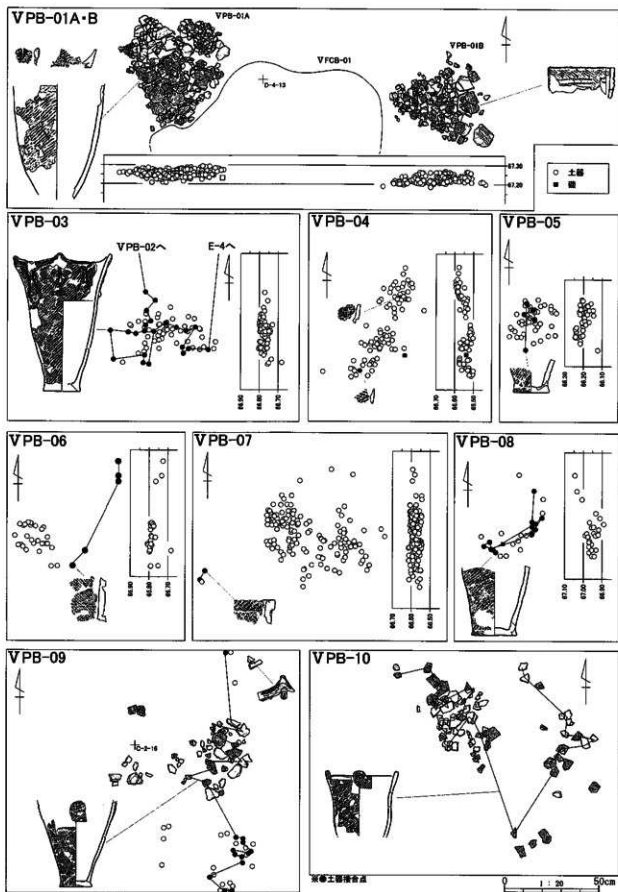
## VPB-20 (図Ⅱ-33-40-28～30 図版 26-4・35-29～31)

位置：H-22 層位：Vb層上位 規模：329×119cm 出土点数：262点

確認・調査：Hラインの東西トレンチを掘削している際、V層上位から土器片が出土しており、広がりを確認したところ広範囲にわたって土器が散在していたが同一個体であったため土器集中として微細図を作成し、遺物を取り上げて調査終了とした。

遺物(28)：28は口縁部片の貼付帯部分で、破片の口縁部資料と同様に口唇部と貼付帯状の地文が同一であることから本集中区で掲載している。29は口縁部片で器表面は全て剥落し、内面に縄文が施される（風化により不明瞭）。器表面の剥落状態から口縁部に貼付帯と直下に縄による刺突文が認められることが推測できる。30は胴部片で段状積み上げされていることがわかる。胎土は砂礫、亜角礫、軽石を多量に含み、剥落が著しい。





図二-30 VPB-01A・B-03～10・VFCB-01 平面及び垂直分布図

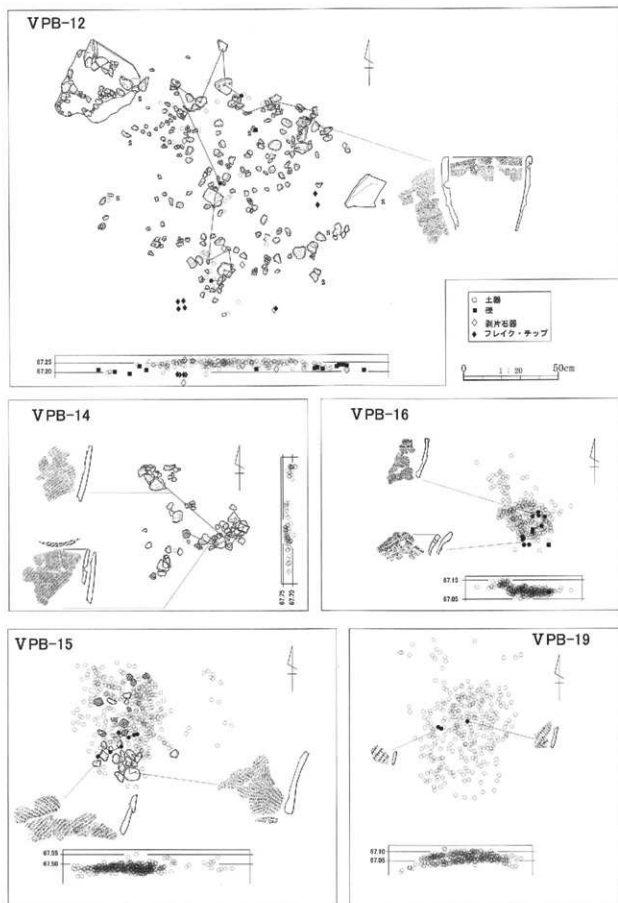
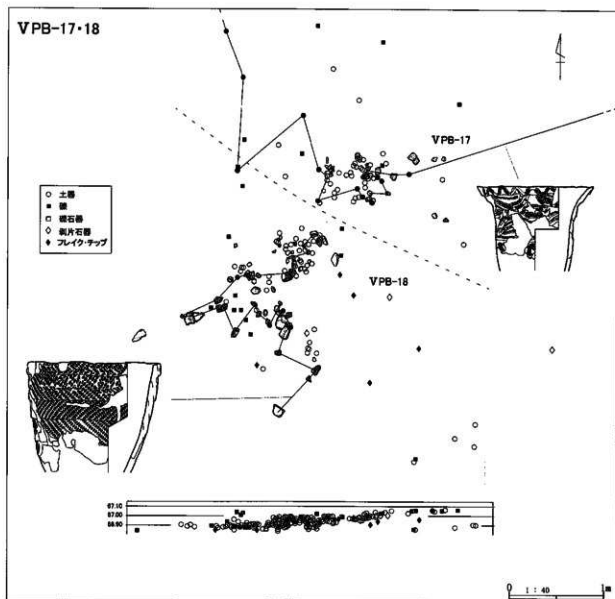


図 II-31 VPB-12-14 ~ 16-19 平面及び垂直分布図



図Ⅱ-32 VPB-17・18 平面及び垂直分布図

VPB-21 (図Ⅱ-34・41-31・32・42-33 図版 26-5・34-11・36-32・33)

位置：E-16 層位：Vb層上位 規模：114×46cm 出土点数：192点

**確認・調査：**平成22年度との調査区境界付近で土器のまとまりを確認した。分布確認するため周囲を掘り下げると旧河川の流路と思われる低地部分に集中して土器片を検出した。土器は内面に上にした状態で口縁部が対照になるように出土し、この集中より北東側0.7m地点のまとまりも含めて集中範囲と設定し微細図を作成した。遺物を取り上げる際、細片が一番主体的なブロックをA、南側のブロックをB、北東側のブロックをCに分けて取り上げを行って調査終了とした。本集中区で出土した土器は接合した結果、Aブロックの約半分が7.5m北東側に離れたVBB-05で出土した個体と接合関係にあり、B、Cブロックともに別個体であったため、3個体がまとまって出土していたことになる。また、Aブロックからはシカの歯が2点見つかっており、同定ではシカ歯冠破片という結果を得ている。このような動物遺存体の在り方は接合関係にあるVBB-05（第5節）の焼骨

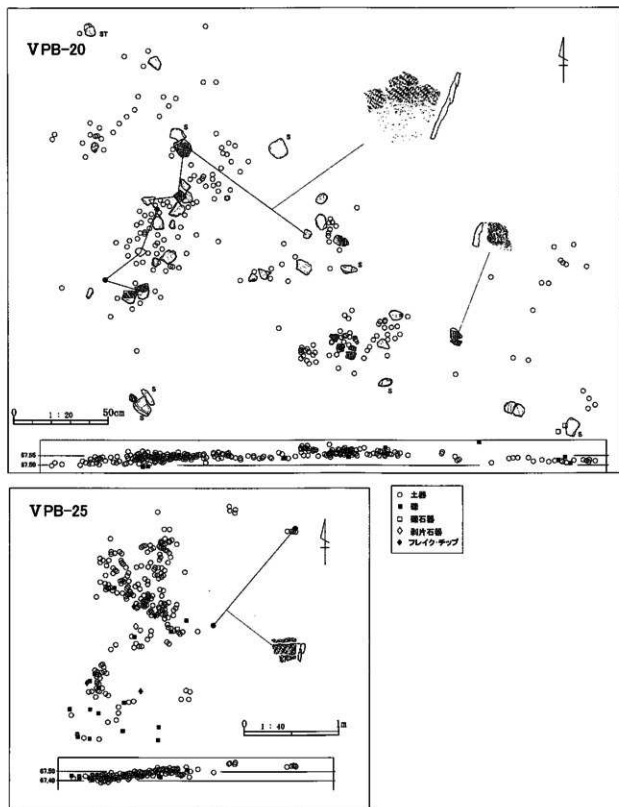
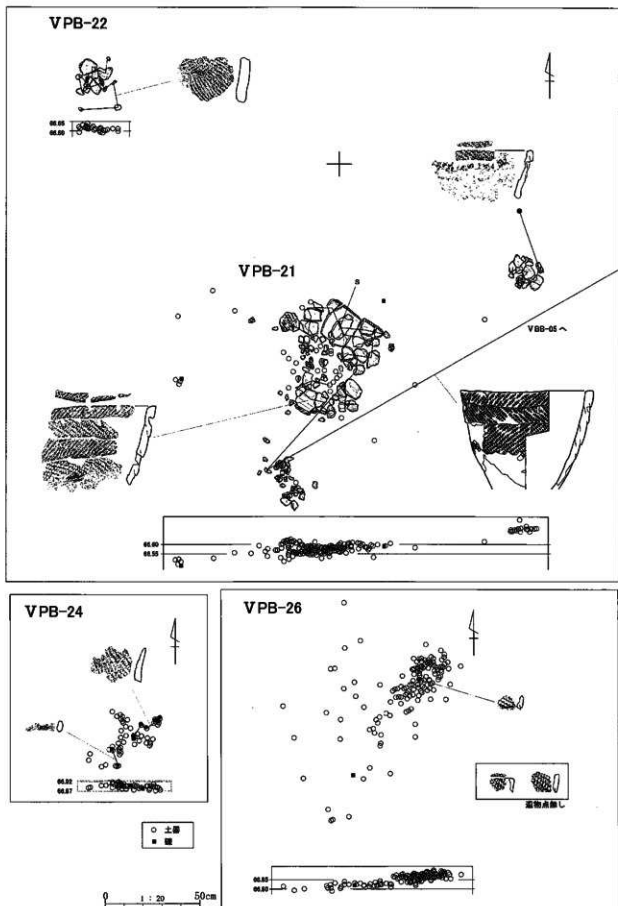
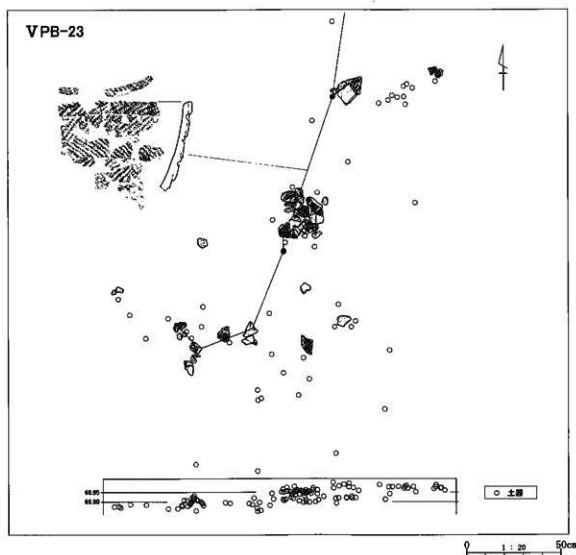


図 II-33 VPB-20・25 平面及び垂直分布図



図Ⅱ-34 VPB-21・22・24・26 平面及び垂直分布図



図Ⅱ-35 VPB-23 平面及び垂直分布図

片と関連あるものと思われる。

**遺物(31~33) :** 31はIV群 A2 類の復元個体である。胴部から胴部下半にかけてすぼまる形状をしている。口唇部の幅は1~2cmと輪積み後に作出された貼付帯幅が均一ではない。文様構成は口縁部貼付帯直下の縄による刺突文と、段状積み上げで構成されている器表面に異原体羽状縄文が施されている。段状積み上げの幅は4.5~5cmで、内面はナデによって整形しているが輪積みの痕跡が残る。胎土は砂粒を主体に亜円礫、軽石を含んでいる。32・33はIV群 A2 類の土器片で、両資料とも段状積み上げ(33は破片での推定)で口縁部直下に縄による刺突文が施される。32は口唇部、器表面が丁寧に作られており、33は殆ど剥がれのため文様構成は不明である。胎土を比較してみると内容物に違いは認められないが、33の方が圧倒的に軽石を多く含んでいる。

**VPB-22 (図Ⅱ-34・42-34 図版 36-34)**

位置 : E-16 層位 : Vb 層上位 規模 : 32×32cm 出土点数 : 29点

**確認・調査 :** VPB-21 の範囲確認中、約1.6m北西側で土器のまとまりを確認した。微細図及び写真の記録はVPB-21 と同時に行い、遺物を取り上げて調査終了とした。本集中は平成22年度と境

界付近にあり前年度との接合を試みたが接合関係は認められない。

**遺物(34)** : 34は胴部下半から底部付近の資料で、LR斜行縄文に重複するようにRL斜行縄文が施されるように見える。器体は厚く胎土に軽石を多く含むことから33と類似している。

**VPB-23・24** (図Ⅱ-34・35・42-35~37 図版 26-6・7・36-35~37)

〔VPB-23〕位置:F・G-16 層位:Vb層上位~下位 規模:214×36cm 出土点数:122点

〔VPB-24〕位置:F-17 層位:Vb層下位 規模:47×30cm 出土点数:54点

**確認・調査**: VPB-21の南側約5m地点に土器のまとまりを検出した。VPB-21・22は同時期の土器集中であり、周辺に同時期の集中がないか周辺4グリッドを掘り下げたところ、北東約5m地点にVPB-24を検出した。両集中は離れているため、別々に微細図を作成して遺物を取り上げて調査終了とした。

**遺物(35~37)** : 35~37はIV群A2類の口縁部から底部までの破片で、35は口唇部が内削角状に整形され、口縁部貼付帯直下に縄による刺突文が施される。胴部は段状積み上げのタイプで、異原体羽状縄文が施され、胎土に砂礫、亜円礫、軽石を含み、器表面は剥落が著しいが内面は横方向のミガキにより丁寧な整形がなされている。36は胴部片、37は底部側縁である。胎土に砂礫を含み色調が橙色に近く軽い。本資料は包含層(Ⅱ-56-35)に掲載しているものと胎土、色調が類似しているが、接合関係がなく離れているため別に掲載している。

**VPB-25** (図Ⅱ-33・42-38~40 図版 26-8・36-38~40)

位置:F・G-22 層位:Vb層下位 規模:248×124cm 出土点数:231点

**確認・調査**: VPB-20の北側約4.5m地点に遺物が散在して出土した。範囲を確認したところ土器細片や剥片石器、礫石器が南北に約2.5mの細長い範囲に広がりを示した。遺物周辺もV層下位で遺物が途切れたため範囲内の遺物をVPB-25として写真撮影後に取り上げを行って調査終了とした。掲載遺物は範囲内の同一レベルから出土したもので、土器は細片のため口縁部片を掲載している。

**遺物(38~40)** : 38はIV群A2類の口縁部片で、内面剥落のため口唇部形状は外側の角度から隅丸角状と判断した。口縁部断面から貼付帯の作りを観察すると、VPB-18の様に雑な口唇部整形であったと思われる。胎土は他のIV群と同じく砂粒と極少量の軽石を含んでいる。39は平坦な基部をもつ石槍で、背面左側縁に新しい剝離が連続して認められる。40は阿面に敲打痕が認められる砂岩製のたたき石で、裏面は敲打によって大きく剝離している。

**VPB-26** (図Ⅱ-34・42-41~43 図版 27・1・36-41~43)

位置:J-19 層位:Vb層上位~下位 規模:113×61cm 出土点数:141点

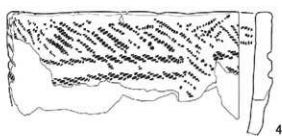
**確認・調査**: J-19区の旧河川による緩斜面に土器のまとまりを検出した。範囲確認のため周辺を広げたが、中心は1m前後と小規模で南西側斜面にやや流れたような分布を示している。細片であるため写真を撮って遺物を取り上げて調査終了とした。

**遺物(41~43)** : 41は口縁部で内面を剥落しているが、口唇部形状は外側で隅丸角状と判断している。42・43は胴部の段状積み上げ段差部分にあたる。地文は複節の斜行縄文で、胎土には砂粒と軽石を含み、剥落面の色調は灰色を呈している。本遺跡で出土した複節を地文にもつ土器は単節地文に比べ少ない。

VPB-01A



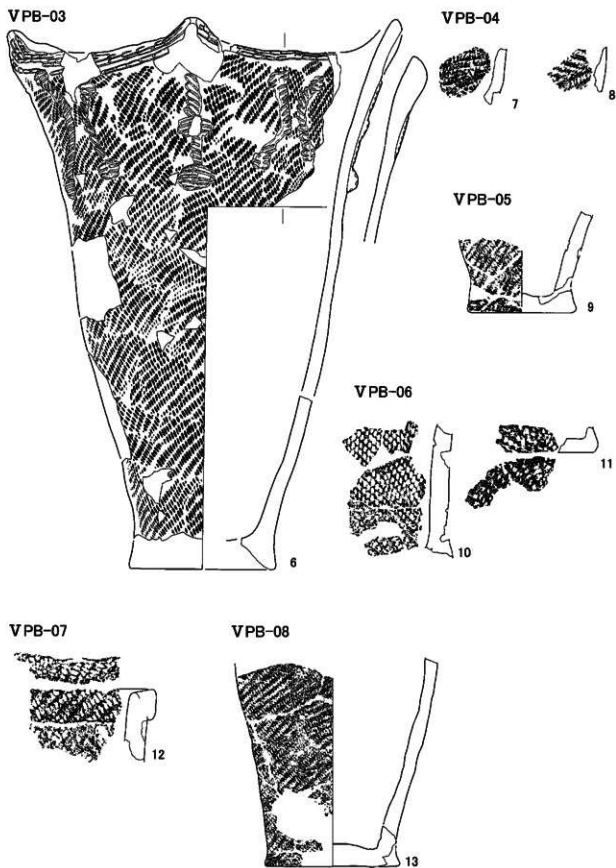
VPB-01B



0 1 3 5 10cm

図II-36 VPB出土土器(1)

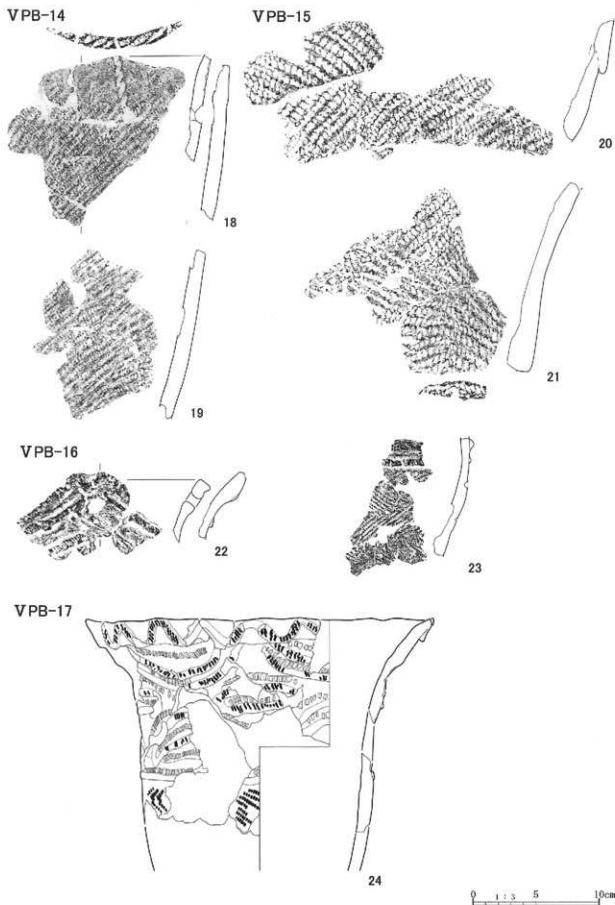




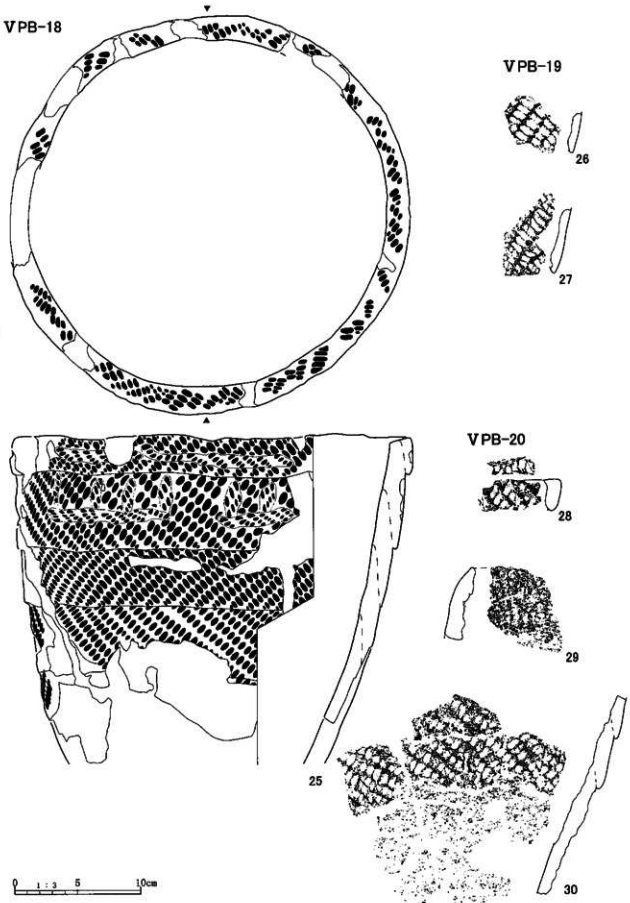
図Ⅱ-37 VPB出土土器(2)



図Ⅱ-38 VPB出土土器(3)

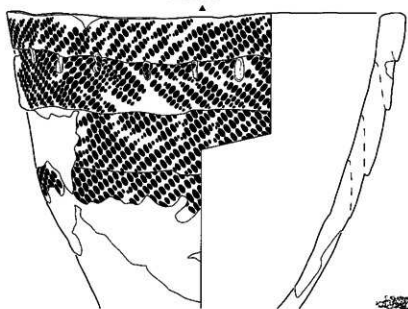
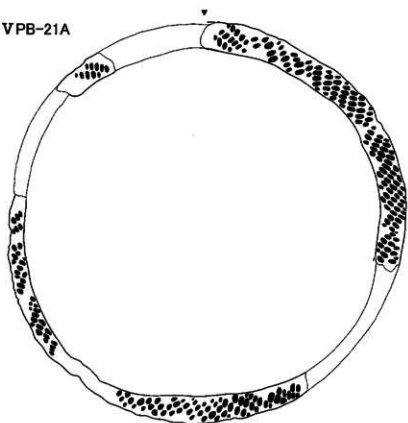


図Ⅱ-39 VPB出土土器(4)

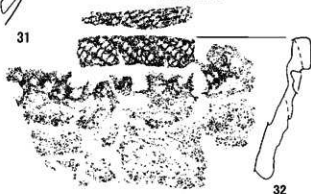


図II-40 VPB出土土器(5)

VPB-21A



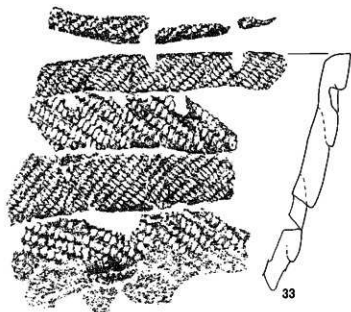
VPB-21C



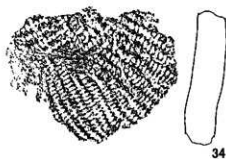
0 1 3 5 10cm

図Ⅱ-41 VPB出土土器(6)

VPB-21B



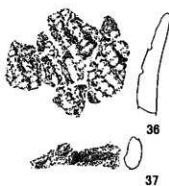
VPB-22



VPB-23



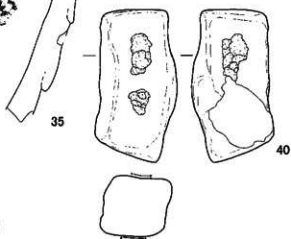
VPB-24



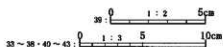
VPB-25



VPB-25



VPB-26



図Ⅱ-42 VPB出土遺物(7)

表Ⅱ-15 VPB出土土器属性表(1)

押図番号	図版番号	個体名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文様	胎土	備考			
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面					
Ⅱ-36-1	33-1-1	JP041A	IVB1	VPB-01A	VbU	53	胴部 上半 ~ 下半	胴部上半:直立 胴部下半:外傾	縄線文・LR斜行縄文	砂粒・軽石 (φ1~3) 少量混入				
Ⅱ-36-2	35-1-12	JP041B	IVB1	VPB-01A	VbU	1	口縁部	直立	縦位貼付帯+縄線文・ 縄線文・LR斜行縄文	軽石(φ1~ 10)多量・砂 粒微量混入				
Ⅱ-36-3	35-1-13	JP041C	IVB1	VPB-01A	VbU	3	底部	やや外傾-角状 -平底	LR斜行縄文 -LR斜行縄文	砂粒・軽石 (φ1~3) 少量混入				
Ⅱ-36-4	33-1-2	JP032A	IVB1	VPB-01B	VbU	14	口縁部	平縁・隅丸角状 -直立	RL斜行縄文-縄線文・ RL斜行縄文 -RL縦走縄文	軽石(φ1~ 5)・砂粒 多量混入				
Ⅱ-36-5	35-1-14	JP032B	IVB1	VPB-01B	VbU	1	胴部	やや外傾	LR斜行縄文	砂粒・軽石 (φ1~3) 少量混入				
Ⅱ-37-6	33-1-3	JP001A	ⅢB1	VPB-03	VbU	24	口縁 ~ 底部	山形突起・外傾- 外削り出し隅丸 状・肥厚/胴部上 半:やや外傾胴部 下半:外傾/張り出 し-平底	突引文+肥厚帯-貼 瘤+半截竹管(内) 刺突文・貼付帯+半 截竹管(内)刺突文/ LR斜行縄文/LR斜 行縄文	繊維混入				
												VPB-02	VbU	1
												E-4	VbL	11
Ⅱ-37-7	35-1-15	JP020A	IVB1	VPB-04	VbU	1	胴部 下半	外傾	LR斜行縄文	砂粒・軽石 (φ1~3) 少量混入				
Ⅱ-37-8	35-1-16	JP020B	IVB1	VPB-04	VbU	1	胴部	やや外傾	2段異原体羽状縄文	砂粒・軽石 (φ1~3) 少量混入				
Ⅱ-37-9	33-1-4	JP009A	ⅢB1	VPB-05	VbU	12	胴部 下半 ~ 底部	外傾/張り出し -平底	LR斜行縄文/ LR斜行縄文	繊維混入				
Ⅱ-37-10	35-1-17	JP003A	ⅢB1	VPB-06	VbL	5	胴部 下半	やや外傾	RL斜行縄文	繊維混入				
												E-3	VbU	1
Ⅱ-37-11	35-1-18	JP003B	ⅢB1	E-4	VbL	1	底部	張り出し-平底	RL斜行縄文- RL斜行縄文	繊維混入	L2746等			
												E-3	VbU	1
Ⅱ-37-12	35-1-19	JP024A	IVA2	VPB-07	VbU	2	口縁部	平縁直立 -内削角状	LR縄文-貼付帯+LR 斜行縄文・刺突文 (縄)・RL斜行縄文	小礫(φ1~ 5)・砂粒・軽 石(φ1~3) 少量混入				
Ⅱ-37-13	33-1-5	JP016A	ⅢB1	VPB-08	VbL	15	胴部 下半 ~ 底部	外傾/張り出し -平底	LR斜行縄文/ LR斜行縄文- LR斜行縄文	繊維少量 混入				
Ⅱ-38-14	35-1-20	JP006B	ⅢB1	VPB-09	VbU	2	口縁部	山形突起・外傾 -外削角状・肥厚	半截竹管(内)刺突文 +肥厚帯-貼瘤+ 半截竹管(内) 刺突文・半截竹管(内) 刺突文	砂粒・軽石 (φ1~3) 少量混入				
Ⅱ-38-15	33-1-6	JP006A	ⅢB1	VPB-09	VbL	10	胴部 上半 ~ 底部	外傾/張り出し -平底	貼付文+半截竹管 (内)刺突文 ・突引文・結束第1種 LR斜行縄文	砂粒・軽石 (φ1~3) 少量混入				
												VbU	21	

表Ⅱ-16 VPB出土土器属性表(2)

図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
							口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅱ-38- 16	34-1-7	JP005A	ⅢB1	VPB-10	VbU	26	口縁部 ~胴部	台形状突起 ・やや外傾- 隅丸角状・肥厚/ 胴部中央くびれる	LR斜行縄文-LR 斜行縄文+肥厚帯/ 結束第1種斜行縄文	繊維・砂粒 微量混入
Ⅱ-38- 17	34-1-8	JP060A	ⅣA2	VPB-12	VbU	23	口縁~ 胴部	平縁・直立- 隅丸角状/やや 外傾	LR斜行縄文-貼付帯 1B+LR斜行縄文・ 刺突文(縄) 弱いミガキ	砂粒多量混 入・軽石(φ) 微量混入
Ⅱ-39- 18	35-1- 21	JP061A	ⅣB1	VPB-14A	VbU	8	口縁~ 胴部	波状口縁・やや外 傾-角状/やや 外傾	LR斜行縄文-無文帯 +縄線文(縦)-ナデ弱 いミガキ/LR斜行縄文 +ナデ-弱いミガキ	軽石(φ1~3) 多量・砂粒中 量混入
Ⅱ-39- 19	35-1- 22	JP061C	ⅣB1	VPB-14A	VbU	7	胴部	やや外傾	LR斜行縄文+ナデ- 弱いミガキ	軽石(φ1~3) 多量・砂粒中 量混入
Ⅱ-39- 20	35-1- 23	JP063B	ⅣA2	VPB-15	VbU	11	胴部	やや外傾	段状積み上げ+2段 異原体羽状縄文 +ナデ	砂粒中量・ 軽石(φ1~3) 少量混入
Ⅱ-39- 21	35-1- 24	JP063E	ⅣA2	VPB-15	VbU ・bL	7	胴部~ 底部	外傾/直立	2段異原体羽状縄文+ 弱いミガキ	砂粒中量・ 軽石(φ1~3) 少量混入
Ⅱ-39- 22	35-1- 25	JP051B	ⅢA2	VPB-16	VbL	7	口縁部	山形突起・外反- 角状(突起;丸状)	貼付文+捺系圧痕文・ 円形刺突文・RL斜行 縄文-ミガキ	細粒砂少量・ 繊維少量 混入
Ⅱ-39- 23	35-1- 26	JP051C	ⅢA2	VPB-16	VbL	7	胴部	外傾	貼付文・LR羽状縄文- 弱いミガキ	細粒砂少量・ 繊維少量 混入
Ⅱ-39- 24	34-1-9	JP055A	ⅢA2	VPB-17	VbU ・bL・c	38	口縁部 ~胴部	平縁・外傾-尖状/ やや外傾	肥厚帯+貼付文(鋸 歯)+捺系圧痕文-貼 付文(弧状)+捺系圧 痕文・突引文/RL第1 種結束羽状縄文-貼付 文+捺系圧痕文・突引 文-ミガキ	細粒砂中量・ 繊維極少量 混入
Ⅱ-40- 25	34-1- 10	JP064A	ⅣA2	VPB-18	VbU	42	口縁部 ~胴部	平縁・やや外傾- 内削角状/ やや外傾	LR斜行縄文-貼付帯 1A+LR斜行縄文+縄 線文/段状積み上げ+ 2段異原体羽状縄文+ 縄線文(縦・横)-弱いミ ガキ	砂粒多量・円 礫中量・軽石 (φ1~3)少量 混入
Ⅱ-40- 26	35-1- 27	JP065H	ⅣA2	VPB-19	VbU	2	胴部	やや外傾	段状積み上げ・ RL斜行縄文	砂粒中量 混入
Ⅱ-40- 27	35-1- 28	JP065L	ⅣA2	VPB-19	VbU	2	胴部	やや外傾	段状積み上げ・ RL斜行縄文	砂粒中量 混入
Ⅱ-40- 30	35-1- 31	JP066A	ⅣA2	VPB-20	VbU	10	胴部	やや外傾	段状積み上げ・ RL斜行縄文	砂礫・歪角礫 多量・軽石 (φ1~3) 中量混入
Ⅱ-40- 29	35-1- 30	JP066k	ⅣA2	VPB-20	VbU	2	口縁~ 胴部	平縁・やや外傾	貼付帯1B・刺突文 (縄)-RL斜行縄文/ 段状積み上げ	砂礫・歪角礫 多量・軽石(φ 1~3)中量 混入



表Ⅱ-17 VPB出土土器属性表(3)

図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
							口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅱ-40- 28	35-1- 29	JP066P	IVA2	VPB-20	VbU	1	口縁部 平縁・やや外傾- 隅丸角状	RL斜行縄文-貼付帯 1B+RL斜行縄文	砂礫・垂円礫 多量・軽石 ( $\phi 1\sim 3$ ) 中量混入	
Ⅱ-41- 31	34-1- 11	JP067A	IVA2	VPB-21A .V98-05	VbU	41	口縁部 ~胴部 平縁・やや外傾- 内削角状/外傾	RL斜行縄文-貼付帯 1A+LR斜行縄文・刺 突文(縄)-弱いミガキ/ 段状積み上げ+2段具 原体羽状縄文	砂粒多量・垂 円礫少量・軽 石( $\phi 1\sim 3$ ) 少量混入	
Ⅱ-41- 32	36-1- 33	JP069A	IVA2	VPB-21C	VbU	11	口縁 ~胴部 平縁・やや外傾- 内削角状	RL斜行縄文-貼付帯 1A-2段具原体羽状縄 文・刺突文(縄)-ナデ	軽石( $\phi 1\sim 3$ ) 多量・砂粒多 量・垂円礫極 少量混入	
Ⅱ-42- 33	36-1- 32	JP068A	IVA2	VPB-21B	VbU	11	口縁 ~胴部 平縁・やや外傾- 内削角状/やや 外傾	RL斜行縄文-貼付帯 1A+LR斜行縄文・刺 突文(縄)-弱いミガキ/ 段状積み上げ+2段具 原体羽状縄文	砂粒・小礫 ( $\phi 1\sim 5$ ) 多量・砂粒中 量・軽石( $\phi 1$ $\sim 3$ )少量混 入	
Ⅱ-42- 34	36-1- 34	JP070A	IVA2	VPB-22	VbU	7	胴部 やや外傾	2段具原体羽状縄文	砂粒軽石( $\phi$ $1\sim 3$ )中量 混入	
Ⅱ-42- 35	36-1- 35	JP071A	IVA2	VPB-23	VbU	40	口縁 ~胴部 平縁・やや外傾- 内削角状/外傾	RL斜行縄文-貼付帯 1A+LR斜行縄文・刺 突文(縄) /段状積み上げ +2段具原体羽状縄文	砂礫中量・ 垂円礫少量・ 軽石微量混 入	
Ⅱ-42- 36	36-1- 36	JP072A	IVA2	VPB-24	VbL	6	胴部 やや外傾	RL斜行縄文	砂礫中量混 入	
Ⅱ-42- 37	36-1- 37	JP072E	IVA2	VPB-24	VbL	2	底部 やや外傾-丸状	弱いミガキ	砂礫中量混 入	
Ⅱ-42- 38	36-1- 38	JP073A	IVA2	VPB-25	VbL	2	口縁部 平縁・やや外傾- 隅丸角状	RL斜行縄文-貼付1B +2段具原体羽状縄文	砂粒多量・ 軽石( $\phi 1\sim$ $3$ )少量混入	
Ⅱ-42- 41	36-1- 41	JP074A	IVA2	VPB-26	-	1	口縁部 平縁・やや外傾- 隅丸角状	RLR斜行縄文- RLR斜行縄文	砂粒中量・軽 石( $\phi 1\sim 3$ ) 少量混入	
Ⅱ-42- 42	36-1- 42	JP074B	IVA2	VPB-26	-	1	胴部 やや外傾	段状積み上げ- RLR斜行縄文	砂粒中量・軽 石( $\phi 1\sim 3$ ) 少量混入	
Ⅱ-42- 43	36-1- 43	JP074C	IVA2	VPB-26	VbL	1	胴部 やや外傾	段状積み上げ- RLR斜行縄文	砂粒中量・軽 石( $\phi 1\sim 3$ ) 少量混入	

表Ⅱ-18 VPB出土土器属性表

押図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物名	遺物 番号	遺構名/ グリッド	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-42-39	36-1-39	-	石 槍	23752	VPB-25	B1a	VbL	44.0	18.0	7.0	4.3	Obs.	
Ⅱ-42-40	36-1-40	-	たたき石	23724	VPB-25	ⅡB2	VbL	122.0	62.0	48.0	590.0	Sa.	

## 2. 礫集中

礫集中は調査区全体で12ヶ所確認している。分布範囲はV層遺構分布図(図II-1)で見られるように、段丘北側縁辺部の高まりにVSB-01~07・12、東側縁辺部の高まりにVSB-08~10、北東側の水成堆積シルト層からVSB-11が出土している。これら礫集中内から出土する礫は全部で約288.447kgになる。礫集中の範囲から出土した礫石器及び礫は4,042点中、3,582点の約88%が被熱しており、ポイルストーンとして礫を使用していたものと思われる。石材は殆どが砂岩製で、時期についてはVSB-11からⅢ群の胴部片が出土しているため中期中葉に帰属すると考えられる。以下に各集中の特徴を示す。(奈良)

## VSB-01(図II-43・46-1~3 図版27-2・37-1-1~3)

位置:D・E-5・6 規模:256×224cm 重量:27,111g(35,241g 礫石器含む)

確認・調査:調査区西側に被熱礫がまとまって検出している。出土礫の殆どは砂岩の被熱礫で、VSB-03の南東側に特に密な分布を示していたため別に遺構名を付番しているが、VSB-02・03と同じ出土状態、礫構成であるため、これらVSB-03の1ブロックと考えられる。

遺物(1~3):礫石器は7点出土し、うち3点を掲載している。1~3はいずれも扁平礫の砂岩礫を素材としているたたき石で、1は片面に連続した敲打痕と弱いすり面が、裏面には一部に敲打痕が認められ被熱している。2・3は両面に敲打痕が認められる。1・2は欠損、3は礫片を使用したものと考えられる。(奈良)

## VSB-02(図II-43・46-4 図版27-3・37-4)

位置:D-5 規模:120×112cm 重量:5,790g(5,980g 礫石器含む)

確認・調査:VSB-01の西側約1m地点に小規模にまとまって検出した礫集中である。VSB-01と同様にVSB-03の分布範囲の中で一部ブロック的に集中していたため別に遺構名を付番して調査している。

遺物(4):礫石器が1点出土している。4は短軸とほぼ変わらない厚さがある砂岩礫を素材としているたたき石で、片面のほぼ中央付近に敲打痕が集中して認められる。(奈良)

## VSB-03(図II-43・47~49 図版27-5・37-5~24・38-25~30)

位置:C・D-4・5 規模:1016×744cm 重量:169,916g(195,121g 礫石器含む)

確認・調査:調査区西側に被熱礫が散在している地点が認められた。調査は分布範囲を確認するためVbU~VbL層にかけて出来るだけ遺物を残しながら掘り下げを行った。分布範囲は南東側にVSB-01・02の小規模なブロックが認められるが、北側は当初予定していたDラインまでの調査区から更に北西側段丘縁辺部まで延びていることがわかったため、一度予定調査区内の遺物取り上げ、図化を行った。残りの分布が予想された範囲については、予定調査範囲の調査が終了した後に、重機によって表土、火山灰除去を行って再びV層上面から手掘りで拡張部分の調査を行った。拡張範囲については崩落が予想されたため、縁辺部については2~3mのクリアランスをとり安全面に考慮した。そのため段丘縁の遺物は回収できていない。礫の組成は殆どが被熱の砂岩礫で、僅かに緑色泥岩の石斧類が認められる。

遺物(1~26):本集中からは剥片石器6点、礫石器81点出土しており、剥片石器5点、礫石器21点掲載している。1は基部に抉りのあるA2類の石鏃、2~4はA2類相当のつまみ付ナイフである。3は腹面左に連続した剥離調整によって背面に急角度の刃部が作出されている。5は左側縁に連続し

た剥離が認められるスクレイパーで、下端を欠損している。素材は1・3が黒曜石、2・5が頁岩、4がメノウ質頁岩である。6・7は石斧で6の素材は緑色泥岩で全面研磨されているが、刃部が敲打により潰れている。7は青色片岩製で、敲打成形されているが、片岩特有の層状剥離によって器表面は階段状に剥がれる。8~14はたたき石で、8・9は縦長素材を用いて、両面に連続した敲打痕が認められる。10は扁平礫を素材として片面に敲打が認められ、欠損後に被熱している。12は縁辺部に連続した敲打が認められるもので、形状は欠損のため不明で被熱している。11・13・14は礫片を使用したたたき石で、いずれもほぼ中央に敲打痕がある。13は被熱している。石材は12がホルンフェルス（第三章第2節）、それ以外は砂岩である。15・16は石冠で、15は残存している使用面に敲打痕がある。16はすり面縁辺部に連続した剥離があり、薄く半割されている。石材はいずれも砂岩である。24は砂岩製の半円状扁平打製石器で、表裏面の周縁を剥離調整して整形し下縁には擦り面がある。17は石鋸と考えられるもので、下縁に使用面と裏面にも一部すり面が認められる。石材は砂岩製で、石鋸は礫石器組成の中で殆ど出土していない。18は石錘で、3点が接合した資料である。扁平な楕円礫を用いて長軸方向に抉りを作出している。石材は片麻岩である。19~23は砥石で、19は片面ほぼ全面使用されているが、中央部分に敲打痕が認められる。20・21は顕著な窪みが認められる砥石で、21は縁辺に剥離が連続して認められるため、整形して使用したものと思われる。22・23は平坦な砥面が認められる。石材はいずれも砂岩である。25・26は台石で、25は砥面が認められることから、石皿として使用された後に台石として使用されたと考えられる。26は両面及び1側縁に敲打痕が認められる。石材はいずれも砂岩である。 (奈良)

#### VSB-04 (図Ⅱ-44-50-1~5 図版27-6・7・38-31~35)

位置：D-8・9 規模：364×300cm 重量：19,228g (20,542g 礫石器含む)

確認・調査：本集中は8ラインの埋没河川を挟んだ東側に検出している。分布は北側に延びるが、段丘縁辺部であるため安全面を優先し、全ての遺物回収は出来ていない。出土状態は西側で出土する礫集中と同様に小規模にまとまって分布しており、殆どが被熱した砂岩である。

遺物(1~5)：1~3はⅢ群B1類である。1・2は同一個体で山形突起である。口唇は肥厚している。地文はLR縄文を横走気味に施している。3は横位に沈線文が施されたものである。礫石器は6点出土しており1点掲載している。4は基部に抉りが認められる黒曜石製の石鏃である。5は縦長素材を利用した、両面に2ヶ所ずつ敲打痕の認められるたたき石である。石材は砂岩である。

(1~3：天方 4・5：奈良)

#### VSB-05 (図Ⅱ-44 図版27-6)

位置：D-7 規模：196×136cm 重量：6,588g (6,962g 礫石器含む)

確認・調査：本集中はVSB-04と埋没河川を挟んだ西側に小規模な分布を示している。本集中も北側段丘縁辺部に延びることが予想されるが、崩落の恐れがあったため範囲拡張及び遺物回収は行っていない。礫石器は2点出土しているが、破片であるため掲載していない。 (奈良)

#### VSB-06 (図Ⅱ-44 図版27-8)

位置：E-12 規模：80×80cm 重量：1,986g (1,986g 礫石器含む)

確認・調査：本集中は西側の礫集中群と離れた12ラインのTP-01付近で検出している。分布範囲は非常に小規模で、被熱礫を主体とする砂岩礫がまとまって検出されている。 (奈良)

#### VSB-07 (図Ⅱ-44-50-6・7 図版28-1・38-2-36・37)

位置：E-3 規模：172×160cm 重量：3,874g (3,960g 礫石器含む)

確認・調査：VSB-03 を調査した際、北西側に分布範囲が広がることが確認されたため、予定調査区内調査終了後に西側に拡張したところVb層下位から被熱礫がまとまって出土した。他の礫集中と同様に分布範囲を確認したところ、VSB-01～03の連続した繋がりが認められなかったことから、別の遺構名を付番して遺物の取り上げを行った。礫の石材は周辺の礫集中と同じで、被熱した砂岩礫が主体である。

遺物(6・7)：礫石器は4点出土しており、2点掲載している。6・7は砥石で、6は両面に平坦な砥面が、7は片面に顕著な窪みが認められる。石材はいずれも砂岩である。(奈良)

VSB-08 (図Ⅱ-45-50-8 図版28-2-38-38)

位置：G・H-19 規模：129×55 cm 重量：1,930g (2,290g 礫石器含む)

確認・調査：Hラインのトレンチを掘削中、Vb層下位から被熱礫がまとまって出土した。トレンチ内の遺物は写真撮影後に取り上げ、メインセクション作成後ベルトを外して残りの南側範囲の確認を行った。残りの範囲は殆ど広がりが認められなかったが、微細図を作成して遺物を取り上げ調査終了とした。

遺物(8)：8は欠損している資料だが、扁平礫を素材としているたたき石で片面に浅い敲打が認められる。材質は砂岩で被熱している。(奈良)

VSB-09 (図Ⅱ-45-50-9-10 図版28-3-38-39-40)

位置：F-21 規模：327×225 cm 重量：18,010g (18,925g 礫石器含む)

確認・調査：VH-01の南側約5m地点のグリッドを掘り下げたところ、自然堤防上の高まりから旧河川の緩やかな傾斜にむけて礫がまとまって出土した。礫を残して周辺を掘り下げたところ、Vc層で遺物のまとまりが途切れたため微細図を作成して、遺物を取り上げ調査終了とした。

遺物(9・10)：9は礫岩、10は砂岩製のたたき石で片面に敲打痕が認められる。9は不整形の礫を利用したもので、10は板状礫を素材とし下半は欠損している。(奈良)

VSB-10 (図Ⅱ-45-50-11 図版28-4-39-41)

位置：G-23 規模：64×22 cm 重量：2,290g (18,925g 礫石器含む)

確認・調査：調査区東側の試掘坑16の壁面とその周辺で礫のまとまりを検出した。礫は被熱している資料が多かったことから、礫集中の可能性が高く、礫を残して下位に掘り下げて範囲を確認したのちに微細図の作成を行った。周辺には関連遺構がなく遺物を取り上げて調査終了とした。

遺物(11)：11は厚手で角状の礫を素材とする砂岩製のたたき石で、両面に敲打痕が認められる。接合資料で被熱しており敲打の影響のためか裏面の多くは剥落している。(奈良)

VSB-11 (図Ⅱ-45-50-12～14-51-15～20-52-21 図版28-5-39-42～51)

位置：A-21-22 規模：634×385 cm 重量：28,210g (42,783g 礫石器含む)

確認・調査：調査区北東隅の旧河川堆積物であるシルト層から礫石器及び礫が旧河川の傾斜に沿うようにまとまって出土した。礫の分布は当初の発掘範囲を超えて段丘崖付近まで広がったため、安全面を考慮した範囲内まで掘削を行い遺物の微細図を作成した。分布範囲と出土状態から本集中は南西の自然堤防上が主体であると考えられる。水成堆積物はシルト主体であるために殆ど停滞した沼地もしくは流れが極めて緩い環境であったと考えられる。また、集中からⅢ群B1類(Ⅱ-50-12)の口縁部と胴部片合わせて3点出土していることからVSB-11は中期の所産と考えられる。

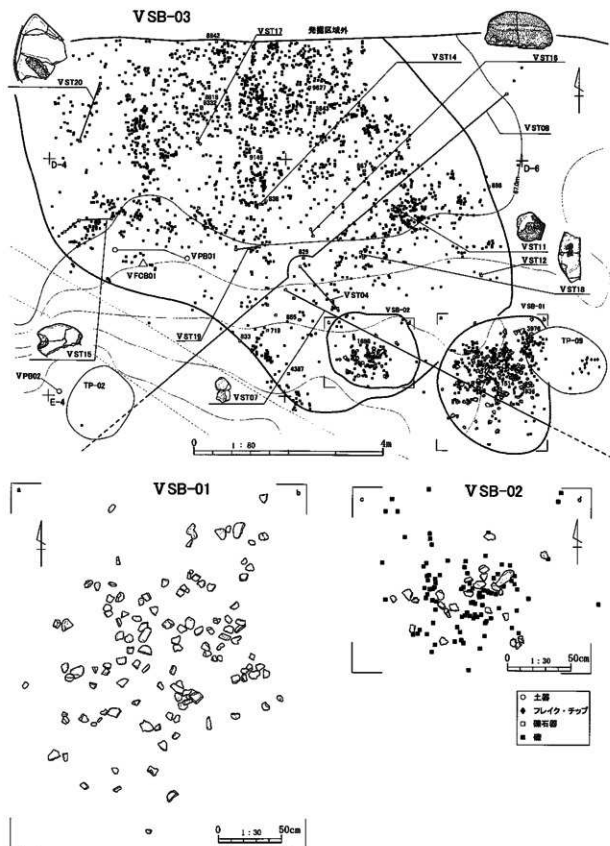
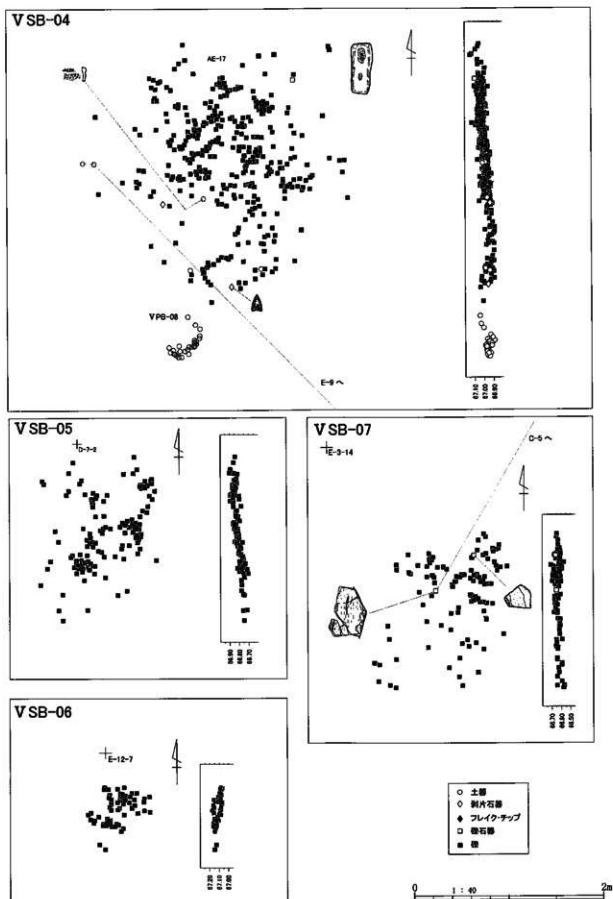
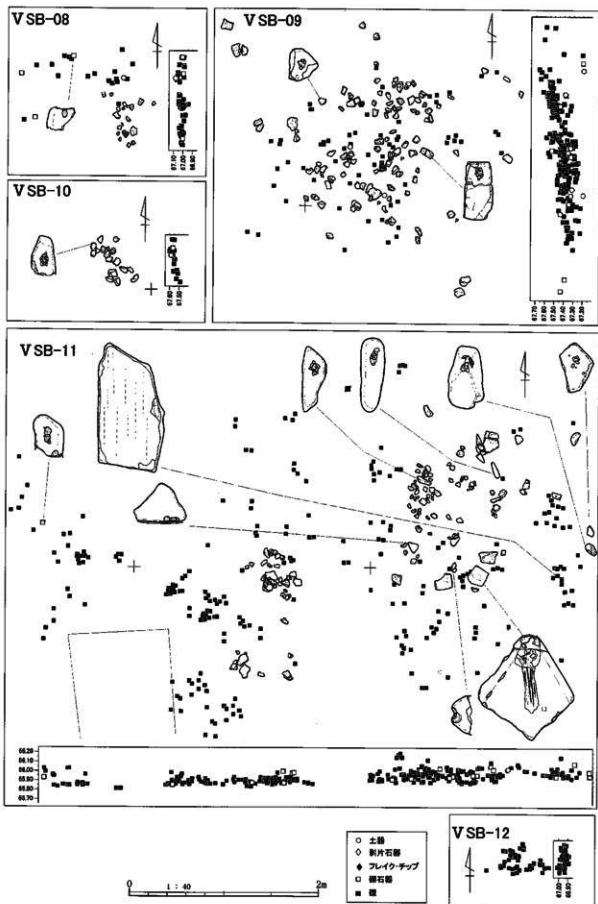


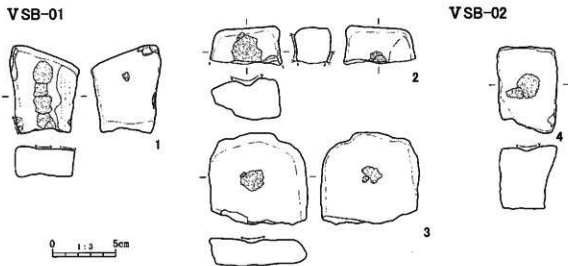
図 II-43 VSB-01 ~ 03 平面及び遺物分布図



図II-44 VSB-04～07平面及び垂直分布図



図Ⅱ-45 VSB-08～12平面図



図Ⅱ-46 VSB-01-02 出土礫石器

遺物(12~21) : 12はⅢ群B1類の口縁部片で、口唇部には半截竹管の突引文と口縁部には地文施文後、沈線文が施される。胎土には繊維を少量含んでいる。13~17は砂岩製のたたき石で、13は棒状礫を素材とし両面に敲打痕が、14は厚手の礫を素材に両面の敲打痕が認められる。15、16は厚手の不整形な礫を素材として、15は片面と側面、16は両面と側面で、側面の敲打はやや線状に認められる。17は断面三角状の不整形な礫の端部と側縁、底面に敲打痕が認められる。18はすり石と分類したもので、扁平礫を素材として側縁に長軸方向のすり面が認められる。剥離に伴う敲打痕は顕著でないことから古い段階のものと思われる。19は石錘の破片資料で長軸方向に抉りを作成している。

20・21は石皿で20は端部の敲打により上部は大きく剥離した後に縦方向のすり面が形成され、数条の線条痕も認められる。21はほぼ全面に長軸方向のすり面が認められるが、器面は平滑であるため対象物が柔らかいものであったと思われる。写真に写る黒色付着物は樹液などが還元した自然付着物であると考えられる。石材は19が片麻岩でそれ以外は砂岩製である。(奈良)

## VSB-12 ((図Ⅱ-45))

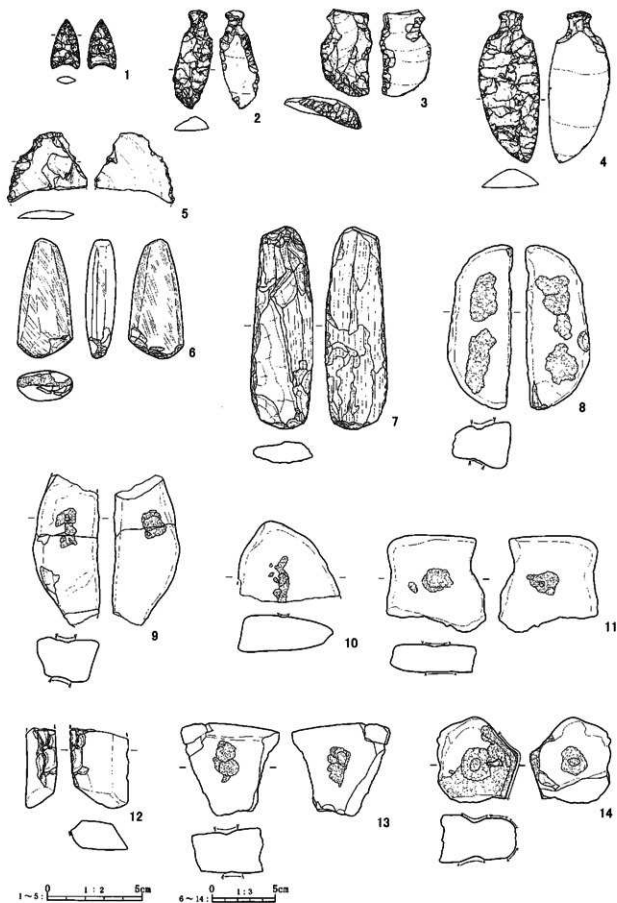
位置 : C-16 規模 : 79×36 cm 重量 : 3,510g (礫石器なし)

確認・調査 : 調査区北側縁辺部でVF-20の精査中礫のまとまりを検出した。周辺は遺物が多く出土し、範囲を確認したところ比較的小さな範囲で礫が出土した。礫は全て被熱しており、南側に検出した焼土との共存関係は本集中の方が高い位置にあるため、焼土周辺から流れ込んだ可能性は低い。礫は小片が多く写真撮影後、遺物を取り上げて調査終了とした。(奈良)

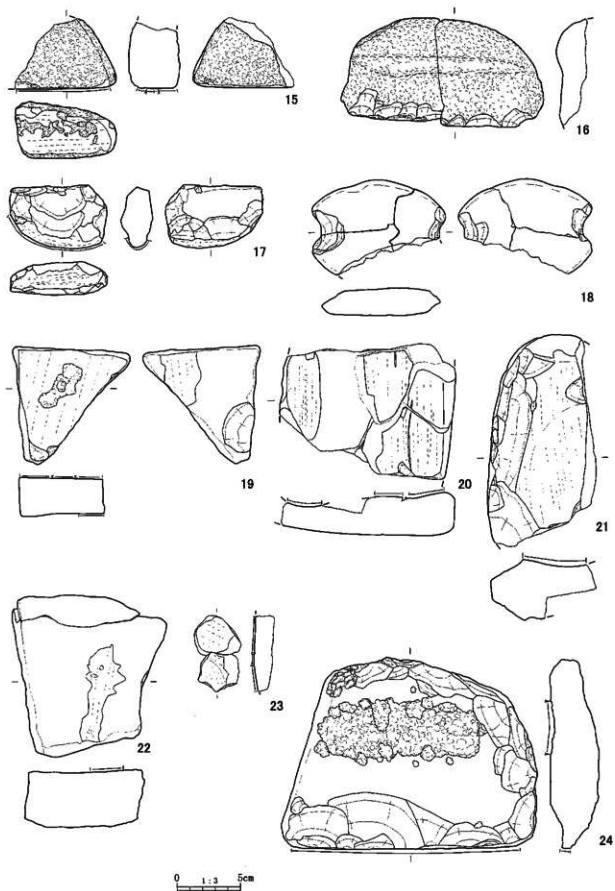
## 3. フレイク・チップ集中 (図Ⅱ-1-52-23)

フレイク・チップ集中(以下F・C集中)はVFCB-01~04の4ヶ所検出している。それぞれ範囲と写真撮影の記録を行って調査終了としている。VFCB-01はVPB-01のタブコブ式土器とほぼ同じ地点の同一レベルから出土しており、後期前葉の所産と考えられる(図Ⅱ-30に掲載)。VFCB-02-03はVPB-14の南側Vb層上位で検出しているが分布に重複はなく、共存関係は不明である。各集中の材質は01-03が緑色泥岩、02-04が黒曜石で集中内からは石器等は出土していないが、VFCB-01の出土状態から03の集中もVPB-14に伴う可能性がある。

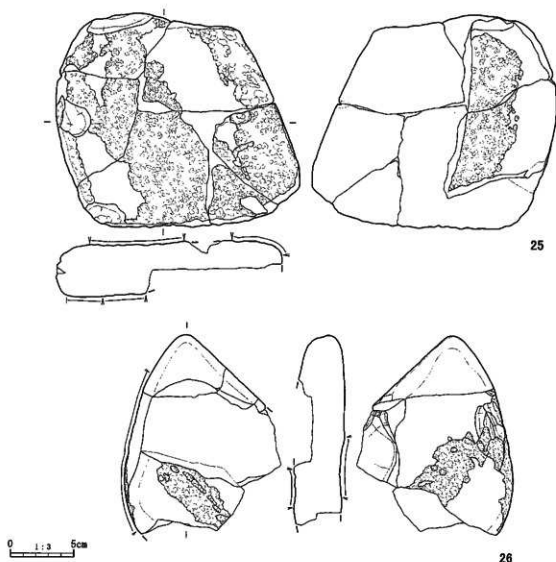




図Ⅱ-47 VSB-03 出土石器(1)



図II-48 VSB-03 出土石器(2)



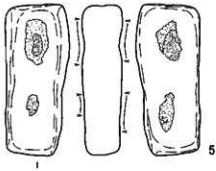
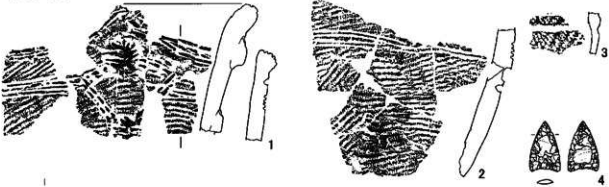
図Ⅱ-49 VSB-03 出土石器(3)

遺物(23) : 23はIV群A2類の胴部片である。胎土に砂粒、砂礫を含み、器表面がナデによる潰れで条間が広がることから本群に含め掲載している。  
(奈良)

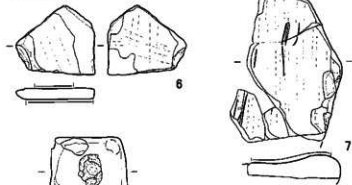
### 第6節 獣骨集中(焼骨) (図Ⅱ-52-22・53 図版カラー2-4・28-7)

本節で取り扱う獣骨集中はVBB-02・04~06・09・10の6ヶ所で焼土に伴わない焼けた獣骨の分布範囲で、厚さはいずれも1cm以下と薄く、範囲とサンプルを採取して調査終了としている。VBB-02はVF-08と20の西側約1.5m地点に検出しており、これらの焼土はいずれも焼骨片がないため検出層位からVBB-02は投棄の可能性も考えられる。VBB-04は旧河川堆積シルト層を重機で除去中に検出した。低地部分に遺構は殆ど検出されていないが、周辺からは中期と思われる土器片が1点出土しているため、中期の所産と考えられる。VBB-05は試掘坑7を掘削中、Vb層上面でIV群A2類の土器内面に焼骨片がまとまって多量に出土した。周辺には同一個体の土器片と礫が散在しており、最も集中している地点の土器片は約7m南西側に離れたVPB-21のA個体と接合している。検出時は

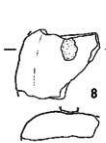
VSB-04



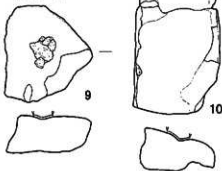
VSB-07



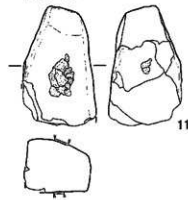
VSB-08



VSB-09



VSB-10



VSB-11

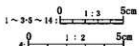
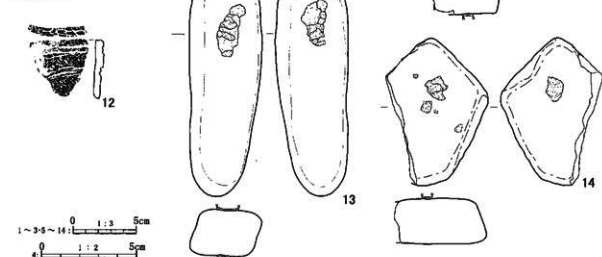
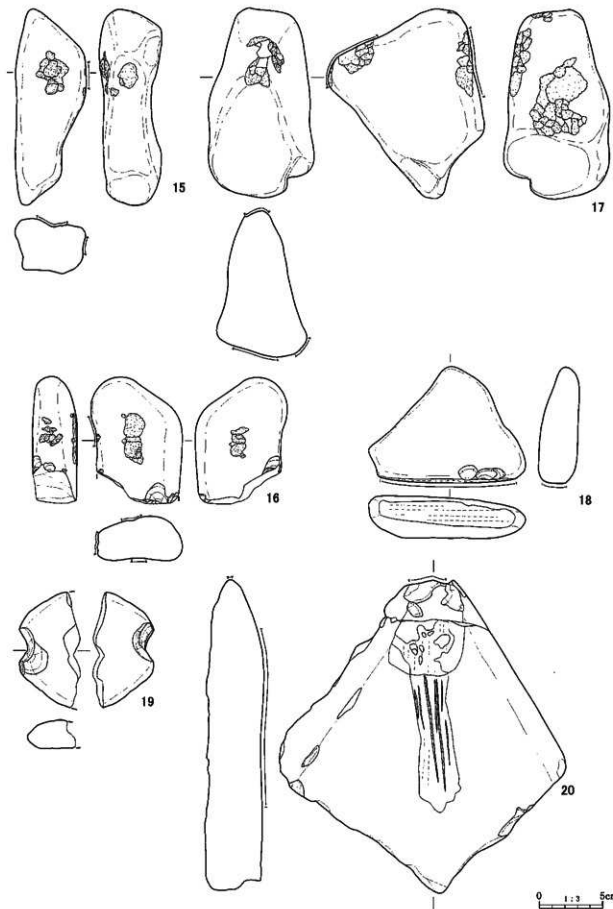


図 II-50 VSB-04-07 ~ 11 出土遺物



図II-51 VSB-11 出土遺物

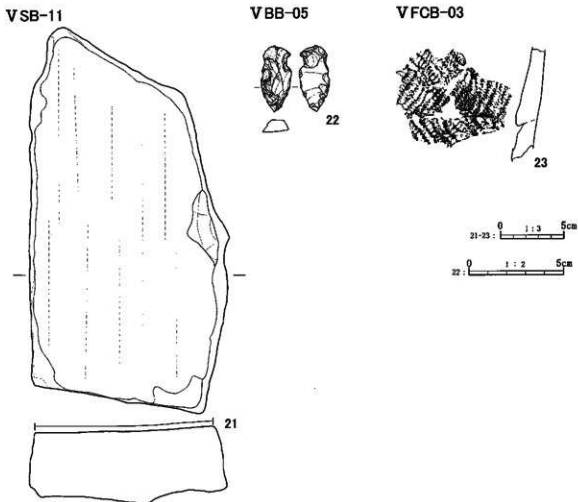


図 II-52 VSB-11・VBB-05・VFCB-03 出土遺物

表 II-19 VSB-04・VFCB-03出土土器属性表

押図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
II-50- 1	38-2- 31	JP002A	III B1	D-9	VbL	1	口縁 ~ 胴部 上半	山形突起・外傾- 丸状・肥厚/やや 外傾	突引文+肥厚帯 /貼瘤+ 半截竹管(内) 沈線文・突引文・ LR斜行縄文	繊維混入	
						7					
II-50- 2	38-2- 32	JP002C	III B1	VSB-04	VbL	2	胴部 上半	外傾	半截竹管(内) 沈線文・LR斜行縄文	繊維混入	
				E-9		4					
II-50- 3	38-2- 33	JP014A	III B1	VSB-04	VbL	1	胴部	やや外傾	沈線-LR斜行縄文	砂粒・繊維 微量混入	
II-50- 12	39-1- 42	JP149	III B1	VSB-11	VbL	1	口縁部	平縁-外削角状	突引文-LR斜行縄文 +半截竹管(内) 沈線文	砂粒・繊維 微量混入	
II-52- 23	39-1- 53	JP089	IVA2	VFCB- 03・ C-19	VbL	4	胴部	やや外傾	2段異原体羽状 縄文+弱いミガキ	砂粒小量 混入	
				VbL							

表Ⅱ-20 VPB・SB・BB出土石器属性表

押印 番号	図版 番号	個体 名称	遺物名	遺物 番号	遺物名/ グリッド	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-46-1	37-1-1	-	たたき石	1514	VSΒ-01	ⅡB1	VbU	70.0	54.0	24.0	114.0	Sa.	被熱
Ⅱ-46-2	37-1-2	-	たたき石	3936	VSΒ-01	Ⅳ	VbL	(57.0)	28.0	31.0	(71.0)	Sa.	
Ⅱ-46-3	37-1-3	-	たたき石	3976	VSΒ-01	V	VbL	77.0	72.0	23.0	187.5	Sa.	
Ⅱ-46-4	37-1-4	-	たたき石	1698	VSΒ-02	V	VbU	68.0	48.0	49.0	190.0	Sa.	被熱
Ⅱ-47-1	37-2-5	-	石 鏝	4501	VSΒ-03	A2	VbL	28.1	15.0	4.0	1.4	Obs.	
Ⅱ-47-2	37-2-6	-	つらねナイフ	866	VSΒ-03	A2	VbU	25.1	18.0	7.3	7.2	Age-Sh.	
Ⅱ-47-3	37-2-7	-	つらねナイフ	869	VSΒ-03	A2	VbU	47.9	26.8	10.5	14.0	Obs.	
Ⅱ-47-4	37-2-8	-	つらねナイフ	860	VSΒ-03	A2	VbU	80.8	32.0	10.0	25.2	Sh.	
Ⅱ-47-5	37-2-9	-	スライバー	9200	VSΒ-03	C1a	VbL	(36.0)	43.1	5.5	6.6	Sh.	
Ⅱ-47-6	37-2-10	-	石 斧	868	VSΒ-03	A	VbU	96.0	49.0	28.0	180.0	Gr-Mud.	
Ⅱ-47-7	37-2-11	-	石 斧	867	VSΒ-03	B	VbU	161.0	49.0	17.0	182.0	Sch.	未成品
Ⅱ-47-8	37-2-12	-	たたき石	8842	VSΒ-03	I A1	VbL	130.0	50.0	37.0	270.0	Sa.	
Ⅱ-47-9	37-2-13	SST18	たたき石	4274・ 4276	VSΒ-03	ⅡB1	VbL	(119.0)	52.0	33.0	(94.2)	Sa.	
Ⅱ-47-10	37-2-14	-	たたき石	9627	VSΒ-03	ⅡB1	Vc	(80.0)	70.0	29.0	(165.3)	Sa.	被熱
Ⅱ-47-11	37-2-15	-	たたき石	9643	VSΒ-03	V	Vc	79.0	76.0	22.0	210.0	Sa.	
Ⅱ-47-12	37-2-16	-	たたき石	719	VSΒ-03	ⅡB2	VbU	(65.0)	44.0	24.0	(115.0)	Mud.	被熱
Ⅱ-47-13	37-2-17	-	たたき石	4551	VSΒ-03	V	VbL	78.0	72.0	36.0	202.0	Sa.	被熱
Ⅱ-47-14	37-2-18	SST11	たたき石	779・ 4229	VSΒ-03	V	VbU・ VbL	69.0	68.0	38.0	194.1	Sa.	
Ⅱ-48-15	37-1-19	-	石 鏝	4387	VSΒ-03	D	VbL	(80.0)	(56.0)	44.0	(210.0)	Sa.	
Ⅱ-48-16	37-1-20	SST16	石 鏝片	796・ 4344	VSΒ-03	D	VbU・ VbL	160.0	87.0	(27.0)	(378.0)	Sa.	
Ⅱ-48-17	37-1-21	-	石 鏝	833	VSΒ-03	-	VbU	77.0	49.0	27.0	123.8	Sa.	
Ⅱ-48-18	37-1-22	SST15	石 鏝	697・ 698・ 4735	VSΒ-03	-	VbU・ VbL	(106.0)	70.0	23.0	(206.0)	Gin.	
Ⅱ-48-19	37-2-23	-	砥 石	9145	VSΒ-03	A	VbL	94.0	94.0	27.0	250.0	Sa.	被熱
Ⅱ-48-20	37-2-24	-	砥 石	829	VSΒ-03	A	VbU	(140.0)	108.0	39.0	(560.0)	Sa.	
Ⅱ-48-21	38-1-25	-	砥 石	865	VSΒ-03	A	VbU	(168.0)	(96.0)	48.0	(650.0)	Sa.	
Ⅱ-48-22	38-1-26	-	砥 石	838	VSΒ-03	B	VbU	129.0	122.0	46.0	880.0	Sa.	
Ⅱ-48-23	38-1-28	SST07	砥 石	827・ 4310	VP-01・ VSΒ-03	B	3・VbU	(60.0)	(38.0)	(19.0)	(39.0)	Sa.	
Ⅱ-48-24	38-1-27	半円状磨石打削り跡		9332	VSΒ-03	-	VbL	201.0	154.0	39.0	1600.0	Sa.	
Ⅱ-49-25	38-1-29	-	台 石	8818-2	VSΒ-03	-	VbL	193.0	169.0	43.0	1310.0	Sa.	
Ⅱ-49-26	38-1-30	SST20	台 石	9535・ 9826	VSΒ-03	-	Vc	(158.0)	126.0	40.0	(750.0)	Sa.	
Ⅱ-50-4	38-2-34	-	石 鏝	3147	VSΒ-04	A2	VbL	26.6	16.3	3.4	1.3	Obs.	
Ⅱ-50-5	38-2-35	-	たたき石	3139	VSΒ-04	I B1	VbL	120.0	51.0	31.0	335.0	Sa.	
Ⅱ-50-6	38-2-36	-	砥 石	8660	VSΒ-07	B	VbL	61.0	53.0	8.0	40.0	Sa.	被熱
Ⅱ-50-7	38-2-37	SST08	砥 石	7520・ 8677	VSΒ-07 -C-5	A	VbL	(122.0)	(90.0)	18.0	(197.0)	Sa.	
Ⅱ-50-8	38-2-38	-	たたき石	17287	VSΒ-08	Ⅳ	VbL	(55.0)	(62.0)	(21.0)	(95.0)	Sa.	被熱
Ⅱ-50-9	38-2-39	-	たたき石	22624	VSΒ-09	V	Vc	78.0	68.0	30.0	205.0	Con.	
Ⅱ-50-10	38-2-40	-	たたき石	22682	VSΒ-09	I B1	Vc	138.0	67.0	32.0	330.0	Sa.	
Ⅱ-50-11	39-1-41	VST61	たたき石	23425・ 23427	VSΒ-10	ⅡB2	Vc	(92.0)	55.0	43.0	(260.0)	Sa.	被熱
Ⅱ-50-13	39-1-43	-	たたき石	25017	VSΒ-11	I A2	Vc	176.0	58.0	37.0	630.0	Sa.	
Ⅱ-50-14	39-1-44	-	たたき石	26725	VSΒ-11	ⅡB1	Vc	116.0	(77.0)	37.0	(420.0)	Sa.	
Ⅱ-51-15	39-1-45	-	たたき石	25043	VSΒ-11	ⅡB3	Vc	156.0	56.0	40.0	475.0	Sa.	
Ⅱ-51-16	39-1-46	-	たたき石	24658	VSΒ-11	ⅡB3	Vc	(95.0)	68.0	34.0	(340.0)	Sa.	
Ⅱ-51-17	39-1-47	-	たたき石	26724	VSΒ-11	ⅢB1	Vc	147.5	81.0	70.5	1210.0	Sa.	
Ⅱ-51-18	39-1-48	-	すり石	25080	VSΒ-11	-	Vc	95.0	123.0	30.0	390.0	Sa.	
Ⅱ-51-19	39-1-49	-	石 鏝	25079	VSΒ-11	-	Vc	(92.0)	46.0	23.0	(135.0)	Gni.	
Ⅱ-51-20	39-1-50	VST58	石 皿	25066・ 25088	VSΒ-11	-	Vc	240.0	193.0	45.0	2850.0	Sa.	
Ⅱ-52-21	39-1-51	-	石 皿	25211	VSΒ-11	-	Vc	288.0	159.0	57.0	3500.0	Sa.	黒色付着物
Ⅱ-52-22	39-1-52	-	つらねナイフ	12297	VBB-05	A1	VbU	35.0	16.0	7.4	3.9	Obs.	

土器の中に焼骨片を入れたものが押し潰されたと考えたが、接合関係からもともと大きく割った土器片の上に焼骨をのせた状態で廃棄されていたもので、土器を受け皿の様に使用していた可能性も考えられる。VBB-09はVF-10の西側約1m地点に検出され、この焼土上面には同様の焼骨範囲が認められるため、同時期のものと考えられる。VBB-06・10はVH-01の南西側掘り上げ土縁辺部に検

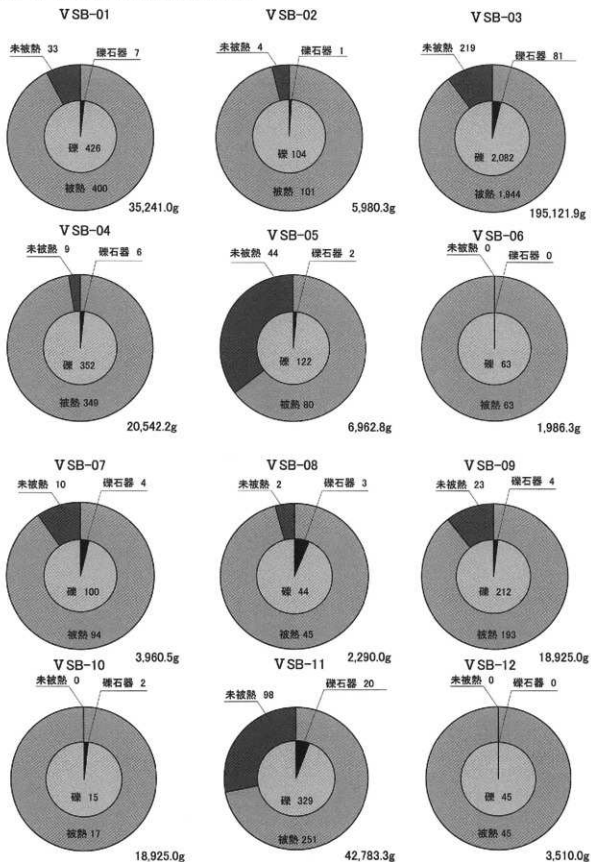
出され、住居内の石組炉に灰層が認められなかったために、掻き出した灰部分と考えられる。焼骨片の同定結果はVBB-05が哺乳綱(135, 35g)、06がシカ末節骨、(22.25g)、09が哺乳綱(0.57g)、10が哺乳綱(4.76g)である。

表II-21 縄文時代燧石重量一覧表

グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)
A-21	4175.0	E-2	23862.0	G-8	8040.0	K-12	97.0	VH-01	33945.0
A-22	105.0	E-3	10700.0	G-10	4580.0	K-13	880.0	TP-01	2220.0
A-18	465.0	E-4	6587.0	G-12	1960.0	K-16	130.0	TP-28	130.0
A-19	1730.0	E-5	8360.0	G-13	15280.0	K-18	710.0	VP-03	4060.0
A-20	8705.0	E-6	14260.0	G-14	3840.0	K-19	2330.0	VP-10	900.7
A-21	9403.0	E-7	9559.0	G-15	730.0	K-20	1705.0	VP-11	395.0
A-22	1125.0	E-8	7160.0	G-16	8495.0	K-21	4095.0	VP-12	6318.0
B-14	5020.0	E-9	2080.0	G-17	11805.0	K-22	1040.0	VP-18	2712.0
B-15	2120.0	E-10	7380.0	G-18	9562.0	K-23	1650.0	VP-19	370.0
B-16	4863.0	E-11	9040.0	G-19	16345.0	K-24	6228.0	VP-02	900.0
B-17	40655.0	E-12	1800.0	G-20	30015.0	K-25	4680.0	VF-07	5140.0
B-18	34679.0	E-13	6900.0	G-21	6930.0	L-16	645.0	VF-10	2580.0
B-19	6430.0	E-14	4328.0	G-22	4000.0	L-17	25.0	VPB-12	1257.0
B-20	124415.0	E-15	18535.0	G-23	7265.0	L-18	395.0	VPB-16	20.0
B-21	16205.0	E-16	42109.0	G-24	10628.0	L-19	270.0	VPB-17	720.0
B-22	8820.0	E-17	6150.0	G-25	870.0	L-20	325.0	VPB-18	965.0
C-1	6200.0	E-18	16825.0	H-16	7300.0	L-21	2850.0	VPB-20	1610.0
C-2	840.0	E-19	11120.0	H-17	1980.0	L-22	1135.0	VPB-21	1125.0
C-3	2738.0	E-20	22615.0	H-18	13325.3	L-23	815.0	VPB-24	180.0
C-4	6440.0	E-21	7175.0	H-19	18005.9	L-24	5325.0	VPB-25	3645.0
C-5	8520.0	E-22	9100.0	H-20	4927.5	M-14	4540.0	VPB-26	5.0
C-6	16340.0	E-23	15382.0	H-21	8915.0	M-15	560.0	VSB-01	27111.1
C-13	15580.0	E-24	2495.0	H-22	14525.0	M-16	160.0	VSB-02	5790.3
C-14	5160.0	F-5	400.0	H-23	6000.0	M-17	495.0	VSB-03	169915.9
C-15	8180.0	F-6	5280.0	H-24	5195.0	M-19	1005.0	VSB-04	19227.9
C-16	31025.0	F-7	4260.0	H-25	1015.0	M-20	380.0	VSB-05	6587.6
C-17	9635.0	F-8	2725.0	I-16	5735.0	M-21	340.0	VSB-06	1986.3
C-18	5820.0	F-9	340.0	I-17	2970.0	M-22	5615.0	VSB-07	3846.8
C-19	9645.0	F-10	1780.0	I-18	4735.0	M-23	300.0	VSB-08	1930.0
C-20	37882.0	F-11	8800.0	I-19	8930.0	M-24	2175.0	VSB-09	18010.0
C-21	9460.0	F-12	2420.0	I-20	6000.0	N-15	3580.0	VSB-10	2290.0
C-22	3530.0	F-13	2120.0	I-21	11555.0	N-22	320.0	VSB-11	28210.0
D-1	7898.0	F-14	294.0	I-22	19435.0	N-23	1755.0	VSB-12	3510.0
D-2	12517.0	F-15	15040.0	I-23	4295.0	O-14	40.0	VFCB-02	3.0
D-3	11860.0	F-16	3773.6	I-24	11930.0	O-15	77.9	VFCB-03	430.0
D-4	9690.0	F-17	31343.8	J-16	2902.0	O-19	40.0	VBB-05	13065.0
D-5	5500.0	F-18	33469.4	J-17	95.0	O-20	140.0	VBB-06	675.0
D-6	21405.0	F-19	7360.8	J-18	1985.0	O-22	175.0	VBB-07	7513.0
D-7	15140.0	F-20	13745.0	J-19	2910.0	O-23	800.0	VBB-08	470.0
D-8	9710.0	F-21	8081.2	J-20	2270.0	P-15	660.0		
D-9	37510.0	F-22	8870.0	J-21	12130.0	TR-01	11385.0		
D-10	10180.0	F-23	3765.0	J-22	5121.0	TR-02	830.0		
D-11	20450.0	F-24	19960.0	J-23	13850.0	TR-05	3435.0		
D-12	3920.0	F-25	17717.0	J-24	1840.0	TR-18	30.0		
D-13	5600.0			J-25	1095.0	表様	7671.0		
D-14	18940.0								
D-15	17935.0							小計	379,769.6
小計	653,665.0	小計	455,064.8	小計	341,316.7	小計	82,038.9	合計	1,911,855.0



表 II-22 VSB 出土礫石器・礫比率円グラフ





図Ⅱ-53 VBB-01・02・04・05 平面及び遺物分布図

遺物(22) : 22はVBB-05から出土した基部に転礫面を残す片面調整のつまみ付きナイフで、背面右側縁に連続して微細刺離が認められる。つまみ部の作出は背面左側に礫皮部分にあたり、剥離調整段階で大きく割れて挟りがあるように見えるが、調整されていない。(奈良)

## 第7節 包含層出土遺物

### 1. 土器 (図Ⅱ-54~56 図版40・41)

土器は遺構出土のものを含めて10,430点が出土している。時期は縄文時代中期中葉〜後期前葉のものが出土しており、内訳はⅢ群A2類436点、Ⅲ群B1類921点、Ⅳ群A1類781点、Ⅳ群A2類5,538点、Ⅳ群B1類2,514点、Ⅳ群の内細片で細分ができなかったもの240点である。Ⅳ群A2類及び、Ⅳ群B1類のタブコブ式は土器片の一つ一つが非常に小さいため、出土点数が多くなっているため出土点数から個体数等を比較することはできない。整理作業時の個体識別からの分類毎の最小個体数はⅢ群A2類10点、B1類21点、Ⅳ群A1類12点、Ⅳ群A2類78点、Ⅳ群B1類5(8)点、Ⅳ群4点である。 (奈良)

#### Ⅲ群A2類土器(3~6・15)

中期中葉の円筒上層c式(サイベ沢、VI式)に相当するものである。本類は16ラインより東側で、調査区北側半分の高約67mの平坦面に主な分布を示している。以下、属性毎に記載する。

器種は口縁部と底部を掲載しているが、本類出土の土器は全て深鉢と思われる。器形は口縁部が大きく外反する突起をもつもの(3・4)と平縁のものがともに出土している。口唇部形状は全て丸〜尖状で、僅かに肥厚帯が認められるものもある(6)。底部は張り出しが見られ、平底である(15)。文様は口唇部に沿うもの(3・4)、コイル状(5)、鋸歯状(6)の貼付文が認められ、貼付文上に施される工具は燃糸圧痕文(3・5)が殆どで、棒状工具による刻み(4)も認められる。(6は剥落のため不明)。口縁部文様帯に地文が認められるのは羽状縄文が施される1個体(5)のみで、底部は単節斜行縄文である。内面は全て光沢があり平滑になっているためミガキ調整と思われる。また、底部変換点も横方向のミガキ調整が施される。

#### Ⅲ群B1類土器(1・7~14・16)

中期後半の萩ヶ岡1・2式、天神山式(萩ヶ岡3式)に相当するものである。本類は調査区北側の標高66.7~67.1mの平坦面からの出土が殆どである。以下、属性毎に記載するが遺跡全体の特徴を把握するために、一部遺構掲載のものについても触れている。

器種：復元個体は1個体が得られており(1)、深鉢形の土器である。それ以外は破片であるが、いずれも深鉢形土器と思われる。

器形：遺構出土のものを含めると棒状突起(7・8・11・12)のものが共に見られる。口唇部の断面形はすべて肥厚している(7~12)。底部はすべて平底で、底部側面は張り出している(16)。

文様：口唇や貼付帯上に施される工具には半截竹管状のもの(7・8・12)が大半で、縄の圧痕のもの(7)は一例のみである。地文は単節斜行縄文(8・9・11・12・14)、結束第1種斜行縄文(Ⅱ-38-15・16)、結束第1種羽状縄文(7・10・13・16)、複節斜行縄文(Ⅱ-37-10・11)がある。最も多いのは単節斜行縄文のもので、次に結束第1種羽状縄文、結束第1種斜行縄文である。複節斜行縄文のものは図示したものも含め2個体のみ出土である。内面に縄文の施されているものは11の一例のみである。

内面調整：光沢があり、平滑になっているもの(Ⅱ-37-10・11、Ⅱ-38-15・16、Ⅱ-50-1・2)があり、ミガキ調整と思われる。その他の大半のものはナデ調整と考えられる。

胎土：すべて繊維を含むが、混入量は少ない。

#### Ⅳ群A1類a種土器(18~25)

後期初頭の糸市式土器で、古手のものである。遺構出土のものを含めても11個体のみ出土であ

る。器種はいずれも深鉢で、器形は口縁部に幅の狭い貼付帯が付されるもの(18・22・23)と19は剥落のため不明である。文様は口唇にナデ調整を行って平滑にしているもの(18・23)、縄文を施文するもの(22)があり、貼付帯上の施文は縄文を転がすものが主体(18・22)で、指頭によるナデ調整されるものもある(23)。口縁部貼付帯下には地文縄文後に円形刺突を施すものが主体で(19・22・23)、18は口唇横の貼付帯直下は無文帯となっており、その下の貼付帯は地文施文後に貼り付けている。22は段上積み上げが認められるが、円形刺突文を有することから本類に含めている。19～21は同一個体で胴部下半は羽状縄文に貼付帯が、23～25も同一個体で24は結縛痕と思われる線条痕が残り、25は上段無節の異原体羽状縄文である。胎土は次の型式のタブコブ式に見られる円礫の混入は見られなく、23～25は石英を含む富良野盆地系土器で、全体で8点しか出土していない。

#### IV群 A1 類 d 種土器(17)

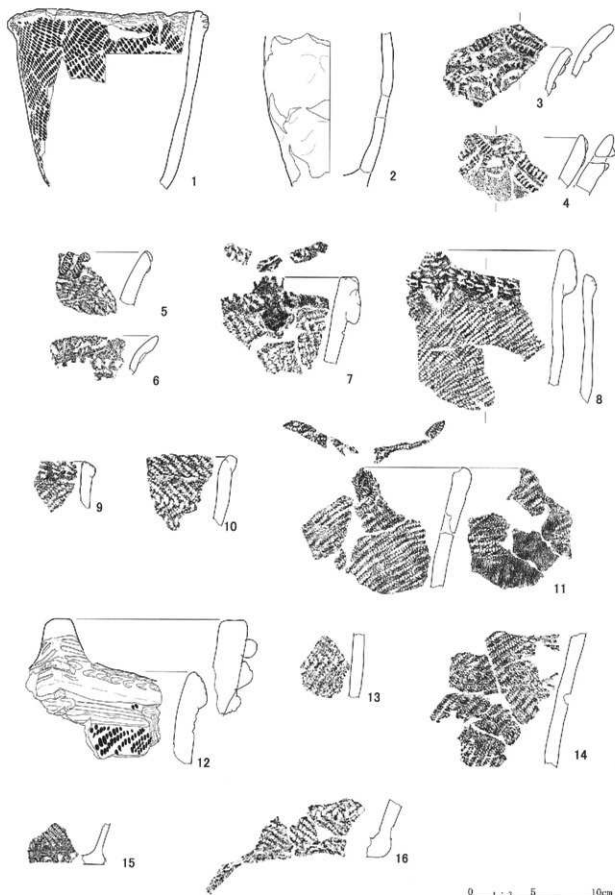
後期初頭に位置する北筒Ⅲ式土器に相当する土器で、本類は町内初出土となる。出土点数は6点と少なく、搬入品と考えられる。器種は口縁部のみであるが深鉢と思われ、器形は平縁で口唇部はナデ整形され、幅広の肥厚帯と、縦方向の貼付帯が付される。貼付帯の数は破片であるため不明だが、4～5個付されていたものと考えられる。文様については肥厚帯に貼付帯(縦)を付して羽状縄文を施文し、貼付帯には縄線文を施している。縦位貼付帯の頂部には円形刺突文が、胴部に地文縄文が施される。縄文は菱形状で深く整然と並び、道東で出土する地文に類似している。胎土は砂礫以外に沸石が少量混入し、後述するタブコブ式土器とは若干異なる。

#### IV群 A2 類土器(26～42)

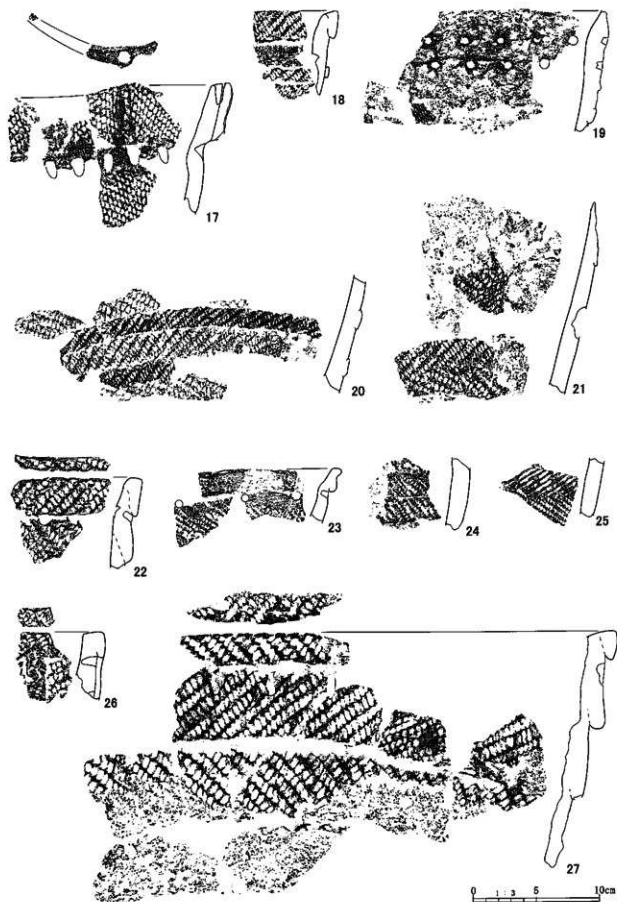
新手の余市式、及びタブコブ式の古手のものである。本類は平成23年度の調査からは主体的に出土した土器群で、標高66.0～66.5mの一段低い平坦面から多く出土しているが、集中個体の中には標高67.5mの1段高い面からも出土している。この1段低い平坦面はⅢ群 B1 類の頃は完全には離水していなかった場所である。26～36は口縁部片で、口唇直下に貼付帯が付くもので、36以外はその直下に、縄による刺突文が施されるものである。26は縦方向に垂下する貼付帯も施される。37・38は幅の広い貼付帯が付くもので、破片からは刺突文は認められない。口唇部断面形状は隅丸の角状が殆どで、全て口唇部に縄文が施されている。39・40は階段状の器表面を呈する胴部片である。施文手順は段毎に縄文原体を変え、羽状縄文となり縄文が輪積み部分で重なり合うことから縄文施文後に段を重ねていることが分かる。40は図Ⅱ-29-1と同一個体片で、残存部から非常に大型の土器であったと考えられる。41は地文が複節の胴部片で、同一個体の観察から本類に含めている。42は無文の底部平底で、器表面はナデ調整のみであるが、胎土の観察から本類に含めている。胎土は35以外はバミスが混入し、円礫、砂礫が多く含まれているため器表面及び内面の剥落が著しい。IV群 B1 類のように円礫を含むものは集計していないが半数ほどである。

#### IV群 B1 類土器(43)

新手のタブコブ式土器である。遺構出土を含めて最小個体数は5個体程と少ないが、その分布はIV群 A2 類とは大きく異なり、Ⅲ群 B1 類と似ている。43は口縁部がやや内湾し、縦位の棒状貼付帯部分で小突起となっている。口唇の断面形は内削ぎの角状である。棒状貼付帯には縄線文が施されている。地文は羽状縄文となっており、施文後のナデ調整によって条間は潰れている。口唇及び口縁部の内面に施される縄文も施文後にナデ調整が施されている。胎土はバミス・円礫を多く含む。



図II-54 包含層出土土器(1)



図II-55 包含層出土土器(2)

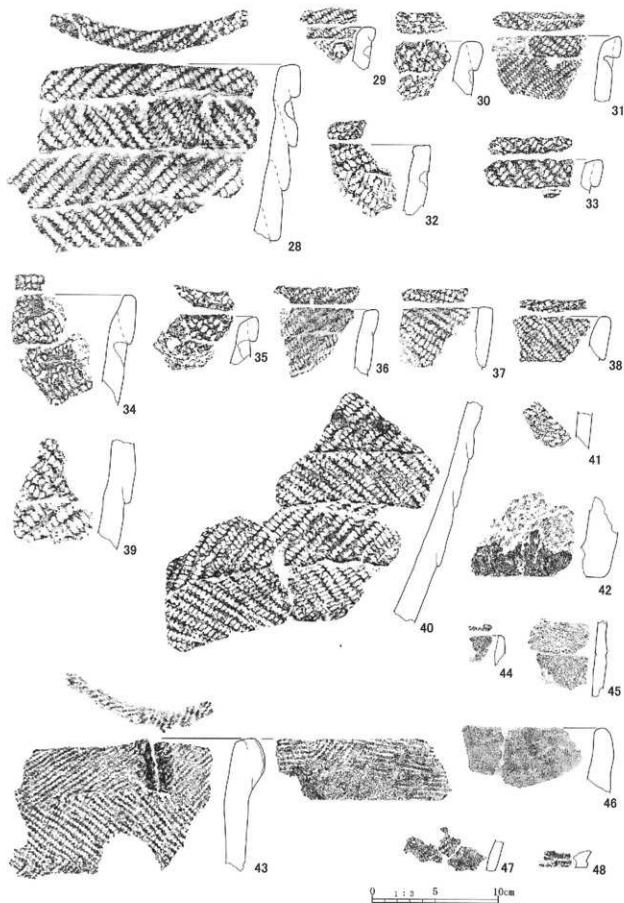
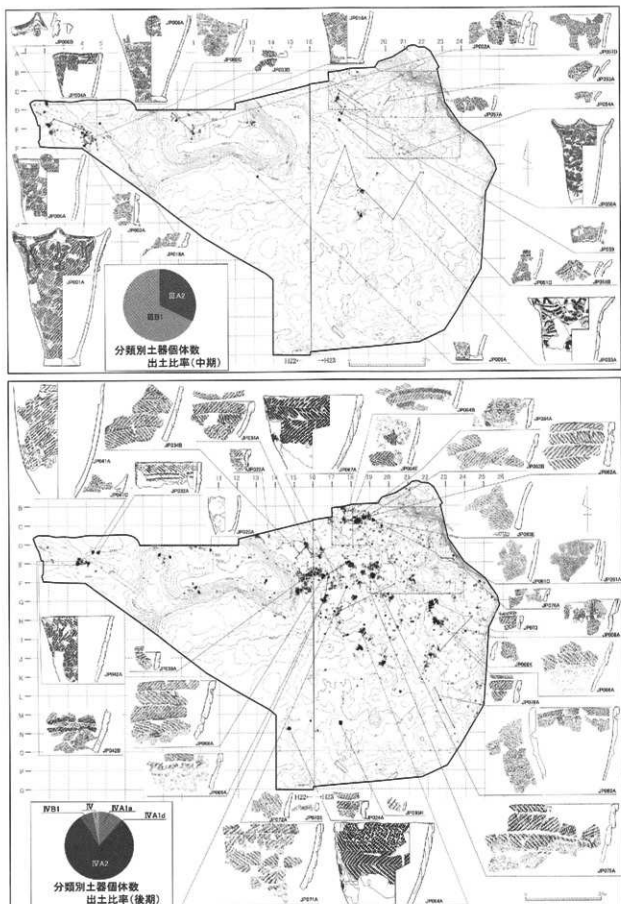


図 II-56 包含層出土土器(3)



図II-57 時代別遺物接合線図(上段:縄文時代中期 下段:縄文時代後期)



## IV群土器(2・44~48)

2・47・48は同一個体片である。小型の深鉢形土器で47にLRの斜行縄文が僅かに施されているが、ほぼ無文となっている。口縁部は欠損しているが、残存部から口縁は内湾していたと思われる。胎土はIV群A2類、B1類と同様にパミス・円礫を多く含むもので、胎土からこの時期のものと考えられるが、文様等から細分することができないため、分類をIV群までで留めている。但し、分布傾向から考えると、IV群B1類に伴うものと思われる。近隣の苫小牧市静川37遺跡の8号住居跡からタブコブ式相当の土器として類似の土器が出土している。(苫小牧市教育委員会 1991) 44・45は器表面を剥落しているが同一個体片で、44は口唇部に僅かな縄文が施されているが風化が著しいため不明瞭である。この資料は胎土に蛇紋岩を含み、器面全体に滑りが認められ、今回出土した土器の中でも6点と少ないため客観的に入ってきたものと考えられる。46は2と同じく無文土器であるが、胎土は小礫などを多く含まず、器面は滑らかであるが、文様がないため細分できず本類に含めている。

(天方・奈良)

## 2. 剥片石器(図Ⅱ-58・59 図版42・43)

包含層からは剥片石器316点出土し、59点掲載している。総数では348点出土し、内訳は石鏃75点、石槍85点、分類不明ポイント類18点、石錐9点、つまみ付きナイフ24点、スクレイパー56点、石核10点、R・F、U・Fなど71点である。出土した器種ではポイント類が178点と多く出土する傾向にあるが、器種に偏りは認められない。石材は黒曜石主体であるが、つまみ付きナイフは頁岩製が16点と多い。掲載した石核はメノウ質頁岩であるが、同一石材を用いた剥片石器は認められない。以下に器種ごとに詳細を示す。

石鏃(1~19): 1はA1に相当し五角形を呈しており、掲載したものが唯一の出土資料でVI層から出土している。2~5はA2に相当し、3は両面に素材面を残置しており薄い剥片素材を用いていたことが分かる。5は基部の抉りが明瞭となり平行剥離で丁寧に作出されている。6~12はA3に相当し、6~8は最大幅から基部にむかってノッチ状の調整も見られるため本類に含めている。11は刃部に古い剥離面と、刃部調整が粗雑であることから再利用の可能性も考えられる。なお、基部には転離面が残置している。13~19はA4相当で、棒状(13~16)、菱形状(17・18)、木葉状(19)に分かれる。13は先端に摩滅はないが両側縁に潰れが認められることから石錐として転用された可能性も考えられる。出土層位はVbU~L層が主体で縄文後期前葉に所属すると考えられる。19は尖頭部を作出していないため、未成品または両面調整石器の可能性も考えられる。石材は3・5が頁岩、それ以外は黒曜石製である。

石槍(20~38): 20~22はB1aに相当し、基部のかえしは鈍角で左右非対称である。23~26はB1bに相当し基部を丸へ尖状に整形している。26は主に背面のみ微細剥離が施され、腹面は素材面が残る湾曲しているため、未成品もしくはスクレイパーとしての機能が考えられる。27は基部にノッチが認められる資料でB1cに相当する。入念な平行剥離で基部を作出しているが、尖頭部を折損している。本資料は1点のみでVc層から出土している。23~38はB2に相当し、最大幅から両端がほぼ上下対称になる菱形状~木葉状をしている。29は最大幅より上端部に新しい剥離が認められ尖頭部を作出しているのが分かる。32は腹面左を折損した後平坦面から剥離を進めているが整形が粗雑である。33~38は最大幅が中央から下端部もしくは不明瞭なもので、棒状を呈している。石鏃に分類したA4と同様の形態を示し、殆どがVbU~L層で出土している。33は尖頭部付近では紡錘状にな

表Ⅱ-23 包含層出土土器属性表(1)

採出 番号	図版 番号	個体 名称	分類	グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考			
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面					
Ⅱ-54- 1	40-1-1	JP004A	ⅢB1	D-2	VbU	2	口縁部 ~ 胴部 下半	平縁・外傾・外削角 状・肥厚/外傾	肥厚帯+半截竹管 (内)刺突文/ LR斜行縄文	繊維砂粒 少量混入				
												E-4	VbL	1
													VbU	9
Ⅱ-54- 2	40-1-2	JP025A	ⅣB	D-10	VbU	13	胴部上 ~ 下半	上半:やや内傾 下半:外傾	無文	砂粒少量 混入				
Ⅱ-54- 3	40-1-3	JP053A	ⅢA2	C-19-C- 20	VbU	2	口縁部	山形突起・外反 -隅丸角状	貼付文+刻み-ミガキ	砂粒少量・繊維 極少量混入				
Ⅱ-54- 4	40-1-4	JP052A	ⅢA2	E-20	Vc	2	口縁部	山形突起・外反 -尖状	貼付文+燃糸圧痕・ 円形刺突文-ミガキ	砂粒少量・繊維 極少量混入				
Ⅱ-54- 5	40-1-5	JP143	ⅢA2	C-20	Va	1	口縁部	平縁・外傾・外削 隅丸角状	貼付文(コイル状)+燃 糸圧痕文・異原体 羽状縄文-ミガキ	砂粒中量混入				
Ⅱ-54- 6	40-1-6	JP054A	ⅢA2	F-20	Vc	2	口縁部	平縁・外反・肥厚 -尖状	肥厚帯+貼付文(歯 状)刻み-刺突文/ 縄縁文-ミガキ	砂粒少量・ 繊維極少量 混入				
Ⅱ-54- 7	40-1-7	JP007A	ⅢB1	E-3	VbU	1	口縁部	棒状突起・やや 外傾-隅丸角状 ・肥厚	縄圧痕文-貼付文 +貼付文+縄圧痕文 ・結束第1種羽状縄文	繊維少量・軽石 (φ1~3) 微量混入				
Ⅱ-54- 8	40-1-8	JP008A	ⅢB1	D-1	VbU	3	口縁 ~ 胴部	棒状突起・やや外傾 -外削角状 ・肥厚/やや外傾	肥厚帯+半截竹管 (内)刺突文・LR斜行縄 文/LR斜行縄文	繊維少量・チヤ ート(φ3~5) 微量混入				
Ⅱ-54- 9	40-1-9	JP013A	ⅢB1	E-2	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾 -外削角状・肥厚	肥厚帯+半截竹管 (内)刺突文- LR斜行縄文	繊維少量 混入				
Ⅱ-54- 10	40-1- 10	JP012A	ⅢB1	C-1	VbU	1	口縁部	平縁・外傾~ 隅丸角状・肥厚 /やや外傾	RL縄文・肥厚帯 +RL斜行縄文/ 結束第1種羽状縄文	繊維混入				
Ⅱ-54- 11	40-1- 11	JP017A	ⅢB1	E-2	VbU	5	口縁 ~ 胴部 上半	棒状突起・ 隅丸角状・外傾 /外傾	LR斜行縄文-LR斜行 縄文-LR斜行縄文 /LR斜行縄文	繊維少量 混入				
Ⅱ-54- 12	40-1- 12	JP056A	ⅢB1	B-18	VbL	4	口縁~ 胴上部	棒状突起・やや外傾 -丸状(突起角状) ・肥厚/やや外傾	突起;貼付文・貼瘤+ 半截竹管沈線文(内) 口縁;肥厚+半截竹管 刺突文・沈線文(内) ・LR斜行縄文	砂粒中量 混入				
Ⅱ-54- 13	40-1- 13	JP019A	ⅢB1	D-13	VbL	1	胴部	やや外傾	第1種結束羽状縄文	繊維少量混入				
Ⅱ-54- 14	40-1- 14	JP017B	ⅢB1	E-2	VbU	3	胴部	やや外傾	LR斜行縄文	繊維少量混入				
Ⅱ-54- 15	40-1- 15	JP144	ⅢA2	J-24	VI	1	底部	外傾-張り出し- 平底	RL斜行縄文 -弱ミガキ	砂粒少量・ 繊維極少量 混入				
Ⅱ-54- 16	40-1- 16	JP018A	ⅢB1	D-4	VbL	3	底部	やや外傾-丸状 -平底	結束第1種羽状縄文	繊維混入				
Ⅱ-55- 17	40-1- 17	JP058A	ⅣA1d	G-24-I- 22-23	Va VbU VbL	4	口縁~ 胴上部	平縁・やや外傾- 角状・肥厚/直立	ミガキ・円形刺突文-肥 厚帯+貼付帯(縦)+ 縄縁文+異原体羽状 縄文・無文帯+刺突文 /RL斜行縄文	角~歪角種 多量混入				

表Ⅱ-24 包含層出土土器属性表(2)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅱ-55-18	40-1-18	JP022A IVA1a		C-13	VbL	2	口縁部	平縁・やや外傾- 内削角状	貼付帯1+LR斜行 縄文・無文/貼付帯2 +LR斜行縄文 ・RL斜行縄文	砂粒少量 混入	
Ⅱ-55-19	40-1-19	JP084A IVA1a		B-18	VbU VbL	3	口縁~ 胴部	平縁・やや外傾 /やや外傾	剥落-円形刺突文 -ミガキ/LR斜行縄文	砂粒中量・歪円 礫中量混入	
Ⅱ-55-20	40-1-20	JP084B IVA1a		B-17・18	VbU VbL	7	胴部	やや外傾	貼付帯2・2段異原体 羽状縄文-ミガキ	細粒砂中量・ 歪円礫少量 混入	
Ⅱ-55-21	40-1-21	JP084E IVA1a		B・D-18	VbU	3	胴部	やや外傾	貼付帯2・2段異原体 羽状縄文-ミガキ	砂粒砂中量・ 歪円礫少量 混入	
Ⅱ-55-22	40-1-22	JP078A IVA1a		K-22・M- 23	VbU	2	口縁~ 胴部	平縁・やや外傾 -隅丸角状	LR斜行縄文-貼付帯1 +LR斜行縄文・円形刺 突文/段状積み上げ+ RL斜行縄文	砂粒中量・ 軽石(φ1) 少量混入	
Ⅱ-55-23	41-1-23	JP076A IVA1a		D-22・23	VbL Vc	3	口縁部	平縁・外傾- 隅丸角状	貼付帯1・RL斜行縄文・ 無文帯+円形刺突文・ RL斜行縄文 -器いミガキ	砂粒中量・ 石英多量 混入	富良野 盆地系
Ⅱ-55-24	41-1-24	JP076B IVA1a		D-22	VbU	1	胴部	やや外傾	RL斜行縄文	砂礫中量・ 石英多量 混入	富良野 盆地系
Ⅱ-55-25	41-1-25	JP076C IVA1a		D-23	VbL	1	胴部	やや外傾	異原体羽状縄文・ (無節・RL斜行縄文)	砂礫中量・ 石英多量 混入	富良野 盆地系
Ⅱ-55-26	41-1-26	JP079 IVA2		N-22	Vc	1	口縁部	平縁・直立-角状	RL斜行縄文-貼付1・貼 付帯(縦)・RL羽状縄 文・刺突文(溝)?-ナデ /RL斜行縄文	砂粒中量・ 軽石(φ1) 少量混入	
Ⅱ-55-27	41-1-27	JP075A IVA2		G-17	VbU VbL	19	口縁~ 胴部	平縁・やや外傾 -内削角状/外傾	LR斜行縄文-貼付帯1 +RL斜行縄文・刺突文 (溝)/段状積み上げ ・異原体羽状縄文	砂粒多量・歪円 礫・軽石 (φ1~3) 少量混入	
Ⅱ-56-28	41-1-28	JP062A IVA2		B-18	VbU VbL	4	口縁~ 胴部	平縁・やや外傾- 内削角状/やや外傾	LR斜行縄文-貼付帯1・ LR斜行縄文・刺突文 (溝)-ナデ/段状積み 上げ・異原体羽状縄文	砂粒少量 混入	
Ⅱ-56-29	41-1-29	JP040A IVA2		E-3	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾- 角状	LR縄文-貼付帯1+LR 斜行縄文・刺突文(溝) ・RL斜行縄文	砂粒・小礫 (φ1~5)軽石 (φ1~3)混入	
Ⅱ-56-30	41-1-30	JP097 IVA2		J-22	VbL	1	口縁部	平縁・やや外傾	RL斜行縄文-貼付帯1・ 異原体複節羽状縄文 ・刺突文(溝)	砂粒多量・ 軽石(φ1~3) 少量混入	
Ⅱ-56-31	41-1-31	JP101A IVA2		H-21	VbL	1	口縁部	平縁・やや外傾- 内削角状	RL斜行縄文-貼付帯1 +RL斜行・刺突文(溝) ・LR斜行縄文	砂礫多量・歪円 礫・軽石(φ1~ 3)少量混入	
Ⅱ-56-32	41-1-32	JP039A IVA2		E-15	VbL	2	口縁部	平縁・直立-角状	LR縄文-貼付帯1+ LR斜行縄文・刺突文 (溝)・RL斜行縄文	砂粒・軽石(φ 1~3)混入	
Ⅱ-56-33	41-1-33	JP093 IVA2		G-24	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾 -角状	RL斜行縄文-貼付帯1 +RL斜行縄文	砂礫中量・歪円 礫・軽石(φ1~ 3)少量混入	
Ⅱ-56-34	41-1-34	JP099A IVA2		L-24	VbL	1	口縁部 ~胴部	平縁・やや外傾 -隅丸角状	RL縄文-貼付帯1+RL 斜行縄文・刺突文(溝) ・LR斜行縄文	砂粒多量 ・軽石(φ1~3) 少量混入	

表II-25 包含層出土土器属性表(3)

博図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
II-56-35	41-1-35	JP100A	IVA2	I-22	Vc	1	口縁部	平縁・やや外傾・ 内削隅丸角状	RL縄文-貼付帯1・RL斜 行縄文・刺突文(縄) ・RL斜行縄文	砂礫多量混入	
II-56-36	41-1-36	JP105A	IVA2	F-19	Vc	1	口縁部	平縁・やや外傾・ 内削	LR斜行縄文-貼付帯1 +LR斜行縄文	砂粒・長石中 量・軽石(φ1) 少量	
II-56-37	41-1-37	JP104	IVA2	H-20	VbL	1	口縁部	平縁・やや外傾・ 角状	RL縄文-貼付帯1A? +RL斜行縄文	砂粒中量・ 軽石(φ1~3) 少量混入	
II-56-38	41-1-38	JP095	IVA2	E-23	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾・ 隅丸角状	RL縄文-貼付帯1A? ・RL斜行縄文	砂粒中量・ 軽石(φ1~3) 少量混入	
II-56-39	41-1-39	JP038A	IVA2	D-15	VbU	1	胴部	外傾	段状積み上げ・ 2段異原体羽状縄文	軽石(φ1~5) 少量・砂粒・小 礫(φ1~5) 微量混入	
II-56-40	41-1-40	JP034B	IVA2	D-15	VbL	2	胴部	外傾	段状積み上げ・2段 異原体羽状縄文	軽石(φ1~5) 少量・砂粒・小 礫(φ1~5) 微量混入	
II-56-41	41-1-41	JP103	IVA2	G-18	Va	1	胴部	やや外傾	LRL斜行縄文(複部)	砂粒少量混入	
II-56-42	41-1-42	JP096	IVA2	I-21	VbU	1	底部	やや外傾・丸状・ 平底	ナデ	砂粒中量・ 軽石(φ1~3) 少量混入	
II-56-43	41-1-43	JP021A	IVB1	D-9	VbU	1	口縁 - 胴部 上半	小突起・直立 - 内削角状/直立	LR縄文-縦位貼付帯 +縦位縄文・ 2段異原体羽状縄文- RL縄文	砂粒・軽石・小 礫(φ1~3) 多量混入	
II-56-44	41-1-44	JP147B	IV	D-16	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾・ 丸状	LR縄文-風化	蛇紋岩中量 混入	
II-56-45	41-1-45	JP147A	IV	D-16	VbU	1	胴部	やや外傾	風化	蛇紋岩中量 混入	
II-56-46	41-1-46	JP146	IV	B-18	Vc	2	口縁部	平縁・直立・丸状	ナデ-ナデ	砂粒少量 混入	
II-56-47	41-1-47	JP025B	IVB	D-10	VbU	1	胴部	外傾	LR斜行縄文	砂粒少量混入	
II-56-48	41-1-48	JP025C	IVB	D-10	VbU	1	底部	張り出し-平底	無文	砂粒少量混入	

属性表記載において、下記の認識のもと行っているが、「部位」「器形」「胎土」の記載については、相对比较によるもので観察者の主観による。

〔個体名称〕 同一個体にアラビア数字、統計資料にアルファベットを付番した。

〔分類〕 「第1章 第4節 土器」に記載している。

〔器形等・文様〕 各部位等の形態を示した。「口縁」は口縁部露表面、「底側面」は底側部露表面、「変換点」は底側面と底面との状態を記載した。

〔器形等〕 「外反」は反る状態。「外傾」は直線的に開く状態を示している。

〔文 様〕 以下の認識で記載した。

記載順序: 部位の口縁→胴部; 口縁部→胴部への記載順、部位の底→胴部; 底部→胴部への記載順となっている。

記号: +; 文様要素の重複描文 \*; 文様要素の重なりは充填構成

文様要素

2段異原体羽状縄文: 縞りの異なる2段の縞帯(RL・RL)による羽状縄文

斜引文: 器面に対し縄文工具が斜め方向に突き刺され、水平方向に連続して飾く。文様の観察としては、圧痕が強く縄文が連続している。

押し文: 器面に対し縄文工具が垂直方向に押し当てられ、水平方向に連続して飾く。文様の観察としては、圧痕が強く縄文が連続している。

手載竹管工具による縄文:( )内に胴部に当てた工具面を記載している。(内)は手載竹管の内側、(外)は竹管の外側を用いて縄文されたもの。

縄断文: 器表面に対し、2段以上の縄断帯の圧痕。 刺突文(縄) 縄文による刺突

貼付帯1A: 口唇直下の幅広の貼付帯 貼付帯1B: 口唇直下の幅の細い貼付帯 貼付帯2: 貼付帯1以外の胴部に貼着する貼付帯。

重複縄文: 縞りの異なる縞帯を重畳して縄文する。文様の観察としては、糸が交差状に見られる。

〔胎 土〕 組織: 縦断面や斜断面に観察できる「段状の平行な割れ目」組織。(花岡 1992)

るが基部は背面から急角度に剥離が進み断面はかまぼこ状になる。両面調整器と捉えることも出来るが、基部の一部にノッチが認められるため本類に含めた。37は背面右側縁を欠損しており、尖頭部の稜に磨滅が見られるため石錐として転用されていたと考えられる。石材は23・27・30が頁岩、それ以外が黒曜石製である。

つまみ付きナイフ(39~43)：つまみ付きナイフは24点出土しているが、全てが縦長剥片素材を用いて製作されたものである。39~41はA1相当で、腹面には連続した微細剥離は認められず39は背面右に急角度の刃部を作出している。40は接合資料で背面左の大きく剥離したところで折損しているため、製作中の破損と考えられる。42・43はA2相当で共に背面右側縁に刃部を作出している。石材は41がメノウでそれ以外は頁岩製である。

スクレイパー(44~54)：スクレイパーは44・45がB2相当で、44は上端部の打点から素材を剥ぎ取り、下端部に刃部を作出している。45は下縁の刃部に使用による磨滅が認められる。46~53は縦長剥片を素材としたもので、46~49がC1相当、50~53がC2相当である。48は下端部両面が剥離調整され、側縁に磨滅が認められることから石錐として転用していたものと思われる。縦長剥片を用いたスクレイパーは本遺跡において主体的に出土しているため、出土層位と主体土器から後期初頭から前葉にかけての所産と考えられる。54は挟入石器で、薄手の剥片素材に背面のみ剥離調整が認められ、右側縁は比較的丁寧に作出されている。石材は全て黒曜石である。

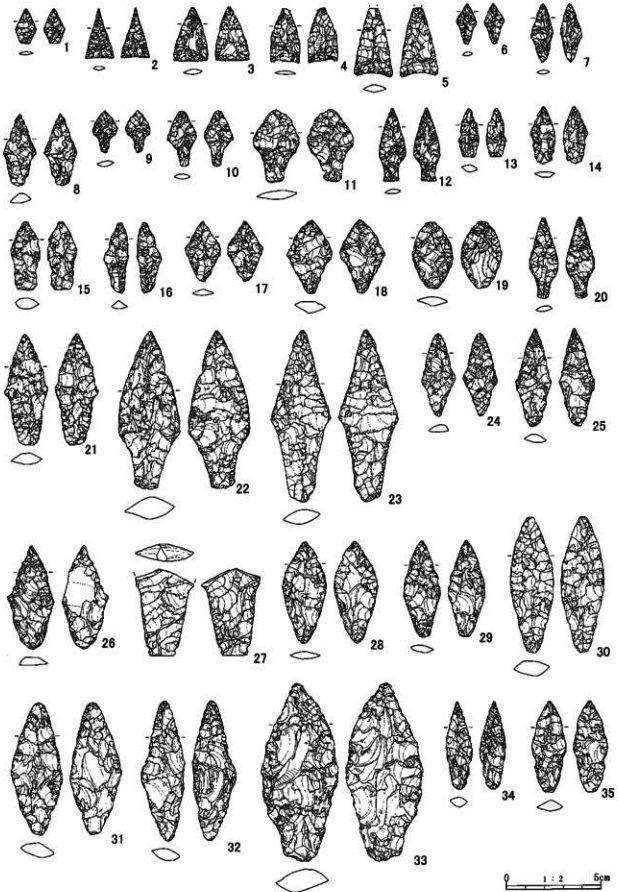
石錐(55~58)：いずれも棒状で柄と機能部の区別が不明瞭な細分D相当で、断面形は凸レンズ状からかまぼこ状を呈している。側縁は磨滅し、55~57は使用により先端部も目減りまたは折れが生じている。石材はいずれも黒曜石製。

石核(59)：メノウ質頁岩を素材とする石核で、1面に岩屑面が残置している。剥離は横方向から打面転移して、縦方向へと移行し、上端部に打点が集中している。(奈良)

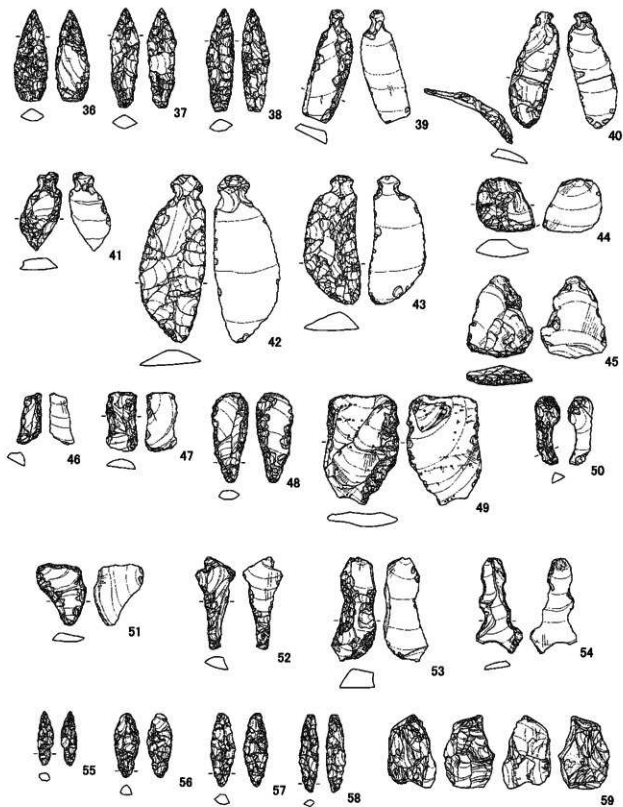
### 3. 礫石器・石製品 (図II-60~70 図版44~48)

礫石器は総数で1,054点が出土し、このうち包含層からは874点出土のうち83点掲載している。出土礫石器の内訳は石斧105点、石斧片67点、たたき石384点、石冠20点、すり石19点、石錘5点、石鋸3点、砥石194点(破片含む)、石皿111点、台石94点、その他52点である。砥石は破片資料が多く実数個体とは異なるが、たたき石は全体の36%と特に多く出土していることが分かる。礫石器は器種ごとに分類と細分を行った後、一定の比率で抽出して掲載できるように努めた。本遺跡は被熱している礫が多量に出土しているが、被熱している礫石器は少ない。

石斧(1~17)：石斧と分類したものは未成品・欠損品・破片を含めて包含層で172点出土した。1は緑色泥岩を素材とした小型の石斧で、左側縁に擦り切り痕が認められる。2は棒状で緑色泥岩を素材としており、刃面に長軸中心線より左寄りに不明瞭な浅い快りが見られるため、丸のみ形石斧の範疇に含まれる可能性がある。刃部には磨滅が認められ、左側縁に敲打痕が見られる。3~8は緑色泥岩素材で、刃部に向かってやや広がる形状をしており、3~5は薄手、6~8は厚手である。4は基部にも刃部を作出し、両端に刃部を有するタイプで、遺跡からは1点のみである。4・5は全面研磨している。6は刃部に原石面が残る。7は剥離調整をしているが素材形状を大きく残している。9は青色片岩の縦長素材の端部のみ刃部として使用しており、刃部は平坦面が認められることから、対象物に垂直方向の使用をしていたと思われる。10~12は欠損品でいずれも緑色泥岩素材。13は砂



図II-58 包含層出土剥片石器(1)



図Ⅱ-59 包含層出土剥片石器(2)

表II-26 包含層出土剥片石器属性表(1)

押図 番号	図版 番号	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重さ(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
II-58-1	42-1-1	D-23	26218	石鏃	A1	VI	18.5	11.0	1.9	0.4	Obs.	
II-58-2	42-1-2	F-23	22136	石鏃	A2	VbL	26.5	15.0	2.9	0.7	Sh.	
II-58-3	42-1-3	A-18	26347	石鏃	A2	VbU	28.5	18.0	3.9	1.8	Obs.	
II-58-4	42-1-4	D-14	6668	石鏃	A2	VbL	28.5	16.0	3.1	1.1	Obs.	
II-58-5	42-1-5	C-6	8472	石鏃	A2	V	(36.0)	20.0	4.5	2.6	Sh.	
II-58-6	42-1-6	C-18	19742	石鏃	A3	VbL	21.5	11.0	2.5	0.4	Obs.	
II-58-7	42-1-7	I-22	23313	石鏃	A3	Vc	31.0	11.5	4.2	1.1	Obs.	
II-58-8	42-1-8	I-19	17889	石鏃	A3	VbL	38.0	17.0	5.7	2.8	Obs.	
II-58-9	42-1-9	D-2	7660	石鏃	A3	VbU	22.2	13.0	4.2	0.8	Obs.	
II-58-10	42-1-10	B-21	21578	石鏃	A3	VbL	30.0	15.5	4.3	1.3	Obs.	
II-58-11	42-1-11	E-21	7405	石鏃	A3	VbL	38.0	24.0	5.1	3.8	Obs.	
II-58-12	42-1-12	D-7	3589	石鏃	A3	VbL	38.8	14.0	4.2	1.7	Obs.	
II-58-13	42-1-13	H-19	17947	石鏃	A4	VbL	26.0	10.5	5.5	1.2	Obs.	
II-58-14	42-1-14	H-23	22996	石鏃	A4	VbL	30.5	13.0	3.7	1.4	Obs.	
II-58-15	42-1-15	G-19	19871	石鏃	A4	VbL	35.5	15.5	6.4	3.5	Obs.	
II-58-16	42-1-16	C-16	16557	石鏃	A4	VbU	37.0	13.5	4.9	1.9	Obs.	
II-58-17	42-1-17	C-17	18037	石鏃	A4	VbU	32.0	18.5	4.8	2.2	Obs.	
II-58-18	42-1-18	E-11	348	石鏃	A4	VbU	39.1	24.0	7.2	5.1	Obs.	
II-58-19	42-1-19	E-12	2261	石鏃	A4	VbU	35.1	21.1	5.8	3.3	Obs.	
II-58-20	42-1-20	D-17	13774	石槍	B1a	Vc	43.0	15.5	4.1	2.1	Obs.	
II-58-21	42-1-21	I-23	18672	石槍	B1a	VbU	59.0	23.0	8.4	8.6	Obs.	
II-58-22	42-1-22	F-12	1469	石槍	B1a	VbU	83.5	33.1	12.4	22.2	Obs.	
II-58-23	42-1-23	G-19	7372	石槍	B1a	VbL	91.0	32.0	8.0	18.1	Sh.	
II-58-24	42-1-24	D-14	5987	石槍	B1b	VbU	43.8	17.6	6.3	3.4	Obs.	
II-58-25	42-1-25	B-17	19720	石槍	B1b	VbL	52.0	19.0	5.6	4.2	Obs.	
II-58-26	42-1-26	H-21	26965	石槍	B1b	Vc	55.0	25.0	6.1	6.8	Obs.	
II-58-27	42-1-27	B-19	13217	石槍	B1c	VbU	(46.0)	(31.0)	8.7	12.2	Sh.	
II-58-28	42-1-28	F-8	472	石槍	B2	VbU	54.0	23.1	5.2	5.5	Obs.	
II-58-29	42-1-29	E-11	347	石槍	B2	VbU	49.0	18.0	5.3	4.4	Obs.	
II-58-30	42-1-30	D-9	3366	石槍	B2	VbL	71.7	22.6	9.0	13.7	Sh.	
II-58-31	42-1-31	O-19	12595	石槍	B2	VbU	71.0	27.0	8.1	13.0	Obs.	
II-58-32	42-1-32	F-23	16887	石槍	B2	VbU	74.5	23.0	9.6	11.2	Obs.	
II-58-33	42-1-33	E-14	6651	石槍	B2	VbL	95.0	40.8	15.1	48.0	Obs.	
II-58-34	42-1-34	H-19	17946	石槍	B2	VbL	47.0	14.0	5.9	3.3	Obs.	
II-58-35	42-1-35	G-13	85	石槍	B2	VbU	51.8	20.0	7.7	5.7	Obs.	
II-59-36	43-1-36	A-21	18694	石槍	B2	VbU	48.5	18.0	6.1	5.8	Obs.	
II-59-37	43-1-37	J-21	17766	石槍	B2	VbL	52.0	16.0	9.8	6.5	Obs.	
II-59-38	43-1-38	I-22	26765	石槍	B2	Vc	54.0	15.0	7.4	4.8	Obs.	
II-59-39	43-1-39	D-18	11737	つまみ付ナイフ	A1	VbU	60.0	20.0	4.9	9.2	Sh.	
II-59-40	43-1-40	G-17	20564	つまみ付ナイフ	A1	VI	61.5	20.5	7.1	8.9	Sh.	
			25874	つまみ付ナイフ								
II-59-41	43-1-41	G-14	5747	つまみ付ナイフ	A2	VI	42.1	19.5	8.8	6.1	Aga.	
II-59-42	43-1-42	F-16	14630	つまみ付ナイフ	A2	VbL	89.0	35.0	7.6	21.9	Sh.	
II-59-43	43-1-43	I-21	23871	つまみ付ナイフ	A2	VbL	68.0	30.0	13.9	20.5	Sh.	
II-59-44	43-1-44	F-5	19854	スレイバー	B2	VbL	28.0	31.0	9.3	7.4	Obs.	
II-59-45	43-1-45	G-12	3	スレイバー	B2	VbU	34.6	42.5	9.1	9.5	Obs.	
II-59-46	43-1-46	G-24	23051	スレイバー	C1a	Vc	27.0	13.0	5.3	1.9	Obs.	
II-59-47	43-1-47	L-18	26186	スレイバー	C1a	Vc	31.0	17.5	6.0	3.0	Obs.	
II-59-48	43-1-48	K-24	11515	スレイバー	C1b	Va	47.5	20.0	6.6	5.9	Obs.	
II-59-49	43-1-49	E-4	115	スレイバー	C1b	VbU	58.2	39.1	8.6	17.7	Obs.	
II-59-50	43-1-50	D-14	1412	スレイバー	C2a	VbU	36.2	13.1	8.7	3.2	Obs.	
II-59-51	43-1-51	B-17	26326	スレイバー	C2a	VbU	32.5	26.5	5.0	3.8	Obs.	
II-59-52	43-1-52	B-18	13216	スレイバー	C2a	VbU	49.0	21.0	7.1	4.2	Obs.	



表Ⅱ-27 包含層出土剥片石器属性表(2)

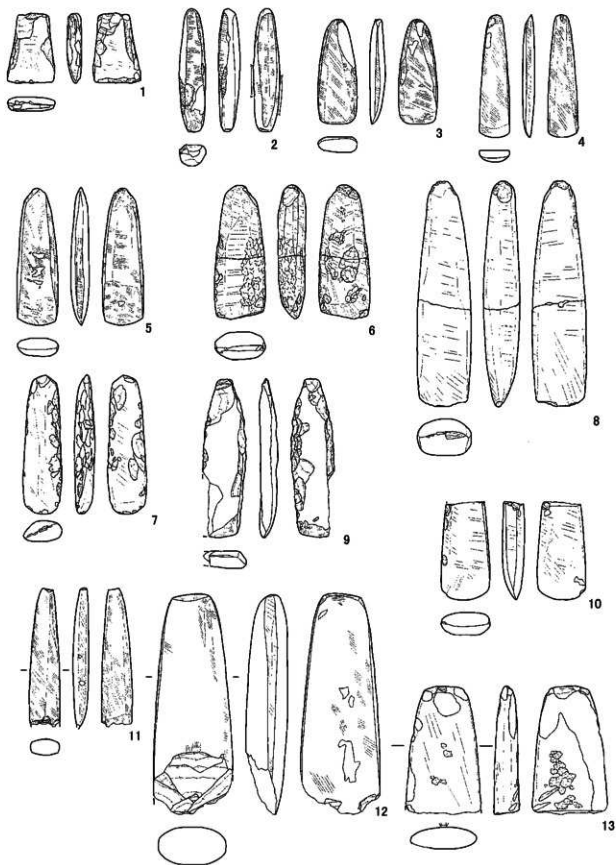
押図 番号	図版 番号	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重さ(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-59-53	43-1-53	H-22	19302	スクレイパー	C2b	VbL	55.0	23.0	10.9	12.9	Obs.	
Ⅱ-59-54	43-1-54	I-23	18673	スクレイパー	3	VbU	51.0	25.0	3.8	3.3	Obs.	
Ⅱ-59-55	43-1-55	C-13	5956	石錐	D	VbU	28.7	8.4	5.1	1.0	Obs.	
Ⅱ-59-56	43-1-56	C-16	12675	石錐	D	VbL	34.0	13.5	6.0	3.0	Obs.	
Ⅱ-59-57	43-1-57	D-12	328	石錐	D	VbU	38.9	12.7	6.8	2.7	Obs.	
Ⅱ-59-58	43-1-58	A-21	26675	石錐	D	VbL	41.0	10.0	6.2	2.3	Obs.	
Ⅱ-59-59	43-1-59	E-6	219	石核	-	VbU	25.2	40.3	25.0	23.7	Aga-Sh.	

岩製の被熱資料で、形状から石斧類として掲載している。器表面は風化が著しいが僅かに擦痕が見られる。破損面は石材の影響もあるが磨滅しており、被熱している。14・15は石斧母材と考えられる資料で、14は欠損しているが全面敲打整形しており、長軸の中心線上で浅い窪みが認められる。15は片側全面に敲打整形痕が残り、右側縁には擦り切り痕が見られる。これらの資料から14のように、ある程度敲打整形したものが遺跡内に持ち込まれ、15のように擦り切りによって分割していく製作工程が推定できる。16・17は緑色泥岩素材で、石斧からの転用品として掲載したもので、16は剥離調整のみで下端部の敲打により決りが顕著である。17は磨製石斧の両端と両側縁に敲打が認められる。

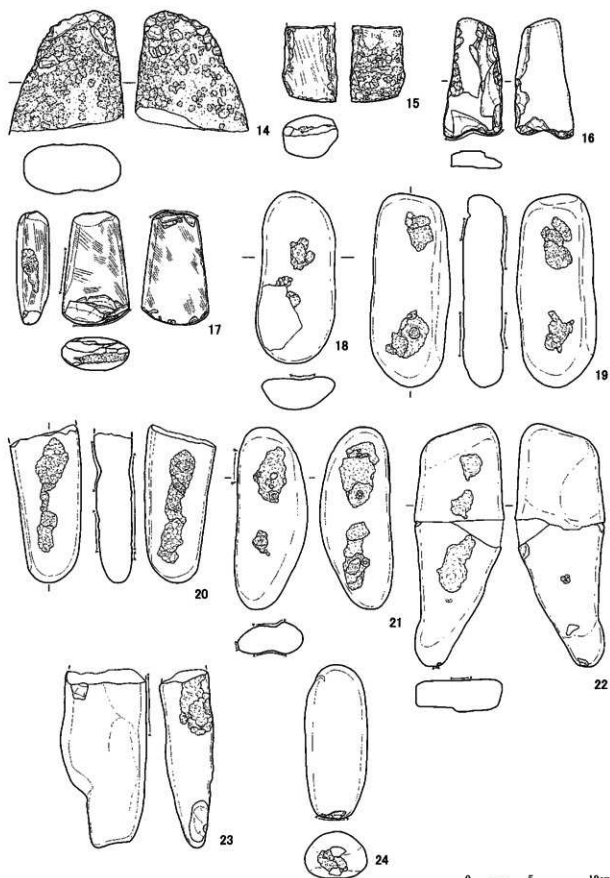
たたき石(18~54): たたき石は遺跡から出土した礫石器の中で最多の384点出土している。分類は大きく素材形状と厚さ、敲打面の位置で細分を行った。18~22はIA相当で、縦長の扁平礫を素材としている。敲打痕は面の両端に偏る。23~28はIB相当で、縦長の棒状礫を素材としている。敲打面は3~4面を使用しているものが多く(25~28)、棒状で端部のみ使用する例は(24)ほとんど出土していない。たたき石の素材としてはI類に相当する縦長の扁平または棒状の素材を使用するものが主体を占めている。29~35はIIA相当で、扁平礫を素材として平坦面(29~31)や側縁(32~33)やその両方(34~35)を使用している。36~47はIIB相当で、厚手の槽口~不整形礫を素材としているもので、形状が方形に近く(43~45)断面に厚みがあるものについては端部を利用して敲打を行っているものが多いように感じられる。47は石材が緑色泥岩で石斧原材の可能性もあるが、右側面に線状の敲打痕が認められたたたき石として掲載している。48~50はIIIB相当で、49は敲打使用面には陵が形成されている。51~54は礫片を素材としているもので、ほぼ面の中央部分に敲打痕が認められる。石材は掲載していない資料も含めて殆どが砂岩製で、32・49・50が斑れい岩、48が安山岩、47が緑色泥岩である。

北海道式石冠(55~57): 石冠は欠損品も含めて15点出土している。55・56は把握部を作出し、すり面は幅広で、敲打痕が認められる。55はすり面が片減りしており、短軸方向に多く擦痕が観察できる。56は被熱した資料で、使用面からの距離が著しいものの、その後敲打による再調整を施している。57は把握部のみ作出された未製品のもので、すり面は認められない。石材は55・56が砂岩、57が緑色泥岩製である。

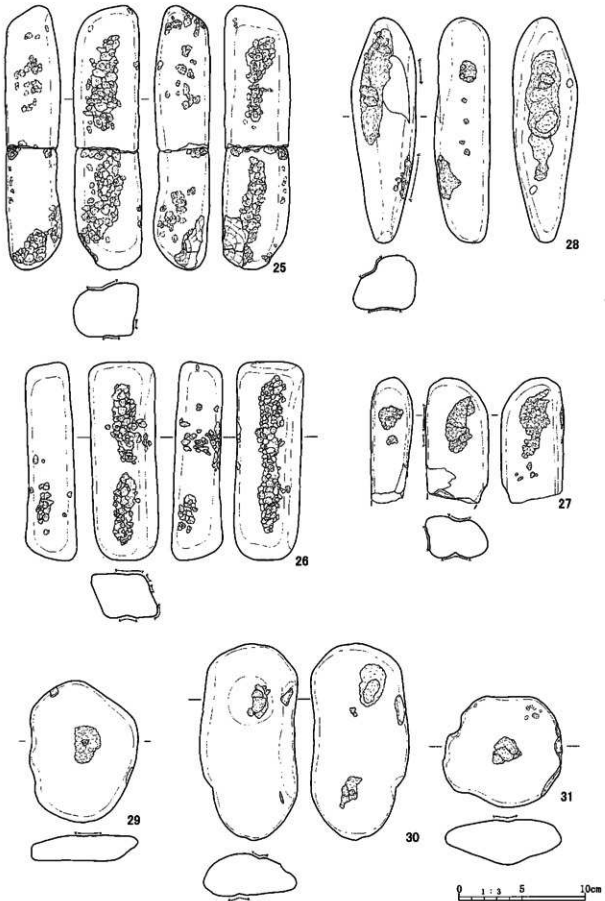
すり石(58~60): すり石に分類したものは19点で、そのうち3点を掲載している。58は砂岩の扁平礫を素材としたもので、剥離と一部の敲打後に長軸方向のすり面が認められる。用途としては北海道式石冠に近いが、形状と把握部がないことから本群に含めている。59・60は多面にすり面が形成され、一端が尖る紡錘状を呈している(60は推定)。すり方向はいずれも長軸方向で、同様の石



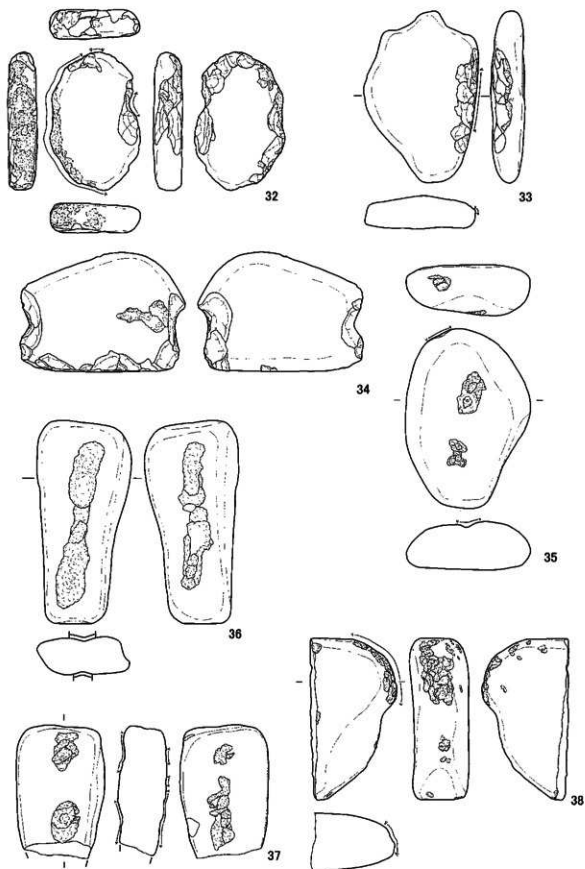
図II-60 包含層出土礫石器(1)



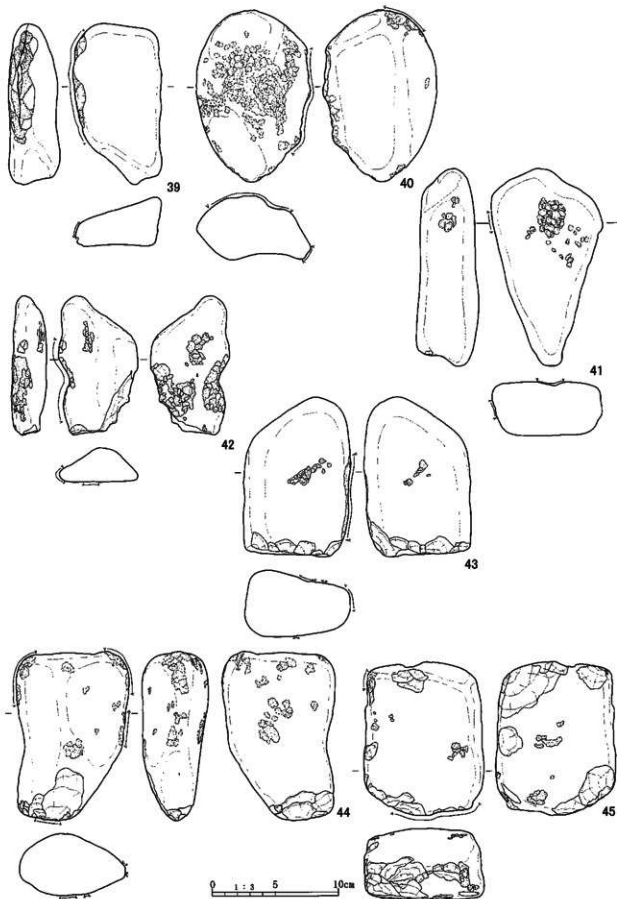
図Ⅱ-61 包含層出土礫石器(2)



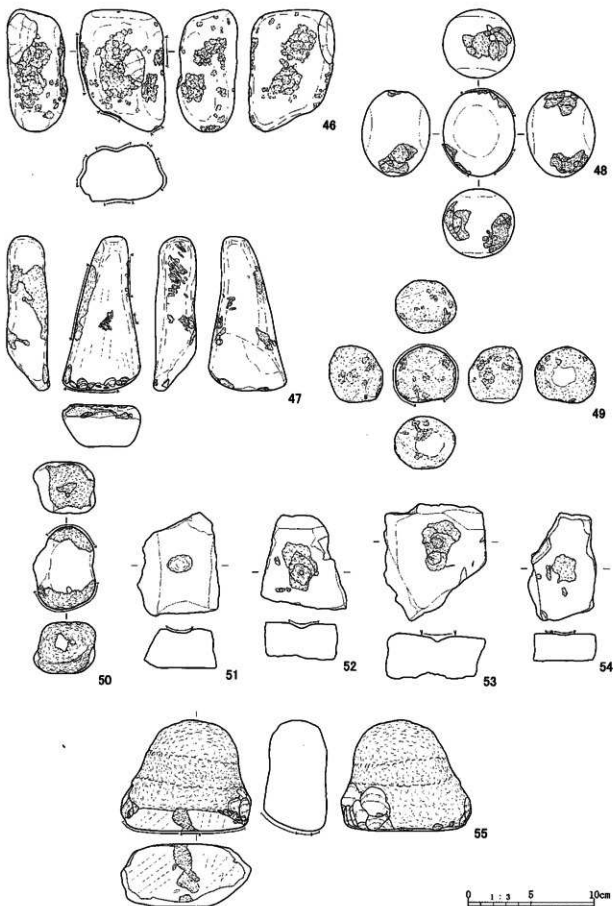
図II-62 包含層出土礫石器(3)



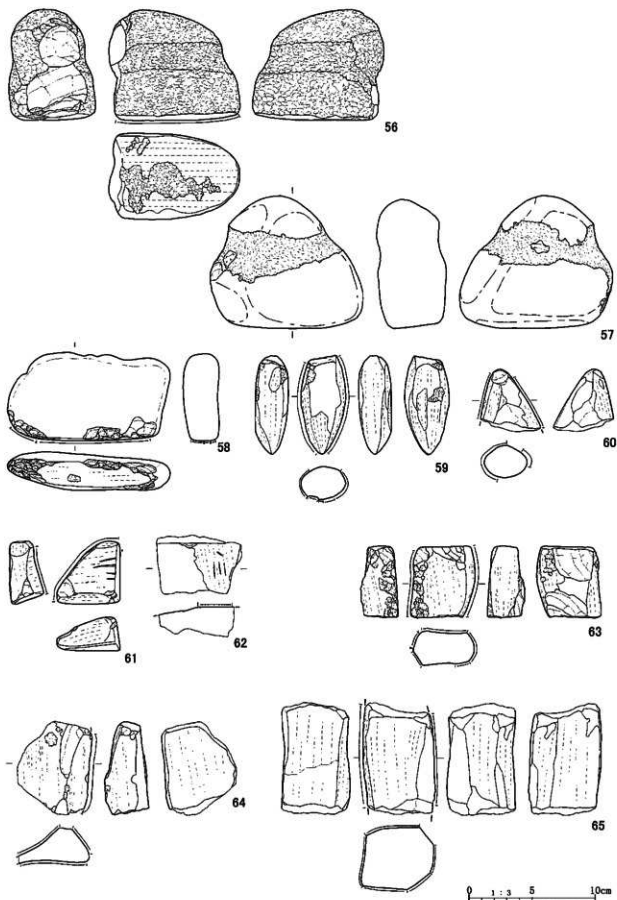
図II-63 包含層出土礫石器(4)



図II-64 包含層出土石器(5)

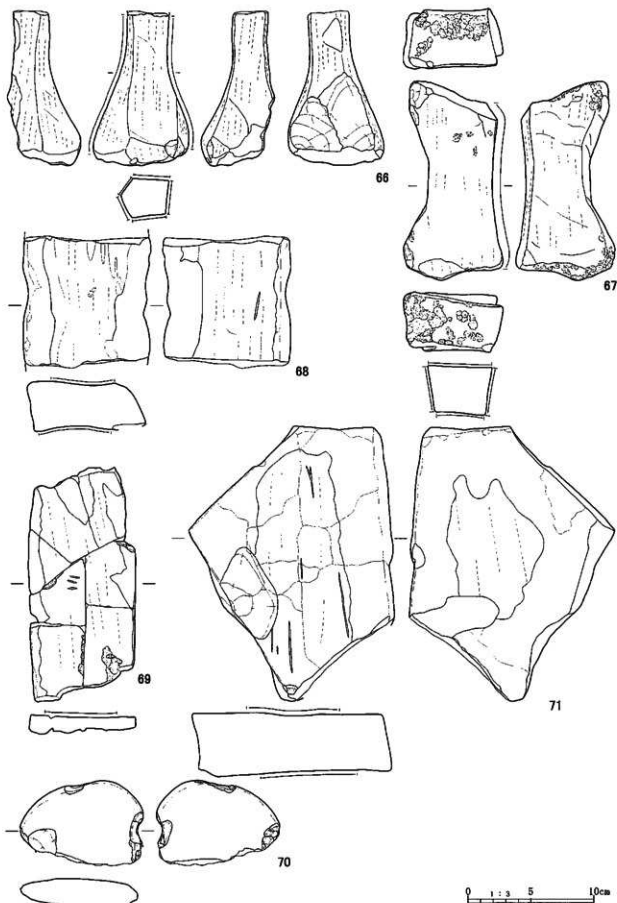


図II-65 包含層出土礫石器(6)

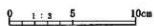
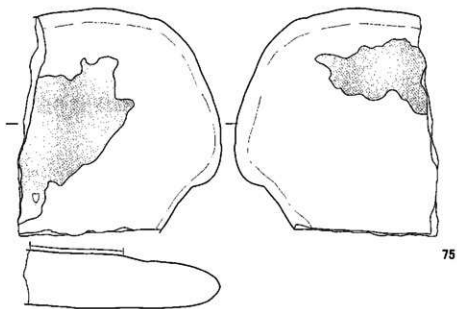
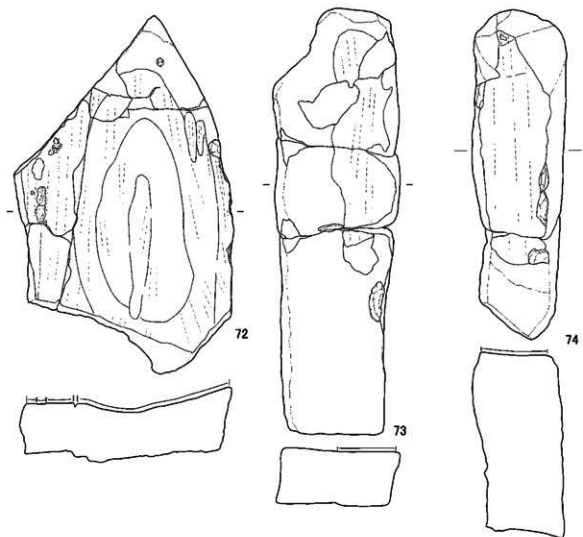


図Ⅱ-66 包含層出土礫石器(7)

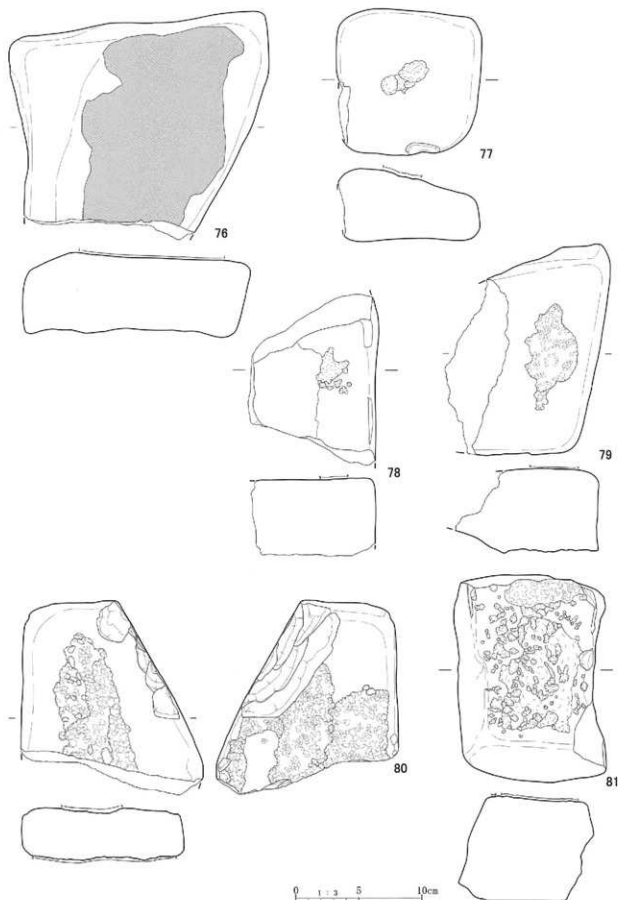




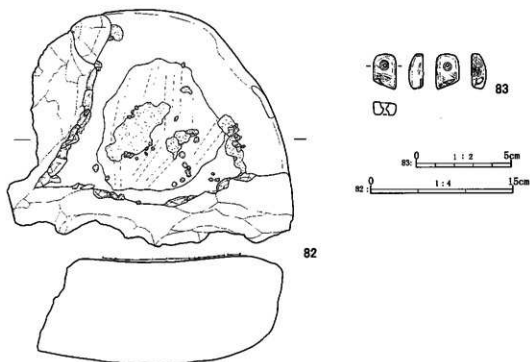
図Ⅱ-67 包含層出土礫石器(8)



図II-68 包含層出土礫石器(9)



図II-69 包含層出土燧石器(10)



図Ⅱ-70 包含層出土礫石器 (11)

器は出土していない。石材は全て砂岩製である。

**砥石 (61~69)**：砥石は破片数も含めて 194 点と礫石器群の中ではたき石について多いが、小破片もカウントしているため実数はより少ない。61・63 は側縁にも凸状のすり面が認められる資料で、石錘としての機能も考えられる資料だが、平坦面にもすり面が見られることから本類に含めている。61・62 には幅 1mm 程度の線条痕が砥面と同方向に認められる。64~67 は 3~5 面の多面にわたって砥面が見られる資料で、66 は縦長の角柱素材を用いた中央部が擦り減り折損した四面砥石で、後期初頭の土器群に伴うものである。68 は端部に敲打痕が認められる。石材は掲載していない資料も全て砂岩製である。

**石錘 (70)**：石錘は 5 点のみの出土で、うち 1 点は VSB-11 の図Ⅱ-50-12 で掲載している。70 は片麻岩製で、一部欠損しているが、長軸方向に明瞭な抉りが見られ、短軸は上部のみ観察できる。厚真町では石錘の出土率が極めて低く、縄文時代前期前葉の遺跡であるニタツナイ遺跡からも 5 点しか出土しておらず、山間部に立地する本遺跡においても出土量は少ない。

**石皿 (71~76)**：石皿は多方向にすり面が認められるものが主体で、設置タイプが考えられるものを本群に分類している。全点で 111 点だが砥石と同様に破片も多く含んでいるため、実数はより少ない。71・72 は板状礫を素材として中央にすり面が見られ、71 は裏面も認められる。72 は比較的明瞭な窪みが長軸上にみられ、楕円状にすり面が形成されていることから、石冠のようなすり面を有したものとセットで使用されていたと考えられる。73 は縦長の板状礫を素材とし、74 は側縁部を一部打ち欠いて使用面を形成している完形個体で器高があり使用するには埋設などの固定が必要と思われる。75・76 は大型の扁平歪円礫(75)から歪角礫(76)を素材としての両面に滑沢面(75)、片面にすり面(76)が認められる資料で、75 は対象物が柔らかいものを用いていたものと思われる。石

表Ⅱ-28 包含層出土石器属性表(1)

標図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	グリッド	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-60-1	44-1-1	-	石 斧 22975	C-20	A	Vc	55.3	34.9	10.9	41.4	Gr-Mud.	
Ⅱ-60-2	44-1-2	-	石 斧 5215	D-6	A	Vc	97.5	20.6	16.6	55.0	Gr-Mud.	丸のみ?
Ⅱ-60-3	44-1-3	-	石 斧 5246	D-5	A	Vc	83.0	30.0	12.0	47.0	Gr-Mud.	
Ⅱ-60-4	44-1-4	-	石 斧 7981	E-3	A	VbU	97.0	24.0	9.0	35.0	Gr-Mud.	
Ⅱ-60-5	44-1-5	-	石 斧 7243	C-12	A	VbL	109.0	34.0	19.0	85.0	Gr-Mud.	付着物有
Ⅱ-60-6	44-1-6	VST56	石 斧 16897・ 18631	E・F-23	A	VbL	105.0	40.1	21.6	163.6	Gr-Mud.	
Ⅱ-60-7	44-1-7	-	石 斧 20869	G-21	A	Vc	110.7	30.8	16.5	82.6	Gr-Mud.	
Ⅱ-60-8	44-1-8	VST55	石 斧 17155・ 17159	F-25	A	VbU	180.0	41.7	29.0	375.8		緑色岩
Ⅱ-60-9	44-1-9	-	石 斧 460	E-8	B	VbU	126.0	(39.0)	14.0	(75.0)	Bl-Sch.	
Ⅱ-60-10	44-1-10	-	石 斧 18828	D-20	A	Va	(77.4)	37.4	17.3	(98.6)	Gr-Mud.	
Ⅱ-60-11	44-1-11	-	石 斧 250	D-6	A	VbU	(110.0)	24.0	13.0	(57.0)	Gr-Mud.	被熱
Ⅱ-60-12	44-1-12	-	石 斧 7776	C-4	A	VbU	(176.0)	69.0	30.0	(545.0)	Gr-Mud.	
Ⅱ-60-13	44-1-13	-	石 斧 24440	A-21	A	VbL	(120.2)	54.8	18.6	(154.7)	Sa.	被熱
Ⅱ-61-14	44-1-14	-	石 斧 21765	N-19	E	Vc	(91.0)	90.0	40.0	(515.0)	Gr-Mud.	
Ⅱ-61-15	44-1-15	-	石 斧 19403	I-22	E	VbU	(59.3)	41.7	31.6	(149.7)	Gr-Mud.	
Ⅱ-61-16	44-1-16	-	石 斧 7519	C-5	D	VbU	95.0	46.0	13.0	87.4	Gr-Mud.	
Ⅱ-61-17	44-1-17	-	石 斧 3878	D-6	D	VbL	90.0	53.0	26.0	225.0	Gr-Mud.	たたま石に転用
Ⅱ-61-18	44-1-18	-	たたま石 19492	L-22	I A1	VbL	135.0	60.4	25.7	288.0	Sa.	
Ⅱ-61-19	44-1-19	-	たたま石 1176-1	D-8	I A1	VbU	154.0	65.0	32.0	450.0	Sa.	
Ⅱ-61-20	44-1-20	-	たたま石 3365	D-9	I A1	VbL	(125.0)	56.0	30.0	(280.0)	Sa.	
Ⅱ-61-21	44-1-21	-	たたま石 3641	D-8	I A3	VbL	149.0	58.0	28.0	270.0	Sa.	
Ⅱ-61-22	44-1-22	VST41	たたま石 11521・ 19559	L-22	I A3	Va	197.0	70.1	26.5	(470.0)	Sa.	
Ⅱ-61-23	44-1-23	-	たたま石 7555	C-1	I B2	VbU	(142.0)	69.0	43.0	(450.0)	Sa.	被熱
Ⅱ-61-24	45-1-24	-	たたま石 3849	D-6	I B2	VbL	123.0	50.0	37.0	280.0	Sa.	
Ⅱ-62-25	45-1-25	VST43	たたま石 12176・ 24531	A・B-22	I B3	VbL	208.0	51.9	42.6	740.0	Sa.	
Ⅱ-62-26	45-1-26	-	たたま石 22139	F-24	I B3	VbL	156.0	53.2	41.1	560.0	Sa.	
Ⅱ-62-27	45-1-27	-	たたま石 5761	E-8	I B3	VbL	(100.0)	50.0	33.0	(160.0)	Sa.	
Ⅱ-62-28	45-1-28	-	たたま石 20885	B-17	I B3	VbL	178.0	51.0	41.0	450.0	Sa.	
Ⅱ-62-29	45-1-29	-	たたま石 392	D-9	II A1	VbU	114.0	85.0	21.0	275.0	Sa.	
Ⅱ-62-30	45-1-30	-	たたま石 19694	M-22	II A1	VbL	157.0	73.7	32.4	500.0	Sa.	
Ⅱ-62-31	45-1-31	-	たたま石 21935	D-19	II A1	Vc	91.3	89.0	36.1	330.0	Sa.	
Ⅱ-62-32	45-1-32	-	たたま石 17098	F-24	II A2	VbL	111.0	72.2	23.3	330.0	Geb.	
Ⅱ-63-33	45-1-33	-	たたま石 7431	TR-05	II A2	VbL	139.0	90.2	26.4	421.0	Sa.	
Ⅱ-63-34	45-1-34	-	たたま石 8160	E-2	II A3	VbU	130.0	95.0	24.0	410.0	Sa.	
Ⅱ-63-35	45-1-35	-	たたま石 7673	F-2	II A3	VbU	142.2	98.8	38.8	670.0	Sa.	被熱
Ⅱ-63-36	45-1-36	-	たたま石 13428	B-20	II B1	VbL	161.0	75.0	30.0	520.0	Sa.	
Ⅱ-63-37	45-1-37	-	たたま石 7980	E-3	II B1	VbU	(107.0)	70.0	40.0	(400.0)	Sa.	
Ⅱ-63-38	45-1-38	-	たたま石 22475	E-20	II B2	Vc	120.5	66.9	43.5	490.0	Sa.	
Ⅱ-64-39	45-1-39	-	たたま石 7130	C-15	II B2	VbL	(129.0)	74.0	39.0	395.0	Sa.	
Ⅱ-64-40	45-1-40	-	たたま石 14802	F-18	II B3	VbL	138.0	89.5	56.6	720.0	Sa.	
Ⅱ-64-41	45-1-41	-	たたま石 12582	M-20	II B3	Va	158.0	85.5	42.7	750.0	Sa.	
Ⅱ-64-42	45-1-42	-	たたま石 16925	G-24	II B3	VbU	109.5	56.8	28.2	205.0	Sa.	
Ⅱ-64-43	45-1-43	-	たたま石 6606	D-13	II B3	VbU	126.0	85.0	53.0	810.0	Sa.	
Ⅱ-64-44	46-1-44	-	たたま石 25459	E-18	II B3	Vc	136.0	85.9	50.3	750.0	Sa.	被熱
Ⅱ-64-45	46-1-45	-	たたま石 17862	I-18	II B3	Vc	125.0	93.4	58.3	1020.0	Sa.	
Ⅱ-65-46	46-1-46	-	たたま石 22472	E-20	II B3	Vc	93.9	65.7	46.5	400.0	Sa.	
Ⅱ-65-47	46-1-47	-	たたま石 24916	D-16	II B3	Vc	122.0	59.5	33.0	330.0	Gr-Mud.	
Ⅱ-65-48	46-1-48	-	たたま石 433	F-7	III B	VbU	68.0	57.0	54.0	225.0	Geb.	
Ⅱ-65-49	46-1-49	-	たたま石 19401	I-23	III B	VbL	48.7	45.2	42.1	165.0	Geb.	
Ⅱ-65-50	46-1-50	-	たたま石 1147	D-8	III B	VbU	69.0	50.0	41.0	220.0	Geb.	
Ⅱ-65-51	46-1-51	-	たたま石 20861	G-21	V	Vc	79.8	57.1	31.3	200.0	Sa.	
Ⅱ-65-52	46-1-52	-	たたま石 1410	D-14	V	VbU	75.0	67.0	27.0	178.7	Sa.	
Ⅱ-65-53	46-1-53	-	たたま石 6571	E-14	V	VbL	93.0	81.0	38.0	290.0	Sa.	
Ⅱ-65-54	46-1-54	-	たたま石 14827	F-19	V	VbL	88.2	52.0	21.8	145.0	Sa.	
Ⅱ-65-55	46-1-55	-	石 鏡 14800	F-18	D	VbL	88.0	102.0	49.0	710.0	Sa.	
Ⅱ-66-56	46-1-56	-	石 鏡 6669	D-14	D	VbL	99.0	88.0	69.0	910.0	Sa.	被熱
Ⅱ-66-57	46-1-57	-	石 鏡 25872	G-17	D	Vc	140.0	120.0	54.0	1090.0	Gr-Mud.	
Ⅱ-66-58	46-1-58	-	すり石 21391	D-18	-	Vc	70.0	125.0	28.0	360.0	Sa.	
Ⅱ-66-59	46-1-59	-	すり石 5749	E-7	B	VbL	78.0	35.0	26.0	81.0	Sa.	被熱
Ⅱ-66-60	46-1-60	-	すり石 18065	F-21	-	VbU	(46.0)	45.5	25.0	(60.5)	Sa.	
Ⅱ-66-61	46-1-61	-	砥石 21394	D-18	-	Vc	49.0	50.0	27.0	63.6	Sa.	
Ⅱ-66-62	46-1-62	-	砥石 3721	E-7	B	VbL	(70.0)	(46.0)	(28.0)	(90.5)	Sa.	
Ⅱ-66-63	46-1-63	-	砥石 20843	G-21	-	Vc	56.2	48.8	24.7	110.3	Sa.	

表Ⅱ-29 包含層出土礫石器属性表(2)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物名	遺物 番号	グリッド	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-66-64	46-1-64	-	砥石	27001	G-17	-	Vl	(72.2)	(48.9)	35.1	(127.0)	Sa.	
Ⅱ-66-65	46-1-65	-	砥石	6003	E-15	B	VbU	(99.0)	59.0	50.0	(380.0)	Sa.	
Ⅱ-67-66	46-1-66	-	砥石	14847	F-19	-	VbU	(124.0)	71.6	43.6	395.0	Sa.	
Ⅱ-67-67	46-1-67	-	砥石	22547	D-20	-	Vc	150.4	73.9	43.8	645.0	Sa.	
Ⅱ-67-68	46-1-68	-	砥石	17319	F-19	A	VbL	(101.4)	44.3	38.4	(640.0)	Sa.	
Ⅱ-67-69	46-1-69	-	砥石	23349	J-22	-	VbL	170.3	85.2	14.0	280.0	Sa.	
Ⅱ-67-70	47-1-70	-	石鏃	22538	D-20	-	Vc	67.0	(93.0)	21.0	(225.0)	Gnl.	被熱
Ⅱ-67-71	47-1-71	-	石皿	16821	E-23	-	VbU	182.0	160.0	50.4	2100.0	Sa.	
Ⅱ-68-72	47-1-72	VST13	石皿	384・ 468-1	D-9-F-8	-	VbU	284.0	174.0	56.0	385.0	Sa.	
Ⅱ-68-73	47-1-73	-	石皿	7269	K-13	A	Vc	339.0	100.0	44.0	236.0	Sa.	被熱
Ⅱ-68-74	47-1-74	VST22	石皿	19593・ 19595	K-24	-	VbL	258.0	72.0	67.0	3410.0	Sa.	
Ⅱ-68-75	47-1-75	-	石皿	12120	I-19	-	VbL	178.0	(159.0)	44.0	(2000.0)	Sa.	被熱
Ⅱ-69-76	48-1-76	-	石皿	8197	C-1	-	VbL	(206.0)	182.0	64.0	(3800.0)	Sa.	
Ⅱ-69-77	48-1-77	-	台石	16830	E-23	-	VbU	112.0	107.0	62.3	1183.0	Sa.	
Ⅱ-69-78	48-1-78	-	台石	18630	E-23	-	Va	(137.0)	(99.0)	56.7	(1115.0)	Sa.	
Ⅱ-69-79	48-1-79	-	台石	1441	E-14	-	VbL	166.0	(134.0)	67.0	1900.0	Sa.	
Ⅱ-69-80	48-1-80	-	台石	428	F-7	-	VbU	(155.0)	144.0	40.0	(1140.0)	Sa.	
Ⅱ-69-81	48-1-81	-	台石	19044	I-20	-	VbL	186.0	116.0	88.2	2500.0	Sa.	
Ⅱ-70-82	48-1-82	-	台石	6257	E-13	-	VbU	(302.0)	(250.0)	112.0	10540.0	Sa.	
Ⅱ-70-83	48-1-83	-	石製品	327	D-12	-	VbU	28.0	17.0	10.0	6.4	rod.	

※U2層は河川堆積中でVbU層を上下で区分した層で、上がbU層、下がU2層。

材は全て砂岩製である。

台石 (77~82) : 台石は敲打主体のもので、設置が考えられるものを本群に分類している。全点で94点出土し、6点掲載している。77~79は比較的小型の亜角礫を素材として、片面中央付近に敲打が認められる。80は板状礫を素材として、両面の敲打痕が顕著である。また、側縁も敲打によって大きく剥離している。81の敲打痕は全体に浅く認められ、部分的に10~15mmの線状または槽円形状の敲打痕が見られる。82は厚手の礫を素材としたもので、すり面と敲打痕が認められる。石材は全て砂岩製である。

石製品 (83) : 石製品はこの1点のみの出土である。石質はロジン岩(Ⅲ章第2節参照)を使用しており、磨いた後に中央よりやや上に両側からの穿孔が認められる。器表面は比較的光沢を持っているが、下端部は自然面を残しているため未成品と考えられる。色調は10Y7/2灰白色であるが、部分的に白色の鉱物が内在しているため色調は単調ではなく斑状を呈する。(奈良)